

Oracle® Collaboration Suite

インストールおよび構成ガイド

リリース 2 (9.0.4.1.1) for Windows

部品番号 : B13730-01

2004 年 3 月

Oracle Collaboration Suite インストールレーションおよび構成ガイド, リリース 2 (9.0.4.1.1) for Windows

部品番号 : B13730-01

原本名 : Oracle Collaboration Suite Installation and Configuration Guide, Release 2 (9.0.4.1.1) for Windows

原本部品番号 : B12239-01

原本著者 : Janelle Simmons, Richard Strohm

原本協力者 : Rajesh Bansal, Atila Bodis, Steve Carbone, Will Chin, Jeremy Chone, Tanya Correia, Edsel delos Reyes, Saheli Dey, Vikas Dhamija, Craig Foch, Gaurav Goel, Don Gosselin, Neal Kaplan, Eunhei Jang, Hassan Karraby, Mark Kennedy, George Kotsovolos, Ken Kwok, Charles Liuson, Stephanie MacLean, Matthew McKerley, Stefano Montero, Elizabeth Morgan, Bhupen Patel, Nagarajan Ragunathan, Shubha Rangarajan, Ricardo Rivera, Daniel Shih, Helen Slattery, Robb Surridge, Kenneth Tang, Sekhar Varanasi, Jennifer Waywell, David Wood, Huai Zhang

Copyright © 2002, 2003 Oracle Corporation. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかえる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

はじめに	xvii
対象読者	xviii
このマニュアルの構成	xviii
関連ドキュメント	xx
表記規則	xxi

第 I 部 Oracle Collaboration Suite インストール前の要件

1 インストールの概要

Oracle Collaboration Suite CD パックの内容	1-2
Oracle9iAS Infrastructure Release 2 (9.0.2.3.0) for Microsoft Windows (32-bit)	1-2
Oracle Collaboration Suite Information Storage Release 2 (9.2.0.3.0) for Microsoft Windows (32-bit)	1-3
Oracle Collaboration Suite Release 2 (9.0.4.1.1) for Microsoft Windows (32-bit)	1-4
Oracle Collaboration Suite Release 2 (9.0.4.1.1) for Microsoft Windows (32-bit) Single-Box Installation DVD	1-6
Oracle Collaboration Suite Clients Release 2 (9.0.4.1.1)	1-6
Oracle Voicemail & Fax Release 2 (9.0.4.1.0) for Microsoft Windows 2000 (32-bit)	1-7
Oracle Web Conferencing Voice & Document Conversion Components Release 2 (9.0.4.1.1) for Microsoft Windows 2000 (32-bit)	1-8
Oracle Collaboration Suite Documentation Viewable Release 2 (9.0.4.1.0)	1-8
インストール・ガイド	1-9
一般的なインストール手順	1-9
Oracle Calendar のインストール	1-10
Oracle Collaboration Suite の一部としての Oracle Calendar のインストール	1-10
スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール	1-11

Oracle Email のインストール	1-12
Oracle Files のインストール	1-12
Oracle Web Conferencing のインストール	1-13
Oracle Ultra Search のインストール	1-13
Oracle Voicemail & Fax のインストール	1-14
Oracle9iAS Wireless のインストール	1-14

2 インストールの準備

ハードウェア要件	2-2
その他の Oracle Web Conferencing のハードウェア要件	2-2
オペレーティング・システムのバージョン	2-3
その他の Oracle Web Conferencing のソフトウェア要件	2-4
多言語サポート	2-4
Oracle Calendar での多言語サポートの制限	2-4
オンライン・ドキュメントの要件	2-5
ポートの割当て	2-5
認証ソフトウェア	2-6
環境に対するインストール前のタスク	2-6
環境変数の設定	2-6
仮想メモリー・ページング・ファイルのサイズ変更	2-7
Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の Real Application Clusters	2-8
RAW デバイスの要件	2-8
Real Application Clusters のインストール前のタスク	2-9

3 Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) へのアップグレード

Oracle インストールのバックアップ	3-2
Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) での多言語サポートの有効化	3-3
Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード	3-5
Oracle Collaboration Suite レベルでの Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード	3-5
Oracle9iAS Infrastructure での Oracle Email のアップグレード	3-9
Oracle9iAS Infrastructure での Oracle9iAS Wireless のアップグレード	3-10
Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのアップグレード	3-10
Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のアップグレード	3-10
Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier のインストール	3-11
コンポーネントのアップグレード前のタスク	3-11

Oracle Calendar のアップグレード前のタスク	3-11
Oracle Email のアップグレード前のタスク	3-12
Oracle Ultra Search のアップグレード前のタスク	3-12
Oracle Voicemail & Fax のアップグレード前のタスク	3-13
Oracle9iAS Wireless のアップグレード前のタスク	3-13
Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant	3-14
ocsua.xml ファイル	3-14
ocsua.properties ファイル	3-15
Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant の実行	3-16
アップグレード後のタスク	3-23
Oracle Calendar の共存	3-24
Oracle Email のアップグレード後のタスク	3-28
Oracle Email の Jar ファイルのアップグレード	3-29
現行の電子メール・テキスト索引の新規表領域への移動	3-29
Oracle Webmail のリリース 9.0.3.1 からリリース 9.0.4 へのアップグレード	3-30
Oracle Webmail アプリケーションの構成	3-30
Java ライブラリの更新	3-32
Oracle Files のアップグレード後のタスク	3-34
Oracle Workflow パラメータの更新	3-34
IFS_TEXT 索引の手動による同期	3-35
Oracle Ultra Search のアップグレード後のタスク	3-35
Oracle Voicemail & Fax のアップグレード	3-36
Oracle9iAS Wireless のアップグレード	3-36
Oracle Collaboration Suite Web Client のアップグレード	3-38
Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のインスタンスの削除	3-38
Oracle Collaboration Suite への CorporateTime Server 5.4 のアップグレード	3-39
非 Oracle Collaboration Suite アップグレードの実行	3-40

第 II 部 Oracle Collaboration Suite インストールの手順

4 Oracle Collaboration Suite の配置方法

Oracle9iAS Infrastructure の配置	4-2
Oracle Collaboration Suite Information Storage の配置	4-2
Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の配置	4-3
Oracle Calendar の配置	4-4
Oracle Email の配置	4-6

Oracle Files の配置	4-7
要件の確認および配置タイプの選択	4-8
Oracle Ultra Search の配置	4-10
十分な RAM	4-11
十分なディスク領域	4-11
ソフトウェア要件	4-12
パフォーマンスの要因およびサイズ指定のガイドライン	4-12
Oracle Voicemail & Fax の配置	4-13
Oracle Web Conferencing の配置	4-14
配置についての推奨項目および考慮事項	4-15
Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の削除	4-16

5 インストールの開始

CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール	5-2
ハード・ドライブからの Oracle コンポーネントのインストール	5-2
Oracle Universal Installer の概要	5-2
Oracle Universal Installer の前提条件の確認	5-3
Oracle Universal Installer を使用した追加コンポーネントのインストール	5-3
Oracle Universal Installer の起動	5-4
インストール・セッション・ログ・ファイル	5-6

6 Oracle Collaboration Suite のインストール

Oracle9iAS Infrastructure のインストール	6-2
Oracle9iAS Infrastructure のその他のドキュメント	6-4
Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのインストール	6-4
既存の Oracle ホームへのデータベースのインストール	6-5
Oracle Internet Directory への Oracle Collaboration Suite Information Storage の登録	6-5
Oracle Net Configuration Assistant の実行	6-6
Database Configuration Assistant の実行	6-7
Oracle Internet Directory の構成の確認	6-8
Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール	6-8
Oracle Web Conferencing Document Conversion Server および Voice Conversion Server のインストール	6-13
Oracle Collaboration Suite の統合 Web クライアントのインストール	6-14
コマンドラインを使用した Web クライアント・インストーラの起動	6-15

Middle-Tier での mod_osso を伴った HTTPS の手動設定	6-16
設定の確認	6-17
mod_osso を伴った https の設定	6-18
その他のドキュメント	6-19

7 単一コンピュータへの Oracle Collaboration Suite のインストール

単一コンピュータへのインストールの概要	7-2
インストール要件	7-2
Oracle Collaboration Suite のインストール	7-3
インストール後のタスク	7-9

8 Oracle Voicemail & Fax のインストールおよび構成

インストール前のチェックリスト	8-2
インストール要件	8-2
Oracle Voicemail & Fax Telephony Server のインストール	8-3
Oracle9iAS コアのインストール	8-3
Oracle Voicemail & Fax コードのインストール	8-4
中間層での Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant の実行	8-5
Oracle Voicemail & Fax Telephony Server の追加インストール	8-6
Oracle Collaboration Suite への Information Storage データベースの追加インストール	8-6

9 サイレント・インストールおよび非対話型インストール

非対話型インストールの概要	9-2
サイレント・インストール	9-2
非対話型インストール	9-2
インストール要件	9-3
レスポンス・ファイルの選択	9-3
レスポンス・ファイルの編集	9-4
レスポンス・ファイルの指定	9-4
エラー処理	9-5
削除	9-5
非対話型モードでの Configuration Assistant の使用	9-6
レスポンス・ファイルのエラー処理	9-6

10 Oracle Collaboration Suite コンポーネントの削除

削除の概要	10-2
Oracle コンポーネントの削除の準備	10-2
Oracle コンポーネントの削除	10-3

第 III 部 Oracle Collaboration Suite コンポーネントの構成

11 Oracle Calendar の構成

Oracle Calendar Server の構成	11-2
ポート値の確認	11-2
Oracle Calendar Administrator を開く	11-3
リソース承認の設定	11-3
ワイヤレス機能の有効化	11-4
Windows PATH 変数の処理	11-4
Oracle Calendar アプリケーション・システムの起動および構成	11-4
Oracle Calendar アプリケーション・システムのステータスの確認	11-5
Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成	11-5
Oracle Calendar リソース・キットのインストール	11-6
Oracle Calendar の複数インスタンスでの orclguest アカウントのプロビジョニング	11-6
Oracle Calendar ポートレットからの SSL 要求の有効化	11-7

12 Oracle Email のインストールおよび構成

構成前のチェックリスト	12-2
Information Store データベース上の Java および Oracle Text オプションの確認	12-2
Oracle9iAS Infrastructure および Application Server の確認および起動	12-3
Oracle Internet Directory へのデータベースの登録	12-3
Oracle Net Configuration Assistant の実行	12-3
Database Configuration Assistant の実行	12-4
Information Storage データベースのデータベース init.ora パラメータの設定	12-5
Information Storage 表領域およびスキーマの作成	12-5
Oracle Email のインストール	12-6
Oracle Email Information Store の構成	12-6
Oracle Email Information Store の手動構成	12-8
umbackend.tar ファイルのインストール	12-10
umbackend の SQL スクリプトのロード	12-10

Oracle Email Middle-Tier の構成	12-11
Oracle Email Middle-Tier の手動構成	12-12
管理ツールの使用	12-14
Oracle Enterprise Manager	12-14
Oracle Email Webmail クライアント	12-15
Oracle Email の起動、停止および再初期化	12-15
Information Store の Oracle Net Listener の確認および起動	12-16
Middle-Tier 用の SMTP リスナーの確認および起動	12-16
Oracle Email システムの起動	12-17
Oracle Email システムの停止	12-17
Oracle Email システムの再初期化	12-18
パブリック・ユーザーの作成	12-18

13 検索機能の構成

デフォルトの Oracle Ultra Search インスタンス	13-2
Oracle Ultra Search データベース・ユーザーの作成	13-2
Oracle Ultra Search Crawler の構成	13-3
Web ソースの作成	13-4
スケジュールの作成	13-5
Oracle Ultra Search Crawler のスケジュール	13-5
Oracle Collaboration Suite Search プロパティの設定	13-6
電子メールを検索可能に設定	13-7
電子メールの索引付け	13-7
HouseKeeping プロセスの構成	13-8
OC4J_iFS_files の再起動	13-9
Oracle Ultra Search のテスト	13-9

14 Oracle Files の構成

Oracle Files の構成プロセスの概要	14-2
推奨のプロトコル構成	14-2
Oracle Files の推奨およびオプションの構成前のタスク	14-4
カスタム表領域の作成（推奨）	14-6
Real Applications Clusters データベースを使用するための Oracle Files の設定 （オプション）	14-7
Oracle Files の構成	14-8
新しい Oracle Files ドメインの作成	14-9

既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定	14-27
Oracle Files の非対話型構成	14-30
Oracle Files ランタイムの設定	14-31
管理者アカウントに対する権限の付与	14-31
Windows NT での権限の付与	14-31
Windows 2000 および 2003 Server での権限の付与	14-32
すべての必要なプロセスの起動	14-33
Oracle Files のサブスクリイバの作成	14-35
Oracle Internet Directory でのユーザーの作成	14-36
プロトコル・サーバーへのアクセス	14-38
基本操作の検証	14-39
構成後の追加タスク	14-40
Oracle Files と Oracle Workflow の統合（オプション）	14-40
ネット・サービス名の構成	14-40
Oracle Workflow の構成	14-42
Oracle Workflow と Oracle Files スキーマの統合	14-43
Oracle Workflow スキーマの追加言語の有効化（オプション）	14-47
Real Application Clusters データベースで Oracle Files を使用するための構成後の手順（オプション）	14-48
Oracle Files Web UI への「Portal へ戻る」リンクの追加（必須）	14-50
Oracle Internet Directory での問合せエントリの返送制限の編集（オプション）	14-51
NTFS プロトコル・サーバーの構成（オプション）	14-51
NTFS プロトコル・サーバーの構成手順	14-52
ローカル O ドライブへのアクセスの構成	14-53
Windows ユーザーによるネットワーク・ドライブとしての Oracle Files のマップの可能化（オプション）	14-53
Windows NT、2000 および 2003 ファイル共有のトラブルシューティング	14-54
Oracle Files および Search のポートレットの登録（必須）	14-55

15 Oracle Web Conferencing の構成

Oracle Web Conferencing 構成の概要	15-2
imctl コマンドライン・ユーティリティ	15-3
Oracle Real-Time Collaboration インスタンスの起動	15-4
Oracle Real-Time Collaboration インスタンスの停止	15-5
Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントのインストール後のタスク	15-5
システム・タスク	15-6

インスタンス・タスク	15-8
確認	15-9
Document Conversion Server および Voice Conversion Server のインストール	15-10
Voice Conversion Server の構成	15-10
システム・ダイヤルイン	15-10
タイムゾーンの構成	15-12
タイムゾーン	15-13
プロパティ	15-17
プロキシの設定	15-17
電子メールの構成	15-20
Oracle Real-Time Collaboration プロパティと Apache 設定の同期	15-22

A Java Access Bridge のインストール

Java Access Bridge の設定	A-2
JRE 1.3.1 に対する設定	A-2
JRE 1.1.8 に対する設定	A-3
Oracle Universal Installer に対する設定	A-3
インストール済 Oracle コンポーネントの設定	A-4

B インストール・チェックリスト

Oracle9iAS Infrastructure のインストール・チェックリスト	B-2
Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール・チェックリスト	B-3
Oracle Collaboration Suite のインストール・チェックリスト	B-4
Oracle Files の構成チェックリスト	B-5

C トラブルシューティング

Oracle Collaboration Suite のインストールのトラブルシューティング	C-2
Oracle Collaboration Suite Web Client 構成のトラブルシューティング	C-3
Oracle Files のインストールのトラブルシューティング	C-5
データベース・オブジェクトの作成エラー	C-5
データベースに関連するインストール・エラー・メッセージ	C-5
Oracle Text が正しく動作しているかどうかの判断	C-6
低速なサーバー	C-8
プロトコル・サーバーへの接続不可	C-8
「503 Service Unavailable」メッセージ	C-9

Oracle Files Configuration Assistant の「session_max_open_files must be set to 50」 エラー・メッセージ	C-9
Real Application Clusters のトラブルシューティング	C-10

D デフォルトのポート番号およびポート範囲

ポート割当ての概要	D-2
コンポーネントのポート番号	D-2
Oracle9iAS Infrastructure のポート使用	D-3
Oracle のポート使用（コンポーネント別）	D-3
Oracle のポート使用（ポート番号別）	D-7

E Windows サービス

Windows サービスへのアクセス	E-2
Oracle Collaboration Suite インストール時のサービス	E-2
Oracle Voicemail & Fax インストール時のサービス	E-4

F スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール

システム要件	F-2
共通要件	F-2
Oracle Calendar Server の要件	F-3
Oracle Calendar アプリケーション・システムの要件	F-3
インストール前	F-4
ディレクトリ・サーバーの設定	F-4
Sun ONE Directory Server	F-5
OpenLDAP	F-5
Syntegra Aphelion Directory Server	F-6
Critical Path InJoin Directory Server	F-6
ディレクトリ・サーバーの用語	F-9
Oracle Calendar アプリケーション・システムおよびサーバーの個別インストールの計画	F-10
Oracle Calendar アプリケーション・システムの考慮事項	F-11
インストール	F-11
Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムの インストール	F-11
Oracle Calendar Server のみのインストール	F-14
Oracle Calendar アプリケーション・システムのみのインストール	F-14

複数の Oracle Calendar インスタンスの処理	F-15
アップグレード	F-15
Server のアップグレード	F-16
サポートされる自動アップグレード・パス	F-16
サポートされる手動アップグレード・パス	F-16
共存	F-16
サーバーのアップグレード	F-17
Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード	F-19
開始する前に	F-19
Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード	F-19
インストール後の構成	F-20
Web サーバーの構成	F-21
ディレクトリ・サーバーの構成	F-23
Sun ONE Directory Server	F-23
OpenLDAP	F-23
Syntegra Aphelion Directory Server	F-23
Critical Path InJoin Directory Server	F-24
Oracle Calendar Server の構成	F-24
Oracle Calendar Server の起動および停止	F-25
ポート値の確認	F-25
Oracle Calendar Administrator を開く	F-25
リソース承認の設定	F-26
Windows PATH 変数の処理	F-26
セキュリティ・メカニズムの処理	F-26
Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成	F-27
Oracle Calendar アプリケーション・システムのステータスの確認	F-27
Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成	F-27
Oracle Calendar の削除	F-28
一般的な問題と対処方法	F-29
Server の問題	F-29
インストール	F-29
再インストール	F-29
共存およびアップグレード	F-29
代理	F-31
その他	F-31
Oracle Calendar アプリケーション・システムの問題	F-32
インストール	F-32

アップグレード	F-32
構成	F-34

G Oracle Collaboration Suite のクライアントのインストール

Oracle Connector for Outlook	G-2
Oracle Connector for Outlook のシステム要件	G-2
Oracle Connector for Outlook のインストール前の要件	G-3
Oracle Connector for Outlook のインストール	G-4
Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール	G-4
Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成ファイル・ パラメータ	G-5
Oracle Connector for Outlook の削除	G-14
Oracle Calendar Desktop Client for Windows	G-15
Oracle Calendar Desktop Client for Windows のシステム要件	G-15
Oracle Calendar Desktop Client for Windows のインストール	G-16
Oracle Calendar Desktop Client for Windows の削除	G-16
Oracle Calendar Desktop Client for Linux	G-16
Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のシステム要件	G-16
Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のインストール	G-17
Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のサイレント・インストール	G-17
Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 の削除	G-18
Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh	G-18
Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のシステム要件	G-18
Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のインストール	G-19
Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh の削除	G-20
Oracle Calendar Desktop Client for Solaris	G-22
Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) の システム要件	G-22
Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) の インストール	G-23
Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) の削除	G-23
Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) の サイレント・インストール	G-23
Oracle Calendar Sync for Palm for Windows	G-24
Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のシステム要件	G-24
Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のインストール	G-25

Oracle Calendar Sync for Palm for Windows の削除	G-25
Oracle Calendar Sync for Pocket PC	G-26
Oracle Calendar Sync for Pocket PC のシステム要件	G-26
Oracle Calendar Sync for Pocket PC のインストール	G-27
Oracle Calendar Sync for Pocket PC の削除	G-28
Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh	G-28
Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件	G-28
以前のバージョンへのインストールの準備	G-29
Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストール	G-30
Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストールのトラブルシューティング	G-31
Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh の削除	G-32
Oracle FileSync	G-32
Oracle FileSync for Windows のインストール	G-32
Oracle FileSync for Windows の削除	G-33

用語集

索引

図リスト

2-1	ディスク アドミニストレータのウィンドウ	2-12
2-2	「コンピュータの管理」ウィンドウ	2-13
4-1	Oracle Calendar の配置	4-5
14-1	「ドメイン操作」画面	14-9
14-2	「データベースの選択」画面	14-10
14-3	「スキーマ名」画面	14-11
14-4	「表領域」画面	14-13
14-5	「キャラクタ・セットおよび言語」画面	14-14
14-6	「デフォルトのポート番号」画面	14-15
14-7	「Web サイト情報」画面	14-16
14-8	「SMTP 情報」画面	14-17
14-9	「管理者情報」画面	14-19
14-10	「ユーザー」画面	14-20
14-11	Oracle Internet Directory の「ログイン」画面	14-21
14-12	「ローカル・マシンの設定」画面	14-22
14-13	「ドメインのコンポーネント」画面	14-23
14-14	「ノード構成」画面	14-25
14-15	「HTTP ノードの設定」画面	14-26
15-1	Oracle Real-Time Collaboration の基本配置	15-2

表リスト

2-1	Oracle Collaboration Suite ハードウェア要件	2-2
2-2	Oracle Collaboration Suite のオペレーティング・システム要件	2-3
2-3	オンライン・ドキュメントの要件	2-5
2-4	Database Configuration Assistant 用の論理ドライブのディスク・サイズ	2-8
2-5	シンボリック・リンクのタスク	2-18
2-6	RAW デバイス・ディスク管理ユーティリティ	2-19
3-1	Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) でサポートされている言語	3-4
3-2	指定のターゲット・ディレクトリにコピーするファイル	3-5
3-3	Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に対する必須 Oracle Files 情報	3-17
3-4	Oracle Files が Oracle Workflow と統合される場合の Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に対する必須 Oracle Files 情報	3-17
3-5	Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に対する必須 Oracle Ultra Search 情報	3-18
3-6	指定のターゲット・ディレクトリにコピーするファイル	3-40
4-1	既存データベース上の Oracle Email の初期化パラメータ値	4-6
4-2	既存データベース上の Oracle Files の初期化パラメータ値	4-9
4-3	小企業、中企業および大企業のパフォーマンスの要因	4-12
4-4	小企業、中企業および大企業向けのサイズ指定のガイドライン	4-13
5-1	Oracle Universal Installer の前提条件の自動確認	5-3
7-1	Oracle Collaboration Suite を単一コンピュータにインストールするための ハードウェア要件	7-2
9-1	レスポンス・ファイル	9-3
14-1	Oracle Files のオプションの構成前のタスク	14-4
14-2	Oracle Files の構成および実行に関する重要情報	14-5
14-3	Oracle Files のカスタム表領域定義	14-7
14-4	Configuration Assistant のオプション	14-8
14-5	基本機能	14-39
14-6	Oracle Workflow Configuration Assistant の値	14-42
14-7	ifswfsetup.properties ファイルの値	14-45
14-8	言語コード	14-47
15-1	タスクのチェックリスト	15-5
15-2	ダイヤルインの例	15-11
15-3	Oracle Real-Time Collaboration タイムゾーン	15-13
A-1	サブディレクトリへのファイルのコピー	A-4
B-1	Oracle9iAS Infrastructure のインストール情報	B-2
B-2	Information Storage のインストール情報	B-3
B-3	Oracle Collaboration Suite のインストール情報	B-4
B-4	Oracle Files の構成情報	B-5
D-1	Oracle のポート使用 (コンポーネント別)	D-3
D-2	Oracle のポート使用 (ポート番号別)	D-7
E-1	Oracle Collaboration Suite の Windows サービス	E-2
E-2	Oracle Voicemail & Fax の Windows サービス	E-4
F-1	Calendar Server/ ディレクトリ・サーバーの用語	F-9

G-1	Oracle Connector for Outlook のシステム要件	G-2
G-2	Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ	G-6
G-3	Oracle Calendar Desktop Client for Windows のシステム要件	G-15
G-4	Oracle Calendar Desktop Client for Linux のシステム要件	G-16
G-5	Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のシステム要件	G-18
G-6	Oracle Calendar Desktop Client for Solaris のシステム要件	G-22
G-7	Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のシステム要件	G-24
G-8	Oracle Calendar Sync for Pocket PC のシステム要件	G-26
G-9	Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件	G-28

はじめに

このマニュアルでは、Oracle Collaboration Suite の概要、インストール前のタスク、インストールおよびインストール後のタスクについて説明します。

ここでは、次の項目について説明します。

- [対象読者](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)

対象読者

『Oracle Collaboration Suite インストールेशनおよび構成ガイド for Windows』は、Oracle Collaboration Suite を Windows にインストールし、構成するすべてのユーザーを対象としています。

このマニュアルの読者には、Oracle 製品およびコンピュータ管理の経験が必要です。

このマニュアルの構成

このマニュアルの構成は次のとおりです。

第1章「インストールの概要」

この章では、Oracle Collaboration Suite のインストールおよび構成の概要を示し、Oracle Collaboration Suite の各インストールの機能および目的について説明します。

第2章「インストールの準備」

この章では、Oracle Collaboration Suite の各インストールを計画する方法について説明します。

第3章「Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) へのアップグレード」

この章では、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) およびそのコンポーネントへのアップグレード方法について説明します。

第4章「Oracle Collaboration Suite の配置方法」

この章では、特定の Oracle Collaboration Suite コンポーネントをアップグレードおよびダウングレードする方法、およびそれらのコンポーネント間で発生する可能性がある競合について説明します。また、既存の Oracle9i データベースを Oracle Collaboration Suite コンポーネントとともに使用する場合のデータベースのチューニングについても説明します。

第5章「インストールの開始」

この章では、CD-ROM またはハード・ドライブからのインストール方法、および Oracle Universal Installer の起動方法など、インストールを開始する方法について説明します。

第6章「Oracle Collaboration Suite のインストール」

この章では、Oracle9iAS Infrastructure、Oracle Collaboration Suite Information Storage および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールする方法について説明します。

第7章「単一コンピュータへの Oracle Collaboration Suite のインストール」

この章では、単一のコンピュータに Oracle Collaboration Suite をインストールする方法について説明します。

第 8 章「Oracle Voicemail & Fax のインストールおよび構成」

この章では、Oracle Collaboration Suite の Oracle Voicemail & Fax コンポーネントをインストールおよび構成する方法について説明します。

第 9 章「サイレント・インストールおよび非対話型インストール」

この章では、Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールを実行する方法について説明します。

第 10 章「Oracle Collaboration Suite コンポーネントの削除」

この章では、Oracle Collaboration Suite コンポーネントを削除する方法について説明します。

第 11 章「Oracle Calendar の構成」

この章では、Oracle Collaboration Suite の Oracle Calendar コンポーネントを構成する方法について説明します。

第 12 章「Oracle Email のインストールおよび構成」

この章では、Oracle Collaboration Suite の Oracle Email コンポーネントを構成する方法について説明します。

第 13 章「検索機能の構成」

この章では、Oracle Collaboration Suite の検索機能を構成する方法について説明します。

第 14 章「Oracle Files の構成」

この章では、Oracle Collaboration Suite の Oracle Files コンポーネントを構成する方法について説明します。

第 15 章「Oracle Web Conferencing の構成」

この章では、Oracle Collaboration Suite の Oracle Web Conferencing コンポーネントを構成する方法について説明します。

付録 A「Java Access Bridge のインストール」

この付録では、Java Access Bridge のインストールに必要な手順を説明します。

付録 B「インストール・チェックリスト」

この付録では、Oracle Collaboration Suite の各インストール用のチェックリストを示します。

付録 C「トラブルシューティング」

この付録では、一般的なインストールの問題および解決策を示します。

付録 D 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」

この付録では、Oracle Collaboration Suite コンポーネントが使用するポートを示します。

付録 E 「Windows サービス」

この付録では、Oracle Collaboration Suite for Windows がインストール中に作成するサービスを示します。

付録 F 「スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール」

この付録では、Oracle Calendar のコンポーネントをスタンドアロンでインストールするための要件および手順について説明します。

付録 G 「Oracle Collaboration Suite のクライアントのインストール」

この付録では、Oracle Collaboration Suite Client CD-ROM のコンポーネントのシステム要件、インストール手順および削除手順について説明します。

用語集

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

- Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ライブラリ、リリース 2 (9.0.4.1.1)
- Oracle9i Application Server ドキュメント・ライブラリ
- Oracle9i データベース・ドキュメント・ライブラリ
- Oracle9iAS Portal ドキュメント・ライブラリ

関連資料：『Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ガイド』

このマニュアルに記載されている情報は、公開時のものです。最新の情報については、次の URL の Oracle Technology Network Japan を参照してください。

<http://otn.oracle.co.jp/>

リリース・ノート、インストール関連ドキュメント、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連ドキュメントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。登録は、次の Web サイトから無償で行えます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得している場合は、次の URL で OTN-J Web サイトのドキュメントのセクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

この項では、このマニュアルの本文およびコード例で使用される表記規則について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [本文の表記規則](#)
- [コード例の表記規則](#)
- [Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則](#)

本文の表記規則

本文では、特定の項目が一目でわかるように、次の表記規則を使用します。次の表に、その規則と使用例を示します。

規則	意味	例
太字	太字は、本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。	この句を指定すると、 索引構成表 が作成されます。
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システム指定の要素を示します。このような要素には、パラメータ、権限、データ型、 Recovery Manager キーワード、 SQL キーワード、 SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージおよびメソッドがあります。また、システム指定の列名、データベース・オブジェクト、データベース構造、ユーザー名およびロールも含まれます。	NUMBER 列に対してのみ、この句を指定できます。 BACKUP コマンドを使用して、データベースのバックアップを作成できます。 USER_TABLES データ・ディクショナリ・ビュー内の TABLE_NAME 列を問い合わせます。 DBMS_STATS.GENERATE_STATS プロシージャを使用します。

規則	意味	例
固定幅フォントの小文字	固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザーが指定する要素のサンプルを示します。このような要素には、コンピュータ名およびデータベース名、ネット・サービス名および接続識別子があります。また、ユーザーが指定するデータベース・オブジェクトとデータベース構造、列名、パッケージとクラス、ユーザー名とロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値も含まれます。 注意： プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせて使用するものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。	sqlplus と入力して、SQL*Plus をオープンします。 パスワードは、orapwd ファイルで指定します。 /disk1/oracle/dbs ディレクトリ内のデータ・ファイルおよび制御ファイルのバックアップを作成します。 hr.departments 表には、department_id、department_name および location_id 列があります。 QUERY_REWRITE_ENABLED 初期化パラメータを true に設定します。 oe ユーザーとして接続します。 JRepUtil クラスが次のメソッドを実装します。
固定幅フォントの小文字のイタリック	固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダまたは変数を示します。	parallel_clause を指定できます。 Uold_release.SQL を実行します。ここで、old_release とはアップグレード前にインストールしたリリースを示します。

コード例の表記規則

コード例は、SQL、PL/SQL、SQL*Plus または他のコマンドライン文の例です。次のように固定幅フォントで表示され、通常のテキストと区別されます。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表に、コード例で使用される表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。大カッコは、入力しないでください。	DECIMAL (<i>digits</i> [, <i>precision</i>])
{ }	中カッコは、カッコ内の項目のうち、1つが必須であることを表します。中カッコは、入力しないでください。	{ENABLE DISABLE}

規則	意味	例
	縦線は、大カッコまたは中カッコ内の複数の選択項目の区切りに使用します。項目のうちの1つを入力します。縦線は、入力しないでください。	{ENABLE DISABLE} [COMPRESS NOCOMPRESS]
...	水平の省略記号は、次のいずれかを示します。	
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 例に直接関連しないコードの一部が省略されている。 ■ コードの一部を繰り返すことができる。 	CREATE TABLE ... AS subquery; SELECT col1, col2, ... , coln FROM employees;
.	垂直の省略記号は、例に直接関連しない複数の行が省略されていることを示します。	SQL> SELECT NAME FROM V\$DATAFILE; NAME ----- /fsl/dbs/tbs_01.dbf /fsl/dbs/tbs_02.dbf . . . /fsl/dbs/tbs_09.dbf 9 rows selected.
その他の記号	大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の記号は、記載されているとおりに入力する必要があります。	acctbal NUMBER(11,2); acct CONSTANT NUMBER(4) := 3;
イタリック体	イタリック体は、特定の値を指定する必要があるプレースホルダや変数を示します。	CONNECT SYSTEM/system_password DB_NAME = database_name
大文字	大文字は、システム指定の要素を示します。これらの要素は、ユーザー定義の要素と区別するために大文字で示されます。大カッコ内にかぎり、表示されているとおりの順序および綴りで入力します。ただし、大 / 小文字が区別されないため、小文字でも入力できます。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; SELECT * FROM USER_TABLES; DROP TABLE hr.employees;
小文字	小文字は、ユーザー指定のプログラム要素を示します。たとえば、表名、列名またはファイル名などです。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; sqlplus hr/hr
	注意： プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせるものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。	CREATE USER mjones IDENTIFIED BY ty3MU9;

Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則

次の表に、Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
ファイル名およびディレクトリ名	ファイル名およびディレクトリ名は大 / 小文字が区別されません。特殊文字の左山カッコ (<)、右山カッコ (>)、コロン (:)、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、縦線 () およびハイフン (-) は使用できません。円記号 (¥) は、引用符で囲まれている場合でも、要素のセパレータとして処理されます。Windows では、ファイル名が ¥¥ で始まる場合、汎用命名規則が使用されていると解釈されます。	C:¥winnt"¥"system32 は C:¥WINNT¥SYSTEM32 と同じです。
Windows コマンド・プロンプト	Windows コマンド・プロンプトには、カレント・ディレクトリが表示されます。このマニュアルでは、コマンド・プロンプトと呼びます。コマンド・プロンプトのエスケープ文字はカレット (^) です。	C:¥oracle¥oradata>
特殊文字	Windows コマンド・プロンプトで二重引用符 (") のエスケープ文字として円記号 (¥) が必要な場合があります。丸カッコおよび一重引用符 (') にはエスケープ文字は必要ありません。エスケープ文字および特殊文字の詳細は、Windows オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。	C:¥>exp scott/tiger TABLES=emp QUERY=¥"WHERE job='SALESMAN' and sal<1600¥" C:¥>imp SYSTEM/password FROMUSER=scott TABLES=(emp, dept)
HOME_NAME	Oracle ホームの名前を表します。ホーム名には、英数字で 16 文字まで使用できます。ホーム名に使用可能な特殊文字は、アンダースコアのみです。	C:¥> net start OracleHOME_NAME_TNSListener

第 I 部

Oracle Collaboration Suite インストール前 の要件

第 I 部では、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) をインストールする前に確認しておく必要がある、概要の説明およびインストール前の要件を示します。

第 I 部は、次の章で構成されています。

- [第 1 章「インストールの概要」](#)
- [第 2 章「インストールの準備」](#)
- [第 3 章「Oracle Collaboration Suite リリース 2 \(9.0.4.1.1\) へのアップグレード」](#)

インストールの概要

この章では、Oracle Collaboration Suite CD パックの内容についての概要を示します。インストールを実行する前にこの章を読んでおくことをお勧めします。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Collaboration Suite CD パックの内容](#)
- [インストール・ガイド](#)

Oracle Collaboration Suite CD パックの内容

Oracle Collaboration Suite CD パックには、次の CD-ROM セットが含まれています。

- [Oracle9iAS Infrastructure Release 2 \(9.0.2.3.0\) for Microsoft Windows \(32-bit\)](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage Release 2 \(9.2.0.3.0\) for Microsoft Windows \(32-bit\)](#)
- [Oracle Collaboration Suite Release 2 \(9.0.4.1.1\) for Microsoft Windows \(32-bit\)](#)
- [Oracle Collaboration Suite Release 2 \(9.0.4.1.1\) for Microsoft Windows \(32-bit\) Single-Box Installation DVD](#)
- [Oracle Collaboration Suite Clients Release 2 \(9.0.4.1.1\)](#)
- [Oracle Voicemail & Fax Release 2 \(9.0.4.1.0\) for Microsoft Windows 2000 \(32-bit\)](#)
- [Oracle Web Conferencing Voice & Document Conversion Components Release 2 \(9.0.4.1.1\) for Microsoft Windows 2000 \(32-bit\)](#)
- [Oracle Collaboration Suite Documentation Viewable Release 2 \(9.0.4.1.0\)](#)

次の項では、これらの CD-ROM セットについて説明します。

Oracle9iAS Infrastructure Release 2 (9.0.2.3.0) for Microsoft Windows (32-bit)

Oracle Collaboration Suite とともにインストールされるすべての Middle-Tier アプリケーション（Oracle Files、Oracle Calendar など）を使用するには、Oracle9iAS Infrastructure のインストールが前提条件となります。最初に Oracle9iAS Infrastructure をインストールする必要があります。

注意： Oracle Collaboration Suite CD パックに含まれている Oracle9iAS Infrastructure をインストールするか、または既存の Oracle9iAS Infrastructure を使用できます。Oracle Collaboration Suite を使用するには、最初に既存の Oracle9iAS Infrastructure をアップグレードする必要があります。詳細は、3-5 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード](#)」を参照してください。

Oracle9iAS Infrastructure は、Oracle9iAS Infrastructure Release 2 (9.0.2.3.0) for Microsoft Windows (32-bit) のラベルの付いた 3 枚の CD-ROM に収録され、次のコンポーネントが含まれています。

- [Oracle9iAS Metadata Repository](#)

Oracle Collaboration Suite インスタンスの実行に必要なメタデータおよびスキーマを含む事前作成済データベースです。このリポジトリは、Oracle9iAS Infrastructure のインストールごとにインストールされ、構成されます。

- Oracle Internet Directory

分散したユーザーおよびネットワーク・リソースに関する情報を共有可能にするディレクトリ・サービスです。Oracle Internet Directory は、**LDAP** バージョン 3 標準を実装します。

- Oracle9iAS Single Sign-On

複数のアカウントおよび Oracle Collaboration Suite アプリケーションへのアクセスを可能にする、企業規模のユーザー認証プロセスです。

- Oracle Management Server

Oracle Enterprise Manager コンソールを使用して、システム管理タスクを処理し、ネットワーク間のこれらのタスクの分散を管理します。Oracle Enterprise Manager コンソールおよびその 3 層アーキテクチャを Oracle Enterprise Manager Web Site と併用すると、Oracle Collaboration Suite のみでなく、Oracle 環境全体を管理できます。

- J2EE and Web Cache

J2EE and Web Cache をインストールすると、**Oracle HTTP Server** および **Oracle9iAS Containers for J2EE** が構成されます。これらのコンポーネントは、Oracle9iAS Infrastructure によって内部的に使用されます。

注意： J2EE and Web Cache の Infrastructure インストールを使用したカスタム・アプリケーションの配置はサポートされていません。

Oracle Collaboration Suite Information Storage Release 2 (9.2.0.3.0) for Microsoft Windows (32-bit)

Oracle Collaboration Suite Information Storage は、Oracle Collaboration Suite Information Storage Release 2 (9.2.0.3.0) for Microsoft Windows (32-bit) のラベルの付いた 2 枚の CD-ROM に収録され、1-4 ページの「[Oracle Collaboration Suite Release 2 \(9.0.4.1.1\) for Microsoft Windows \(32-bit\)](#)」に記述された Middle-Tier アプリケーションでの使用のためにチューニング済の Oracle9i リリース 2 (9.2) 初期データベースが含まれています。Oracle9iAS Infrastructure をインストールした後、Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールします。

Oracle Collaboration Suite Release 2 (9.0.4.1.1) for Microsoft Windows (32-bit)

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールすると、企業規模通信、コンテンツ管理およびコンテキスト管理のための統合ソリューションが提供されます。これによって、デスクトップ・コンピュータ、ノート型コンピュータ、携帯情報端末（PDA）、FAX、電話および Web クライアントのユーザーが共同作業を行い、日常の業務を遂行できます。

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier は、Oracle Collaboration Suite Release 2 (9.0.4.1.1) for Microsoft Windows (32-bit) のラベルの付いた 3 枚の CD-ROM に収録されています。

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールするには、次の操作を実行しておく必要があります。

- Oracle9iAS Infrastructure のインストール
- ネットワーク上での Oracle9iAS Infrastructure の Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On コンポーネントの構成（個別のコンピュータ上で構成することをお勧めします。）
- Oracle Email、Oracle Files および Oracle Web Conferencing 用にチューニング済のデータベースを含む、Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール

Oracle Collaboration Suite は、次の Middle-Tier コンポーネントで構成されます。

- Oracle Calendar

デスクトップ・クライアント、Web およびすべてのモバイル端末を介した予定調整、スケジューリングおよび個人情報管理（PIM）機能を提供します。スケーラブルなカレンダー・アーキテクチャによって、企業全体での高度なグループ・カレンダーの使用およびリソース・スケジューリングが可能になります。

- Oracle Email

信頼性が高くスケーラブルで安全なメッセージ・システムです。整理統合されたメール・ストアを使用することによって管理し、ハードウェアおよびソフトウェアのコストを削減します。Oracle Email は、Oracle9i データベースを電子メール用の単一のメッセージ・ストアとして使用し、様々な種類の情報のアクセス、格納および管理に Oracle のメリットを利用します。Oracle9i の事前構成済のデータベースが、Oracle Collaboration Suite Information Storage CD-ROM に用意されています。

注意： Oracle Email には、Oracle Calendar、Oracle Calendar Sync および Oracle Connector for Outlook が含まれています。

- Oracle Files

スケーラブルで信頼性の高い統合ファイル・サーバーを介した共同作業およびファイルの共有をサポートする、コンテンツ管理アプリケーションです。高度な Web ベースのユーザー・インタフェースおよび業界標準プロトコルを提供します。これによって、ユーザーはワークスペース内または企業内の他のユーザーと様々な種類のファイルを簡

単に共有できます。Oracle Files は、Oracle9i データベースを使用してコンテンツを格納します。事前構成済の Oracle9i データベース (Oracle Collaboration Suite Information Store) が、Oracle Collaboration Suite Information Storage CD-ROM に用意されています。

- Oracle Web Conferencing

あらゆる企業でオンラインの共同作業が可能になります。顧客、従業員、チームおよびパートナーが、E-Business のコンテンツ、取引および総合的ビジネス・フローによるコンテキスト内で、オンラインで会合を持つことができます。

- Oracle Ultra Search

企業向け検索エンジンを提供します。この検索エンジンによって、企業ユーザーは、イントラネットまたはエクストラネット内の有用な情報を検索できます。Oracle Ultra Search は、Web ページ、Oracle9i データベースなどのデータ・ソースの統合検索を行うための検索機能を提供します。

- Oracle Voicemail & Fax

Oracle Voicemail & Fax は、信頼性が高く、高スケーラブルなボイスメールおよび FAX のシステムです。このシステムによって、ボイスメール・メッセージおよび FAX メッセージの格納および取出しを集中管理し、安全に実行できます。Oracle Voicemail & Fax は、ボイスメール・メッセージおよび FAX メッセージに Oracle Collaboration Suite Information Storage を使用します。

- Oracle9iAS Wireless

社外にいる従業員による、社内情報へのあらゆるデバイス（携帯電話、PDA、その他のモバイル機器など）からの完全なアクセスを可能にします。

注意： Oracle9iAS Wireless には、インストール後に構成の必要のある組み込みアプリケーションが含まれています。まず基礎となる Oracle9iAS Wireless スタック、次にアプリケーションを、使用前に構成する必要があります。これらのアプリケーションおよびその他の Oracle9iAS Wireless コンポーネントの構成方法の詳細は、『Oracle9iAS Wireless 管理者ガイド』を参照してください。

- Oracle Collaboration Suite Web Client

Oracle Collaboration Suite は、ブラウザを搭載したコンピュータ用の統合 Web クライアントを提供します。これは、基礎となる Oracle9iAS Infrastructure を使用して、安全なシングル・サインオン環境を提供し、メッセージ（電子メール、ボイスメールおよび FAX）、カレンダーおよびディレクトリ情報、および大規模な共同作業用に設計されたファイル・サーバーである Oracle Files に格納されたコンテンツにアクセスするために使用できます。

- Oracle9iAS Portal

Oracle Collaboration Suite に付属しているポートレットのインストール、構成および管理を可能にします。

注意： Oracle9iAS Portal は、Web データベース・アプリケーションおよびコンテンツ駆動型の Web サイトを構築、配置および監視するための完全なソリューションです。Oracle9iAS Portal を使用すると、簡単に使用可能な HTML ベースのインタフェースを介して、データベース・オブジェクトを作成および表示できます。Oracle9iAS Portal のライセンス供与については、オラクル社担当者に問い合わせてください。

すべての Middle-Tier アプリケーションが、Oracle Collaboration Suite をインストールするたびにインストールされます。Oracle Collaboration Suite のインストール中に、Oracle Calendar、Oracle Email、Oracle Files、Oracle Web Conferencing および Oracle9iAS Portal を構成できます。オプションで、これらのアプリケーションをインストール後に構成することもできます。

Oracle Collaboration Suite Release 2 (9.0.4.1.1) for Microsoft Windows (32-bit) Single-Box Installation DVD

Oracle Collaboration Suite Release 2 (9.0.4.1.1) for Microsoft Windows (32-bit) Single-Box Installation DVD を使用すれば、Oracle Collaboration Suite およびそのすべてのコンポーネントを単一のコンピュータにインストールできます。

関連項目： [第 7 章「単一コンピュータへの Oracle Collaboration Suite のインストール」](#)

Oracle Collaboration Suite Clients Release 2 (9.0.4.1.1)

Oracle Collaboration Suite Client Release 2 (9.0.4.1.1) CD-ROM には、次のコンポーネントが含まれています。

デスクトップ・クライアント：

- Oracle Connector for Outlook 9.0.4.1
- Oracle Calendar Desktop Client for Windows リリース 9.0.4.1
- Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh OS9 および OSX リリース 9.0.4
- Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 リリース 9.0.4
- Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) リリース 9.0.4.1

Oracle Calendar Synch クライアント :

- Oracle Calendar Sync for Palm for Windows リリース 9.0.4.1
- Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh OS9 および OSX リリース 9.0.4
- Oracle Calendar Sync for Pocket PC for Windows リリース 9.0.4.1

開発者パッケージ :

- Oracle Calendar SDK 9.0.4.1 (HP)
- Oracle Calendar SDK 9.0.4.1 (Linux)
- Oracle Calendar SDK 9.0.4.1 (Solaris)
- Oracle Calendar SDK 9.0.4.1 (Windows)
- Oracle Calendar SDK 9.0.4 (Macintosh)
- Oracle Calendar Web Services リリース 9.0.4

その他 :

- Oracle Email の esmigration.zip
- Oracle Files の FileSync.exe

Oracle Voicemail & Fax Release 2 (9.0.4.1.0) for Microsoft Windows 2000 (32-bit)

Oracle Voicemail & Fax Release 2 (9.0.4.1.0) for Microsoft Windows 2000 (32-bit) CD-ROM を使用すると、Windows 2000 に Oracle Voicemail & Fax がインストールされます。

関連項目 : 構成方法は、[第 8 章「Oracle Voicemail & Fax のインストールおよび構成」](#)を参照してください。

Oracle Web Conferencing Voice & Document Conversion Components Release 2 (9.0.4.1.1) for Microsoft Windows 2000 (32-bit)

Oracle Web Conferencing Voice & Document Conversion Components Release 2 (9.0.4.1.1) for Microsoft Windows 2000 (32-bit) CD-ROM を使用すると、次のコンポーネントがインストールされます。

- Oracle Web Conferencing Document Conversion Server

ドキュメント・プレゼンテーション・モードで表示できるように、Microsoft Office ドキュメントを HTML に変換します。Oracle Web Conferencing Document Conversion Server は、Microsoft Windows および Microsoft Office 搭載のコンピュータにインストールする必要があります。

- Oracle Web Conferencing Voice Conversion Server

会議の音声部分の音声ストリーミング、キャプチャおよび記録を可能にします。Oracle Web Conferencing Voice Conversion Server は、Microsoft Windows 搭載のコンピュータにインストールする必要があり、専用の電話のハードウェアおよびソフトウェアが必要です。

関連項目：

- 2-2 ページの「[その他の Oracle Web Conferencing のハードウェア要件](#)」
- 2-4 ページの「[その他の Oracle Web Conferencing のソフトウェア要件](#)」

Oracle Collaboration Suite Documentation Viewable Release 2 (9.0.4.1.0)

Oracle Collaboration Suite Documentation Viewable Release 2 (9.0.4.1.0) CD-ROM には、Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ライブラリが含まれています。このドキュメントは、CD-ROM から参照するか、またはハードディスク・ドライブにコピーできます。

関連資料：『Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ガイド』

インストール・ガイド

この項では、Oracle Collaboration Suite のインストールおよび構成に必要な手順の概要を示します。

関連項目： Oracle Collaboration Suite へのアップグレードの詳細は、
第 3 章「[Oracle Collaboration Suite リリース 2 \(9.0.4.1.1\)](#) へのアップグレード」を参照してください。

この項の内容は次のとおりです。

- [一般的なインストール手順](#)
- [Oracle Calendar のインストール](#)
- [Oracle Email のインストール](#)
- [Oracle Files のインストール](#)
- [Oracle Web Conferencing のインストール](#)
- [Oracle Ultra Search のインストール](#)
- [Oracle Voicemail & Fax のインストール](#)
- [Oracle9iAS Wireless のインストール](#)

注意： インストール・プロセス中または構成プロセス中に問題が発生した場合は、[付録 C「トラブルシューティング」](#)を参照してください。

一般的なインストール手順

Oracle Collaboration Suite のインストールの一般的な手順は、次のとおりです。

1. [第 2 章「インストールの準備」](#)で説明するインストール計画の要件を満たします。

Oracle Web Conferencing をインストールする場合は、Document Conversion Server および Voice Conversion Server のハードウェア要件およびソフトウェア要件について、『Oracle Web Conferencing サイジング・ガイド』を必ず一読してください。

Voice Conversion Server は、音声会議システムにダイヤルし、アナログ音声をデジタル形式に変換して流す Oracle Web Conferencing コンポーネントのグループです。Document Conversion Server は、ドキュメント・プレゼンテーション・モードで表示できるように Microsoft Office ドキュメントを HTML に変換する Oracle Web Conferencing コンポーネントのグループです。

『Oracle Web Conferencing サイジング・ガイド』を読んだ後に、2-2 ページの「[その他の Oracle Web Conferencing のハードウェア要件](#)」に示す手順に従って、Voice Conversion Server のハードウェアを設定します。前提条件のソフトウェアを、Voice

Conversion Server および Document Conversion Server が存在するシステムにインストールします。

2. [第 4 章「Oracle Collaboration Suite の配置方法」](#)を読んで、配置方法を計画します。
3. [付録 B「インストール・チェックリスト」](#)のインストール・チェックリストを出力し、確認を完了します。
4. [第 5 章「インストールの開始」](#)で説明するインストール手順を完了します。
5. 6-2 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure のインストール](#)」で説明するインストール手順に従って、Oracle9iAS Infrastructure をインストールします。
6. 6-4 ページの「[Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのインストール](#)」で説明するインストール手順に従って、Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースをインストールします。
7. 6-8 ページの「[Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール](#)」で説明するインストール手順に従って、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールします。
8. [第 III 部「Oracle Collaboration Suite コンポーネントの構成」](#)のコンポーネントの構成に関する章で説明する手順に従って、インストールされた Oracle Collaboration Suite コンポーネントを構成します。

Middle-Tier のインストール・プロセスの際、構成する Oracle Collaboration Suite のコンポーネントを選択できます。Oracle Collaboration Suite の個々のコンポーネントごとに固有のインストール要件および構成要件があります。これらの要件については、次の各項で説明します。

Oracle Calendar のインストール

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Collaboration Suite の一部としての Oracle Calendar のインストール](#)
- [スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール](#)

Oracle Collaboration Suite の一部としての Oracle Calendar のインストール

Oracle Collaboration Suite の一部として Oracle Calendar をインストールする手順は、次のとおりです。

1. サイズの要件、インストール前のチェックリストおよび配置の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の第 3 章「Oracle Calendar の配置」を参照してください。
2. インストールおよび構成の問題は、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノート of Oracle Calendar の章を参照します。
3. 以前のバージョンからアップグレードする場合は、[第 3 章「Oracle Collaboration Suite リリース 2 \(9.0.4.1.1\) へのアップグレード」](#)を参照します。

4. 1-9 ページの「一般的なインストール手順」の手順 1 ～ 7 に従います。
5. 第 11 章「Oracle Calendar の構成」で説明する構成手順に従います。
6. Oracle Connector for Outlook、Oracle Calendar Desktop Client または Oracle Calendar Sync クライアントをインストールするには、付録 G「Oracle Collaboration Suite のクライアントのインストール」を参照します。
7. Oracle Calendar コンポーネントの構成手順およびメンテナンス手順の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照します。構成パラメータおよびコマンドライン管理ユーティリティの詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照します。

スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール

Oracle CorporateTime から Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4) へのアップグレードの手順は、次のとおりです。

1. サイズの要件、インストール前のチェックリストおよび配置の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の第 3 章「Oracle Calendar の配置」を参照してください。
2. インストールおよび構成の問題は、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノートの Oracle Calendar の章を参照します。
3. Oracle CorporateTime から Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4) へアップグレードするには、付録 F「スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール」で説明する手順に従います。
4. Oracle Connector for Outlook、Oracle Calendar Desktop Client または Oracle Calendar Sync クライアントをインストールするには、付録 G「Oracle Collaboration Suite のクライアントのインストール」を参照します。
5. Oracle Calendar コンポーネントの構成手順およびメンテナンス手順の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照します。構成パラメータおよびコマンドライン管理ユーティリティの詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照します。

Oracle Email のインストール

Oracle Email のインストール手順は、次のとおりです。

1. インストールおよび構成の問題は、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノート
Oracle Email の章を参照します。
2. 1-9 ページの「[一般的なインストール手順](#)」の手順 1 ～ 7 に従います。
3. [第 12 章「Oracle Email のインストールおよび構成」](#) に示す手順に従って、Oracle Email
をインストールして構成します。
4. Oracle Email の管理およびメンテナンスの詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』を参
照します。

Oracle Files のインストール

Oracle Files のインストール手順は、次のとおりです。

1. 『Oracle Files プランニング・ガイド』を参照して、サイズの要件およびハードウェア情
報を確認します。
2. インストールおよび構成の問題は、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノート
Oracle Files の章を参照します。
3. 1-9 ページの「[一般的なインストール手順](#)」の手順 1 ～ 7 に従います。
4. [第 14 章「Oracle Files の構成」](#) に示す手順に従って、Oracle Files を構成します。

関連項目： Oracle Files の構成の問題を解決するには、C-5 ページの
[「Oracle Files のインストールのトラブルシューティング」](#)を参照してくだ
さい。

5. Oracle FileSync をインストールする場合は、G-32 ページの「[Oracle FileSync](#)」に示す手
順に従います。
6. Oracle Files の管理およびメンテナンスの詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照し
ます。

Oracle Web Conferencing のインストール

Oracle Web Conferencing のインストール手順は、次のとおりです。

1. 最新のインストールおよび構成の問題は、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノート
の Oracle Web Conferencing の章を参照します。
2. [第 4 章「Oracle Collaboration Suite の配置方法」](#)を参照します。
3. 1-9 ページの「[一般的なインストール手順](#)」の手順 [1](#) ～ [7](#) に従います。
4. [第 15 章「Oracle Web Conferencing の構成」](#)に示す手順に従って、Oracle Web
Conferencing を構成します。
5. 次の事柄に関する情報は、『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』を参照します。
 - このマニュアルで説明されていない配置の例
 - 高度なカスタマイズ
 - システムの監視
 - レポートの実行
 - サイトの作成および管理

Oracle Ultra Search のインストール

Oracle Ultra Search のインストール手順は、次のとおりです。

1. 4-10 ページの「[Oracle Ultra Search の配置](#)」を参照して、サイズの要件およびハード
ウェア情報を確認します。
2. 1-9 ページの「[一般的なインストール手順](#)」の手順 [1](#) ～ [7](#) に従います。
3. [第 13 章「検索機能の構成」](#)に示す手順に従って、Oracle Ultra Search を構成します。
4. Oracle Ultra Search インスタンスの管理およびメンテナンスの詳細は、『Oracle Ultra
Search ユーザーズ・ガイド』を参照します。

Oracle Voicemail & Fax のインストール

この項では、Oracle Voicemail & Fax のインストール手順を説明します。

注意： Oracle Voicemail & Fax をインストールする前に、Oracle Email をインストールして構成する必要があります。

Oracle Voicemail & Fax をインストールするには、次のようにします。

1. インストールおよび構成の問題は、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノートの Oracle Voicemail & Fax の章を参照します。
2. 1-12 ページの「[Oracle Email のインストール](#)」に示す手順に従って、Oracle Email をインストールして構成します。
3. 第 8 章「[Oracle Voicemail & Fax のインストールおよび構成](#)」に示す手順に従って、Oracle Voicemail & Fax をインストールして構成します。
4. Oracle Voicemail & Fax の管理およびメンテナンスの詳細は、『Oracle Voicemail & Fax 管理者ガイド』を参照します。

Oracle9iAS Wireless のインストール

Oracle9iAS Wireless のインストール手順は、次のとおりです。

1. 1-9 ページの「[一般的なインストール手順](#)」の手順 1 ～ 7 に従います。
2. Oracle9iAS Wireless インスタンスの構成および管理の詳細は、『Oracle9iAS Wireless 管理者ガイド』を参照します。

インストールの準備

この章では、Oracle Collaboration Suite の各インストールを計画する方法について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [ハードウェア要件](#)
- [オペレーティング・システムのバージョン](#)
- [多言語サポート](#)
- [オンライン・ドキュメントの要件](#)
- [ポートの割当て](#)
- [認証ソフトウェア](#)
- [環境に対するインストール前のタスク](#)

ハードウェア要件

表 2-1 に、各 Oracle Collaboration Suite 製品のインストールに対するハードウェアの最低要件を示します。

表 2-1 Oracle Collaboration Suite ハードウェア要件¹

要件	値
CPU	<ul style="list-style-type: none">■ Oracle Collaboration Suite および Oracle9iAS Infrastructure には、Intel Pentium 300MHz 以上のプロセッサが必要■ Oracle Collaboration Suite Information Storage には、Intel Pentium 166MHz 以上のプロセッサが必要
モニター	256 色カラー表示機能
メモリー（最低要件）	<ul style="list-style-type: none">■ Oracle9iAS Infrastructure: 512MB■ Oracle Collaboration Suite Information Storage: 128MB■ Oracle Collaboration Suite Middle-Tier: 256MB
TMP または TEMP ディレクトリ	Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier には、最低 300MB の空き領域が必要
ディスク領域	<ul style="list-style-type: none">■ Oracle9iAS Infrastructure: 3.58GB■ Oracle Collaboration Suite Information Storage: 4.6GB 以上■ Oracle Collaboration Suite Middle-Tier: 1GB

¹ Oracle Files のハードウェアおよびサイズの要件の詳細は、『Oracle Files プランニング・ガイド』を参照してください。

その他の Oracle Web Conferencing のハードウェア要件

Oracle Web Conferencing は、ドキュメント変換サービスおよび音声変換サービスを提供します。ドキュメント変換サービスは、ドキュメント・プレゼンテーション・モードで表示できるように、Microsoft Office ドキュメントを HTML に変換します。音声変換サービスでは、会議の音声部分の音声ストリーミング、キャプチャおよび記録を可能にします。

ドキュメント変換は Document Conversion Server を介して提供されます。このサーバーは、Middle-Tier とは別のコンピュータに存在する必要があります。コンピュータには、Microsoft Windows 2000 が搭載されている必要があります。Voice Conversion Server も、Middle-Tier と別のコンピュータに存在し、Microsoft Windows 2000 が搭載されている必要があります。さらに、Voice Conversion Server には、Intel Dialogic カードが必要です。サイズの要件に応じて、両方のサービスを 1 台のコンピュータにインストールできます。

関連資料： 使用しているシステムのサイズの要件に固有の情報は、『Oracle Web Conferencing サイジング・ガイド』を参照してください。

オペレーティング・システムのバージョン

表 2-2 に、各 Oracle Collaboration Suite 製品のインストールに対するオペレーティング・システムの要件を示します。

表 2-2 Oracle Collaboration Suite のオペレーティング・システム要件

要件	値
オペレーティング・システム	Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier: <ul style="list-style-type: none">■ Microsoft Windows NT 4.0 Workstation および Server Service Pack 6a 以上■ Microsoft Windows 2000 Professional および Server Service Pack 1 以上 Oracle Collaboration Suite Information Storage: <ul style="list-style-type: none">■ Microsoft Windows NT 4.0 Workstation および Server Service Pack 5 以上■ Microsoft Windows 2000 Professional および Server Service Pack 以上
仮想メモリー	Oracle9iAS Infrastructure: <ul style="list-style-type: none">■ 1024MB 以上■ 2GB を推奨 Oracle Collaboration Suite Information Storage: <ul style="list-style-type: none">■ 200MB 以上■ 400MB 以下 Oracle Collaboration Suite Middle-Tier: <ul style="list-style-type: none">■ 512MB 以上■ 1GB を推奨 関連項目： 2-7 ページの「 仮想メモリー・ページング・ファイルのサイズ変更 」

その他の Oracle Web Conferencing のソフトウェア要件

Oracle Web Conferencing の音声変換サービスおよびドキュメント変換サービスを使用するには、追加のハードウェアおよびソフトウェアが必要です。音声変換サービスは Oracle Web Conferencing Voice Conversion Server により使用可能になり、ドキュメント変換サービスは Oracle Web Conferencing Voice Conversion Server により使用可能になります。これらのサーバーとそのハードウェア要件については、2-2 ページの「[その他の Oracle Web Conferencing のハードウェア要件](#)」を参照してください。

Oracle Web Conferencing 音声およびドキュメント変換サービスが常駐するコンピュータには、Microsoft Windows 2000 オペレーティング・システムが必要です。Voice Conversion Server をインストールするコンピュータには、Intel Dialogic ソフトウェアも必要です。Document Conversion Server をインストールするコンピュータには、Microsoft Office 2000 が必要です。サイズの要件に応じて、両方のサーバーを 1 台のコンピュータにインストールできますが、ハードウェアおよびソフトウェアの要件はすべて満たす必要があります。

多言語サポート

Oracle Collaboration Suite のユーザー・インタフェースは、アラビア語、ポルトガル語（ブラジル）、デンマーク語、オランダ語、英語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、ギリシア語、イタリア語、日本語、韓国語、ノルウェー語、ポルトガル語、中国語（簡体字）、スペイン語、スウェーデン語、中国語（繁体字）およびトルコ語で使用できます。

Oracle Calendar での多言語サポートの制限

Oracle Calendar Server の管理ツールのインタフェースは英語ですが、Oracle Collaboration Suite でサポートされている全言語でのデータ入力をサポートしています。

Oracle Calendar のクライアントは、次のクライアント以外は英語でのみ使用可能です。

- **Oracle Connector for Outlook:** Oracle Collaboration Suite でサポートされるすべての言語（アラビア語を除く）
- **Oracle Calendar Web Client:** Oracle Collaboration Suite でサポートされるすべての言語（アラビア語を除く）
- **Oracle Calendar Desktop Client for Windows:** 英語、フランス語、ドイツ語および日本語
- **Oracle Calendar Sync for Palm for Windows:** 英語、フランス語、ドイツ語および日本語
- **Oracle Calendar Sync for Pocket PC for Windows:** 英語、フランス語、ドイツ語および日本語

オンライン・ドキュメントの要件

Web ブラウザまたは Portable Document Format (PDF) ビューアを使用して、Oracle Collaboration Suite のドキュメントをオンラインで表示できます。

表 2-3 に、Oracle Collaboration Suite のオンライン・ドキュメントを表示するための要件を示します。

表 2-3 オンライン・ドキュメントの要件

要件	項目
オンライン・リーダー	次のいずれかのソフトウェアが必要です。 HTML <ul style="list-style-type: none">■ Netscape Navigator 4.7 以上■ Microsoft Internet Explorer 5.0 以上 PDF <ul style="list-style-type: none">■ Acrobat Reader 4.0 以上■ Acrobat Reader+Search 4.0 以上■ Acrobat Exchange 4.0 以上■ PDFViewer Web ブラウザ・プラグイン 1.0 以上
ライブラリ全体の HTML の検索およびナビゲーション	アクティブなインターネット接続
ディスク領域	37.5MB

関連資料：『Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ガイド』

ポートの割当て

インストール後、Oracle Universal Installer は、Oracle Collaboration Suite コンポーネントのインストール中に割り当てられたポートを示す portlist.ini という名前のファイルを作成します。インストール・プロセスで、ポートの競合が自動的に検出され、そのコンポーネントに割り当てられた範囲で代替ポートが選択されます。

関連項目： 付録 D 「デフォルトのポート番号およびポート範囲」

認証ソフトウェア

多くの Oracle Collaboration Suite コンポーネントに、Web ブラウザが必要です。すべての Oracle Collaboration Suite のインストールで、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle9i データベースが必要です。必要なシステム要件についての最新情報は、こちらをご覧ください。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/>

環境に対するインストール前のタスク

この項の内容は次のとおりです。

- [環境変数の設定](#)
- [仮想メモリー・ページング・ファイルのサイズ変更](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の Real Application Clusters](#)

環境変数の設定

Oracle9iAS Infrastructure または Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールする際には、TMP または TEMP ディレクトリに 300MB 以上の空き領域があることを確認してください。

重要： ORACLE_HOME 環境変数は、レジストリに自動的に設定されます。この変数をシステム環境変数と同じ値に設定しないでください。インストールができなくなります。

Windows NT で TMP または TEMP ディレクトリ・パスを変更するには、次のようにします。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「システム」を選択します。
2. 「環境」タブを選択します。
3. 「*username* のユーザー環境変数」リスト・ボックスから TMP または TEMP 変数を選択します。
4. 「値」フィールドを空き領域が 300MB 以上のディレクトリに変更します。
5. 「設定」をクリックします。
6. 「OK」をクリックします。

Windows 2000 で TMP または TEMP ディレクトリ・パスを変更するには、次のようにします。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「システム」を選択します。

2. 「詳細」タブをクリックします。
3. 「環境変数」をクリックします。
4. 「*username* のユーザー環境変数」リスト・ボックスから TMP または TEMP 変数を選択します。
5. 「編集」をクリックします。
6. 「変数値」フィールドを空き領域が 300MB 以上のディレクトリに変更します。
7. 「システムのプロパティ」が終了するまで「OK」をクリックします。

仮想メモリー・ページング・ファイルのサイズ変更

Windows NT で仮想メモリーの量を変更するには、次のようにします。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。
2. 「パフォーマンス」タブをクリックします。
3. 「変更」をクリックします。
4. 適切なドライブを選択し、「初期サイズ (MB)」フィールドに新規の値を入力します。
5. 「設定」をクリックします。
6. 「システムのプロパティ」が終了するまで「OK」をクリックします。

Windows 2000 で仮想メモリーの量を変更するには、次のようにします。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。
2. 「詳細」タブをクリックします。
3. 「パフォーマンス オプション」をクリックします。
4. 「変更」をクリックします。
5. 適切なドライブを選択し、「初期サイズ (MB)」フィールドに新規の値を入力します。
6. 「設定」をクリックします。
7. 「システムのプロパティ」が終了するまで「OK」をクリックします。

Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の Real Application Clusters

Real Application Clusters をインストールするには、次のインストール前手順を実行します。
この情報は、Oracle Cluster Setup Wizard のオンライン・ヘルプにも説明されています。

関連資料： Real Application Clusters のインストール前の手順の詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』を参照してください。このマニュアルは、次の URL の Oracle Technology Network Japan で入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp/>

この項の内容は次のとおりです。

- [RAW デバイスの要件](#)
- [Real Application Clusters のインストール前のタスク](#)

RAW デバイスの要件

各インスタンスでは、データ・ファイル用の共有ディスク・サブシステム上で、フォーマットされていない一連のデバイスを共有します。必要な RAW デバイスの数およびタイプは、いくつかの要因によって異なります。

「汎用目的」、「トランザクション処理」または「データ・ウェアハウス」のいずれかのデータベース構成タイプを使用する場合は、[表 2-4](#) に示した最小サイズを使用して、特定の表領域を作成する必要があります。使用するディスクのサイズ要件を考慮する際には、各ディスクで拡張パーティションには使用できない初期シグネチャ 1MB または 2MB を計上することを忘れないでください。これらの要件は、ベンダーが供給するクラスタウェア・レイヤーとオラクル社が供給するクラスタウェア・レイヤーのどちらでも同じです。

Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成しない場合、作成する論理ドライブの数は、作成予定のデータ・ファイル、REDO ログ・ファイルおよび制御ファイルの数によって決まります。ただし、投票ディスク用に 100MB の論理ドライブを 1 つ作成する必要があります。

表 2-4 Database Configuration Assistant 用の論理ドライブのディスク・サイズ

パーティション作成の対象	ファイル・サイズ
SYSTEM 表領域	420MB
サーバー・パラメータ・ファイル	5MB
USERS 表領域	120MB
TEMP 表領域	120MB
UNDOTBS 表領域	320MB

表 2-4 Database Configuration Assistant 用の論理ドライブのディスク・サイズ（続き）

パーティション作成の対象	ファイル・サイズ
EXAMPLE 表領域	160MB
CWMLITE 表領域	100MB
XDB 表領域	50MB
ODM 表領域	280MB
INDX 表領域	70MB
TOOLS 表領域	12MB
DRSYS 表領域	250MB
最初の制御ファイル	110MB
2 番目の制御ファイル	110MB
各インスタンス用の 2 つの REDO ファイル	120MB
srvcfg（クラスタウェア用の投票ディスク）	100MB

デフォルトでは、Database Configuration Assistant は自動 UNDO 管理を使用します。各インスタンス用に 1 つの UNDO 表領域を作成します。事前に構成された全データベース・テンプレート用の UNDO 表領域の論理ドライブには、320MB 以上が必要です。手動の UNDO 管理を使用する場合は、625MB 以上のサイズの RBS 論理ドライブを作成します。

関連資料： RAW デバイス作成方針と DBCA データベース構成オプションの計画の詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』を参照してください。

Real Application Clusters のインストール前のタスク

クラスタ・ソフトウェアをインストールする一連のノードを準備するには、Windows NT または Windows 2000 のコンピュータで次のタスクを実行します。

- **タスク 1:** 拡張パーティションおよび論理ドライブの作成
- **タスク 2:** シンボリック・リンク名の割当て
- **タスク 3:** クラスタの作成

タスク 1: 拡張パーティションおよび論理ドライブの作成

フォーマットされていない論理ドライブを構成するには、拡張パーティションと複数の論理ドライブを作成します。

クラスタ内の 1 つのノードから、Windows NT のディスク アドミニストレータまたはディスクの管理を実行して、拡張パーティションと複数の論理ドライブを作成します。各コンピュータは、同じドメインのメンバーか、信頼関係のドメイン内のものである必要があります。

関連資料： 拡張パーティションと論理ドライブの作成および管理の詳細は、Windows のディスク アドミニストレータまたはディスクの管理のオンライン・ヘルプを参照してください。

この項では、次の手順を説明します。

- [Windows NT でのパーティションおよびドライブの作成](#)
- [Windows 2000 でのパーティションおよびドライブの作成](#)

Windows NT でのパーティションおよびドライブの作成

1 つのノードから Windows NT のディスク アドミニストレータを実行し、拡張パーティションを 1 つ作成して、クラスタ全体の共有ディスク上に論理ドライブを構成します。使用する共有ディスク配列の構成に応じて、すべてのパーティションを収容するために、複数のディスクを使用できます。各コンピュータは、同じドメインのメンバーか、信頼関係のドメイン内のものである必要があります。

拡張パーティションを作成するには、次のようにします。

1. 管理者グループのメンバーとしてログインします。
2. 「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「ディスク アドミニストレータ」を選択して、ディスク アドミニストレータのウィンドウを表示します。
3. パーティション化されていないディスクか、拡張パーティションを含まないディスク上の空き領域の 1 領域を右クリックします。
4. 「拡張パーティションの作成」を選択します。ディスク アドミニストレータには、拡張パーティションの最大サイズが表示されます。
5. 拡張パーティションのサイズを入力し、「OK」をクリックします。

論理ドライブを作成するには、次のようにします。

注意： Oracle ファイルを RAW デバイスに格納する場合は、1 つの拡張パーティションに 121 以上の論理ドライブを作成しないことをお勧めします。
121 以上の論理ドライブを作成すると、コンピュータの再起動とディスク管理ツールの起動にかかる時間が大幅に増える可能性があります。

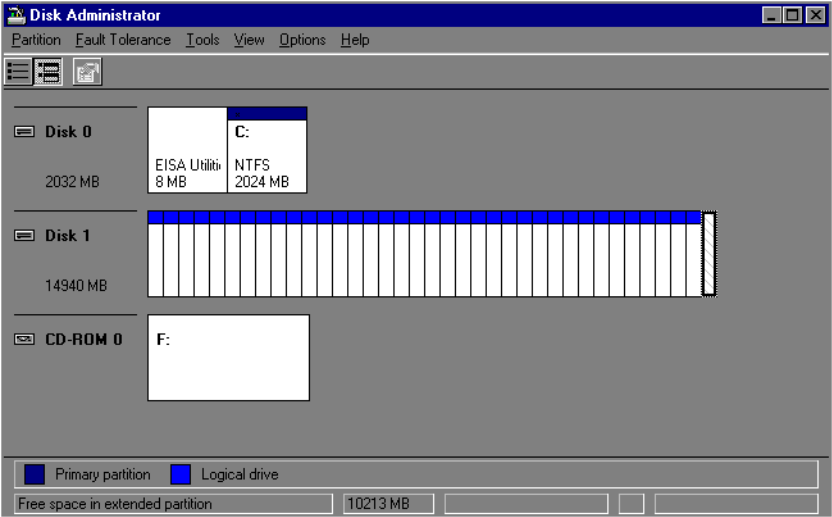
1. 拡張パーティションで空き領域の領域を選択します。
2. 「パーティション」→「作成」をクリックします。
ディスク アドミニストレータのウィンドウには、論理デバイスの最小サイズと最大サイズが表示されます。
 - a. 作成する論理ドライブのサイズを入力します。2-8 ページの表 2-4 に示したファイル・サイズで論理ドライブを作成します。
 - b. 「OK」をクリックします。
3. 論理ドライブを選択します。
4. 「ツール」→「ドライブ文字の割り当て」を選択します。
5. 「ドライブ文字を割り当てない」オプションを選択します。
6. 「OK」をクリックします。

注意： オプションで、全論理ドライブを作成してから、LetterDelete ユーティリティを実行して、1 つのコマンドによりすべてのドライブ文字割当てを削除します。

7. 必要な論理ドライブがすべて作成されるまで、手順 1 ～ 5 を繰り返します。
8. 「パーティション」→「今すぐ変更を反映」をクリックします。
確認ダイアログが表示され、ディスクに対して変更が加えられたことを知らせます。
9. 「はい」をクリックし、確認メッセージを受け入れます。
ディスクが正常に更新されたことを知らせるダイアログ・ボックスが表示されます。
10. 「OK」をクリックします。
11. 「パーティション」→「終了」をクリックします。
すべてのノードで変更が表示されます。

図 2-1 のディスク アドミニストレータのウィンドウは、あるディスクの構成の例を示しています。Database Configuration Assistant によりクラスタ・データベースを作成できるように、論理パーティションのサイズが設定されます。

図 2-1 ディスク アドミニストレータのウィンドウ



ディスク	内容
ディスク 0	プライマリ・パーティション
ディスク 1	36 の論理パーティションと 1 つの空き領域を持つ拡張パーティション

Windows 2000 でのパーティションおよびドライブの作成

1 つのノードから Windows 2000 のディスクの管理を実行し、拡張パーティションを 1 つ作成して、クラスタ全体の共有ディスク上に論理ドライブを構成します。使用する共有ディスク配列の構成に応じて、すべてのパーティションを収容するために、複数のディスクを使用できます。各コンピュータは、同じドメインのメンバーか、信頼関係のドメイン内のものである必要があります。

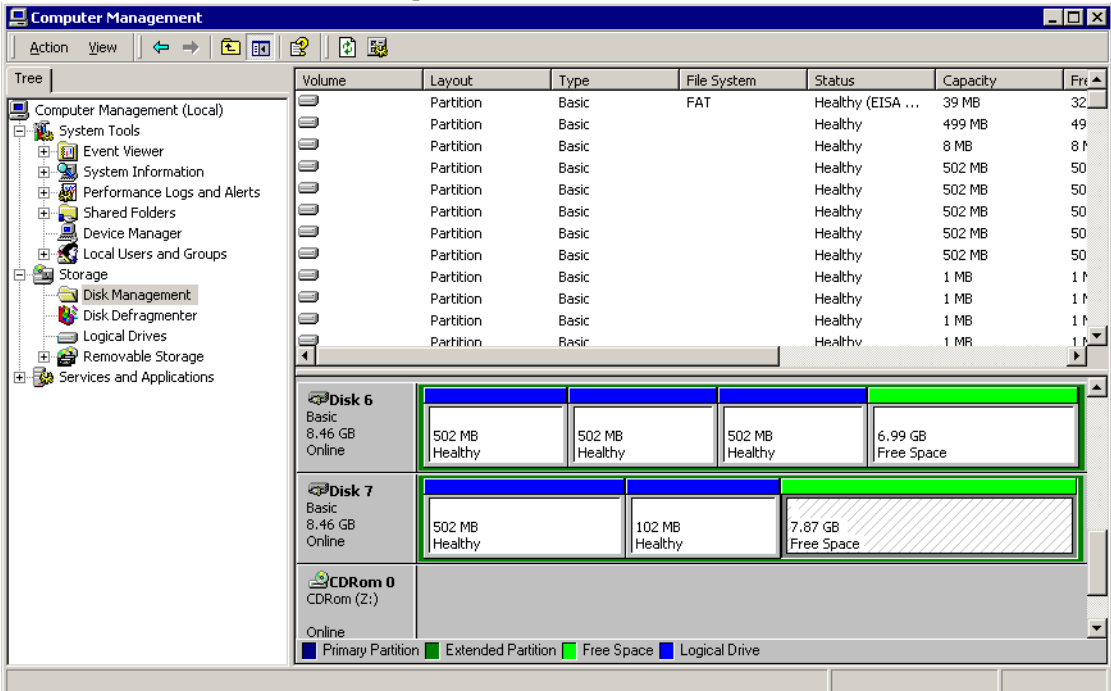
ベーシック・ディスクに複数のプライマリ・パーティション、1 つの拡張パーティションおよび複数の論理ドライブを作成する必要があります。ダイナミック・ディスクはサポートされていません。ベーシック・ディスクでは、Windows の以前のバージョンと同じパーティションを使用し、最大 4 つのプライマリ・パーティション、または 3 つのプライマリ・パーティションと 1 つの拡張パーティションを作成できます。

拡張パーティションと論理ドライブを作成するには、次のようにします。

1. 「設定」→「コントロールパネル」をクリックします。
2. 「管理ツール」をダブルクリックします。
3. 「記憶域」の隣にある「+」をクリックし、「ディスクの管理」を選択します。

「コンピュータの管理」ウィンドウが表示されます。「状態」列にディスクまたはボリュームの状態が表示されます。図 2-2 は、各ボリュームが「正常」で、各ディスクが「オンライン」であることを示しています。

図 2-2 「コンピュータの管理」ウィンドウ



4. ベーシック・ディスクの未割当て領域を右クリックし、「パーティションの作成」をクリックします。または、拡張パーティション内の空き領域を右クリックし、「論理ドライブの作成」をクリックします。
5. 「次へ」→「拡張パーティション」→「次へ」、または「論理ドライブ」→「次へ」をクリックします。2-8 ページの表 2-4 に示した各表領域データ・ファイルの適切な論理ドライブ・サイズを設定します。
6. 「次へ」をクリックします。

7. 「ドライブ文字またはドライブ パスを割り当てない」 オプションを選択します。
8. 「次へ」をクリックします。
9. 「このパーティションをフォーマットしない」 オプションを選択します。
10. 「次へ」をクリックします。
11. 「終了」をクリックします。

注意： シンボリック・リンクの作成や論理パーティションの追加など、ディスク管理の変更中に「ディスクの管理」ウィンドウが開いている場合、いったんウィンドウを閉じ、再度開いて適用した変更を表示する必要があります。

タスク 2: シンボリック・リンク名の割当て

次のいずれかの方法により、シンボリック・リンク名を割り当てます。

- [Oracle Cluster Setup Wizard](#) の使用
- [Object Link Manager](#) の使用
- [ImportSYMLinks](#) ユーティリティの使用

Oracle Cluster Setup Wizard の使用

[Oracle Cluster Setup Wizard](#) は、クラスタの作成、および既存クラスタへのノードの追加を支援します。また、シンボリック・リンク名を論理ドライブに割り当てることもできます。シンボリック・リンク名を作成し、[Oracle Cluster Setup Wizard](#) を使用してクラスタを作成するには、2-16 ページの「[タスク 3: クラスタの作成](#)」を参照してください。

Object Link Manager の使用

Object Link Manager は、シンボリック・リンク名の割当て、または既存のシンボリック・リンク名の名前変更を行う GUI ツールです。

関連項目： [Oracle Object Link Manager](#) をインストールするには、2-20 ページの「[RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール](#)」を参照してください。

1. `c:\temp\GUIOracleOBJManager.exe` を選択します。`temp` は、2-20 ページの「[RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール](#)」の項の手順 2 で定義した一時ディレクトリです。

[Oracle Object Manager](#) のウィンドウが表示されます。

- 2. 更新する行を選択し、ハイライト表示された行内の任意の場所をクリックします。
点滅するアクティブなカーソルが表示された編集ウィンドウが、「New Link Name」列で開きます。
- 3. 新規のリンク名を入力し、「Enter」をクリックします。
- 4. 手順 2 および 3 を繰り返して、その他のシンボリック・リンク名を作成します。

注意： 編集ウィンドウがアクティブな場合は、手順 5 に進まないください。変更が適用されません。

- 5. 「Options」 → 「Commit」を選択します。

ImportSYMLinks ユーティリティの使用

ImportSYMLinks ユーティリティは、シンボリック・リンク名の割当て、または既存のシンボリック・リンク名の名前変更を行うコマンドライン・ツールです。

関連項目： ImportSYMLinks ユーティリティをインストールするには、2-20 ページの「RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール」を参照してください。

- 1. TBL ファイルを作成します。

タスク	手順
既存のシンボリック・リンク名の変更	次のコマンドを使用して、既存のリンクを TBL ファイルにエクスポートします。 ExportSYMLinks.exe /f:filename /f:filename を指定しない場合は、現行の作業ディレクトリにデフォルトのファイル名 symmap.tbl が生成されます。
TBL ファイルの作成	サンプルの ASCII ファイルは、1 枚目のコンポーネント CD-ROM の次のディレクトリにあります。 ¹ ¥preinstall_rac¥olm¥sample.tbl 1. TBL ファイルを作成します。 2. ファイルを保存します。

¹ このサンプル・ファイルには、2 ノードのクラスタ・データベースの RAW パーティションに関連付けられたシンボリック・リンク名が含まれています。

2. 次のコマンドを使用して、シンボリック・リンク・マッピングをインポートします。

```
ImportSYMLinks.exe /f:filename
```

たとえば、次のようにします。

```
ImportSYMLinks.exe %f:c:\%temp%\mysymlinks.tbl
```

temp は、2-20 ページの「[RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール](#)」の項の手順 2 で定義した一時ディレクトリで、filename は、有効な TBL ファイルのフル・パスおよびファイル名です。

タスク 3: クラスタの作成

Oracle9i オペレーティング・システム依存のクラスタウェアを使用する場合は、Oracle Cluster Setup Wizard を使用してクラスタウェアをインストールし、シンボリック・リンクを割り当て、クラスタを作成します。ベンダーのオペレーティング・システム依存のクラスタウェアを使用する場合は、そのベンダーのドキュメントを参照してください。

Oracle9i オペレーティング・システム依存クラスタウェアのかわりに、ベンダーのオペレーティング・システム依存のクラスタウェアを使用する場合、Oracle Cluster Setup Wizard を実行する必要はありません。ただし、Oracle Universal Installer を起動する前に RAW デバイスを構成するには、RAW デバイス管理ユーティリティが必要です。一時的に RAW デバイス管理ユーティリティをインストールする必要があります。

クラスタ内のノードとなるノード上で、Oracle Cluster Setup Wizard を実行します。クラスタ内のノードにならないノードからのウィザードの実行はサポートされていません。既存のクラスタにノードを追加するには、常に CD-ROM から Oracle Cluster Setup Wizard を実行します。

関連資料： Windows プラットフォーム上のクラスタウェア層におけるノード追加の詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters 管理』を参照してください。

はじめに

- クラスタに含まれるすべてのノードが起動していて、TCP/IP 環境で相互に通信できることを確認します。
- Oracle オペレーティング・システム依存のクラスタウェアと Object Link Manager をインストールするために、ノードごとに 2MB の空き領域があることを確認します。
- ベンダーのオペレーティング・システム依存クラスタウェアを停止します。これは、Oracle オペレーティング・システム依存クラスタウェアをインストールする予定で、ベンダーのオペレーティング・システム依存クラスタウェアを実行している場合のみです。

注意： 1つのクラスタ内の各ノードでは同じユーザー名とパスワードを使用するか、1つのドメイン・ユーザー名を使用することをお勧めします。これには管理権限が必要で、各ノードは同じドメイン内に存在する必要があります。

管理権限を確認するには、Oracle Cluster Setup Wizard が実行されるノードから、クラスタ内の各ノードに次のコマンドを入力します。

```
NET USE %host_name%*
```

`host_name` は、他のノードのパブリック・ネットワーク名です。

たとえば、`node1` で Oracle Cluster Setup Wizard を実行し、`node1`、`node2`、`node3` および `node4` の4つのノードのあるクラスタを作成して、`node1` で次のコマンドを入力します。

```
NET USE %node2%*
```

```
NET USE %node3%*
```

```
NET USE %node4%*
```

コマンドが正常に完了すると、各ノードで管理権限が得られます。

クラスタを作成するには、次のようにします。

1. クラスタの1つのノードに1枚目のコンポーネント CD-ROM を挿入し、`%preinstall_rac%clustersetup` ディレクトリに移動します。
2. `clustersetup.exe` を選択し、Oracle Cluster Setup Wizard を起動します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. クラスタの作成を選択して、「次へ」をクリックし、「ディスク構成」画面を表示します。
5. オプションで、表 2-5 に示したタスクの1つを実行して、シンボリック・リンクの名前変更または追加を行います。

表 2-5 シンボリック・リンクのタスク

タスク	手順
シンボリック・リンクの名前変更	<ol style="list-style-type: none">1. 「Oracle シンボリック・リンクの作成」をクリックすると、Oracle Object Link Manger ウィンドウが表示されます。2. 「シンボリック・リンク」列から更新する行を選択します。 カーソルが点滅し始めます。3. 新規のリンク名を入力します。4. 手順 2 および 3 を繰り返して、その他のシンボリック・リンク名を変更します。5. 「適用」をクリックします。6. 画面の一番下にある進捗バーの動きが止まったら「クローズ」をクリックします。
シンボリック・リンクの作成	<ol style="list-style-type: none">1. 「Oracle シンボリック・リンクの作成」をクリックすると、Oracle Object Link Manger ウィンドウが表示されます。2. 「シンボリック・リンク」列から空の行を選択します。 カーソルが点滅し始めます。3. リンク名を入力します。4. 手順 2 および 3 を繰り返して、その他のシンボリック・リンク名を割り当てます。5. 画面の一番下にある進捗バーの動きが止まったら「クローズ」をクリックします。

6. 対応する行をハイライト表示して、srvcfg という名前の投票ディスクを割り当てます。
7. 「次へ」をクリックします。
8. 「クラスタの作成」を選択し、「次へ」をクリックして「ネットワークの選択」ウィンドウを表示します。
9. ノードが高速プライベート・ネットワークで接続されている場合、「インターコネク트에プライベート・ネットワークを使用します」を選択します。それ以外の場合は、「インターコネク트에パブリック・ネットワークを使用します」を選択し、「次へ」をクリックして「ネットワーク構成」ウィンドウを表示します。
10. ノードの名前を入力し、「次へ」をクリックします。
 - この項の手順 9 でプライベート・ネットワークを選択した場合、ノードのパブリック名とプライベート名を入力します。
 - この項の手順 9 でパブリック・ネットワークを選択した場合は、パブリック名を入力します。

ローカル・ノードで VIA が検出されると、「VIA の検出」ウィンドウが表示されます。手順 11 に進みます。それ以外の場合は、手順 12 に進みます。

11. クラスタウェアの相互接続に VIA を使用するか、しないかを選択します。選択後、「次へ」をクリックすると、「インストール場所」ウィンドウが表示されます。
12. インストールの場所を選択し、「次へ」をクリックします。

進捗ウィンドウには、Oracle Cluster Setup Wizard で実行される様々なアクションが表示されます。

関連資料： Oracle Cluster Setup Wizard オンライン・ヘルプ

RAW デバイス管理ユーティリティの概要

表 2-6 に示したその他のディスク管理ユーティリティは、すべてのノードで Oracle Cluster Setup Wizard によってインストールされます。これらのユーティリティは、Oracle Cluster Setup Wizard を実行しなければインストールされません。

表 2-6 RAW デバイス・ディスク管理ユーティリティ

ユーティリティ	タスク
Object Link Manager	論理ドライブに対するシンボリック・リンクを作成または変更する GUI ツール。このユーティリティは、Oracle Cluster Setup Wizard の一部として、または単独で使用できます。
DeleteDisk	ディスク全体をフォーマットしなおし、その内容を削除します。
LetterDelete	Oracle RAW パーティションからすべてのドライブ文字を削除し、コンピュータの再起動時にマッピングを無効にするために、ディスク・キー・レジストリを更新します。
LogPartFormat	論理パーティション内のすべての領域を初期化して 0 にし、シンボリック・リンク名を削除します。
crlogdr	論理ドライブとそれらの関連シンボリック・リンク名を、プライマリ・パーティションがなく、拡張パーティションが 1 つのディスクで作成および削除します。このツールを使用して、ディスク・レイアウトを調べます。
ExportSYMLinks	各ディスク・ドライブから永続シンボリック・リンクを読み取り、リストの TBL ファイル（デフォルトのファイル名は symmap.tbl）を生成します。
ImportSYMLinks	TBL ファイルを読み取り、ディスクとクラスタ内の全ノードに永続シンボリック・リンクを作成します。

関連資料：

- 2-20 ページの「[RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール](#)」。
- ユーティリティの使用については、ディスク管理ツールとともに `directory%olm` ディレクトリにある README を参照してください。
`directory` とは、Oracle Cluster Setup Wizard で Oracle オペレーティング・システム依存クラスタウェアをインストールしたディレクトリです。

RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール

Oracle Cluster Setup Wizard を使用して Oracle9i オペレーティング・システム依存クラスタウェアをインストールしなかった場合は、RAW デバイス管理ユーティリティを手動でインストールします。

ディスク管理ユーティリティを手動でインストールするには、クラスタの各ノードで次のタスクを実行します。

1. 一時ディレクトリを作成します。
2. 1 枚目のコンポーネント CD-ROM から `%preinstall_rac%olm` ディレクトリのコンテンツを作成した一時ディレクトリにコピーします。
3. 作成した一時ディレクトリから次のコマンドを入力して、Oracle Object Service をインストールします。

```
C:%temp> OracleOBJService %INSTALL
```

注意： Oracle Cluster Setup Wizard によりこのサービスが自動的に作成され、起動されます。

クラスタ内の各ノードの Oracle Object Service サービスを「自動」に設定します。サービスの構成、起動および停止の詳細は、Microsoft のオンライン・ヘルプを参照してください。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) へのアップグレード

この章では、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の既存のインストールおよび関連のコンポーネントを Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) にアップグレードするための手順について説明します。

アップグレードを正常に実行するための一連のイベントを次に示します。

1. 重要な情報のバックアップ
2. グローバリゼーション要件
3. Infrastructure のアップグレード
4. Information Store のアップグレード
5. Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier のインストール
6. アップグレード前のタスクの実行
7. Middle-Tier のアップグレード
8. アップグレード後のタスクの実行

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle インストールのバックアップ](#)
- [Oracle Collaboration Suite リリース 2 \(9.0.4.1.1\) での多言語サポートの有効化](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのアップグレード](#)
- [Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のアップグレード](#)
- [アップグレード後のタスク](#)
- [Oracle Collaboration Suite への CorporateTime Server 5.4 のアップグレード](#)

- 非 Oracle Collaboration Suite アップグレードの実行

Oracle インストールのバックアップ

注意： ソフトウェアをアップグレードする前に、Oracle ホーム・ディレクトリのソフトウェア、データベース・ファイルおよび Oracle インベントリをバックアップしておくことをお勧めします。

関連資料： Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) のドキュメントは、次の URL の Oracle Technology Network Japan で入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp/>

Oracle インストールをバックアップします。

1. Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Information Storage データベースをバックアップします。
2. Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Infrastructure をバックアップします。
3. Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Middle-Tier をバックアップします。
4. 9-3 ページの表 9-1 に示す該当のプラットフォームのディレクトリをバックアップします。
5. ユーザー unison としてログインし、¥users¥unison ディレクトリをバックアップして、Oracle Calendar をバックアップします。
6. oraInventory ディレクトリに存在する Oracle Universal Installer インベントリをバックアップします。
 - oraInventory サブディレクトリおよびその内容すべてを別のディレクトリにコピーします。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) での多言語サポートの有効化

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) では、表 3-1 に示すとおり、リリース 1 (9.0.3) の言語に加えてさらに 9 言語の翻訳をサポートしています。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) で多言語サポートを有効にするには、アップグレード・プロセスを実行する前に、リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier から ptlasst.bat スクリプトを実行します。このスクリプトは、次のディレクトリにあります。

注意：

- このスクリプトは、有効にする言語ごとに実行する必要があります。
 - すでに有効になっている言語は有効にできません。有効にしようとする
と、Oracle9iAS Single Sign-On および Oracle9iAS Portal のリポジトリが
破損します。リリース 1 (9.0.3) の 9 言語すべてを有効にしている場合
は、再度それらの言語を有効にしないでください。通常、一般的なり
リース 1 (9.0.3) のインストールでは、英語のみ、または 9 言語すべて
が有効になっています。
-

```
%ORACLE_HOME%\ora9ias\assistants\opca
```

ptlasst.bat ファイルを次のように使用します。

```
%ORACLE_HOME%\ora9ias\assistants\opca\ptlasst.bat -mode LANGUAGE -s portal -sp
portal -o orasso -op orasso -c myhost.domain.com:1521:mySID -lang lang
-available -silent- verbose -sso_c myhost.domain.com:1521:mySID
```

-available: ユーザー翻訳に使用可能な言語を判別します。

-c: ターゲット・データベースへの接続文字列。形式は、hostname:port:SID のように
する必要があります。

-o: Oracle9iAS Single Sign-On のスキーマ名。デフォルトは orasso です。

-op: Oracle9iAS Single Sign-On のパスワード。デフォルトは orasso です。

-lang: インストールする言語の言語コード。表 3-1 に各種言語とそのコードを示します。

-silent: Oracle9iAS Portal Configuration Assistant をサイレント・モードで実行します。
デフォルトは TRUE です。

-sp: Oracle9iAS Portal スキーマのパスワード。デフォルトは portal です。

-sso_c: Oracle9iAS Single Sign-On がインストールされているターゲット・データベース
への接続文字列。形式は、hostname:port:SID のようにする必要があります。

-verbose: 詳細なロギング・モードを有効にします。ログ・ファイルにエラーがある場合でも、Oracle9iAS Portal Configuration Assistant のインストールは続行されます。このパラメータが設定されていない場合、ロギング情報は簡単なものになり、ORA-、PLS- または SP2 エラーが発生した場合、Oracle9iAS Portal Configuration Assistant はインストールを強制終了します。デフォルトは TRUE です。

次の識別名を使用して、Oracle Internet Directory から Oracle9iAS Portal および Oracle9iAS Single Sign-On のランダム化されたパスワードを取得できます。

```
OrclResourceName=PORTAL,orclReferenceName=sid.myhost.domain.com,cn=IAS
Infrastructure Databases,cn=IAS,cn=Products,cn=OracleContext
```

```
OrclResourceName=ORASSO,orclReferenceName=sid.myhost.domain.com,cn=IAS
Infrastructure Databases,cn=IAS,cn=Products,cn=OracleContext
```

表 3-1 に、Oracle Collaboration Suite リリース 2（9.0.4.1.1）によってサポートされている 18 の言語およびその言語コードを示します。

表 3-1 Oracle Collaboration Suite リリース 2（9.0.4.1.1）でサポートされている言語

言語	コード	リリース 1（9.0.3）でのサポート
アラビア語	ar	なし
ポルトガル語（ブラジル）	ptb	あり
デンマーク語	dk	なし
オランダ語	nl	なし
フィンランド語	sf	なし
フランス語	f	あり
ドイツ語	d	あり
ギリシア語	el	なし
イタリア語	i	あり
日本語	ja	あり
韓国語	ko	あり
ノルウェー語	n	なし
ポルトガル語	pt	なし
中国語（簡体字）	zhs	あり
スペイン語	e	あり
スウェーデン語	s	なし
中国語（繁体字）	zht	あり

表 3-1 Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) でサポートされている言語 (続き)

言語	コード	リリース 1 (9.0.3) でのサポート
トルコ語	tr	なし

関連資料： 言語コードの詳細は、『Oracle9i Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード

Oracle Collaboration Suite レベルでの Oracle9iAS Infrastructure のアップグレードに加えて、Infrastructure は Oracle Email および Oracle9iAS Wireless のコンポーネント・レベルでもアップグレードする必要があります。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Collaboration Suite レベルでの Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure での Oracle Email のアップグレード](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure での Oracle9iAS Wireless のアップグレード](#)

Oracle Collaboration Suite レベルでの Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード

Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1、Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 または Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Infrastructure を Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.3 にアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.3 パッチ 3038037 を Infrastructure に適用します。
2. [表 3-2](#) に示すファイルを、リリース 2 (9.0.4.1.1) の Oracle9iAS Infrastructure のインストール用 CD-ROM の `CDROM_ROOT\tools\upgrade` ディレクトリから、アップグレードする Infrastructure の Oracle ホーム・ディレクトリ内の指定されたターゲット・ディレクトリにコピーします。

表 3-2 指定のターゲット・ディレクトリにコピーするファイル

ファイル	ターゲット・ディレクトリ
modDirectiveMS.xsd	%ORACLE_HOME%\dcm\config\plugins\apache
opca.jar	%ORACLE_HOME%\sysman\webapps\emd\WEB-INF\lib
portalSMI.jar	%ORACLE_HOME%\sysman\webapps\emd\WEB-INF\lib
repository.jar	%ORACLE_HOME%\jlib
ApacheModuleFastCGI.dll	%ORACLE_HOME%\Apache\Apache\modules

表 3-2 指定のターゲット・ディレクトリにコピーするファイル（続き）

ファイル	ターゲット・ディレクトリ
ApacheModuleOSSO.dll	%ORACLE_HOME%\¥Apache¥Apache¥modules
FastCGI.dll	%ORACLE_HOME%\¥Apache¥fastcgi
FastCGI.lib	%ORACLE_HOME%\¥Apache¥fastcgi
fcgi.jar	%ORACLE_HOME%\¥Apache¥fastcgi

3. Oracle9iAS Portal のパッチ 2513540 を適用します。

このパッチを適用するには、次のようにします。

- a. ファイルの内容を一時ディレクトリに解凍します。このファイルには次のファイルが含まれています。
 - secapi.pks
 - secapi.pkb
 - secapip.pks
 - secapip.pkb
 - secoid.pks
 - secoid.pkb
 - secoidd.pkb
 - secrmoid.sql
 - recompile.sql
 - ssooidd.sql
- b. パッチを適用するためのシステム停止時間をスケジュールします（Infrastructure のリポジトリ・データベースを除くすべての Infrastructure プロセスを停止します）。これは、パッチの適用中にどのユーザーにも Oracle9iAS Portal にアクセスさせないためです。
- c. 次の例のように、SQL*Plus を使用して Oracle9iAS Portal スキーマの所有者としてログインします。

```
c:¥>sqlplus portal/portal_schema_password
```
- d. SQL*Plus シェルで、次のコマンドを実行します。

```
set define off
```

- e. 次の順序でファイルをコンパイルします。
 - @secapi.pks
 - @secapip.pks
 - @secoid.pks
 - @secapi.pkb
 - @secapip.pkb
 - @secoid.pkb
 - @secoidd.pkb
- f. 前述のファイルのコンパイルにより、一部の依存スキーマ・オブジェクトが無効になります。次のスクリプトを使用して、これらのオブジェクトを再コンパイルします。

注意： このスクリプトの実行には、数分かかります。

```
@recompile.sql
```

- g. この手順の手順 b で停止したすべての **Infrastructure** プロセスを再起動します。
4. Oracle Delegated Administration Services を使用して、orclguest ユーザーを作成します。

注意： デフォルトのサブスクリイバに新規ユーザーを作成するには、十分な権限が必要です。

- a. ユーザーを作成する権限を持つユーザーとして Oracle Delegated Administration Services にログインします。
- b. 「ディレクトリ」タブをクリックします。
- c. 「検索結果」セクションで、「作成」をクリックします。
- d. 構成によって、「ユーザーの作成」ページで入力要求される値は異なります。この場合、**ユーザー名**の値は orclguest である必要があります。必要に応じて、他の値を入力します。すべての必須フィールドが入力されていることを確認します。
- e. 「送信」をクリックします。

5. Oracle Directory Manager を使用して次の手順を完了し、orclguest ユーザーのプロビジョニングを完了します。

- a. デフォルトのレルムの DN を検索します。

Oracle Directory Manager を使用し、cn=orcladmin としてログインします。「**エントリ管理**」セクションで、cn=common,cn=products,cn=oraclecontext エントリへ移動します。orcldefaultsubscriber 属性の値はデフォルトのレルムの DN です。

- b. orclguest ユーザー・エントリの DN を検索します。

Oracle Directory Manager を使用し、デフォルトのレルムの DN の下にある cn=common,cn=products,cn=oraclecontext,default_realm_DN エントリへ移動します。orclcommonusersearchbase 属性の値はユーザー検索ベースの DN です。

この DN へ移動します。orclguest ユーザー・エントリは、この DN の下のサブツリー（ほとんどの場合、ユーザー検索ベースより 1 つ下のレベル）に存在します。このユーザーの完全な DN を書きとめます。

- c. orclguest ユーザーのデフォルトのプロファイル・グループを OCS_PORTAL_USERS に設定します。

orclguest ユーザーのエントリで、orclguest ユーザーの DN の「プロパティの表示」から「すべて」を選択します。orcldefaultprofilegroup 属性に値 cn=ocs_portal_users,cn=groups,default_realm_DN を移入します。default_realm_DN をこの手順の手順 a で取得した DN に置き換えます。

- d. orclguest を OCS_PORTAL_USERS グループに追加します。

Oracle Directory Manager を使用して、cn=ocs_portal_users,cn=groups,default_realm_DN エントリへ移動します。手順 b で取得した orclguest の DN を uniquemember 属性に追加します。この属性の既存の値は削除しないでください。ocs_portal_users エントリの DN を書きとめます。

注意： 新規ユーザーを作成する際、Oracle Collaboration Suite ホーム・ページはデフォルトでは設定されません。

関連項目： Oracle Collaboration Suite ホーム・ページの設定方法の詳細は、C-3 ページの「[Oracle Collaboration Suite Web Client 構成のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Oracle9iAS Infrastructure での Oracle Email のアップグレード

Oracle9iAS Infrastructure で Oracle Email をアップグレードするには、次のようにします。

1. 電子メールの管理者がベース・ユーザーの電子メール属性を変更できるように、ACL を変更します。
 - a. oidadmin を実行し、cn=orcladmin として接続します。
 - b. cn=Common,cn=Products,cn=OracleContext エントリへ移動します。
 - c. 共通のコンテナから orclsubscribersearchbase 属性の値を取得します。
 - d. %ORACLE_HOME%\oes\bin の下に存在する emailaci.ldif をバックアップし、次のテキストを使用して再作成します。

注意： このテキストの最後の 2 行は単一行として入力する必要があります。

```
dn: %SUBSCRIBER_SEARCHBASE%
changetype: modify
add: orclaci
orclaci: access to attr=(mail) by group="cn=EmailAdminsGroup,
cn=EmailServerContainer,cn=Products,cn=OracleContext" (write)
```

- e. emailaci.ldif スクリプトの %SUBSCRIBER_SEARCHBASE% を、手順 c で取得した orclsubscribersearchbase の値に置き換えます。
 - f. 次のように入力して、emailaci.ldif をロードします。


```
ldapmodify -v -a -Dcn=orcladmin -w orcladmin_password -h ldap_host -p
ldap_port -f emailaci.ldif
```
2. targetdn 属性を索引付けします。これによって、Oracle Email に必要な属性を検索できます。
 - a. データベースの所有者として、Oracle9iAS Infrastructure の Oracle Internet Directory がインストールされているコンピュータにログインします。
 - b. Oracle Internet Directory サーバーを停止します。
 - c. 次のように入力して、targetdn に対し、catalog.bat を実行します。


```
%ORACLE_HOME%\ldap\bin/catalog.bat -connect infrastructure_connectstr
-add -attr targetdn
```
 - d. Oracle Internet Directory サーバーを再起動します。

Oracle9iAS Infrastructure での Oracle9iAS Wireless のアップグレード

Oracle Collaboration Suite Metadata Repository 内の Oracle9iAS Wireless スキーマは、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier のインストール時に、既存の Metadata Repository に対して自動的にアップグレードされます。Oracle Collaboration Suite Infrastructure に関しては、追加のアップグレード手順を実行する必要はありません。

関連項目： Oracle9iAS Wireless のアップグレード手順の詳細は、3-36 ページの「[Oracle9iAS Wireless のアップグレード](#)」を参照してください。

Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのアップグレード

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Oracle Email および Oracle Files Information Store はどちらも Oracle9i リリース 2 (9.2.0.3) にアップグレードする必要があります。

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のアップグレード

この項では、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をリリース 1 (9.0.3) からリリース 2 (9.0.4.1.1) にアップグレードする方法を説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Collaboration Suite リリース 2 \(9.0.4.1.1\) の Middle-Tier のインストール](#)
- [コンポーネントのアップグレード前のタスク](#)
- [Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant](#)

重要： 多言語サポートを有効にするには、この項のアップグレード・タスクを実行する前に、3-3 ページの「[Oracle Collaboration Suite リリース 2 \(9.0.4.1.1\) での多言語サポートの有効化](#)」の手順を実行する必要があります。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier のインストール

Middle-Tier をアップグレードする前に、次の手順に従って、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier がインストールされているのと同じコンピュータ上の別の Oracle ホームにリリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier をインストールする必要があります。

1. リリース 1 (9.0.3) のプロセスをすべて停止します。
2. 次の例外を除いて、6-8 ページの「[Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール](#)」で説明する Middle-Tier のインストール手順に従います。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) のインストール時に、Oracle Universal Installer で「**Oracle Files**」チェックボックスのチェックを外し、Oracle Files Configuration Assistant が自動的に起動しないようにします。

Oracle Files Configuration Assistant が起動した場合は、「**取消**」をクリックして終了します。

注意：

- Middle-Tier の構成フェーズで、Web Client のインストールは正常に終了しませんが、手動で構成するしかないのでこの手順は必要です。
 - Upgrade Assistant では、リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier のインストール時にリリース 1 (9.0.3) およびリリース 2 (9.0.4.1.1) のインベントリ・ディレクトリが同じである必要があります。
-
-

コンポーネントのアップグレード前のタスク

この項では、アップグレード・プロセスを開始する前に実行する必要のあるアップグレード前のタスクについて説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar のアップグレード前のタスク](#)
- [Oracle Email のアップグレード前のタスク](#)
- [Oracle Ultra Search のアップグレード前のタスク](#)
- [Oracle Voicemail & Fax のアップグレード前のタスク](#)
- [Oracle9iAS Wireless のアップグレード前のタスク](#)

Oracle Calendar のアップグレード前のタスク

Oracle Calendar をアップグレードする前に、%ORACLE_HOME%\ocal\%upgrade から ocalPreUpg.cmd を実行します。これにより、アップグレード・プロセス中に使用され、アップグレードが正常に完了すると自動的に削除される仮想ドライブが作成されます。

注意： アップグレードを実行する前に、新規ソフトウェアの要件に基づいてサイズ計算を再評価することをお勧めします。詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の付録 A「ディスク領域およびメモリー」を参照してください。（この付録は UNIX 固有のものです、Windows の要件も類似しています。）機能の追加により、CPU の使用量のハードウェア要件が変更されています。現在の Oracle Calendar インストールで、1 日に数回、CPU 使用状況の通常のピークが 60%以上に達する場合、新規インストールには追加の CPU が必要になる可能性があります。また、ご使用の配置で以前のバージョンのカレンダー・クライアントが新規 Calendar Server に対して使用されている場合、CPU の使用量が増加します。

Oracle Email のアップグレード前のタスク

Oracle Email をアップグレードする前に、次の手順を実行する必要があります。

- パッチ 2868153 を Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の ORACLE_HOME に適用し、共有フォルダの既存の権限をリリース 2 (9.0.4.1.1) で必要な形式にアップグレードします。
- Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) および Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の両方のインストールが含まれる複数の Middle-Tier を実行する場合、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) にパッチ 2979341 を適用する必要があります。Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) のクライアントが作成した共有フォルダに Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) がアクセスするためには、このパッチが必要です。

Oracle Ultra Search のアップグレード前のタスク

Oracle Ultra Search をアップグレードする前に、次の手順を実行する必要があります。

- Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Oracle Ultra Search 管理ツールにログインし、すべての Oracle Ultra Search インスタンスで、すべてのクローラ同期スケジュールを停止および無効にします。Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) へのアップグレード後に、すべてのクローラ同期スケジュールを有効にできます。
- Oracle Net Configuration Assistant を使用して、Oracle Collaboration Suite Infrastructure データベースのネットワーク・サービス名を設定します。

関連資料： Oracle Net Configuration Assistant の使用方法の詳細は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

- アップグレード中に障害が発生した場合に備え、データベース・ホストの %ORACLE_HOME%\ultrasearch ディレクトリ内の全ファイルをバックアップします。

Oracle Voicemail & Fax のアップグレード前のタスク

Oracle Voicemail & Fax をアップグレードする前に、次の手順を実行する必要があります。

- Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier の Advanced Queue Message Waiting Indicator (AQMWI) プロセスを停止します。
- アップグレード中に障害が発生した場合に備え、Oracle Internet Directory 内の次のツリーをバックアップします。


```
cn=midtier_hostname, cn=computers, cn=oraclecontext
cn=telephony_server_host_name, cn=computers, cn=oraclecontext
cn=umontainer, cn=products, cn=oraclecontext
```
- %ORACLE_HOME%\sysman¥emd ディレクトリ内の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の targets.xml ファイルをバックアップします。
- Windows 2000 のシステム上で、実行中の Oracle Voicemail & Fax リリース 1 (9.0.3) のプロセスをすべて停止します。また、すべての既存の Oracle Voicemail & Fax リリース 1 (9.0.3) を (rmid、rmiregistry および UM で始まるすべてのサービスを含む) 削除します。

Windows 2000 のシステム上で、Oracle Voicemail & Fax コンテナ部分を sc_vsto.cfg ファイルから削除し、CT サーバーを再起動します。

関連項目： sc_vsto.cfg ファイルの構成の詳細は、8-6 ページの「[Oracle Collaboration Suite への Information Storage データベースの追加インストール](#)」を参照してください。

Oracle9iAS Wireless のアップグレード前のタスク

複数の Oracle Collaboration Suite Wireless Middle-Tier をアップグレードする場合、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant を起動する前に、次の手順を実行する必要があります。

1. ファーム内のすべての Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Wireless Middle-Tier (Oracle9iAS Wireless を実行するよう構成されている Oracle9iAS 中間層を含む) を停止します。

注意： 最初の Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の Wireless Middle-Tier のインストールを実行する前に、Infrastructure 内の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Wireless スキーマを必ずバックアップしてください。最初の Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の Wireless Middle-Tier のインストール時に、このスキーマはアップグレードされます。

2. アップグレードする最初の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の Wireless Middle-Tier を選択します。

3. 最初の Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の Wireless Middle-Tier を、前述の手順の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Wireless と同じコンピュータにインストールします。

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant は、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) へのアップグレード・プロセスを自動化するコマンドライン・ツールです。アップグレード・プロセス中に、アップグレードする Oracle Collaboration Suite コンポーネントを選択します。すると、アップグレードする各コンポーネントに対し、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant が個別のプラグインを実行して、アップグレード・プロセスを完了します。

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant は、次のディレクトリ内に存在します。

```
%ORACLE_HOME%\upgrade
```

このディレクトリには、ocsua.xml、ocsua.properties および ocsua.bat という、アップグレード・プロセスで使用される 3 つの主要なファイルが含まれています。これらのファイルについては、この項で後述します。また、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant には、次の 2 つのディレクトリが含まれています。

```
%ORACLE_HOME%\upgrade\log
```

```
%ORACLE_HOME%\upgrade\lib
```

log ディレクトリには、アップグレード・プロセス中に生成されたログ・ファイルが含まれます。lib ディレクトリには、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant フレームワークで必要な .jar ファイルが含まれています。

この項の内容は次のとおりです。

- [ocsua.xml ファイル](#)
- [ocsua.properties ファイル](#)
- [Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant の実行](#)

ocsua.xml ファイル

ocsua.xml ファイルには、コンポーネントのプラグインおよびユーザー入力が必要な変数がリスト表示されています。Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant フレームワークは、このファイルを読み取ることにより、個別のコンポーネントのアップグレードを実行するプラグインを読み取ります。このファイルは変更しないでください。

ocsua.properties ファイル

ocsua.properties ファイルには、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant フレームワークで使用されるオプションのプロパティが含まれています。このファイルに含まれていないプロパティの場合、アップグレード・プロセスは Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant フレームワークに必要な Java クラス内のデフォルト値を使用します。ocsua.properties の内容は次のとおりです。

```
#
# Global properties
#
# These properties apply to all components of Upgrade Assistant.
#
# Default global log level is NOTIFICATION
log.level=NOTIFICATION
#
# Utilities component
#
# Default log level for CopyFile class is NOTIFICATION
CopyFile.log.level=NOTIFICATION
#
# Component plug-in specific properties
#
#   For log level, the property name is plugin-name as a prefix
#   with ".log.level". Plug-ins can define any names for
#   other properties as long as they are prefixed with the
#   plug-in name
#
# Example: setting Ultra Search plug-in log level to TRACE to override default
#           log level of NOTIFICATION
#UltraSearch.log.level=TRACE
```

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant の実行

注意：

- すべての Oracle Collaboration Suite コンポーネントは同時にアップグレードする必要があります。
 - アップグレードする Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のディレクトリが同時にアクティブな Oracle Enterprise Manager ディレクトリである場合、Oracle Enterprise Manager ディレクトリは新規の Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) のディレクトリに変更されます。アクティブな Oracle Enterprise Manager ディレクトリが Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のホーム・ディレクトリと異なる場合は、変更されません。
 - `ocsua.bat` スクリプトは、一度に 1 つの Information Store をアップグレードするため、複数の Information Store の場合はそれぞれに対して実行する必要があります。
 - Middle-Tier のアップグレードによって、システムの他の Middle-Tier が停止することはありません。
 - 今回のリリースの Oracle Collaboration Suite では、1 台のコンピュータに複数の Oracle Email Middle-Tier は共存できません。
 - 既存の Oracle9i データベースから Oracle Ultra Search をアップグレードする場合は、『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
 - Upgrade Assistant を実行する前に、Oracle9iAS Metadata Repository の TNS 接続文字列を設定する必要があります。
 - Oracle Collaboration Suite Web Client は、Web Client Configuration Assistant を使用してアップグレードします。Web Client Configuration Assistant を起動する前に、Oracle9iAS Portal Middle-Tier を手動でインストールまたはアップグレードし、構成しておく必要があります。
3-38 ページの「[Oracle Collaboration Suite Web Client のアップグレード](#)」を参照してください。
-

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant は、自動的に次の手順を実行します。

- アップグレードする Oracle Collaboration Suite のソース・ディレクトリの存在およびリリース番号を検証します。
- アップグレードを選択したコンポーネントに基づき、実行するプラグインを識別します。

- アップグレードする各コンポーネントに対し、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のソース・ディレクトリ内の更新する構成ファイルを識別します。
- アップグレードするコンポーネントの共通およびプラグイン固有の変数の値を入力するよう要求します。

表 3-3 に、Oracle Files の Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に指定する必要がある情報を示します。

表 3-3 Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に対する必須 Oracle Files 情報

情報	説明
ホスト	既存の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Oracle Files スキーマが存在するデータベース・ホスト
ポート	データベース・リスナー・ポート
SID	データベース・サービス名

表 3-4 に、既存の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Oracle Files スキーマが Oracle Workflow と統合される場合に Oracle Files の Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に指定する必要がある情報を示します。

注意： スキーマ・アップグレード・プロセスは、最初の中間層に対してのみ実行する必要があります、追加の中間層に対して実行する必要はありません。

表 3-4 Oracle Files が Oracle Workflow と統合される場合の Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に対する必須 Oracle Files 情報

情報	説明
Oracle Files スキーマ	Oracle Workflow スキーマと統合される Oracle Files スキーマの名前
Oracle Files スキーマのパスワード	Oracle Files スキーマのパスワード
Oracle Workflow スキーマ	Oracle Files スキーマと統合される Oracle Workflow スキーマの名前
Oracle Workflow スキーマのパスワード	Oracle Workflow スキーマのパスワード

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Oracle Files スキーマのアップグレード時にエラーが発生した場合、次のログ・ファイルで詳細を確認します。

%ORACLE_HOME%\upgrade\log\FilesUpgrade.log

表 3-5 に、Oracle Ultra Search の Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に指定する必要がある情報を示します。

表 3-5 Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant に対する必須 Oracle Ultra Search 情報

情報	説明
SYS パスワード	データベースの SYS パスワード
WKSYS パスワード	データベースの WKSYS パスワード
TNS 接続文字列	データベースの TNS 接続文字列

- 各コンポーネントについて、アップグレードが必要なファイルのサマリーを表示します。
- 実行する必要があるアップグレード前のタスクのリストと、必要な場合は警告を表示します。

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant を実行するには、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier で次の手順を実行します。

1. %ORACLE_HOME%\upgrade ディレクトリに移動します。
2. ocsua.bat スクリプトを実行し、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant を起動し、アップグレード・プロセスを開始します。ocsua.bat ファイルを次のように使用します。

```
bash-2.05$ ocsua.bat -help
ocsua -sourcehome sourcehome [-config input XML] [-all]
Upgrade configuration files to the Oracle Collaboration Suite
リリース 2 (9.0.4.1.1) Oracle home: -sourcehome ORACLE_HOME for
Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) -config Input XML file that
lists all the plug-ins [-all] Run all the component plug-ins without prompt
```

ocsua.bat ファイルを実行して初めてアップグレードを実行する場合、アップグレード・プロセスは、Oracle Collaboration Suite で必要な Oracle9iAS コンポーネントを自動的にアップグレードします。これらのコンポーネントには、Oracle9iAS Portal、Oracle9iAS Web Cache および Oracle Enterprise Manager が含まれます。

ocsua.bat スクリプトの例

例 3-1 は、サンプルのアップグレード・セッションのログのコピーです。入力および出力の両方を示します。

例 3-1 ocsua.bat スクリプト

```
C:\OCSV2Home> ocsua.bat -sourcehome C:\OCSV1Home
Validating Oracle homes
-----
These are the components that can be upgraded
1. Oracle9iAS Portal
2. Oracle Ultra Search
3. Oracle9iAS Wireless
4. Oracle Calendar Server
5. Oracle Calendar Application System
6. Oracle Email
7. Oracle Email Store
8. Oracle Voicemail & Fax
9. Oracle Files
Enter component numbers and/or ranges(example:1-3,5) [all]:
-----
Validating component plug-ins
-----
Examining "Oracle9iAS Portal"
Upgrade items found:
Oracle_Collaboration_Suite_Release_1_ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.bat
-----
Examining "Oracle Ultra Search"
Upgrade items found:
Oracle_Collaboration_Suite_Release_1_ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/config/data-sources.xml
-----
Examining "Oracle9iAS Wireless"
Upgrade items found:
Oracle_Collaboration_Suite_Release_1_ORACLE_HOME/wireless/server/classes/oracle/panama/marconi/marconi.config
Upgrading the Oracle Collaboration Suite Middle Tier
Upgrading to Oracle Collaboration Suite Release 2 (9.0.4.1.1) 3-21
Oracle9iAS Wireless Repository
-----
Examining "Oracle Calendar Server"
Upgrade items found:
Oracle Calendar Server configuration files
Oracle Calendar Server database files
Oracle Calendar Server Oracle Internet Directory entries
Oracle Calendar Server administrator administration files
-----
```

```
Examining "Oracle Calendar Application System"
Upgrade items found:
Oracle Calendar applications configuration file
Oracle Calendar Web Client files
-----
Examining "Oracle Email"
Upgrade items found:
Oracle Email Oracle Internet Directory entries
Webmail configuration
listener.ora
oc4j.properties
-----
Examining "Oracle Email Store"
Upgrade items found:
Oracle Email Store
-----
Examining "Oracle Voicemail & Fax"
Upgrade items found:
Oracle Voicemail & Fax Oracle Internet Directory product tree
Oracle Voicemail & Fax mid-tier Oracle Internet Directory entry
-----
Examining "Oracle Files"
Upgrade items found:
Oracle Files Schema
-----
Validate pre-upgrade requirements:
The destination Oracle home has not been modified since it was installed.
The source and destination instances of Oracle Collaboration Suite are not
running.
The Oracle Enterprise Manager Web Site is not running.
The source Oracle home is based on Oracle9iAS 9.0.2.0.1 version with interim
patches.
[Oracle Ultra Search] A tnsnames.ora file has been created in the destination
Oracle home and contains an entry for the Oracle9iAS Metadata Repository
Upgrading the Oracle Collaboration Suite Middle Tier
3-22 Oracle Collaboration Suite Installation and Configuration Guide
containing the Oracle Ultra Search schema.
[Oracle Calendar Server] The ocalPreUpg.bat script has been run in the
destination Oracle home.
Have you verified all pre-upgrade requirements? [No] Y
-----
Specify the TNS connect string for the Oracle9iAS Metadata Repository used
by Oracle Ultra Search, as well as passwords for the following users:
TNS Connect: TNS_connect_string
SYS Password: password
WKSYS Password: password
-----
```

```
Specify connection information (host:port:SID) and associated passwords
for the Oracle Email Store to be upgraded:
Oracle Email Store Connect: host_name:port_number:SID
SYS Password: password
ESMail Password: password
CTXSYS Password: password
-----
Specify connection information for the Oracle Files Store to be upgraded:
Host: database_host_name
Port: port_number
SID: service_name
-----
Specify the Oracle Files schema and password in the Oracle Files Store to be
upgraded:
Oracle Files Schema: IFSSYS
Oracle Files Schema Password: password
-----
If Oracle Workflow was integrated with Oracle Files in the source installation,
specify the Oracle Workflow schema and password. If Oracle Workflow was not
integrated with Oracle Files, leave both fields blank:
Oracle Workflow Schema: OWF_MGR
Oracle Workflow Schema Password: password
-----
Upgrading "Oracle Portal"
Executing the script
Oracle_Collaboration_Suite_Release_1_ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.bat
to upgrade Oracle Portal
Script terminated with exit value 0
Upgrade finished with status: Success.
-----
Upgrading "Oracle Ultra Search"
Upgrading the metadata schema (this will take approximately 5 to 10 minutes)
The schema upgrade log file is XXXXX
Finished upgrading metadata schema
Upgrading the Oracle Collaboration Suite Middle Tier
Upgrading to Oracle Collaboration Suite Release 2 (9.0.4.1.1) 3-23
Getting JDBC connection
Loading Java stored packages (this will take approximately about 3 to 5
minutes)
Finished loading Java stored packages
Creating the file materialization table
Upgrading database files (this will take approximately about 15 to 30
seconds)
Processing XXXXX
Finished upgrading database files
Dropping the file materialization table
Upgrading mid-tier configuration files...
```

[illegible]

You must now complete the following post-upgrade tasks:

[Oracle Files] Run the following script manually to complete the Oracle Files upgrade:

`Oracle_Collaboration_Suite_Release_2_ORACLE_HOME/ifs/files/bin/ifsca`

[Oracle9iAS Web Cache] The following files may need to be upgraded manually if they were customized in the old Oracle home:

`Oracle_Collaboration_Suite_Release_2_ORACLE_HOME/XXX`

`Oracle_Collaboration_Suite_Release_2_ORACLE_HOME/XXX`

[Oracle Enterprise Manager] The

`Oracle_Collaboration_Suite_Release_2_ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml` file may contain duplicate target entries from both the old Oracle home and the new Oracle home. If you want to remove the old targets, edit this file.

Log files containing details of the upgrade process can be found in the following location:

`Oracle_Collaboration_Suite_Release_2_ORACLE_HOME/upgrade/log`

A transcript of this upgrade session can be found at:

`Oracle_Collaboration_Suite_Release_2_ORACLE_HOME/log/ocsua.log`

アップグレード後のタスク

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar の共存](#)
- [Oracle Email のアップグレード後のタスク](#)
- [Oracle Webmail のリリース 9.0.3.1 からリリース 9.0.4 へのアップグレード](#)
- [Oracle Files のアップグレード後のタスク](#)
- [Oracle Ultra Search のアップグレード後のタスク](#)
- [Oracle Voicemail & Fax のアップグレード](#)
- [Oracle9iAS Wireless のアップグレード](#)
- [Oracle Collaboration Suite Web Client のアップグレード](#)
- [Oracle Collaboration Suite リリース 1 \(9.0.3\) のインスタンスの削除](#)

Oracle Calendar の共存

現行の Oracle Calendar インストールをリリース 2 (9.0.4.1.1) にアップグレードする大規模な組織では、共存が役立ちます。異なるバージョンのノードとサーバーを接続して同時に実行する機能は、アップグレードの実行に必要なダウン時間の短縮に役立ちます。

注意： Oracle Calendar Server リリース 5.5 および Oracle Calendar Server リリース 9.0.4 の共存は、Calendar Server の統一（同じバージョンの）ネットワークを持つための移行手順としてみなされることに注意する必要があります。2 つのバージョンを混在して長期間、または永続的に使用しないでください。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Server のパラメータ](#)
- [共存の制限](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード](#)

Oracle Calendar Server のパラメータ

共存を行うには、まず、Oracle Calendar Server リリース 9.0.4 の %ORACLE_HOME%\ocal¥misc¥unison.ini に次のパラメータを追加する必要があります。

セクション： **[ENG]**

パラメータ： **coexist_cwsbasicauth**

値： **TRUE**

セクション： **[ACE_PLUGINS_SERVER]**

パラメータ： **cs-standard_coexistence**

値： **TRUE**

重要： セキュリティ上の理由から、すべての Calendar Server をリリース 9.0.4 にアップグレードした後、すぐに %ORACLE_HOME%\ocal¥misc¥unison.ini から前述のパラメータを削除する必要があります。

次のパラメータは、ここに示すデフォルト値にリセットされます。Oracle Calendar Server リリース 5.x のインストールで別の値を使用していた場合は、アップグレードの完了後に目的の値にリセットします。

パラメータ： **resourceemailmap**

値： **"O"**

パラメータ: **usermailmap**

値: **"O"**

パラメータ: **usersmcprefmap**

値: **"OU3"**

パラメータ: **usermobiletypemap**

値: **"N"**

パラメータ: **usermobilemap**

値: **"R"**

パラメータ: **itemuidmap**

値: **"P"**

共存の制限

異なるバージョンの 2 つのサーバーが共存している場合、次の制限事項があります。

- Web Services リリース 9.0.4 を使用するには、すべての接続されたサーバーがリリース 9.0.4 にアップグレードされている必要があります。
- イベント・カレンダーは共存の場合はサポートされていません。
- 16 文字以上のパスワードは、リリース 5.5 の **Calendar Server** またはリリース 9.0.4 より前の **Oracle Calendar Client** ではサポートされていません。したがって、16 文字以上のパスワードを使用しているユーザーは、以前のクライアントにはログインできません。
- リリース 5.x の **Oracle Calendar Server** の管理にはリリース 9.0.4 ユーティリティを使用しないでください。この例外は、ユーザーを移動する場合のみです。どちらも旧サーバー・ノード (5.x) にある 2 つのノード間でユーザーを移動する場合でも、**moveuser** ユーティリティは最新サーバーのリリース (9.0.4) から実行する必要があります。
- リリース 9.0.4 の **Oracle Calendar Server** の管理にはリリース 5.x ユーティリティを使用しないでください。
- ノード・ネットワークを作成する必要がある場合は、**nodes.ini** および **uninode** コマンドの使用はネットワーク内の最新リリース (9.0.4) のサーバーで行う必要があります。
- 共存により、旧 **Oracle Calendar Server** (リリース 5.x) で意味不明なエラー・メッセージが表示されることがあります。これは、新サーバーで導入された機能が旧サーバーでは認識されない場合があるためです。
- マッピング・パラメータは、共存およびアップグレード用にリリース 9.0.4 の **Server** の **unison.ini** に追加されています。リリース 5.x の **Server** は、EMAIL には O、UID には P をマッピングします。ただし、リリース 9.0.4 の **Server** は、このマッピングを必要

としなくなりました。リリース 9.0.4 の Server に追加されたパラメータは、マッピングに影響しません。

新規パラメータは次のとおりです。

```
[ENG]
usermailmap = O
itemuidmap = P
resourceemailmap = O
usersmscprefmap = OU3
usermobiletypemap = N
usermobilemap = R
```

- Unidbfix -c は、Oracle Calendar リリース 9.0.4 のユーザーによって Oracle Connector for Outlook リリース 9.0.4 を使用してイベントが作成され、Oracle Calendar リリース 5.4 のユーザーによって Windows Native Client リリース 9.0.4 を使用してそのイベントが受け入れられる、または受け入れられない場合に、Oracle Calendar リリース 9.0.4 の Server について重要度の低い非一貫性をレポートすることがあります。
- 以前のリリースの Oracle Calendar のユーザーは、リソース・スケジューリングの使用時に電子メール・メッセージを生成しません。
- Oracle Connector for Outlook を使用している Oracle Calendar リリース 9.0.4 と 5.4 のユーザーが混在している場合、添付ファイルの名前が Mime-Encoded-attachment.txt に変わることがあります。添付ファイルは、読み取り可能なままです。
- Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh (リリース 5.2.3) のユーザーは、リリース 9.0.4 のスタンドアロン・インストールに接続している際に、オフライン・ファイルをダウンロードできない場合があります。
- 現行のバージョンの Oracle Calendar Client は、Oracle Calendar Server リリース 9.0.4 とともに使用できます。これには、次のバージョンのクライアントも含まれます。
 - Oracle Calendar Desktop Client for Windows リリース 6.0.5
 - Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh リリース 5.2.3
 - Oracle Calendar Desktop Client for Linux/Solaris リリース 5.0.2
 - Oracle Connector for Outlook リリース 3.3 以上

これらのバージョンのクライアントを使用することが最適です。旧バージョンのクライアントを使用している場合は、テストを実行する前にアップグレードしてください。

- Oracle Collaboration Suite Web Client リリース 1 (9.0.3) の Oracle Calendar のポートレットは、Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4.1.1) とは互換性がありません。この問題を回避するには、6-8 ページの「[Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール](#)」で説明するとおり、両方のコンポーネントをリリース 2 (9.0.4.1.1) にアップグレードします。

既に Oracle Calendar がアップグレードされており、Oracle Collaboration Suite Web Client がまだアップグレードされていない場合は、3-38 ページの「[Oracle Collaboration Suite Web Client のアップグレード](#)」を参照してください。

Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード

Upgrade Assistant は、次のキーのみ移行します。特記していないかぎり、これらは ocwc.conf に移行されます。パラメータを変更しなくてもインストールは稼働しますが、希望のロック・アンド・フィールドを実現するには、パラメータを変更する必要がある場合があります。パラメータの編集の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

```
[system]
connection
```

```
[servers]
(All keys migrated to "connection" section of ocas.conf. If the old installation
was a masternode, 'mnode' will be the only entry.)
```

```
[ACE_PLUGINS_CLIENT]
(All keys into ocas.conf)
```

```
[admin]
sso_user_env_key
```

```
[modules]
hide_eventcal
hide_global
hide_taskview
hide_managegroups
hide_suggesttime
hide_show_unconfirmed
hide_updateall
enable_designate
hide_viewpub
```

```
[file_attachment]
download_enable
upload_enable
```

```
[taskview]
quickCreateStartTime
quickCreateEndTime
showQCCompletion
```

```
[calendar_view]
default_view
default_dayview_mode
default_weekview_mode

hide_dayview_toggle
hide_weekview_toggle
pdv_notes_top_task_bottom
default_color_mgt_by

[cookies]
domain

[sched]
showicalvcal (becomes same key in "modules" section in ocwc.conf).
```

Oracle Email のアップグレード後のタスク

3-16 ページの「[Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant の実行](#)」で説明するとおり、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant を実行すると、Oracle Email Information Storage データベースはアップグレードされます。

さらに、必須ファイルおよびライブラリをリリース 2 (9.0.4.1.1) の Information Storage データベースにインストールするために、次の手順を実行します。

1. Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier の %ORACLE_HOME%\oes ディレクトリに存在する umbackend.tar ファイルを Information Storage データベースにコピーします。
2. umbackend.tar ファイルを解凍し、backend ディレクトリを作成します。
3. backend¥Disk1¥install¥win32 ディレクトリに移動し、次のコマンドを入力します。
setup.exe

Oracle Email の Jar ファイルのアップグレード

リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier の Oracle ホームから次のコマンドを実行し、Oracle Email の jar ファイルをアップグレードします。これらのコマンドは、メール・ストアごとに 1 回実行する必要があります。

```
cd %ORACLE_HOME%\oes\bin
esupgv2_lj.bat password connect_string Release 2
(9.0.4.1.1)_middle_tier_
%ORACLE_HOME%
```

`password` は es_mail ユーザー・パスワード、`connect_string` は Information Storage データベースの接続文字列です。

注意： 前述のスクリプトによる ORA-29521 エラーは無視してください。

現行の電子メール・テキスト索引の新規表領域への移動

現行の電子メールのテキスト索引を新規表領域に移動するには、次のように手動で行う必要があります。

1. es_mail ユーザーとして Information Storage データベースにログインします。
2. コマンド・プロンプトから、SQL*Plus に次のようにログインします。

```
c:\> sqlplus es_mail/es
```

注意： es は、es_mail ユーザーのデフォルトのパスワードです。

3. 次のコマンドを実行します。
 - a. drop es_ot_ix_search index
 - b. drop ctx_ddl.drop_preference('oratextstore')
 - c. ctx_ddl.create_preference('oratextstore',
'BASIC_STORAGE');
 - d. ctx_ddl.set_attribute('oratextstore', 'I_TABLE_CLAUSE',
'tablespace my_new_text_tblspc');
 - e. ctx_ddl.set_attribute('oratextstore', 'K_TABLE_CLAUSE',
'tablespace my_new_text_tblspc');
 - f. ctx_ddl.set_attribute('oratextstore', 'R_TABLE_CLAUSE',
'tablespace my_new_text_tblspc lob (data) store as
(cache)');

- g. `ctx_ddl.set_attribute('orateststore', 'N_TABLE_CLAUSE', 'tablespace my_new_text_tblspc');`
- h. `ctx_ddl.set_attribute('orateststore', 'I_INDEX_CLAUSE', 'tablespace my_new_text_tblspc');`
- i. `ctx_ddl.set_attribute('orateststore', 'P_TABLE_CLAUSE', 'tablespace my_new_text_tblspc');`

`my_new_text_tblspc` は、電子メールのテキスト索引が作成される表領域の名前です。

- 4. 次のコマンドを実行し、新規表領域に電子メールのテキスト索引を作成します。

```
CREATE INDEX es_ot_ix_search ON es_imt_msgbody(text) indextype IS
ctxsys.context parameters ('DATASTORE es_search_dsprof FILTER
CTXSYS.NULL_FILTER SECTION GROUP es_search_sec_group STORAGE
orateststore);
```

Oracle Webmail のリリース 9.0.3.1 からリリース 9.0.4 へのアップグレード

Windows プラットフォームで Oracle Webmail のインストールを完了するには、次の 2 つの手動手順が必要です。

- [Oracle Webmail アプリケーションの構成](#)
- [Java ライブラリの更新](#)

Oracle Webmail アプリケーションの構成

次の手順を実行し、アプリケーションのリリース 9.0.3.1 の設定を維持します。

- 1. デフォルトの Oracle Webmail 9.0.4 アプリケーションの構成をバックアップします。

```
cp %NEW_ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_UM\config\oc4j.properties NEW_ORACLE_HOME%\
j2ee\OC4J_UM\config\oc4j.properties.bak
```

- 2. 古い Oracle Webmail 9.0.3.1 のアプリケーション構成を 9.0.4 の場所にコピーします。

```
cp %OLD_ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_UM\config\oc4j.properties
NEW_ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_UM\config\oc4j.properties
```

- 3. 使用されなくなったプロパティを新しいプロパティ・ファイルから削除します。これは、`%NEW_ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_UM\config\oc4j.properties` を編集し、次の属性のある行を削除することによって実行できます。

- `client.image.help`
- `client.image.login`
- `client.image.logout`
- `client.image.portal`

- `client.image.preferences`
 - `voicemailLanguages`
4. 次の値に古いデフォルト値をそのまま使用している場合は、それらの値を新しいデフォルト値を指すように変更する必要があります。

注意： 古いデフォルト値は、カッコ内に示されます。

- `client.image.corporate=/um/images/ocs_brand_header.gif (/um/images/corporateBrand_oracle.gif)`
 - `client.image.product=/um/images/mail_subbrand.gif (/um/images/branding_collaborationsuite.gif)`
 - `mail.host.qualifiedname=(oracle.com - This new default is empty)`
 - `maxTelephonePinDigits=12 (8)`
 - `minTelephonePinDigits=7 (4)`
 - `toolkit.statefile=%NEW_ORACLE_HOME%\um\client\config\statefile_webmail.xml (%OLD_ORACLE_HOME%\um\client\config\statefile.xml)`
5. 次のプロパティがまだない場合は、新規の `oc4j.properties` ファイルに追加する必要があります。

```
client.esdsconnpoolparam.incrementsize=1
client.esdsconnpoolparam.initialsize=5
client.esdsconnpoolparam.maxsize=10
client.esdsconnpoolparam.minsize=5
client.esdsconnpoolparam.shrinkingtimeoutinterval=1800
client.esdsconnpoolparam.timeoutinterval=30
```

```
client.ldapsearch.maxresult=500
```

```
client.mail.defaultsort=true
client.mail.enforcenestedHTMLfonts=true
client.mail.messagegettransport=SMTP
```

```
jdbc.connection.debug=false
mail.debug=false
```

```
oracle.mail.admin.ui.ojmaDebug=false
oracle.mail.admin.ldapDebug=false
oracle.mail.admin.policy.virus.parallelism.high=8
```

```
oracle.mail.admin.policy.virus.parallelism.low=1
oracle.mail.admin.policy.virus.parallelism.medium=4

oracle.mail.client.prefs.autoreply.echo=true
oracle.mail.client.prefs.autoreply.reject=true
oracle.mail.client.prefs.autoreply.reply=true
oracle.mail.client.prefs.autoreply.vacation=true
oracle.mail.client.prefs.autoreply=true
oracle.mail.client.prefs.autoreplymimesizelimit=-1

oracle.mail.sdk.esmail.cache_inactivity_timeout=300
oracle.mail.sdk.esmail.connpool_max_limit=10
oracle.mail.sdk.esmail.connpool_min_limit=1
oracle.mail.sdk.esmail.ldap_debug=true
```

Java ライブラリの更新

次の Perl スクリプトを実行し、Client で使用する Java ライブラリの一連の設定を更新します。

```
%NEW_ORACLE_HOME%\perl\5.6.1\bin\MSWin32-x86\perl.exe %NEW_ORACLE_HOME%\
oes\bin\webmail_library_mods.pl
```

Java ライブラリを更新する Perl スクリプトは、次のとおりです。

```
#!%ORACLE_HOME%\perl\5.6.1\bin\MSWin32-x86\perl.exe
open oldxml, '<%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_UM\application.xml.pre_libmod';
open newxml, '>%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_UM\application.xml';
while (<oldxml>)
{
    $_ =~ s|<library path="../../jlib/uix2.jar"/>||g;
    s|<library path="../../jlib/share.jar"/>||g;
    s|<library path="../../jlib/regexp.jar"/>||g;
    s|<library path="%long_oracle_home%\jlib/esadmin.jar"/>||g;
    s|<library path="%long_oracle_home%\jlib/esportlet.jar"/>||g;
    s|<library path="%long_oracle_home%\portal\jlib\ptlshare.jar"/>||g;
    s|<library path="%long_oracle_home%\portal\jlib\pdkjava.jar"/>||g;
    print newxml $_;
}

close oldxml;
close newxml;

open oldxml, '<%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_UM\application-deployments\UMClientApp\
orion-application.xml.pre_libmod';
open newxml, '>%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_UM\application-deployments\UMClientApp\
orion-application.xml';
```

```

while (<oldxml>)
{
    $_ =~ s|<principals|<library path="%long_oracle_home%¥¥j2ee/OC4J_UM/
applications/UMClientApp/um_client/WEB-INF/webmail_lib/uix2.jar"/><principals|;
    s|<principals|<library path="%long_oracle_home%¥¥j2ee/OC4J_UM/
applications/UMClientApp/um_client/WEB-INF/webmail_lib/share.jar"/>
<principals|;
    s|<principals|<library path="%long_oracle_home%¥¥j2ee/OC4J_UM/
applications/UMClientApp/um_client/WEB-INF/webmail_lib/regexp.jar"/>
<principals|;
    s|<principals|<library path="%long_oracle_home%¥¥jlib/esadmin.jar"/>
<principals|;
    s|<principals|<library path="%long_oracle_home%¥¥jlib/esportlet.jar"/>
<principals|;
    s|<principals|<library path="%long_oracle_home%¥¥portal/jlib/
ptlshare.jar"/><principals|;
    s|<principals|<library path="%long_oracle_home%¥¥portal/jlib/
pdkjava.jar"/><principals|;
    print newxml $_;
}

close oldxml;
close newxml;

open oldxml, '<%ORACLE_HOME%¥¥j2ee¥OC4J_UM¥application-deployments¥VMAdminApp¥
orion-application.xml.pre_libmod';
open newxml, '>%ORACLE_HOME%¥¥j2ee¥OC4J_UM¥application-deployments¥VMAdminApp¥
orion-application.xml';
while (<oldxml>)
{
    $_ =~ s|<principals|<library path="%long_oracle_home%¥¥jlib/esadmin.jar"/>
<principals|;
    s|WEB-INF/vmailadmin_lib|WEB-INF/vmadmin_lib|g;
    print newxml $_;
}

close oldxml;
close newxml;

```

Oracle Files のアップグレード後のタスク

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant の終了後に、次の手順を実行します。

1. 次の場所から ifsca.bat を実行して、Oracle Files Configuration Assistant を再起動します。

```
%ORACLE_HOME%\ifs\files\bin
```

2. 「ドメイン操作」画面で、「**既存の Oracle Files ドメインを使用するように設定**」を選択します。
3. 「スキーマ名」画面で、アップグレードされた Oracle Files スキーマを選択します。
4. 「次へ」をクリックし、Oracle Files Configuration Assistant の残りの画面に従います。

関連項目： これらの画面の詳細は、14-27 ページの「[既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定](#)」を参照してください。

5. 「サマリー」画面で、「**構成**」をクリックします。

進捗ウィンドウが表示されます。エラーが発生した場合、次のログ・ファイルで詳細を確認します。

```
%ORACLE_HOME%\ifs\files\log\FilesConfig.log
```

プロセスが完了すると、構成が正常に終了したことを示すメッセージが表示されます。「OK」をクリックしてメッセージを閉じます。Oracle Files と Oracle Enterprise Manager Web Site が自動的に統合されます。

注意： すべての中間層で ifsca.bat を実行する必要があります。

Oracle Workflow パラメータの更新

アップグレードする Oracle Files スキーマが Oracle Workflow と統合されている場合、次の項の構成後の手順に従います。

- 14-40 ページの「[ネット・サービス名の構成](#)」
- 14-43 ページの「[Oracle Workflow と Oracle Files スキーマの統合](#)」

注意： 既存の Oracle Workflow 構成パラメータを変更しない場合は、14-40 ページの「[ネット・サービス名の構成](#)」の手順に従う必要はありません。

IFS_TEXT 索引の手動による同期

既存の Oracle Files ドメインのアップグレード後、既存の IFS_TEXT 索引を手動で同期する必要があります。詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』の付録 A 「Oracle Text のリファレンス」を参照してください。

Oracle Ultra Search のアップグレード後のタスク

次の各項で、一般的なエラーのリカバリ手順を説明します。

- 中間層構成ファイルのアップグレード中にエラーが発生しました。
- データベース・ファイル: `file_name` をアップグレードできませんでした
- メタデータ・スキーマのアップグレード中にエラーが発生しました。
- Java ストアド・パッケージのロードとデータベース・ファイルの更新中にエラーが発生しました。

中間層構成ファイルのアップグレード中にエラーが発生しました。

次の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のディレクトリで `data-sources.xml` 構成ファイルが使用可能であるか確認します。

```
%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_Portal\config
```

`data-sources.xml` ファイルが使用可能であることを確認した後、Oracle Ultra Search アップグレード・プラグインを再実行します。

データベース・ファイル: `file_name` をアップグレードできませんでした

データベース・ファイル・システム内の `%ORACLE_HOME%\ultrasearch` ディレクトリに対し、書き込み権限があることを確認します。その後、Oracle Ultra Search アップグレード・プラグインを再実行します。

メタデータ・スキーマのアップグレード中にエラーが発生しました。

スキーマのアップグレード・ログ・ファイルでエラーの詳細を確認します。問題を解決した後、Oracle Ultra Search アップグレード・プラグインを再実行します。

Java ストアド・パッケージのロードとデータベース・ファイルの更新中にエラーが発生しました。

`%ORACLE_HOME%\ultrasearch\lib\ultrasearch_db.jar` ファイルが所定の場所にあることを確認します。その後、Oracle Ultra Search アップグレード・プラグインを再実行します。

Oracle Voicemail & Fax のアップグレード

Oracle Voicemail & Fax のアップグレードは、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant から実行されません。

Oracle Voicemail & Fax をアップグレードするには、次のようにします。

1. Oracle Voicemail & Fax リリース 2 (9.0.4.1.1) を Windows 2000 Telephony Server にインストールします。

注意： Oracle Voicemail & Fax リリース 1 (9.0.3) 用の CT Media 2.1 または 2.1.1 をインストールした場合は、Oracle Voicemail & Fax をインストールする前に、最新バージョンの ITMedia.jar を NTLMAuthentication.dll とともに Program Files¥Dialogic¥CT Media¥Client ディレクトリにダウンロードする必要があります。

2. 次のコマンドを実行して Oracle Voicemail & Fax をアップグレードします。

```
%ORACLE_HOME%\um\scripts\UpgradeTelephonyServerfromV1.bat host_name  
903_ORACLE_HOME 9041_ORACLE_HOME
```

Oracle9iAS Wireless のアップグレード

Oracle9iAS Wireless のアップグレードは、2 つのタスクから構成されます。まず、ランタイム・カスタマイズ・クラスおよび構成ファイルを、新規の ORACLE ホームにコピーする必要があります。次に、既存のプロセスおよびその構成を、新規 Middle-Tier に移動する必要があります。

Oracle9iAS Wireless をアップグレードするには、次のようにします。

1. Oracle9iAS Wireless を実行するよう構成されている Oracle9iAS 中間層を含め、ファーム内のすべての Oracle9iAS Wireless リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier を停止します。
2. アップグレードする最初の Oracle9iAS Wireless リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier を選択します。
3. 最初の Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier を、手順 2 の Oracle9iAS Wireless Middle-Tier と同じコンピュータにインストールします。インストール時に、Oracle9iAS Wireless Configuration Assistant は、Oracle9iAS Metadata Repository 内の Oracle9iAS Wireless スキーマをアップグレードします (3-37 ページの「[Oracle9iAS Wireless のアップグレード項目](#)」を参照)。

Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant は、次のことを行います。

- a. ランタイム・カスタマイズ・クラス (リスナー・フックおよびカスタマイズされたフォルダ・レンダラなど) および Suite レベルの構成ファイルを Oracle ホーム 1 から Oracle ホーム 2 にコピーします (3-37 ページの「[Oracle9iAS Wireless のアップグレード項目](#)」を参照してください)。

- b. Oracle9iAS Wireless スタンドアロン・プロセスのプロセス構成情報を、Oracle9iAS Wireless リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier から Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier にコピーし、リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier を構成します。

この時点で、すべての Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier を再起動し、停止時間を短縮できます。

Oracle9iAS Wireless スタンドアロン・プロセスの構成情報は、Oracle9iAS Metadata Repository 内の Oracle9iAS Wireless スキーマに格納されます。リリース 1 (9.0.3) からリリース 2 (9.0.4.1.1) へのアップグレードの際、Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant は、Oracle9iAS Wireless スキーマに追加エントリを作成することによって、リリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier のプロセス構成情報をリリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier にコピーします。

最初の Middle-Tier のインストール時に Oracle9iAS Wireless スキーマ・アップグレードを行う際、Oracle9iAS Wireless Configuration Assistant は、各プロセス・タイプ用のデフォルトのスタンドアロン・プロセスを事前に移入します。Oracle9iAS Wireless Upgrade Assistant がリリース 1 (9.0.3) のプロセス情報をリリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier にコピーする際、冗長なプロセスをリリース 1 (9.0.3) の Middle-Tier で検出すると、これを削除します。さらに、Oracle9iAS Wireless Upgrade Assistant は各プロセスに一意的なプロセス名を付けます。

Oracle9iAS Wireless のアップグレード項目

Oracle9iAS Wireless のアップグレード・プロセスの最初のフェーズで、次のファイルが変更されます。

- `ORACLE_HOME_2¥wireless¥server¥classes¥*.class`
- `ORACLE_HOME_2¥wireless¥server¥classes¥*.properties`
- `ORACLE_HOME_2¥wireless¥server¥classes¥marconi.config`

Oracle Collaboration Suite Web Client のアップグレード

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール時に、Oracle Universal Installer を使用して、インストールおよび構成する Web Client を選択できます。

関連項目： 6-8 ページの「[Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール](#)」

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のインスタンスの削除

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) へのアップグレードが正常に終了した後、次の手順に従ってリリース 1 (9.0.3) のインスタンスを削除できます。

1. すべてのリリース 1 (9.0.3) ターゲットを `targets.xml` ファイルから削除します。このファイルは、アクティブな Enterprise Manager デーモンの `%ORACLE_HOME%\sysman\emd` ディレクトリにあります。
2. 次のコマンドを Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の `ORACLE_HOME` から実行します。

```
cd %ORACLE_HOME%\dcm\bin
dcmctl destroyInstance -i Release_1_instance_name
```

注意： 次のコマンドを使用してすべてのインスタンスを名前順にリスト出力します。このリストは、削除するインスタンスの特定に使用すると便利です。

```
dcmctl listInstances
```

3. アップグレード前の Middle-Tier を削除します（オプション）。

Oracle Collaboration Suite への CorporateTime Server 5.4 のアップグレード

CorporateTime Server 5.4 内部または外部は、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) にアップグレードできます。これはサポートされるアップグレード・パスですが、プロセスは手動の手順で構成されます。

CorporateTime Server 5.4 を Oracle Collaboration Suite にアップグレードするには、次のようにします。

1. F-16 ページの「[Server のアップグレード](#)」で説明するとおり、CorporateTime Server 5.4 をリリース 2 (9.0.4.1) の Oracle Calendar スタンドアロンにアップグレードします。
2. [第 6 章「Oracle Collaboration Suite のインストール](#)」で説明するとおり、Oracle Collaboration Suite の Infrastructure および Middle-Tier をインストールします。

注意： この項の手順 1 で使用した Oracle ホームにインストールしないでください。また、Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4) を前のリリースの Oracle Calendar がインストールされた Windows コンピュータにインストールすると、前のリリースは使用できなくなります。まず Oracle Calendar スタンドアロンをテスト・インストールする場合は、別の Windows コンピュータにインストールします。

3. ユーザー情報を新しい Oracle Collaboration Suite Infrastructure の Oracle Internet Directory コンポーネントに移行します。
4. CorporateTime Calendar の属性 (ctCalXitem ID など) を、新しい Oracle Collaboration Suite Infrastructure の Oracle Internet Directory コンポーネントにインポートします。
5. 3-39 ページの手順 1 でアップグレードした Oracle Calendar データベース・ファイルを、新しくインストールした Oracle Collaboration Suite の Oracle Calendar コンポーネントの上にコピーします。

非 Oracle Collaboration Suite アップグレードの実行

1. Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1 または Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.0 を、Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.3 にアップグレードします。
- a. Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.3 パッチ 3038037 をアップグレードする Infrastructure に適用します。
- b. [表 3-6](#) に示すファイルを、リリース 2 (9.0.4.1.1) の Oracle9iAS Infrastructure のインストール用 CD-ROM の `CDROM_ROOT/tools/upgrade` ディレクトリから、アップグレードする Infrastructure の Oracle ホーム・ディレクトリ内の指定されたターゲット・ディレクトリにコピーします。

表 3-6 指定のターゲット・ディレクトリにコピーするファイル

ファイル	ターゲット・ディレクトリ
modDirectiveMS.xsd	%ORACLE_HOME%\dcm\config\plugins\apache
opca.jar	%ORACLE_HOME%\sysman\webapps\emd\WEB-INF\lib
portalSMI.jar	%ORACLE_HOME%\sysman\webapps\emd\WEB-INF\lib
repository.jar	%ORACLE_HOME%\jlib
ApacheModuleFastCGI.dll	%ORACLE_HOME%\Apache\Apache\modules
ApacheModuleOSSO.dll	%ORACLE_HOME%\Apache\Apache\modules
FastCGI.dll	%ORACLE_HOME%\Apache\fastcgi
FastCGI.lib	%ORACLE_HOME%\Apache\fastcgi
fcgi.jar	%ORACLE_HOME%\Apache\fastcgi

- c. [3-7 ページ](#)の「[Oracle Collaboration Suite レベルでの Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード](#)」の[手順 4](#)で説明しているように、Oracle Delegated Administration Services を使用する orclguest ユーザーを作成します。

注意： デフォルトのサブスクリイバに新規ユーザーを作成するには、十分な権限が必要です。

- ユーザーを作成する権限を持ったユーザーとして Oracle Delegated Administration Services にログインします。
- 「ディレクトリ」タブをクリックします。
- 「検索結果」セクションで、「作成」をクリックします。

- 構成によって、「ユーザーの作成」ページで入力要求される値は異なります。この場合、**ユーザー名**の値は `orclguest` である必要があります。必要に応じて、他の値を入力します。すべての必須フィールドが入力されていることを確認します。
 - 「送信」をクリックします。
2. 6-4 ページの「[Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのインストール](#)」で説明しているように、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) Information Storage データベースをインストールします。

注意： Information Storage データベースを登録する際に、手順 1 の **a** で 9.0.2.3 にアップグレードした Infrastructure の Oracle Internet Directory を指定します。

3. 6-8 ページの「[Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール](#)」で説明しているように、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier をインストールします。
4. 中間層コンピュータに対して Oracle9iAS Portal パッチ (2758529) を適用します。
5. すべての無効なオブジェクトを再コンパイルします。
6. コマンドラインから Web Client Installer を次のように再実行します。
- ```
$ORACLE_HOME/webclient/bin/webclient_installer.sh OID Administrator pwd
-complete
```
7. 次の SQL コマンドを実行して、Infrastructure データベースで Oracle Ultra Search PL/SQL パッケージ `wk_crw` を再コンパイルします。
- ```
sqlplus /nolog
connect / as sysdba
grant select on sys.dbsms_lock_allocated to wksys;
alter package wksys.wk_crw compile body;
```
8. Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の Middle-Tier のインストール後の手順を完了します。

第 II 部

Oracle Collaboration Suite インストールの 手順

第 II 部では、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) をインストールするための詳細な手順について説明します。

第 II 部は、次の章で構成されています。

- [第 4 章「Oracle Collaboration Suite の配置方法」](#)
- [第 5 章「インストールの開始」](#)
- [第 6 章「Oracle Collaboration Suite のインストール」](#)
- [第 7 章「単一コンピュータへの Oracle Collaboration Suite のインストール」](#)
- [第 8 章「Oracle Voicemail & Fax のインストールおよび構成」](#)
- [第 9 章「サイレント・インストールおよび非対話型インストール」](#)
- [第 10 章「Oracle Collaboration Suite コンポーネントの削除」](#)

Oracle Collaboration Suite の配置方法

この章では、3つの Oracle Collaboration Suite のインストールの配置方法を説明し、配置についての推奨項目を示します。また、既存の Oracle9i データベースを Oracle Collaboration Suite コンポーネントとともに使用する場合のデータベースのチューニングについても説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle9iAS Infrastructure の配置](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage の配置](#)
- [Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の配置](#)
- [配置についての推奨項目および考慮事項](#)
- [Oracle Collaboration Suite リリース 1 \(9.0.3\) の削除](#)

Oracle9iAS Infrastructure の配置

通常、Oracle9iAS Infrastructure の配置では、1 つ以上の Oracle Management Server がインストールされ、ネットワーク内に 1 つの Oracle9iAS Single Sign-On インスタンスおよび 1 つの Oracle Internet Directory インスタンスが含まれます。

別々のホスト上に Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On を構成する場合、Infrastructure のインストール中に表示される「構成オプションの選択」画面で次の手順を実行します。

関連項目： 6-2 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure のインストール](#)」

1. インストール中に、最初のホスト (Host 1) 上で Oracle Internet Directory の構成を選択し、Oracle9iAS Single Sign-On の構成を選択解除します。
2. インストール中に、2 番目のホスト (Host 2) 上で Oracle9iAS Single Sign-On の構成を選択し、Oracle Internet Directory の構成を選択解除します。
3. インストール中に、Host 2 上の Oracle9iAS Single Sign-On の構成が Host 1 上の Oracle Internet Directory の構成を指すように設定します。

Oracle Internet Directory を複数のホストにインストールしてディレクトリ・レプリケーション・ネットワークを構成する場合は、Oracle Internet Directory の 1 つのインスタンスのみで Oracle9iAS Single Sign-On を構成します。Oracle Internet Directory の残りのインスタンスは Oracle9iAS Single Sign-On の構成に関連付けしないでください。

関連資料： 次の URL の Oracle Technology Network Japan で入手可能な『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

<http://otn.oracle.co.jp/>

Oracle Collaboration Suite Information Storage の配置

顧客データと相互作用するいくつかの Oracle Collaboration Suite コンポーネントでは、メタデータ・スキーマの格納に Information Storage データベースが使用されます。同じタイプの複数の Oracle Collaboration Suite コンポーネントをインストールする場合、同じ Information Storage データベースまたは異なる Information Storage データベースを使用できます。単一のデータベース・インスタンスで、異なる Oracle Collaboration Suite コンポーネントのメタデータ・スキーマおよびデータを保持できます。

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の配置

すべての Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストールには、Oracle9iAS Infrastructure が必要です。Oracle9iAS Infrastructure を使用するには、Oracle Collaboration Suite CD パックに含まれる Oracle9iAS Infrastructure を使用するか、または既存の Oracle9iAS Infrastructure リリース 9.0.2.0.0 または 9.0.2.0.1 を Oracle9iAS Infrastructure リリース 9.0.2.1.0 以上にアップグレードします。

Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On をネットワーク上にインストールおよび構成している必要があります。また、すべての Middle-Tier アプリケーションに別々の Oracle9iAS Metadata Repository を使用することをお勧めします。既存の Oracle9iAS Infrastructure が存在する場合は、3-2 ページの「[Oracle インストールのバックアップ](#)」を参照してください。

すべての Oracle Collaboration Suite Middle-Tier アプリケーションで同じ Oracle9iAS Metadata Repository を共有できますが、通常は、Oracle Internet Directory と同じ Oracle9iAS Metadata Repository は共有しないでください。

Middle-Tier は、ホストごとに 1 つしかインストールできませんが、単一のホストから複数の Oracle Collaboration Suite インスタンスを構成できます。Oracle Email は、単一のホストで構成できるのは一度のみであることに注意してください。ただし、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を Oracle9iAS Infrastructure の Oracle ホームまたは既存の Oracle9iAS 中間層の Oracle ホームにインストールすることはできません。

Oracle Collaboration Suite は、Oracle9iAS Portal および Oracle Ultra Search を含む複数の Middle-Tier アプリケーションで構成されます。Oracle9iAS Portal および Oracle Ultra Search は、次のいずれかに接続できます。

- Oracle9i データベース
- Oracle9iAS Metadata Repository（通常、Oracle Internet Directory とは共有されません。）

Oracle Ultra Search による索引付けは、Oracle9iAS Metadata Repository に自動的に格納されるか、または Oracle9i データベースに格納できます。Oracle Ultra Search による索引付けは、Oracle Internet Directory が使用するリポジトリ以外の Oracle9iAS Metadata Repository に格納します。

Oracle Email コンポーネントは、Oracle Email の受信ボックス内のボイスメールおよび FAX を格納するために、Oracle9i リリース 2 (9.2) のデータベースに接続する必要があります。

Oracle Email、Oracle Files および Oracle Calendar を除くすべての Oracle Collaboration Suite Middle-Tier アプリケーションの情報は、Oracle9iAS Metadata Repository に自動的に格納されます。

注意：

- Oracle Collaboration Suite Middle-Tier は、1 つ以上のホスト上に単一または複数のインスタンスとしてインストールできます。複数の Oracle Collaboration Suite Middle-Tier インスタンスを単一のホスト上にインストールする場合は、Oracle Email または Oracle Calendar を 2 つ以上構成しないでください。
 - 今回のリリースの Oracle Collaboration Suite に対応する Oracle9iAS 中間層のアップグレードはサポートされていません。
-
-

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar の配置](#)
- [Oracle Email の配置](#)
- [Oracle Files の配置](#)
- [Oracle Ultra Search の配置](#)
- [Oracle Voicemail & Fax の配置](#)
- [Oracle Web Conferencing の配置](#)

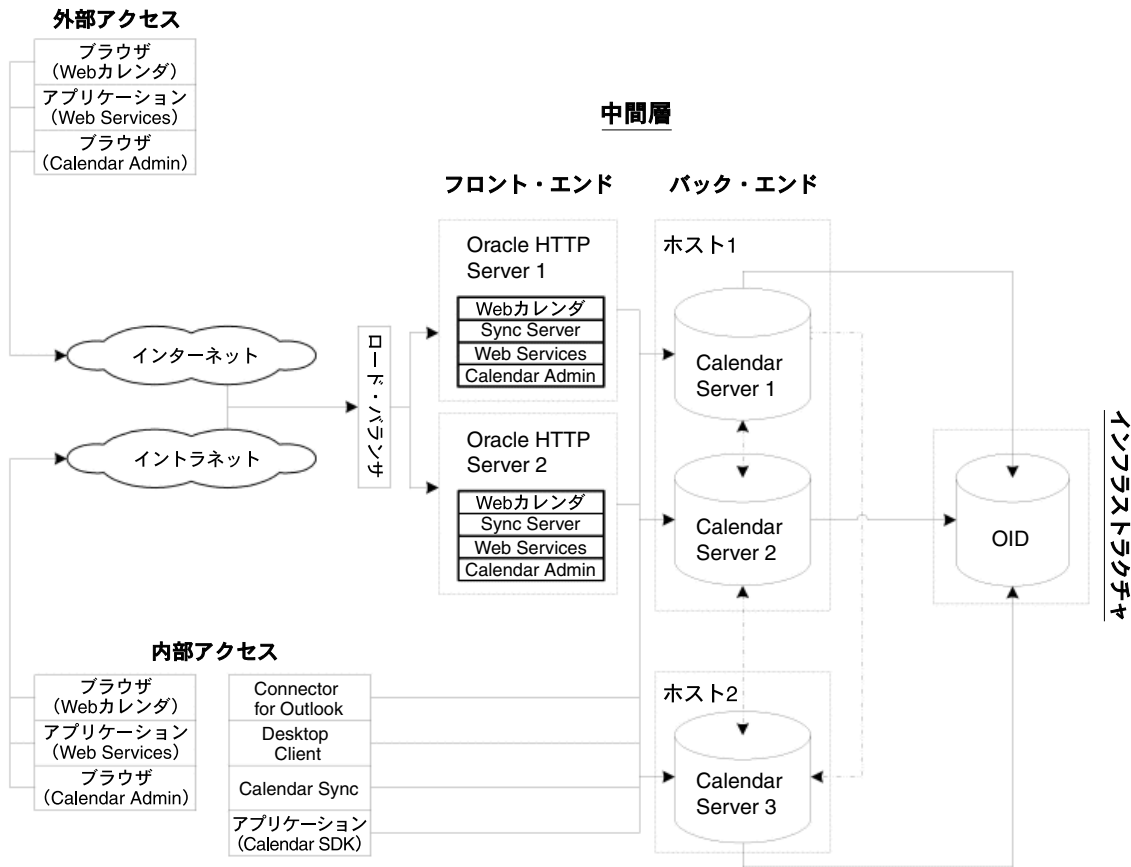
Oracle Calendar の配置

Oracle Calendar をインストールすると、多数のコンポーネントがコンピュータにインストールされます。これらには、Oracle Calendar Server コンポーネント（エンジン、デーモン、ユーティリティなど）および Web コンポーネント（Oracle Calendar Web Client、Oracle Calendar Administrator、Oracle Calendar Sync Server、Oracle Calendar Web Services など）が含まれます。

この冗長性を回避するためには、ソフトウェアをフロントエンド・サーバーおよびバックエンド・サーバーの 2 台のコンピュータに分散してインストールします。その際、Web アプリケーションをフロントエンド・サーバーにインストールし、Oracle Calendar Server のコンポーネントをバックエンド・サーバーにインストールします。これにより、Web アプリケーションおよび Oracle HTTP Server インスタンスの複数のコピーの存在が解消され、[図 4-1](#) に示すとおり、フロントエンド・サーバーの数を増やすことで、Web サーバーでロード・バランシングを実行できます。

また、この構成を使用すると、バックエンド・サーバーをファイアウォール内に設置し、DMZ を設定することが可能になります。

図 4-1 Oracle Calendar の配置



Oracle Email の配置

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールして Oracle Email を構成する前に、次の考慮事項を確認します。

- 単一のコンピュータに Oracle Email インスタンスを 1 つのみ構成します。
- Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースを使用するか、既存の Oracle9i データベースをチューニングします。

既存データベースによる Oracle Email 使用のデータベース要件

Oracle Collaboration Suite に同梱された Information Storage データベース以外の既存の Oracle データベースに Oracle Email データを格納するには、Oracle Email を構成する前に、表 4-1 に示した初期化パラメータ値を使用してデータベースを構成する必要があります。これらのパラメータは、Oracle Email の構成およびパフォーマンスに影響を与えます。

さらに、既存の Oracle データベースは、次の要件を満たしている必要があります。

- Oracle9i Database Server 9.2.x 以上、Enterprise または Standard Edition インストール・タイプ。
- Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.3。さらに、このドライバは、Oracle Files Configuration Assistant で必要です。Oracle Email を構成した後、オプションで Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.3 または Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.3 のいずれかを使用できます。

表 4-1 既存データベース上の Oracle Email の初期化パラメータ値

パラメータ	値
AQ_TM_PROCESSES	1
COMPATIBLE	9.2.0.0.0
DB_BLOCK_SIZE	8192
DB_CACHE_SIZE	16777216
DB_FILE_MULTIBLOCK_READ_COUNT	32
DISPATCHERS	(PROTOCOL=TCP) (SERVICE={SID}XDB)
DML_LOCKS	200
FAST_START_MTTR_TARGET	300
HASH_AREA_SIZE	1048576
HASH_JOIN_ENABLED	TRUE
LARGE_POOL_SIZE	8388608
JAVA_POOL_SIZE	41943040 ¹

表 4-1 既存データベース上の Oracle Email の初期化パラメータ値（続き）

パラメータ	値
JOB_QUEUE_PROCESSES	10 ¹
OPEN_CURSORS	300
PGA_AGGREGATE_TARGET	33554432
PROCESSES	150
QUERY_REWRITE_ENABLED	TRUE
REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE	EXCLUSIVE
SESSION_MAX_OPEN_FILES	50
SHARED_POOL_SIZE	50331648
SORT_AREA_SIZE	1048576
STAR_TRANSFORMATION_ENABLED	TRUE
TIMED_STATISTICS	TRUE
UNDO_MANAGEMENT	AUTO
UNDO_RETENTION	10800
UNDO_TABLESPACE	UNDOTBS1

¹ 一部の初期化パラメータは Oracle Email と Oracle Files の両方で重複しているため、Oracle Email と Oracle Files の両方のデータを同じ既存の Oracle データベースに格納する場合は、表 4-1 および表 4-2 に示した 2 つの初期化パラメータ値の大きい方の値を使用します。

Oracle Files の配置

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールして Oracle Files を構成する前に、次の考慮事項を確認します。

- 4-8 ページの「要件の確認および配置タイプの選択」を参照してください。
- Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースを使用するか、既存の Oracle9i データベースをチューニングします。

関連資料： Oracle Files の配置計画の詳細は、『Oracle Files プランニング・ガイド』および『Oracle Files 管理者ガイド』の「Oracle Files の概要」を参照してください。

要件の確認および配置タイプの選択

『Oracle Files プランニング・ガイド』で説明されている Oracle Files のハードウェアおよびサイズの要件に従ってハードウェア・リソースを評価し、適切な配置パスを選択します。

- [本番環境用の複数コンピュータへの Oracle Files の配置](#)
- [単一コンピュータへの Oracle Files の配置](#)
- [既存の Oracle データベースによる Oracle Files 使用のデータベース要件](#)

関連資料： [第 2 章「インストールの準備」](#) および 『Oracle Files プランニング・ガイド』

本番環境用の複数コンピュータへの Oracle Files の配置

Oracle Files は、Oracle Collaboration Suite によってサポートされる Middle-Tier アプリケーション・サーバー・ソフトウェアとして実行するように設計されています。パフォーマンスを最適化するには、データベースを 1 つのコンピュータ上で実行し、Oracle Files を別のコンピュータ上で実行し、Oracle9iAS を 3 つ目のコンピュータで実行します。

Oracle Files のユーザー資格証明の管理には、Oracle9iAS Infrastructure のコンポーネントである Oracle Internet Directory が必要です。

単一コンピュータへの Oracle Files の配置

コンピュータが『Oracle Files プランニング・ガイド』に示すすべてのハードウェア要件およびソフトウェア要件を満たしている場合、Oracle Files およびそのすべての必須コンポーネントを単一のコンピュータにインストールできます。Oracle Files をインストールおよび配置するには、次のようにします。

1. Oracle ホームに Oracle Internet Directory をインストールし、構成します。
2. 異なる Oracle ホームに Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールし、構成します。
3. 3 つ目の Oracle ホームに Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールし、Oracle Files を構成します。
4. Oracle Files Configuration Assistant を使用して、[第 14 章「Oracle Files の構成」](#)に示す説明に従って、Oracle Files を構成します。

既存の Oracle データベースによる Oracle Files 使用のデータベース要件

Oracle Collaboration Suite に同梱された Information Storage データベース以外の既存の Oracle データベースに Oracle Files データを格納するには、Oracle Files を構成する前に、表 4-2 に示した初期化パラメータ値を使用してデータベースを構成する必要があります。これらのパラメータは、Oracle Files の構成およびパフォーマンスに影響を与えます。

さらに、既存の Oracle データベースは、次の要件を満たしている必要があります。

- Oracle9i Database Server 9.2.x 以上、Enterprise または Standard Edition インストール・タイプ。
- Oracle JVM 9.2 以上（Enterprise または Standard Edition Oracle データベース・サーバーに付属）。次のコマンドを使用して、Oracle JVM がインストールされているかどうかを確認します。

```
SELECT dbms_registry.status('JAVAM') FROM dual;
```


結果が VALID の場合、Oracle JVM はインストールされています。
- Oracle Text 9.2 以上（Enterprise または Standard Edition Oracle データベース・サーバーに付属）。これは、完全テキストの検索および取得に必要です。
- Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.3。さらに、このドライバは、Oracle Files Configuration Assistant で必要です。Oracle Files を構成した後、オプションで Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.3 または Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.3 のいずれかを使用できます。
- USERS 表領域に 450MB 以上の空き領域（Oracle Files オブジェクトの格納に USERS 表領域を使用する場合）、またはカスタム表領域に構成中に作成される表や索引を収納するための十分な空き領域。

表 4-2 既存データベース上の Oracle Files の初期化パラメータ値

パラメータ	値
AQ_TM_PROCESSES	1
COMPATIBLE	9.2.0.0.0
DB_BLOCK_SIZE	8192
DB_CACHE_SIZE	16777216
DB_FILE_MULTIBLOCK_READ_COUNT	32
FAST_START_MTTR_TARGET	300
HASH_AREA_SIZE	1048576
HASH_JOIN_ENABLED	TRUE
LARGE_POOL_SIZE	8388608

表 4-2 既存データベース上の Oracle Files の初期化パラメータ値（続き）

パラメータ	値
JAVA_POOL_SIZE	33554432 ¹
JOB_QUEUE_PROCESSES	4 ¹
OPEN_CURSORS	300
PGA_AGGREGATE_TARGET	33554432
PROCESSES	150
QUERY_REWRITE_ENABLED	TRUE
REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE	EXCLUSIVE
SESSION_MAX_OPEN_FILES	50
SHARED_POOL_SIZE	50331648
SORT_AREA_SIZE	1048576
STAR_TRANSFORMATION_ENABLED	TRUE
TIMED_STATISTICS	TRUE
UNDO_MANAGEMENT	AUTO
UNDO_RETENTION	10800
UNDO_TABLESPACE	UNDOTBS1

¹ 一部の初期化パラメータは Oracle Email と Oracle Files の両方で重複しているため、Oracle Email と Oracle Files の両方のデータを同じ既存の Oracle データベースに格納する場合は、表 4-1 および表 4-2 に示した 2 つの初期化パラメータ値の大きい方の値を使用します。

Oracle Ultra Search の配置

Oracle Ultra Search には Oracle Text が必要です。Oracle Text は、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite Information Storage とともにインストールされます。既存の Oracle9i データベースを使用する場合は、Oracle Text がインストールおよび構成されていることを確認します。

Oracle Ultra Search の索引付け機能を使用する場合は、別の Oracle9iAS Metadata Repository をインストールおよび構成することをお勧めします。Oracle Ultra Search による索引付けは、Oracle9iAS Metadata Repository に自動的に格納されます。Oracle Ultra Search による索引付けは、Oracle Internet Directory が使用するリポジトリ以外の Oracle9iAS Metadata Repository に格納します。

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールして Oracle Ultra Search を構成する前に、次の考慮事項を確認します。

- 十分な RAM
- 十分なディスク領域
- ソフトウェア要件
- パフォーマンスの要因およびサイズ指定のガイドライン

十分な RAM

Ultra Search の索引付けエンジンは、Oracle 内で実行します。そのため、大規模な Oracle インストールの実行が可能な容量のメモリーがシステムに搭載されていることが重要です。Oracle インスタンスのシステム・グローバル領域は、50MB 以上である必要があります。

関連資料：『Oracle9i データベース・パフォーマンス・チューニング・ガイドおよびリファレンス』

Oracle Ultra Search の Web クローラは、同じホスト上で個別の Java プロセスとして実行されます。Web クローラ専用のメモリーとして 50MB を割り当てます。

Oracle Ultra Search の管理ツールは、J2EE 1.2 の標準 Web アプリケーションです。この管理ツールは、Oracle Ultra Search のサーバー・コンポーネントとは別のホスト上にインストールして実行できます。このコンポーネントを Ultra Search のサーバー・コンポーネントと同じホスト上で実行することもできますが、スケーラビリティが制限される場合があります。いずれの方法を選択する場合も、J2EE エンジンに十分なメモリーを割り当てます。Oracle HTTP Server は Oracle9iAS Containers for J2EE とともに使用することをお勧めします。Oracle HTTP Server、および J2EE エンジンを実行する JDK に十分なメモリーを割り当てます。

十分なディスク領域

顧客のニーズは多種多様であるため、特定の容量のディスク領域を推奨することはできません。一般的なガイドラインとして、次の最小要件があります。

- 各リモート・クローラ・ホストに、Oracle Ultra Search のサーバー・コンポーネントをインストールするために必要な容量と同量のディスク領域を割り当てます。
- ホスト上の RAM に応じて、できるかぎり大規模な一時表領域を作成します。
- Oracle Ultra Search インスタンス・ユーザー用に、索引付けするデータの総量と同じサイズの表領域を作成します。たとえば、クローラおよび索引付けするデータの総量が 10GB であると推定した場合、Oracle Ultra Search インスタンス・ユーザー用に 10GB 以上の表領域を作成します。この表領域を Oracle Ultra Search インスタンス・ユーザーのデフォルトの表領域として割り当てる必要があります。

注意： Oracle Ultra Search インスタンス・ユーザーは、明示的に作成する必要のあるデータベース・ユーザーです。クロールおよび索引付けプロセスの一部として収集および処理されるすべてのデータが、このユーザーのスキーマに格納されます。

ソフトウェア要件

Oracle Ultra Search Middle-Tier コンポーネントは、Web アプリケーションです。そのため、Web サーバーを実行する必要があります。Oracle HTTP Server および Jserv、または Oracle HTTP Server および Oracle9iAS Containers for J2EE をお勧めします。

パフォーマンスの要因およびサイズ指定のガイドライン

この項では、一般的な小規模、中規模または大規模な組織のリポトリ間で均一な検索機能を提供するための、Oracle Ultra Search に対するハードウェア要件について説明します。

クロールおよび索引付けのパフォーマンスは、検索するドキュメントの数、ドキュメントの平均サイズ、ドキュメントの種類（これらのドキュメントをシステム固有のフォーマットから INSO に変換する必要がある場合もない場合も）などの要因によって異なります。

注意： クロールおよび索引付けによって収集された実データは、ユーザーのスキーマには格納されません。ただし、データのトークンは格納されます。

問合せのパフォーマンスは、任意の短い時間間隔（たとえば 15 分間）に連続して同時に問合せを実行するユーザーの数によって異なります。また、問合せのパフォーマンスは、データ・セットのサイズおよびコンピュータ・リソース（CPU およびメモリー）によっても異なります。

表 4-3 に、小企業、中企業および大企業の定義を示します。

表 4-3 小企業、中企業および大企業のパフォーマンスの要因

パフォーマンスの要因	小企業	中企業	大企業
企業イントラネット内のドキュメントの数	50000	500000	2500000
ドキュメントの平均サイズ (KB)	50	50	50
同時に検索を実行するユーザー	10 未満	10 未満	10 未満

表 4-4 に、小企業、中企業および大企業のハードウェア構成例を示します。

表 4-4 小企業、中企業および大企業向けのサイズ指定のガイドライン

層	小企業	中企業	大企業
データベース (Oracle9iAS Metadata Repository または Oracle9i リリース 1 (9.0.1) 以上のデータベース)	2GB の RAM が搭載された SUN Ultra 60 (1 台)	4 つの CPU が搭載された SUN Enterprise 450 (または同等のサーバー) 2GB の RAM 10 ～ 15GB の空きディスク領域	16 の CPU が搭載された HP-UX PA-RISC (64-bit) Superdome 48GB の RAM 500GB の空きディスク
Oracle Collaboration Suite Middle-Tier	10GB の空きディスク領域	2GB の RAM が搭載された Windows 2000 Server	2GB の RAM が搭載された Windows 2000 Server

注意： 小規模な構成の場合は、データベース層および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の両方が同じコンピュータ上にインストールされます。前述のハードディスク領域の要件には、ソフトウェアのインストールに必要な領域は含まれていません。ハードディスク領域の要件については、2-2 ページの「[ハードウェア要件](#)」を参照してください。

Oracle Voicemail & Fax の配置

Oracle Voicemail & Fax には、電話サービス用の Windows 2000 Computer Telephony (CT) Server が必要です。

関連資料： ハードウェア要件とソフトウェア要件、およびインストールの方法については、『Oracle Voicemail & Fax 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Web Conferencing の配置

Oracle Web Conferencing は、エンド・ユーザー機能を Middle-Tier アプリケーションとして Oracle Collaboration Suite 内に配信します。Oracle Web Conferencing は、Oracle Real-Time Collaboration グループの製品から現在提供されています。

Oracle Web Conferencing の配置を計画するには、次のようにします。

- このマニュアルの Oracle Web Conferencing に関連する項を確認します。
- 『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』を確認します。
- 次の URL にアクセスして、最新の情報、対処方法およびヒントを確認します。

<http://otn.oracle.co.jp/>

Oracle Collaboration Suite は、互換性のあるバージョンの Oracle9iAS Single Sign-On Server を使用し、Oracle Internet Directory と関連付ける必要があります。これらは、Oracle9iAS Infrastructure に付属しています。

Oracle Web Conferencing は、Oracle9i リリース 2 (9.2) 以上のデータベースを使用する必要があります。Middle-Tier のインストール時に、他の Oracle Collaboration Suite コンポーネント（Oracle Files など）のためにすでにインストールした Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースを使用するか、または適切な別のデータベースに接続情報を指定できます。Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースとは異なるデータベースを使用する場合、このマニュアルに示す Oracle Web Conferencing の表領域に関する要件を必ず確認してください。

Oracle Web Conferencing は、リアルタイム・コラボレーションを配信するために処理能力の消費がより高くなります。使用する配置構成によっては、Oracle Web Conferencing がインストールされる Oracle ホームについて、Oracle HTTP Server および `mod_osso` の構成を再構成する必要があります。そのため、他の Oracle Collaboration Suite コンポーネント製品とは別に、Oracle Web Conferencing を独自の Oracle ホームにインストールすることをお勧めします。

Oracle Collaboration Suite を実装するために中間層のホストが複数ある場合、Oracle Web Conferencing は、可能な限り処理能力が高いメモリーおよび CPU リソースを Oracle Web Conferencing のみに提供でき、エンド・ユーザーに対して最も広い帯域幅のネットワーク接続を保持するホストに設定します。

Oracle Web Conferencing は、選択した数の中間層に配置できます。各 Oracle Web Conferencing インスタンスは、同じデータベースを使用するすべての Oracle Web Conferencing Middle-Tier と連携するようにデフォルトで構成されます。

Oracle Web Conferencing は、他の Oracle Collaboration Suite のコンポーネントとともに同じ Oracle ホームにインストールして構成できます。

Oracle Web Conferencing のコア・コンポーネントは、ホストがこのマニュアルおよび Oracle Collaboration Suite コンポーネントの関連ドキュメントに示すすべての要件を満たしているかぎり、Oracle Collaboration Suite 全体（Infrastructure、Information Store、すべての Middle-Tier の Oracle ホームを含む）が同じホストに存在する場所でも構成できます。

注意： Document Conversion Server および Voice Conversion Server を備えた Oracle Web Conferencing インスタンスには、Microsoft Windows 2000 がインストールされているコンピュータが必要です。このタイプの Oracle Web Conferencing インスタンスによって提供される機能は、配置に Document Conversion Server または Voice Conversion Server が含まれていない場合には使用できません。ただし、Oracle Web Conferencing のコア機能は使用できます。

配置についての推奨項目および考慮事項

推奨項目は次のとおりです。

- 3つの Oracle Collaboration Suite を、次の順序で異なる Oracle ホームにインストールします。
 - Oracle9iAS Infrastructure
 - Oracle Collaboration Suite Information Storage
 - Oracle Collaboration Suite Middle-Tier
- 最適なパフォーマンスのために Infrastructure および Middle-Tier を個別のホストにインストールします。
- Information Storage および Middle-Tier を個別のホスト上にインストールします。
- 同じホストに追加の Oracle Collaboration Suite アプリケーションをインストールおよび構成する場合は、同じオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントを使用します。

別のホスト上に存在する Oracle9iAS Metadata Repository に接続することによって、広範囲で使用されるコンポーネントのパフォーマンスを最適化できます。コンポーネントを独自のリポジトリに割り当てるには、次の手順を実行します。

1. Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On をサポートする（オプションで Oracle Management Server のサポートも含む）ために、Oracle9iAS Infrastructure をインストールします。
2. Oracle Collaboration Suite の Middle-Tier をインストールします。
3. Oracle Internet Directory または Oracle9iAS Single Sign-On を構成せずに、2 番目の Oracle9iAS Infrastructure をインストールします。
4. Oracle Enterprise Manager Web Site で Oracle Collaboration Suite のこのインスタンスを参照し、Oracle9iAS Instance ホーム・ページに移動します。

5. 「Configure Schema」を選択します。

「Configure Schema」ページから、選択されたアプリケーション用のデータベースおよびスキーマを選択できます。

関連資料： このタスクの実行の詳細は、Enterprise Manager Web Site のオンライン・ヘルプの「Configuring the Schema for an Oracle9iAS Component」を参照してください。

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の削除

既存の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) がインストールされているマシンに、アップグレードを実行せずに Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) をインストールすると、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のディレクトリが引き続きアクティブな Oracle Enterprise Manager ディレクトリとなります。後で Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) を削除する場合、まず Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のディレクトリから emctl コマンドを実行し、Oracle Enterprise Manager ディレクトリを Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) のディレクトリまたは別のディレクトリに変更する必要があります。

関連資料：

- emctl コマンドの使用方法は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。
- Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) へのアップグレードは、3-10 ページの「[Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のアップグレード](#)」を参照してください。

インストールの開始

この章では、Oracle Collaboration Suite の 3 種類のインストールを開始する手順について説明します。インストール・プロセスを正常に実行するには、この章に示す手順に従う必要があります。

この章の内容は次のとおりです。

- [CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール](#)
- [ハード・ドライブからの Oracle コンポーネントのインストール](#)
- [Oracle Universal Installer の概要](#)
- [Oracle Universal Installer の起動](#)
- [インストール・セッション・ログ・ファイル](#)

CD-ROM からの Oracle コンポーネントのインストール

Oracle Collaboration Suite には、次の製品をインストールするための CD-ROM が含まれています。

- Oracle9iAS Infrastructure
- Oracle Collaboration Suite Information Storage
- Oracle Collaboration Suite Middle-Tier
- Oracle Collaboration Suite Client
- Oracle Cluster Manager リリース 9.2.0.3

Oracle の CD-ROM は、ISO 9660 を拡張した Rockridge フォーマットで作成されています。CD-ROM から直接インストールするか、または CD-ROM の内容をコピーしてシステムのハードディスク・ドライブからインストールするかを選択できます。Oracle Universal Installer を起動する前に、インストール方法に応じて必要な手順を完了する必要があります。

ハード・ドライブからの Oracle コンポーネントのインストール

1. システムのハード・ドライブに各 CD-ROM をコピーします。1 枚目の CD-ROM を Disk1 という名前のディレクトリにコピーし、2 枚目の CD-ROM を Disk2 という名前のディレクトリにコピーします（セットに含まれる一連の CD-ROM の数に応じて続けて同じようにコピーします）。
2. Disk1 の setup をダブルクリックし、Oracle Universal Installer を起動します。

Oracle Universal Installer の概要

Oracle Collaboration Suite では、Oracle Universal Installer を使用して、インストール・プロセスの手順を示します。Oracle Universal Installer の機能は次のとおりです。

- Oracle Collaboration Suite インストール・オプションの説明
- 事前設定された環境変数および構成設定の検出
- Oracle Collaboration Suite 製品の削除

この項では、Oracle Universal Installer の次の機能について説明します。

- [Oracle Universal Installer の前提条件の確認](#)
- [Oracle Universal Installer を使用した追加コンポーネントのインストール](#)

Oracle Universal Installer の前提条件の確認

Oracle Universal Installer は、インストール前にコンピュータを自動的にチェックして、システムが動作要件を満たしていることを確認します。表 5-1 に、実行される前提条件の確認を示します。

表 5-1 Oracle Universal Installer の前提条件の自動確認

前提条件の確認	関連項目
Oracle ホームのインストールに十分なディスク領域があるかどうかの確認	2-2 ページの「ハードウェア要件」
インストール・ホストに十分な RAM が搭載されているかどうかの確認	2-2 ページの「ハードウェア要件」
Middle-Tier および Information Storage のインストールの場合、1 つの Oracle9iAS Infrastructure がインストールされているかどうかの確認	第 1 章「インストールの概要」
モニターに 256 色カラー表示機能があるかどうかの確認	2-2 ページの「ハードウェア要件」

関連項目： Oracle Collaboration Suite の各インストール用のインストール・チェックリストは、付録 B「インストール・チェックリスト」を参照してください。

Oracle Universal Installer を使用した追加コンポーネントのインストール

同じホスト上に続けて Oracle Collaboration Suite または Oracle9iAS Infrastructure をインストールする場合は、次の手順を実行することをお勧めします。

- 第 2 章「インストールの準備」に示すインストール前のタスクを再確認します。
- Oracle Enterprise Manager Web Site を停止します。

関連資料： 詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

- インストールの開始時に、事前にインストールされた他のすべての Oracle Collaboration Suite インスタンスが実行されていることを確認します。
- 最初にインストールした Oracle Collaboration Suite の Oracle ホームとは別の Oracle ホームを指定します。
- 続けて Oracle Collaboration Suite をインストールする場合は、同じ oraInventory ディレクトリを使用します。
- 第 4 章「Oracle Collaboration Suite の配置方法」を参照して、Oracle Collaboration Suite コンポーネントが問題なく共存していることを確認します。

Oracle Universal Installer の起動

注意： Oracle Universal Installer は、オラクル社が提供する Java Runtime Environment (JRE) を自動的にインストールします。この JRE は、Oracle Universal Installer およびいくつかの Oracle アシスタントを実行するために必要です。JRE を変更する場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターが提供するパッチを使用してください。

関連資料： この項で説明するインストール手順中に入力する情報については、Oracle Universal Installer のオンライン・ヘルプを参照してください。

Oracle Universal Installer を起動して、Oracle Collaboration Suite の各インストールを開始するには、次の手順を実行します。

1. 第 2 章「インストールの準備」に示すすべての要件を満たしていることを確認します。
2. 付録 B「インストール・チェックリスト」に示す各インストールのインストール・チェックリストを出力し、確認を完了します。確認する値の多くは、他のインストールおよび構成を完了するためにも必要です。
3. 管理者グループのメンバーとしてログインします。

注意： 同じホスト上に追加の Oracle Collaboration Suite アプリケーションをインストールおよび構成する場合は、同じオペレーティング・システム・ユーザー・アカウントを使用することをお勧めします。

4. 該当する製品の 1 枚目の CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
自動再生されるウィンドウが自動的に表示されます。自動再生されるウィンドウが表示されない場合は、次のようにします。
 - a. 「スタート」→「ファイル名を指定して実行」を選択します。
 - b. 次のファイル名を入力します。
`DRIVE_ LETTER:¥autorun¥autorun.exe`
5. 「インストール」をクリックして、Oracle Universal Installer の「ようこそ」画面を表示します。

注意： クラスタに Oracle9iAS Infrastructure または Oracle Collaboration Suite Middle-Tier をインストールしないでください。クラスタにインストールできるのは、Oracle Collaboration Suite Information Storage のみです。

関連資料： Real Application Clusters のインストールの詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』を参照してください (Oracle Technology Network Japan で入手可能)。

6. 「次へ」をクリックし、「ファイルの場所の指定」画面を表示します。

クラスタ上に Oracle Collaboration Suite Information Storage をインストールした場合、「クラスターノードの選択」画面が表示されます。Oracle ソフトウェアをインストールするノードを選択します。Real Application Clusters ソフトウェアは、Oracle Universal Installer が実行されるノード上にインストールされ、クラスタ内の選択された他のノードにコピーされます。デフォルトでは、常に、ローカル・ノードが選択されます。

7. 「ファイルの場所の指定」画面で、次の手順を実行します。

- 「ソース」セクションで、デフォルト・パスを使用します。
- 「インストール先」セクションで、Oracle ホームの**名前**およびフルパスを入力します。

8. 「次へ」をクリックし、「言語の選択」画面を表示します。

9. Oracle Collaboration Suite のインストールでサポートする言語を、Oracle Collaboration Suite でサポートされている言語のリストから選択します。「次へ」をクリックします。

注意：

- ここで選択した言語により、ユーザーは自分の母国語で Oracle Collaboration Suite にアクセスできるようになります (Oracle Collaboration Suite でサポートされている言語の場合)。
 - サポート言語は、インストール完了後は追加できません。他の言語を追加するには、Oracle Collaboration Suite を完全に再インストールする必要があります。
-

ここまでの初期の手順で、この後第 6 章「Oracle Collaboration Suite のインストール」の各種インストール手順に進みます。

インストール・セッション・ログ・ファイル

Oracle Universal Installer では、コンピュータで初めて実行されたときに、`SYSTEM_DRIVE:\Program Files\Oracle\Inventory\logs` ディレクトリを作成します。このディレクトリには、Oracle Universal Installer でコンピュータ上にインストールされた製品のインベントリ、および他のインストール情報が保存されます。以前に Oracle 製品をインストールした場合は、このディレクトリがすでに存在します。

最新のインストールに関するログ・ファイルは次のファイルです。

`installActionstodays_date_time.log`

`todays_date_time` は、インストールの日時です。

Oracle Collaboration Suite のインストール

この章では、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) のインストール手順を説明します。

関連資料：

- インストール順序の詳細は、1-9 ページの「[インストール・ガイド](#)」を参照してください。
- Oracle Collaboration Suite をインストールする前に、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノートを読むことをお勧めします。これは各 Oracle Collaboration Suite のインストール用 CD-ROM の doc ディレクトリと次の URL の Oracle Technology Network Japan で入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp/>

注意： Oracle Collaboration Suite は、Windows NT 4.0 Terminal Server および Terminal Services がアクティブになっている Windows 2000 Server ではサポートされません。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle9iAS Infrastructure](#) のインストール
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage](#) データベースのインストール
- [Oracle Collaboration Suite Middle-Tier](#) のインストール
- [Oracle Web Conferencing Document Conversion Server](#) および [Voice Conversion Server](#) のインストール
- [Oracle Collaboration Suite](#) の統合 Web クライアントのインストール
- Middle-Tier での [mod_osso](#) を伴った HTTPS の手動設定

- [その他のドキュメント](#)

Oracle9iAS Infrastructure のインストール

この項では、Oracle9iAS Infrastructure をインストールする方法を説明します。

注意： 業界標準の LDAP ポートは、非 SSL では 389、SSL では 636 です。これらのポートが %WINDIR%\system32\drivers\etc\services ファイルに含まれていない場合、Oracle Universal Installer はこれらを Oracle Internet Directory のポートとして使用します。これらのポートが %WINDIR%\system32\drivers\etc\services ファイルに含まれている場合、Oracle Universal Installer では続けて Oracle Internet Directory ポートとして 4031 ~ 4039 のポートの使用を試みます。

標準ポート 389 または 636 を使用するには、構成を開始する前に、これらのポート番号のある行を %WINDIR%\system32\drivers\etc\services ファイルから削除する必要があります。これらの行をコメント・アウトするだけではなく、削除する必要があります。

ポート 389 または 636 で稼働する LDAP サーバーが存在する場合、構成前にサーバーを停止してください。

1. 1 枚目の Oracle9iAS Infrastructure Release 2 (9.0.2.3.0) for Microsoft Windows (32-bit) CD-ROM を挿入し、5-4 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」の手順に従います。
5-5 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」の手順 9 の「言語の選択」画面で「次へ」をクリックすると、「インストールの要件確認」画面が表示されます。
2. 「次へ」をクリックし、「構成オプションの選択」画面を表示します。

関連項目： アップデートの手順については、[第 3 章「Oracle Collaboration Suite リリース 2 \(9.0.4.1.1\) へのアップグレード](#)」を参照してください。

3. 「デフォルト」を選択し、「次へ」をクリックすると、「インスタンス名および ias_admin パスワードの作成」画面が表示されます。
4. 「インスタンス名」を選択し、「ias_admin パスワード」を選択して確定します。

注意：

- 「**インスタンス名**」はデータベース・インスタンス名ではなく、Oracle9iAS Infrastructure インスタンスの名前です。
 - ここで選択した「**ias_admin パスワード**」は、Infrastructure の Oracle Internet Directory 管理者パスワードとしても使用します。
-
-

「**次へ**」をクリックし、「Guest アカウントのパスワード」画面を表示します。

5. ゲスト・アカウントのパスワードを入力および確認します。
6. 「**次へ**」をクリックし、「サマリー」画面を表示します。
7. 情報を確認し、「**インストール**」をクリックします。インストールのログ・ファイルの場所が表示されます。

「**インストール**」をクリックすると、ファイルがコピーおよびリンクされます。この処理には、1 時間以上かかる場合があります。

8. 「インストールの終了」画面にインストールのポート番号が表示され、インストールの成功が確認されます。
9. インストール・ログ・ファイルで、インストール・エラーがないかを確認します。インストール・ログ・ファイルは、`SYSTEM_DRIVE:\Program Files\Oracle\Inventory\logs` にあります。

各インストール・ログの書式は、`InstallActionsYYYY-MM-DD_HH-MM-SSAM.log` です。

注意：

- TEMP 環境変数で指定されたディレクトリでは、ディレクトリの書式は、`OraInstallYYYY-MM-DD_HH-MM-SSAM.log` となります。`installCluster.log` ファイルに、現在実行中のインストール・モジュールが示されます。
 - ポートのリストは、`%ORACLE_HOME%\install` ディレクトリ内の `portlist.ini` ファイルに記されています。
-
-

Oracle9iAS Infrastructure のその他のドキュメント

インストール後のタスクおよび構成タスクの詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』およびコンポーネント固有のドキュメントを参照してください。

Oracle Collaboration Suite の新規インストールには必要ありませんが、インストールをテストするテスト・ユーザーを作成できます。

関連項目： テスト・ユーザーの作成手順の詳細は、3-5 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure のアップグレード](#)」を参照してください。

Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのインストール

この項では、Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースをインストールする方法を説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [既存の Oracle ホームへのデータベースのインストール](#)
 - [Oracle Internet Directory への Oracle Collaboration Suite Information Storage の登録](#)
- Infrastructure がインストール済であることを確認します。

1. 1 枚目の Oracle Collaboration Suite Release 2 (9.0.2.3.0) for Microsoft Windows (32-bit) CD-ROM を挿入し、5-4 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」の手順に従います。

5-5 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」の手順 9 で、「言語の選択」画面の「次へ」をクリックすると、「データベースの作成」画面が表示されます。次の手順を実行して、Information Storage をインストールします。

2. 「はい」を選択して新しい Oracle9i データベースを作成し、「次へ」をクリックすると、「Information Storage の登録」画面が表示されます。
3. 「はい」を選択し、Information Storage データベースを Oracle Internet Directory に登録します。「次へ」をクリックして、「Oracle Internet Directory 情報」画面を表示します。
4. 完全修飾のホストの名前、ポート、ユーザー名（デフォルトで Oracle Universal Installer に cn=orcladmin と表示）およびパスワードを入力します。「次へ」をクリックし、「データベースの識別」画面を表示します。
5. 「グローバル・データベース名」および「SID」を入力します。必要に応じて、デフォルトの SID を変更します。
6. 「次へ」をクリックし、「データベース・ファイルの場所」画面を表示します。
7. デフォルトを使用して「次へ」をクリックし、「サマリー」画面を表示します。

既存の Oracle ホームへのデータベースのインストール

同じ Oracle ホームに複数のデータベースをインストールできます。

次のいずれかのソフトウェアの CD-ROM で、初期データベースをインストールするか、または「ソフトウェアのみ」データベース構成オプションを選択します。

- Oracle Collaboration Suite Information Storage
- Oracle9i データベース

重要： 本番環境では、1 つの Oracle ホームに複数のデータベースをインストールしないことをお勧めします。この構成は、評価を目的とした場合にのみお勧めします。

1. ソフトウェアがインストールされた後、Database Configuration Assistant を実行します。
2. 「データベースの作成」を選択します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. プロンプトに対し、作成するデータベース構成タイプを選択します。
5. Oracle ホームの名前、インスタンス名などの質問に答えます。

Oracle Universal Installer と同じ方法で、データベースが Database Configuration Assistant によって作成されます。

Oracle Internet Directory への Oracle Collaboration Suite Information Storage の登録

次の各項で、Information Storage データベースを Oracle Internet Directory に登録する方法を説明します。

- [Oracle Net Configuration Assistant の実行](#)
- [Database Configuration Assistant の実行](#)
- [Oracle Internet Directory の構成の確認](#)

注意：

- この項は、「Information Storage の登録」画面で「いいえ」を選択した場合のみ該当します。
 - Information Storage がクラスタ・データベースに存在する場合、1 つのデータベース・インスタンスを Oracle Internet Directory に登録します。
 - Oracle Net Configuration Assistant および Database Configuration Assistant の両方を、Oracle ソフトウェアのインストールに使用した Oracle ユーザー・アカウントで実行する必要があります。
-
-

Oracle Net Configuration Assistant の実行

1. 「スタート」→「プログラム」→「Oracle - *HOME_NAME*」→「Configuration and Migration Tools」→「Oracle Net Configuration Assistant」を選択して Oracle Net Configuration Assistant を起動し、「ようこそ」画面を表示します。
2. 「ディレクトリ使用構成」を選択し、「次へ」をクリックします。
3. 使用するディレクトリ・サーバーを選択します。ディレクトリ・サーバーは、Oracle で使用可能なように構成済である必要があります。
4. 「次へ」をクリックします。
5. 使用するディレクトリ・サーバーのタイプとして「Oracle Internet Directory」を選択します。
6. 「次へ」をクリックします。
7. Oracle Internet Directory の**ホスト名**、**ポート**および SSL ポートを入力します。
8. 「次へ」をクリックします。
9. ディレクトリ・サーバーのデフォルトの Oracle コンテキストとして「cn=OracleContext」を選択します。

注意：「cn=OracleContext,*subscriber_specific_DN*」は選択しないでください。

10. 「次へ」をクリックします。
11. Oracle Net Configuration Assistant の構成の最後まで進みます。
12. Oracle Net Configuration Assistant を終了します。

Real Application Clusters の追加構成手順

次のいずれかのタスクを行うには、Oracle Net Manager を使用します。

- アドレスがリスト表示されていないクラスタ内のノードのデータベース・エントリにネットワーク・アドレスを追加します。
- クラスタ内の 1 つのノードのネットワーク・アドレスを指定する別のネット・サービス名、およびデータベースのサービス名としての Real Application Clusters グローバル・データベース名を作成します。次に、クラスタ内の他のノードのネット・サービス名にネットワーク・アドレスを追加します。

関連資料： 接続文字列オプションの詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』を参照してください。

Database Configuration Assistant の実行

1. 「スタート」→「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Oracle Database Configuration Assistant」を選択して Database Configuration Assistant を起動します。
2. 「次へ」をクリックします。
3. 「データベース内のデータベース・オプションの構成」を選択します。
4. 「次へ」をクリックします。
5. 構成する Oracle Email データベースの SID を選択します。
6. 「次へ」をクリックします。
7. 「はい、データベースの登録を取り消します。」オプションを選択します。
 - a. 「ユーザ DN」フィールドで **cn=orcladmin** と入力します。
 - b. 「ユーザ DN」フィールドに入力した名前のパスワードを入力します。
8. 「終了」をクリックします。

「データベースの再起動」画面が表示されます。
9. 「はい」をクリックします。

「サマリー」画面が表示されます。
10. 「OK」をクリックします。

データベース構成の進捗状況が Database Configuration Assistant の画面に表示されます。
11. Information Storage データベースの SYS ユーザーと SYSTEM ユーザーの新規パスワードを入力します。

12. 「パスワード管理」をクリックします。

コンピュータが最低限のインストール要件を満たしていることを確認した後、画面上のすべてのチェックボックスを選択します。

13. CTXSYS アカウントを探し、「アカウントのロック」列のチェックボックスをクリックして、このアカウントのロックを解除します。

14. 新規の CTXSYS パスワードを入力し、確定します。

15. 「OK」をクリックして、「インストールの要件確認」画面を表示します。

16. 「次へ」をクリックして、「インスタンス名および ias_admin パスワードの作成」画面を表示します。

Information Storage データベースのインストールが完了しました。

Oracle Internet Directory の構成の確認

Oracle Internet Directory の構成を確認するには、Oracle Internet Directory にログインし、cn=oraclecontext の下で、6-6 ページの「[Oracle9iAS Infrastructure のインストール](#)」の手順 3 で選択した Information Storage の SID を確認します。

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール

この項では、Middle-Tier をインストールするために Oracle Universal Installer によって実行される一連の手順に従い、すべての Oracle Collaboration Suite コンポーネントがインストールされることを前提としています。

この項の内容は次のとおりです。

- [はじめに](#)
- [Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストールの開始](#)
- [Oracle Web Conferencing のインストール](#)
- [Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール](#)
- [Oracle Files の構成](#)
- [Middle-Tier のインストールの完了](#)

はじめに

- Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインスタンスをインストールする前に、ネットワーク上に Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On がインストールおよび構成済であることを確認します。
- このアプリケーション Middle-Tier のインスタンスに Oracle Email または Oracle Files を構成する場合は、ネットワーク上に Oracle9i データベースまたは Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースがインストールおよび構成済であることを確認します。

注意： Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースをインストールした場合は、データベースは自動的に Oracle Internet Directory に登録されます。Oracle9i データベースをインストールした場合は、データベースを手動で Oracle Internet Directory に登録する必要があります。

- Oracle Real-Time Collaboration リポジトリが存在するデータベース・インスタンスのデータベース・ホスト名、データベース・リスナー・ポートおよび SID を取得します。これらの情報を使用して、この Oracle Web Conferencing のこのインスタンスをインストールするホストからデータベースに接続できることを確認します。
- システム権限（ユーザーおよび表領域を作成する権限など）を持ったユーザーのユーザー名およびパスワードを取得します。ユーザーは SYSTEM にデフォルトで設定されます。デフォルトを使用する場合は、SYSTEM のパスワードが必要です。
- Oracle Universal Installer は、使用しているデータベースにすでに Oracle Real-Time Collaboration リポジトリがあるかどうかを検出します。リポジトリが検出されなかった場合は、新しいリポジトリが指定されたデータベースに作成されます。その場合、前述のデータベース・ホスト上のディレクトリへのフルパスを入力する必要があります。インストール時に、Oracle Real-Time Collaboration 表領域用のデータ・ファイルがそのディレクトリに作成されます。この場所には 500MB 以上の空き領域が必要です。またデータベースによって書き込むことができる必要もあります。

注意： ここで入力した情報が正しくない場合、インストール障害からリカバリできないため、この Oracle ホームに対してインストール・プロセスをすべてやり直す必要があります。

表領域には、デフォルト値が取得されます。

- データベースにすでに Oracle Real-Time Collaboration リポジトリがある場合、およびロックされているスキーマが検出された場合は、RTC スキーマおよび RTC_APP スキーマの新規パスワードを求めるプロンプトが表示されます。スキーマがロックされていない場合は、既存の RTC_APP スキーマのパスワードを求めるプロンプトが表示されます。

- インストーラは、Oracle Real-Time Collaboration コンポーネントで使用するための空きポートを 2400 ～ 2700 の範囲で検索します。空きポートがこの範囲で見つからない場合は、検索範囲を 2400 ～ 49152 に広げ、最初に見つかった利用可能なポートを取得します。この場合、警告が表示されます。

注意： UNIX ユーザー ID が 9 文字以上のユーザーによってインストールされると、Oracle Calendar Server は動作しません。

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストールの開始

1. 1 枚目の Oracle Collaboration Suite Release 2 (9.0.4.1.1) for Microsoft Windows (32-bit) CD-ROM を挿入し、5-4 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」の手順に従います。

5-5 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」の手順 9 の「言語の選択」画面で「次へ」をクリックすると、「インストールの要件確認」画面が表示されます。次の手順を実行して、アプリケーション Middle-Tier をインストールします。
2. インストールの要件を確認して「次へ」をクリックし、「コンポーネントの構成」画面を表示します。
3. インストールするコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします。「Oracle Calendar アプリケーション・システム」を選択しないと、Oracle Calendar Web Client、Sync Server および Web Services はインストールできません。Oracle Calendar は次の場所にインストールされます。

コンポーネント	場所
Server	%ORACLE_HOME%\ocal¥
Administrator	%ORACLE_HOME%\ocad¥
アプリケーション・システム	%ORACLE_HOME%\ocas¥

注意：

Oracle Calendar Server のみをインストールするには、次のようにします。

1. 「Oracle Calendar Server」を選択し、「Oracle Calendar アプリケーション・システム」は選択しません。
2. その結果、クライアントのホストおよびポートの入力プロンプトが表示されます。これらの値が不明な場合、一時的に値を入力し、後でサーバーの `unison.ini` ファイルを次のように編集します。

```
[RESOURCE_APPROVAL]
url=http://host_name:port_number/ocas-bin/ocas.fcgi
```

Oracle Calendar アプリケーション・システムのみをインストールするには、次のようにします。

1. 「Oracle Calendar アプリケーション・システム」を選択し、「Oracle Calendar Server」は選択しません。
2. その結果、Oracle Calendar Server のホスト、ポートおよびノード ID の入力を求めるプロンプトのみが表示されます。これらの値が不明な場合、一時的に値を入力し、後でアプリケーション・システムの `ocas.conf` ファイルを正しい値で次のように編集します。

```
[CONNECTION]
mode=host_name:engine_port,node
```

-
4. 「次へ」をクリックし、「既存の Oracle9iAS Single Sign-On」画面を表示します。
 5. 既存の Oracle9iAS Single Sign-On インスタンスのホスト名およびポート番号を入力して「次へ」をクリックし、「Oracle Internet Directory」画面を表示します。
 6. 既存の Oracle Internet Directory インスタンスの管理者ユーザー名およびパスワードを入力して「次へ」をクリックし、「管理パスワードおよびインスタンス名の指定」画面を表示します。
 7. 「インスタンス名」を選択し、「管理用パスワード」を選択して確定します。
-

注意：

- 「インスタンス名」はデータベース・インスタンス名ではなく、Middle-Tier インスタンス・インストールの名前です。
 - ここで選択した「管理用パスワード」は、Middle-Tier の Oracle Internet Directory 管理者パスワードとしても使用します。
-

Oracle Web Conferencing のインストール

8. 「次へ」をクリックし、「Oracle Real-Time Collaboration リポジトリの位置」画面を表示します。すべてのフィールドに必要な情報を入力します。
9. 「次へ」をクリックし、「Oracle Real-Time Collaboration リポジトリの詳細」画面を表示します。入力求められる情報は、使用しているデータベースによって異なります。
 - Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースを使用している場合、スキーマのパスワードをリセットします。
 - 既存のデータベースを使用する場合は、必要なパスワードを作成し、データファイルの場所を指定します。
10. 情報を入力した後、「次へ」をクリックし、「Oracle Calendar のデフォルトのタイムゾーン」画面を表示します。

関連資料：『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』

Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール

11. 新規 Oracle Calendar ユーザーのデフォルトのタイムゾーンを選択します。「次へ」をクリックして、「Oracle Calendar Services」画面を表示します。
12. 「Oracle Calendar Services」画面が表示されます。指定したユーザーのパスワードを入力します。「次へ」をクリックします。
13. Oracle Email のインストールを選択しなかった場合、「Oracle Calendar メール通知」画面が開きます。SMTP サーバーの完全修飾ドメイン名を入力します。「次へ」をクリックし、「Oracle Calendar のノード ID」画面を表示します。
14. Oracle Calendar のノードに対して、1 ～ 49999 の間の一意の数値 ID を指定します。「次へ」をクリックし、「Oracle Calendar のマスター・ノード」画面を表示します。
15. Oracle Calendar Server の最初のインストールである場合、「Oracle Calendar のマスター・ノード」画面で「はい」を選択し、現在のインストールをマスター・ノードに指定します。Web Services および Sync Server を動作させるには、ネットワーク上に1つのマスター・ノードが必要です。「次へ」をクリックし、「サマリー」画面を表示します。
16. インストールの設定を確認します。変更する必要がある場合は、「戻る」をクリックします。「次へ」をクリックし、「インストール」画面を表示します。

インストールの進行状況がこの画面の進捗バーに表示されます。各コンポーネントの Configuration Assistant が自動的に起動します。Configuration Assistant が失敗した場合は、その原因が画面のウィンドウに表示されます。失敗の原因を修正し、「再試行」をクリックします。

Oracle Files の構成

17. 「Oracle Files Configuration Assistant」画面が表示されたら、14-8 ページの「[Oracle Files の構成](#)」に進み、そこで説明されている手順を完了します。

Middle-Tier のインストールの完了

18. Oracle Files Configuration Assistant が完了すると、「Configuration Assistant」画面が表示されます。「次へ」をクリックして、「インストールの終了」画面を表示します。
19. 「インストールの終了」画面に表示された情報を書きとめます。
20. 「終了」をクリックしてインストールを終了します。
21. 次のコマンドを使用して Oracle Enterprise Manager を再起動します。

```
%ORACLE_HOME%\bin\emctl stop
%ORACLE_HOME%\bin\emctl start
```

22. Oracle Email をインストールし、Middle-Tier のインストールを完了するには、[第 12 章「Oracle Email のインストールおよび構成」](#)に進んでください。

Oracle Web Conferencing Document Conversion Server および Voice Conversion Server のインストール

Document Conversion Server および Voice Conversion Server は、Middle-Tier とは別のコンピュータにインストールする必要があります。両方のサーバーを同じコンピュータにインストールすることも、それぞれ別のコンピュータにインストールすることもできます。

Document Conversion Server および Voice Conversion Server をインストールする前に、これらのコンポーネントがインストールされる各コンピュータに Oracle9i Application Server をインストールする必要があります。次の例外を除いて、Middle-Tier のインストールと同じ手順に従います。

- 「コンポーネントの構成」画面で、「Oracle Web Cache」を選択する必要はありません。
- 「Oracle9iAS Infrastructure の使用」画面で、「いいえ」を選択します。
- 「インスタンス名および ias_admin パスワードの作成」画面で、新規インスタンス名を作成します。このコンポーネントと既存のインスタンスを関連付ける必要はありません。

Middle-Tier のインストールが終了したら、Document Conversion Server および Voice Conversion Server をインストールします。

1. Oracle Web Conferencing Voice & Document Conversion Components Release 2 (9.0.4.1.1) for Microsoft Windows 2000 (32-bit) CD-ROM を挿入します。
2. 該当のラジオ ボタンを選択して、Document Conversion Server または Voice Conversion Server をインストールします。この選択により、これらのコンポーネントの一方または両方をインストールできます。「次へ」をクリックします。

3. インストールするコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします。
4. Oracle Real-Time Collaboration リポジトリがあるデータベースのホスト、ポート番号および SID を入力します。また、Oracle Real-Time Collaboration リポジトリ・スキーマの RTC_APP のパスワードを入力します。「次へ」をクリックします。
5. この画面には、コンポーネントのインストールのステータスが表示されます。

Oracle Collaboration Suite の統合 Web クライアントのインストール

Oracle Collaboration Suite は、ブラウザを搭載したコンピュータ用の統合 Web クライアントを提供します。これは、基礎となる Oracle9i Application Server を使用して、安全なシングル・サインオン環境を提供します。この統合 Web クライアントを使用して、メッセージ（電子メール、ボイスメールおよび FAX）、カレンダーおよびディレクトリ情報、Oracle Web Conferencing 機能、および Oracle Files に格納されたコンテンツにアクセスできます。

デフォルトでは、Web クライアントは、Oracle Collaboration Suite をインストールする際、コンポーネントの構成中に自動的に統合されます。インストール時に中に Web クライアントを選択解除した場合は、Web クライアント・インストーラを実行する必要があります。

Web クライアント・インストーラは、次のタスクを実行します。

- Oracle Collaboration Suite ホーム・ページをインストールします。
- インストール済 Oracle Collaboration Suite コンポーネントに Web プロバイダおよびポートレットを追加します。
- Oracle Collaboration Suite ホーム・ページを Oracle Collaboration Suite ユーザーのデフォルト Web ページに設定します。
- Oracle Collaboration Suite ホーム・ページのユーザーにカスタマイズされた権限を付与します。

新規 Oracle Collaboration Suite コンポーネントをインストールするたびに Web クライアント・インストーラを実行することにより、そのコンポーネントを Oracle Collaboration Suite ホーム・ページで使用できます。Web クライアント・インストーラは、次の Oracle Collaboration Suite コンポーネントにのみ使用できます。

- Oracle Calendar
- Oracle Email
- Oracle Files
- Oracle Web Conferencing
- Oracle9iAS Wireless
- Oracle Ultra Search

Web クライアント・インストーラは、次のいずれかの方法で起動します。

- Oracle Collaboration Suite Clients Release 2 (9.0.4.1.1) CD-ROM を挿入して Oracle Universal Installer を使用
- コマンドラインの使用

関連資料： 次の URL の Oracle9iAS Portal Web サイトにある Securing Web Providers のドキュメント

<http://portalstudio.oracle.com>

コマンドラインを使用した Web クライアント・インストーラの起動

Oracle Collaboration Suite をインストールする際、Suite 全体ではなく選択したコンポーネントのみをインストールすることも可能です。後で追加コンポーネントをインストールした場合、そのコンポーネントを Oracle Collaboration Suite ホーム・ページで使用するには、コンポーネントの URL を構成し、Web クライアントのコマンドライン・インストーラを実行する必要があります。

コンポーネントの URL の構成

コンポーネントの URL を構成するには、次のディレクトリ内の `webclient.properties` ファイルを変更します。

```
%ORACLE_HOME%\webclient\classes\oracle\collabsuite\webclient\resources
```

`webclient.properties` には、Oracle Collaboration Suite の各コンポーネントに対する、ヘルプ・ページの URL、アプリケーションの URL およびプロバイダの URL という 3 つの URL が含まれています。インストールしているコンポーネントの 3 つの URL すべてについて、ホスト名およびポート番号にトークンを置き換えます。

Web クライアントのコマンドライン・インストーラの実行

Web クライアントのコマンドライン・インストーラを実行するには、次のコマンドを入力します。

```
%ORACLE_HOME%\webclient\bin\webclient_installer.bat
```

このコマンドにより、新規コンポーネントのプロバイダおよびポートレットが Oracle Collaboration Suite ホーム・ページにインストールされます。

Oracle9iAS Portal スキーマの名前、パスワードおよび接続文字列の詳細がわかる場合は、次のように Configuration Assistant を起動することもできます。

```
%ORACLE_HOME%\webclient\bin\webclient_installer.bat -s schema -p password -c connect_string
```

変数の意味は次のとおりです。

- **schema:** Oracle9iAS Portal の Oracle データベース・アカウント。
- **password:** Oracle9iAS Portal アカウントのパスワード。
- **connect_string:** Oracle9iAS Portal リポジトリがインストールされているデータベース・インスタンスへの接続文字列。 *host_name:port:SID* のように指定します。

Middle-Tier での mod_osso を伴った HTTPS の手動設定

Oracle Collaboration Suite インストール・プログラムは、デフォルトの Oracle Collaboration Suite Middle-Tier で https を mod_osso とともに使用できるように、自動的にシステムを構成しません。しかし、これは手動で構成できます。

この項の手順はこの方法を説明します。これは、Middle-Tier で https を必要とする Oracle9iAS Single Sign-On 保護アプリケーションを使用する際にお勧めします。

開始前に、次の点を確認します。

- *SSO_HOST* は、Oracle9iAS Single Sign-On Server の完全修飾ホスト名です。
- *MIDTIER_HOST* は、Middle-Tier の完全修飾ホスト名または IP アドレスです。
- *MIDTIER_HTTPS_PORT* は、Middle-Tier の https ポートで、通常 4443 です。

この項の手順では、次の処理が行われます。

- 優先 https ポートに対して別のパートナ・アプリケーションが Middle-Tier に追加されます。このパートナ・アプリケーションは、Oracle9iAS Single Sign-On の URL それぞれに対して、その https ポートを使用します (Oracle9iAS Single Sign-On のポートは Middle-Tier が要求した URL のポートと一致する必要があるため、https にはこれらの手順が必要です)。
- *mod_osso_https.conf* および *MIDTIER_HOST.https-osso.conf* という、この設定をサポートするための 2 つの新しい Oracle HTTP Server 構成ファイルが Middle-Tier に作成されます。

この項の内容は次のとおりです。

- [設定の確認](#)
- [mod_osso を伴った https の設定](#)

設定の確認

1. Web ブラウザを使用して、Oracle9iAS Single Sign-On Server のホーム・ページへ移動します (http はポート 7777 上にあると仮定)。

`http://SSO_HOST:7777/pls/orasso`

2. 「ログイン」をクリックし、管理権限でログインします。
3. 「SSO Server 管理」をクリックします。
4. 「パートナ・アプリケーションの管理」をクリックし、次の点を確認します。
 - 最良の結果を得るには、Oracle9iAS Single Sign-On Server は、Middle-Tier で構成される https ポートでリスニング中である (および機能している) こと。これにより、Oracle9iAS Single Sign-On のログイン・ページが SSL 保護になったときに、https ポートを mod_osso に再登録する必要がなくなります。
 - Middle-Tier の http ポート (「編集」をクリックして設定を表示、Oracle Web Cache を使用している場合は通常 7777) について表示されるパートナ・アプリケーションが 1 つのみであること。
 - Middle-Tier の http ポートのパートナ・アプリケーションでは、次の Oracle9iAS Single Sign-On の URL すべてに対するポート番号が同じであること。

ホーム URL

成功 URL

ログアウト URL

- Middle-Tier の https ポート (Oracle Web Cache を使用している場合は通常 4443) について表示されるパートナ・アプリケーションがないこと。

これらの要件のいずれかが満たされていない場合、Oracle9iAS Single Sign-On および Oracle HTTP Server のドキュメントを参照して構成を修正してください。

5. 次のように入力して、Middle-Tier で Oracle HTTP Server をエラーなしで再起動できることを確認します。

```
%ORACLE_HOME%\bin\dcmtl.bat restart -ct ohs
```

mod_osso を伴った https の設定

注意： ORACLE_HOME 環境変数が正しいこと、およびすべてのファイルに対して権限があることを確認します。さらに、%ORACLE_HOME%\bin を PATH 環境変数に追加します。

1. %ORACLE_HOME%\Apache\Apache\bin\ssl-osso.bat に次の変更を行います。
 - AS_HOST を Middle-Tier のホスト名に設定
 - AS_PORT を Middle-Tier の Oracle Web Cache SSL ポート（通常は 4443）に設定
 - Oracle9iAS Single Sign-On Serverf がポート 1521 で稼働していない場合は、-port 1521 を正しい番号に変更
2. ssl-osso.bat を実行します。
3. mod_osso.conf ファイルおよび mod_osso_https.conf ファイルの LoadModule osso_module modules\ApacheModuleOSSO.dll の行をコメント・アウトします。どちらのファイルも %ORACLE_HOME%\Apache\Apache\conf ディレクトリにあります。
4. mod_osso_https.conf で、OssosConfigFile ディレクティブを次のように置き換えます（ない場合は、<IfModule mod_osso.c> セクションに追加します）。

```
OssosConfigFile conf\%Ossos%\MIDTIER_HOST.https-osso.conf
```
5. httpd.conf で、次のディレクティブをすべての LoadModule ディレクティブ（デフォルトの設定で fastcgi_module の直後）のすぐ後に追加します。

```
LoadModule osso_module modules/ApacheModuleOSSO.dll
```
6. httpd.conf でも、次のディレクティブを AddModule ディレクティブ（AddModule mod_fastcgi.c の直後）のすぐ後に追加します。

```
AddModule mod_osso.c
```
7. httpd.conf の VirtualHost _default_:4444 ディレクティブ（またはポートが異なる場合は https VirtualHost）内に、次の行を追加します。

```
include conf\mod_osso_https.conf
```
8. Middle-Tier 上で Oracle HTTP Server を再起動します（opmnctl を使用することもできます）。

```
dcmctl stop -ct ohs  
dcmctl start -ct ohs
```

その他のドキュメント

Oracle Collaboration Suite Documentation Library CD-ROM は、Oracle Collaboration Suite CD パックに含まれています。CD-ROM に含まれているドキュメントへのアクセスについては、『Oracle Collaboration Suite ドキュメント・ガイド』を参照してください。

単一コンピュータへの Oracle Collaboration Suite のインストール

Oracle Collaboration Suite がユーザー数の少ない企業に配置されていて、高可用性が問題にはならない状況では、Oracle Collaboration Suite を Windows 環境の 1 台のコンピュータにインストールするという方法が考えられます。ただし、Oracle Collaboration Suite を分散型アーキテクチャでインストールすることをお勧めします。

Oracle Collaboration Suite を単一コンピュータにインストールということは、Oracle Collaboration Suite の 3 つの層（Information Storage、Infrastructure および Middle-Tier）のすべてが 1 台のコンピュータにインストールされているということにすぎません。

インストールは、各層用の CD-ROM ではなく、1 枚の DVD-ROM を使用して実行します。

単一のコンピュータへの Oracle Collaboration Suite のインストールは、複数のコンピュータへのインストールと変わりません。この章では、単一と複数のコンピュータへのインストールのいくつかの違いを説明し、単一のコンピュータに Oracle Collaboration Suite をインストールするための手順を順を追って説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [単一コンピュータへのインストールの概要](#)
- [インストール要件](#)
- [Oracle Collaboration Suite のインストール](#)
- [インストール後のタスク](#)

単一コンピュータへのインストールの概要

単一のコンピュータへの Oracle Collaboration Suite のインストールは、基本的には複数のコンピュータへのインストールと同じですが、両者の手順には次のようないくつかの違いがあります。

- 3つの層を正常にインストールするには、1枚の DVD-ROM を使用します。
- まず Information Storage データベースをインストールしてから、Infrastructure と Middle-Tier をインストールします。
- インストール全体を簡易化するために、一部のオプションが単一コンピュータのインストール用にデフォルト設定されています。

インストール要件

Oracle Collaboration Suite の3層すべてを単一のシステムにインストールして構成するには、複数システムへのインストールの場合とは異なるディスクおよびメモリー要件が必要となります。表 7-1 は、Oracle Collaboration Suite を1台のコンピュータにインストールするための様々なハードウェア要件を示しています。

表 7-1 Oracle Collaboration Suite を単一コンピュータにインストールするためのハードウェア要件

要件	値
CPU	最低： 300MHz 推奨： 1GHz 以上
メモリー	最低： 1GB
スワップ	最低： 1GB
ディスク領域	最低： 9GB
一時領域	最低： 400MB

インストール・データは相当な量になるため、Oracle Collaboration Suite の単一コンピュータへのインストールは、DVD-ROM でのみリリースされています。したがって、単一コンピュータへのインストールを実行するには、標準の DVD-ROM ドライブが必要です。

関連項目： その他のインストール要件をすべて確実に満たすには、[第 2 章「インストールの準備」](#)を参照してください。

Oracle Collaboration Suite のインストール

この項では、Oracle Collaboration Suite のインストールのプロセスを説明します。この項では、インストール・プロセスを Information Storage データベース、Infrastructure および Middle-Tier の 3 つのインストールに分けています。

Oracle Collaboration Suite を単一のコンピュータにインストールするには、次のようにします。

1. Oracle Collaboration Suite Release 2 (9.0.4.1.1) for Microsoft Windows (32-bit) Single-Box Installation DVD-ROM を DVD-ROM ドライブを挿入します。

自動再生されるウィンドウが自動的に表示されます。自動再生されるウィンドウが表示されない場合は、次のようにします。

- a. 「スタート」 → 「ファイル名を指定して実行」を選択します。
- b. 次のファイル名を入力します。

`DRIVE_LETTER:\autorun\autorun.exe`

2. 「インストール」をクリックして、Oracle Universal Installer の「ようこそ」画面を表示します。

3. 「次へ」をクリックし、「ファイルの場所の指定」画面を表示します。

- 「ソース」セクションで、デフォルト・パスを使用します。
- 「インストール先」のセクションで、「名前」フィールドにベース・ディレクトリ名を指定します。名前は 12 文字までで、Oracle Collaboration Suite をインストールするディレクトリには使用可能な領域が 9GB 以上必要です。ファイルは、「ファイルの場所の指定」画面で、ベース・ディレクトリの 3 つのサブディレクトリに次のようにコピーします。

- `base_directory\stg`: Information Storage の Oracle ホーム
- `base_directory\infra`: Infrastructure の Oracle ホーム
- `base_directory\mtier`: Middle-Tier の Oracle ホーム

- 「インストール先」セクションの「パス」フィールドで、ベース・ディレクトリへのフル・パスを指定します。これは %ORACLE_HOME% になります。

「名前」フィールドに入力した値に基づいて、3 層のそれぞれに Oracle ホーム名が次のように割り当てられます。

- `%ORACLE_HOME%\stg`: Information Storage の Oracle ホーム名
- `%ORACLE_HOME%\inf`: Infrastructure の Oracle ホーム名
- `%ORACLE_HOME%\mt`: Middle-Tier の Oracle ホーム名

4. 「次へ」をクリックし、「言語の選択」画面を表示します。

Oracle Collaboration Suite のインストールでサポートする言語を、Oracle Collaboration Suite でサポートされている言語のリストから選択します。「次へ」をクリックします。

注意：

- ここで選択した言語により、ユーザーは自分の母国語で Oracle Collaboration Suite にアクセスできるようになります（Oracle Collaboration Suite でサポートされている言語の場合）。
 - サポート言語は、インストール完了後は追加できません。他の言語を追加するには、Oracle Collaboration Suite を完全に再インストールする必要があります。
-

5. 「次へ」をクリックして、Oracle Collaboration Suite の「Single-box インストレーション説明」画面を表示します。

この画面は、単一コンピュータへの Oracle Collaboration Suite のインストール方法に関して、情報提供の目的でのみ表示されます。

Information Storage データベースのインストール

6. 「次へ」をクリックして、インストールを開始します。

Oracle Universal Installer では、「データベースの識別」画面が表示される前に進捗画面が表示されます。

7. 「グローバル・データベース名」および「SID」を入力します。必要に応じて、デフォルトの SID を変更します。
8. 「次へ」をクリックし、「データベース・ファイルの場所」画面を表示します。
9. デフォルトを使用して「次へ」をクリックし、「サマリー」画面を表示します。
10. 「インストール」をクリックして、Information Storage データベースのインストールを開始します。

インストールが開始され、進捗状況が表示されます。ファイルがコピーされた後、Information Storage の Oracle ホームが構成されます。

別の進捗画面が表示され、各種 Configuration Assistant によって Information Storage の Oracle ホームが構成され、Information Storage データベース・インスタンス作成の進捗状況を示します。

「Database Configuration Assistant」画面が表示されます。

11. Information Storage データベースの SYS ユーザーと SYSTEM ユーザーの新規パスワードを入力します。

12. 「パスワード管理」をクリックします。

コンピュータが最低限のインストール要件を満たしていることを確認した後、画面上のすべてのチェックボックスを選択します。

13. CTXSYS アカウントを探し、「アカウントのロック」列のチェックボックスをクリックして、このアカウントのロックを解除します。
14. 新規の CTXSYS パスワードを入力し、確定します。
15. 「OK」をクリックして、「インストールの要件確認」画面を表示します。
16. 「次へ」をクリックして、「インスタンス名および ias_admin パスワードの作成」画面を表示します。

Information Storage データベースのインストールが完了しました。

Oracle9iAS Infrastructure のインストール

17. インスタンス名を選択し、「インスタンス名および ias_admin パスワードの作成」画面で ias_admin パスワードを選択し、確定します。

注意：

- Oracle Collaboration Suite をインストールする同じシステムに以前に Oracle9iAS がインストールされている場合、システム上のすべての Oracle9iAS インスタンスをアクティブに管理している Oracle Enterprise Manager Web Site の ias_admin パスワードの入力を求められます。これは、システム上ではアクティブな管理ノードが 1 つしかないためです。
 - 「インスタンス名」はデータベース・インスタンス名ではなく、Oracle9iAS Infrastructure インスタンスの名前です。
 - ここで選択した「ias_admin パスワード」は、Infrastructure の Oracle Internet Directory 管理者パスワードとしても使用します。
-
-

18. 「次へ」をクリックし、「Guest アカウントのパスワード」画面を表示します。

ゲスト・アカウントのパスワードを入力および確認します。

19. 「次へ」をクリックし、Oracle9iAS Infrastructure の「サマリー」画面を表示します。
20. 「インストール」をクリックして、Infrastructure のインストールを開始します。

注意： 複数のコンピュータでの Infrastructure インストールと異なり、Oracle Internet Directory や Oracle9iAS Single Sign-On などの ID 管理サービスを、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier で使用されるメタデータ・サービスとは別に構成することはできません。Oracle Internet Directory を Oracle9iAS Single Sign-On とは別に構成するなど、企業内の複数のシステム間で ID 管理サービスを分散させることもできません。かわりに、単一コンピュータへのインストールを実行する場合、ID 管理サービスとメタデータ・サービスの両方がシステム上で自動的に構成され、Infrastructure のインストール完了後に構成される Oracle Collaboration Suite Middle-Tier で使用できます。

インストールが開始され、進捗状況が表示されます。ファイルがコピーされた後、Infrastructure の Oracle ホームが構成されます。

別の進捗画面が表示され、各種 Configuration Assistants によって Infrastructure の Oracle ホーム構成の進捗状況を示します。ID 管理サービスおよびメタデータ・サービスは自動的に構成され、入力は不要です。

「コンポーネントの構成」画面が表示されます。

Middle-Tier のインストール

21. 構成するコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックして「既存の Oracle9iAS Single Sign-On」画面を表示します。

既存の Oracle9iAS Single Sign-On のインスタンスのホスト名およびポート番号を入力します。

注意： これは単一コンピュータへのインストールであり、Infrastructure のインストール時に Oracle9iAS Single Sign-On が自動的に構成されたため、このインストールが実行されているコンピュータの完全修飾ホスト名を入力します。ポート番号は次のファイルで確認できます。

```
%ORACLE_HOME%\infra\install\portlist.ini
```

portlist.ini ファイルの [Ports] セクションを探します。Oracle HTTP Server ポートの値は、「既存の Oracle9iAS Single Sign-On」画面に入力する値です。

22. 「次へ」をクリックして、「Oracle Internet Directory」画面を表示します。

デフォルトのユーザー名を確定し、「[Oracle9iAS Infrastructure のインストール](#)」の項の手順 17 で使用した ias_admin パスワードを指定します。

23. 「次へ」をクリックして、「インスタンス名の作成」画面を表示します。

Middle-Tier インスタンスに対して一意の名前を指定し、Infrastructure のインストール時に使用した `ias_admin` ユーザーのパスワードを入力します。
24. 「次へ」をクリックし、「Oracle Real-Time Collaboration リポジトリの位置」画面を表示します。すべてのフィールドに必要な情報を入力します。
 - 「ホスト」フィールドにコンピュータのホスト名を入力
 - 「ポート」フィールドにリスナーのポート（通常は 1521）を入力
 - 「[Information Storage データベースのインストール](#)」の項の手順 7 で入力した SID を入力
 - デフォルトの DBA ユーザー名を確定
 - 「[Information Storage データベースのインストール](#)」の項の手順 11 で選択した DBA パスワードを入力
25. 「次へ」をクリックし、「Oracle Real-Time Collaboration リポジトリの詳細」画面を表示します。

RTC スキーマおよび RTC_APP スキーマのパスワードを選択し、確定します。
26. 情報を入力した後、「次へ」をクリックし、「Oracle Calendar のデフォルトのタイムゾーン」画面を表示します。
27. 新規 Oracle Calendar ユーザーのデフォルトのタイムゾーンを選択します。「次へ」をクリックして、「Oracle Calendar Services」画面を表示します。
28. 「Oracle Calendar Services」画面が表示されます。指定したユーザーのパスワードを入力します。「次へ」をクリックします。
29. Oracle Email のインストールを選択しなかった場合、「Oracle Calendar メール通知」画面が開きます。SMTP サーバーの完全修飾ドメイン名を入力します。「次へ」をクリックし、「Oracle Calendar のノード ID」画面を表示します。
30. Oracle Calendar のノードに対して、1 ～ 49999 の間の一意の数値 ID を指定します。「次へ」をクリックし、「Oracle Calendar のマスター・ノード」画面を表示します。
31. 「Oracle Calendar のマスター・ノード」画面で「はい」を選択して、現行のインストールをマスター・ノードに設定します。Web Services および Sync Server を動作させるには、ネットワーク上に 1 つのマスター・ノードが必要です。
32. 「次へ」をクリックし、「サマリー」画面を表示します。
33. 「インストール」をクリックして、Middle-Tier のインストールを開始します。

インストールが開始され、進捗状況が表示されます。ファイルがコピーされた後、Middle-Tier の Oracle ホームが構成されます。

別の進捗画面が表示され、各種 Configuration Assistants によって Middle-Tier の Oracle ホーム構成の進捗状況を示します。

Oracle Files の構成

Oracle Files の構成を選択した場合、Middle-Tier の構成中に Oracle Files Configuration Assistant が起動します。

関連項目： Oracle Files Configuration Assistant に関する詳細な手順については、第 14 章「[Oracle Files の構成](#)」を参照してください。

注意：

- Oracle Files Configuration Assistant により Information Storage データベースまたは Oracle Internet Directory の場所の情報の入力を求められた場合、これらのサービスがローカルに存在することを示します。
- Oracle Files Configuration Assistant の「[データベースの選択](#)」画面の「[データベース・ホスト名](#)」フィールドに、「[Information Storage データベースのインストール](#)」の項の手順 7 で「データベースの識別」画面に入力した Information Storage データベースの名前を入力します。
- Oracle Files Configuration Assistant の「[Web サイト情報](#)」画面に、「[Middle-Tier のインストール](#)」の項の手順 21 でインストールし、構成した Oracle HTTP Server のホスト名およびポート番号を入力します。
- Oracle Files Configuration Assistant の [Oracle Internet Directory](#) の「[ログイン](#)」画面で、ローカル・ホスト名を「[サーバー](#)」フィールドに、「[Oracle9iAS Infrastructure のインストール](#)」の項の手順 17 で入力したパスワードを「[スーパー・ユーザー・パスワード](#)」フィールドに入力します。Oracle Internet Directory (non-SSL) プロパティに割り当てられたポート番号を次のファイルの [Ports] セクションに入力します。

```
base_directory%mtier%install%protlist.ini
```

Oracle Files Configuration Assistant が完了したら、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストールが進行します。

Oracle Calendar の構成

Oracle Calendar の構成を選択した場合、Middle-Tier の構成中に Oracle Calendar Configuration Assistant が起動します。

関連項目： Oracle Calendar Configuration Assistant に関する詳細な手順については、[第 11 章「Oracle Calendar の構成」](#)を参照してください。

注意： Oracle Calendar Configuration Assistant により Oracle Internet Directory のパスワードを求められた場合、[「Oracle9iAS Infrastructure のインストール」](#)の項の手順 17 で使用したパスワードを入力します。

Oracle Calendar Configuration Assistant が完了したら、「インストールの終了」画面が表示されるまで、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストールは Middle-Tier の残りの構成を続行します。

34. 「終了」ボタンは使用できません。インストールを終了するには、ウィンドウを閉じ、Oracle Universal Installer から要求されたら「はい」をクリックします。

インストール後のタスク

同じホストにインストールされている Oracle Files および Oracle Email に関する問題を解決するには、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノートを参照してください。

その他のインストール後のタスクについては、このマニュアルの次の項を参照してください。

- 6-13 ページの「[Oracle Web Conferencing Document Conversion Server および Voice Conversion Server のインストール](#)」
- 6-14 ページの「[Oracle Collaboration Suite の統合 Web クライアントのインストール](#)」
- 6-16 ページの「[Middle-Tier での mod_osso を伴った HTTPS の手動設定](#)」

Oracle Collaboration Suite のインストールを完了するには、このマニュアルの各種コンポーネントの構成についての章を参照してください。

Oracle Voicemail & Fax のインストール および構成

この章では、Oracle Voicemail & Fax システムをインストールする方法について説明します。
この章の内容は次のとおりです。

- [インストール前のチェックリスト](#)
- [インストール要件](#)
- [Oracle Voicemail & Fax Telephony Server のインストール](#)
- [中間層での Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant の実行](#)
- [Oracle Voicemail & Fax Telephony Server の追加インストール](#)
- [Oracle Collaboration Suite への Information Storage データベースの追加インストール](#)

インストール前のチェックリスト

この項では、Oracle Voicemail & Fax をインストールする前に実行する必要があるインストール前のタスクについて説明します。

Oracle Voicemail & Fax をインストールする前に、次のタスクを実行します。

1. CT Media または Intel NetMerge CC Server という名前の Windows サービスを変更し、インストールを実行するユーザーのコンテキストで実行されるようにします。インストールを実行するユーザーは CTMUsers グループに属している必要があります。
2. インストール前に CT Media または NetMerge サーバーを再起動してレベル 5 に上げます。

インストール要件

Oracle Voicemail & Fax のインストールは 2 つのタスクから構成されます。

- Windows 2000 システムへの Oracle Voicemail & Fax Telephony Server のインストール
- 中間層での Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant の実行

Oracle Voicemail & Fax をインストールする前に、次のものがが必要です。

- **Oracle Collaboration Suite (Oracle Email を含む)** : Oracle Voicemail & Fax がインストールされているシステム以外のシステムにインストールされ、構成および実行されていること
- **Windows 2000 Resource Kit**
- **CT Media Server または Intel NetMerge Converged Communication Server**
- **S.410 SDK V1.0 for CT Media 2.1**

Oracle Voicemail & Fax Telephony Server のインストール

Oracle Voicemail & Fax Telephony Server のインストールは、2つの部分からなるプロセスです。プロセスの前半では、Oracle9iAS コアをインストールし、後半では Oracle Voicemail & Fax コードをインストールします。

注意：

- Telephony Server のインストール・プロセスの前後半とも、CTMUser ユーザー・グループおよび管理者グループに属するユーザー名を使用して実行する必要があります。
- CT Media または NetMerge サーバーの実行ユーザー名は、インストールを実行しているユーザー名と同じである必要があります。

実行ユーザー名を変更するには、「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。サービスを右クリックします。「プロパティ」を選択します。「ログオン」タブをクリックし、「ログオン」オプションを変更します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle9iAS コアのインストール](#)
- [Oracle Voicemail & Fax コードのインストール](#)

Oracle9iAS コアのインストール

Oracle9iAS コアをインストールするには、次のようにします。

1. Oracle Voicemail & Fax Release 2 (9.0.4.1.0) for Microsoft Windows 2000 (32-bit) CD-ROM を挿入します。
2. ¥install¥win32 ディレクトリにある install1.bat を実行して、Oracle Universal Installer の「ようこそ」画面を表示します。
3. 「次へ」をクリックして「ファイルの場所」画面を表示します。「インストール先」セクションで、「名前」フィールドに Oracle ホームの名前を入力します（またはドロップダウン・リストから既存の Oracle ホームを選択します）。
4. 「パス」フィールドに Oracle ホームのパスを入力します。
「参照」をクリックして Oracle ホーム・パスを特定することもできます。
5. 「次へ」をクリックして、「Oracle Internet Directory」画面を表示します。
6. ユーザー名およびパスワードを入力します。デフォルト・ユーザー名は、cn=orcladmin です。

7. 「次へ」をクリックして、「インスタンス名の作成」画面を表示します。
8. Oracle9iAS インスタンスの名前を「インスタンス名」フィールドに入力します。
9. 現在のホストの `ias_admin` パスワードを「ias_admin パスワード」フィールドに入力します。
10. 「次へ」をクリックし、「サマリー」画面を表示します。
11. 「インストール」をクリックして、「インストールの終了」画面を表示します。
12. 「終了」をクリックして「終了」画面を表示します。
13. 「はい、すぐにシステムを再起動します」を選択し、「OK」をクリックしてシステムを再起動します。

システムの再起動後に、インストールの後半が自動的に開始します。

Oracle Voicemail & Fax コードのインストール

インストールの後半では、次の処理が行われます。

- すべての Oracle Voicemail & Fax ファイルが Telephony Server にコピーされます。
 - CTMedia コンテナにプロンプトが追加されます。
 - Oracle Voicemail & Fax コンテナを構成するための `sc_vsto.cfg` ファイルが作成されます。
 - `rmid`、`rmiregistry` および `UMProcessMgrService` プロセスがインストールされます。
 - Oracle Voicemail & Fax Media Services Profile が CT Media Server にロードされます。
`SCR_AppProfile`、`SCR_ASIMap` および `SCR_RoutingRules` に変更が加えられます。
1. システムの再起動が完了すると、「メール・ストアの選択」画面が表示されます。
 2. 「メール・ストアの選択」ドロップダウン・リストから Information Store を選択します。
 3. 「メール・ストアの選択」ドロップダウン・リストから「<none>」以外の Information Store を選択した場合は、UM パスワードの指定を求められます。デフォルトは `welcome` です。

それ以外の場合は、「DB ユーザー 'um' のパスワード」フィールドが非アクティブになります。

4. 「次へ」をクリックし、「サマリー」画面を表示します。
5. 「インストール」をクリックして、「インストールの終了」画面を表示します。
6. 「終了」をクリックします。

インストールを続行するには、次の項に進みます。

中間層での Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant の実行

注意： Oracle Collaboration Suite の既存のインストールに Telephony Server を追加でインストールする場合のみ、8-6 ページの「[Oracle Voicemail & Fax Telephony Server の追加インストール](#)」に進みます。

Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant により、次のタスクが実行されます。

- Oracle Voicemail & Fax の中間層プロセス・エントリを Oracle Internet Directory にロードします。
 - EMD と統合するために、すべての Oracle Voicemail & Fax のエントリを targets.xml および consoleConfig.xml にロードします。
 - UM スキーマを Information Storage データベースにロードします。
1. %ORACLE_HOME%\um\uminfra ディレクトリにある uminfra_install.bat を中間層システムで実行して、Configuration Assistant の「メール・ストアの選択」画面を表示します。
 2. 「メール・ストアの選択」ドロップダウン・リストから Information Store を選択します。
「メール・ストアの選択」ドロップダウン・リストから「<none>」以外の Information Store を選択した場合は、SYSTEM、ES_MAIL および UM のパスワードの指定を求められます。デフォルト値は次のとおりです。
 - **SYSTEM:** manager
 - **ES_MAIL:** es
 - **UM:** welcome

注意： Information Storage データベースの作成時に新しい SYSTEM パスワードを作成し、Oracle Email のインストール時に新しい ES_MAIL および UM パスワードを作成した場合は、これらの新しいパスワードを使用する必要があります。

3. 「次へ」をクリックして、Oracle Voicemail & Fax がインストールされていて、中間層と関連付けるサーバーを選択します。
4. 「次へ」をクリックして、「インストールの終了」画面を表示します。
5. 「終了」をクリックします。
6. Configuration Assistant を完了したら、Oracle Voicemail & Fax Windows 2000 Telephony Server を再起動します。

関連資料： 構成の詳細は、『Oracle Voicemail & Fax 管理者ガイド』を参照してください。

これで Oracle Voicemail & Fax のインストールは終了です。この章の最後の 2 項は、追加のボイスメール・サーバーまたは Information Store をインストールする場合のみ該当します。

Oracle Voicemail & Fax Telephony Server の追加インストール

Telephony Server を追加でインストールするには、次のようにします。

1. 8-3 ページの「[Oracle Voicemail & Fax Telephony Server のインストール](#)」で説明する手順に従います。
2. 中間層で %ORACLE_HOME%\um\uminfra\uminfra_install.bat を実行します。
3. Information Store に対して「None」を選択します。
4. この Oracle Enterprise Manager デーモン・サーバーによって管理されるボイスメール・サーバーを選択します。

Oracle Collaboration Suite への Information Storage データベースの追加インストール

Information Storage データベースを Oracle Collaboration Suite システムに追加でインストールする際は常に、Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant に戻り、sc_vsto.cfg ファイルを更新する必要があります。

Oracle Voicemail & Fax Configuration Assistant に戻ると、次の処理が行われます。

- UM スキーマを Information Storage データベース上に作成します。
- Advanced Queue Message Waiting Indicator プロセスを作成します。

Oracle Voicemail & Fax 用の新規 Information Storage データベースを設定するには、次のようにします。

1. 中間層で %ORACLE_HOME%\um\uminfra\uminfra_install.bat を実行します。
2. 新しい Information Storage データベースを選択し、必要なパスワードを指定します。
3. ボイスメール・サーバーに対して「None」を選択します。
4. 各 Telephony Server で、sc_vsto.cfg ファイルを新しい Information Storage 情報で更新します。

例 8-1 に更新前の sc_vsto.cfg ファイルを示します。

例 8-1 sc_vsto.cfg ファイル

```

{
  Container_ORCL_VPIM: {
    Container_DLGC_DLLName: "orclcont.dll"
    Container_DLGC_Initialize: "StorageInitialize"
    Container_DLGC_Shutdown: "StorageShutdown"
    Container_DLGC_Parameters: {
      Container_ORCL_ESNode: "v2store.v2store"
      Container_ORCL_DBSet: (
        {
          Container_ORCL_DBName: "v2store.v2store"
          Container_ORCL_PoolMax: 10
          Container_ORCL_PoolMin: 1
          Container_ORCL_DBUserid: "um"
          Container_ORCL_DBPassword:
"0495022e8cbe976b4e9156aeff710fdb6dfeac30dff5ddd81"
          Container_ORCL_DBConnect:
"(DESCRIPTION= (ADDRESS_LIST= (ADDRESS= (PROTOCOL=TCP) (HOST=thintest.us.oracle.com)
(PORT=1521))) (CONNECT_DATA= (SERVICE_NAME=v2store.v2store))) )"
        }
      )
    }
  }

  Container_DLGC_FileStrategy: {
    Container_DLGC_DLLName: "std_sto.dll"
    Container_DLGC_Initialize: "StorageInitialize"
    Container_DLGC_Shutdown: "StorageShutdown"
    Container_DLGC_Parameters: {
      }
    }
  }
}

```

例 8-2 に更新後の sc_vsto.cfg ファイルを示します。

例 8-2 更新後の sc_vsto.cfg ファイル

```

{
  Container_ORCL_VPIM: {
    Container_DLGC_DLLName: "orclcont.dll"
    Container_DLGC_Initialize: "StorageInitialize"
    Container_DLGC_Shutdown: "StorageShutdown"
    Container_DLGC_Parameters: {
      Container_ORCL_ESNode: "v2store.v2store"
      Container_ORCL_DBSet: (

```

```

    {
        Container_ORCL_DBName: "v2store.v2store"
        Container_ORCL_PoolMax: 10
        Container_ORCL_PoolMin: 1
        Container_ORCL_DBUserid: "um"
        Container_ORCL_DBPassword:
"0495022e8cbe976b4e9156aeff710fdb6dfeac30dff5ddd81"
        Container_ORCL_DBConnect:
" (DESCRIPTION= (ADDRESS_LIST= (ADDRESS= (PROTOCOL=TCP) (HOST=database_host_name)
(PORT=1521))) (CONNECT_DATA= (SERVICE_NAME=v2store.v2store))) "
    }
    {
        Container_ORCL_DBName: "2nd_information_storage_database_name"
        Container_ORCL_PoolMax: 10
        Container_ORCL_PoolMin: 1
        Container_ORCL_DBUserid: "um"
        Container_ORCL_DBPassword:
">xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx"
        Container_ORCL_DBConnect:
" (DESCRIPTION= (ADDRESS_LIST= (ADDRESS= (PROTOCOL=TCP) (HOST=2nd_database_host_name)
(PORT=1521))) (CONNECT_DATA= (SERVICE_NAME=2nd_information_storage_database_
name))) "
    }
)
}
}

Container_DLGC_FileStrategy: {
    Container_DLGC_DLLName: "std_sto.dll"
    Container_DLGC_Initialize: "StorageInitialize"
    Container_DLGC_Shutdown: "StorageShutdown"
    Container_DLGC_Parameters: {
    }
}
}

```

前述の例では、パラメータは次のように定義されています。

- **ORCL_DBName:** グローバル・データベース名。Oracle Internet Directory から取得できます。
- **PoolMax、PoolMin:** 値はシステムによって異なります。デフォルト値は、それぞれ 10 および 1 です。
- **DBUserid:** 常に、um です。

- **DBPassword:** um ユーザー・パスワードの暗号化された文字列。このパスワードは、次のプログラムを実行して取得します。

```
%ORACLE_HOME%\um\scripts\encrypt.exe um_password
```

暗号化された文字列が出力され、ユーザーはこれをコピーし、ファイルに貼り付けることができます。

- **DBConnect:** 新規データベースの接続文字列。LDAP から取得できます。

サイレント・インストールおよび非対話型インストール

この章では、Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールおよび非対話型インストールの手順について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [非対話型インストールの概要](#)
- [インストール要件](#)
- [レスポンス・ファイルの選択](#)
- [レスポンス・ファイルの編集](#)
- [レスポンス・ファイルの指定](#)
- [エラー処理](#)
- [削除](#)
- [非対話型モードでの Configuration Assistant の使用](#)

非対話型インストールの概要

Oracle Collaboration Suite には、2 つの非対話型のインストール方法があります。

- [サイレント・インストール](#)
- [非対話型インストール](#)

サイレント・インストール

Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを提供し、`-silent` フラグを指定することによって実行されます。Oracle Universal Installer は、このテキスト・ファイル（レスポンス・ファイルと呼ばれる）に含まれる変数および値を使用して、すべてのユーザー・プロンプトに応答します。ユーザーは、すべてのプロンプトに対する応答をレスポンス・ファイルに含める必要があります。サイレント・インストールでは、グラフィックな出力は表示されません。

複数のコンピュータ上で同様のインストールを行う場合、Oracle Collaboration Suite のサイレント・インストールを使用します。さらに、コマンドラインを使用して遠隔地から Oracle Collaboration Suite のインストールを実行する場合も、サイレント・インストールを使用します。サイレント・インストールを使用すると、画面が表示されず、ユーザーによる入力是不要であるため、Oracle Collaboration Suite のインストールを監視する必要がなくなります。

非対話型インストール

Oracle Collaboration Suite の非対話型インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを提供することによって実行されます。`-silent` フラグは指定しません。Oracle Universal Installer は、このテキスト・ファイル（レスポンス・ファイルと呼ばれる）に含まれる変数および値を使用して、一部またはすべてのユーザー・プロンプトに応答します。Oracle Universal Installer から、画面が表示されます。ユーザーがすべてのプロンプトに対する応答を提供していない場合、インストール中に情報の入力が必要になる場合があります。

関連項目： レスポンス・ファイルの実行の詳細は、9-4 ページの「[レスポンス・ファイルの指定](#)」を参照してください。

インストール要件

インストール要件の完全なリストは、[第2章「インストールの準備」](#)を参照してください。

レスポンス・ファイルの選択

Oracle Collaboration Suite CD パックには、[表 9-1](#) に示す 3 つのインストール・タイプ用の Oracle Universal Installer レスポンス・ファイルが含まれています。

表 9-1 レスポンス・ファイル

インストール・タイプ	ファイル名
Oracle9iAS Infrastructure	infrastructure.rsp
Oracle Collaboration Suite Information Storage	storage.rsp
このインストールには、Oracle Net Configuration Assistant (netca.rsp) および Database Configuration Assistant (dbca.rsp) のレスポンス・ファイルも含まれています。	
Oracle Collaboration Suite Middle-Tier	midtier.rsp
このインストールには、Oracle Files Configuration Assistant のレスポンス・ファイル (silentconfig.properties) も含まれています。	

レスポンス・ファイルは、3 つのインストール・タイプのそれぞれの CD-ROM セットに含まれる 1 枚目の CD-ROM のルートにある `¥response` ディレクトリにあります。サイレント・インストールまたは非対話型インストールの要件を満たすように、レスポンス・ファイルを編集する必要があります。レスポンス・ファイルを使用するには、最初にこのファイルを CD-ROM からシステムにコピーします。

たとえば、次のようにします。

1. `¥response` ディレクトリに移動します (たとえば、Oracle9iAS Infrastructure のインストール用 CD-ROM セットの 1 枚目の CD-ROM)。
2. `infrastructure.rsp` ファイルをシステムのハード・ドライブにコピーします。

レスポンス・ファイルの編集

テキスト・エディタを使用して、システム固有の情報が含まれるようにレスポンス・ファイルを編集します。レスポンス・ファイルのテキストによって、ユーザーが指定する必要がある情報を識別します。

レスポンス・ファイルには、変数の値を指定する必要があります。レスポンス・ファイルにリストされている各変数には、コメントが関連付けられています。コメントによって、変数タイプを識別します。たとえば、次のようにします。

```
string = "Sample Value"
Boolean = True or False
Number = 1000
StringList = {"StringValue 1", "String Value 2"}
```

<Value Required> と表示された値は、サイレント・インストール用に指定する必要があります。

レスポンス・ファイル内の変数値のコメントは、Oracle Collaboration Suite のインストールを開始する前に削除します。

レスポンス・ファイルの指定

レスポンス・ファイルを指定する前に、適切にファイルを構成していることを確認します。詳細は、前述の項を参照してください。

関連項目：

- 9-4 ページの「[レスポンス・ファイルの編集](#)」
- 14-30 ページの「[Oracle Files の非対話型構成](#)」
- 5-4 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」
- 5-6 ページの「[インストール・セッション・ログ・ファイル](#)」

Oracle Universal Installer がインストール時にレスポンス・ファイルを使用するようにするには、Oracle Universal Installer の起動時にパラメータとしてレスポンス・ファイルの場所を指定します。

```
C:\> setup.exe -responseFile absolute_path_and_filename
```

サイレント・インストール・セッションを完全に実行するには、-silent パラメータを使用します。

```
C:\> setup.exe -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

非対話型インストールの成功または失敗のログは、installActions.log に書き込まれます。サイレント・インストールの成功または失敗のログは、silentInstall.log に書き

込まれます。ログ・ファイルは、インストール時に `SYSTEM_DRIVE:\Program Files\Oracle\Inventory\logs` ディレクトリに作成されます。

重要： インストール中に、いくつかの Oracle Collaboration Suite コンポーネントをインストールするために、これらのレスポンス・ファイルは Oracle ホームの下サブディレクトリにコピーされる場合があります。インストールが正常に終了した後、これらのコピーは削除されます。ただし、インストールが失敗した場合、これらのコピーは削除されません。レスポンス・ファイルにパスワードまたはその他の機密情報が含まれる場合は、ファイル・システム上の残りのレスポンス・ファイルのコピーをすべて削除することをお勧めします。

エラー処理

サイレント・インストールおよび非対話型インストールの成功または失敗のログは、`silentInstall.log` ファイルに書き込まれます。このファイルは、`oraInventory` ディレクトリに作成されます。

変数値のコンテキスト、形式またはタイプが不適切な場合、その値は指定されていないものとして処理されます。セクションの範囲外の変数は無視されます。

不適切または不完全なレスポンス・ファイルを使用してサイレント・インストールまたは非対話型インストールを試行すると、Oracle Universal Installer で、ディスク領域の不足、インストールの失敗などのエラーが発生します。

レスポンス・ファイルを指定せずに非対話型インストールを試行すると、インストールが失敗します。

削除

サイレント・インストールまたは非対話型インストールが失敗した場合、Oracle Collaboration Suite のインストールの試行によって作成されたすべてのファイルを完全に削除する必要があります。

関連項目： [第 10 章「Oracle Collaboration Suite コンポーネントの削除」](#)

非対話型モードでの Configuration Assistant の使用

非対話型モードで Configuration Assistant を使用するには、次のいずれかの操作を実行します。

- Oracle Universal Installer レスポンス・ファイルを構成し、非対話型 Configuration Assistant を起動します。
- 次のコマンドの形式を使用して、Configuration Assistant をスタンドアロン・モードで実行します。

```
prompt> assistant_name [-silent] -responseFile filename
```

ここで、*assistant_name* は実行する Configuration Assistant を示し、*filename* はこの Configuration Assistant 用のレスポンス・ファイルを示します。

Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストールを非対話型モードで実行する場合、インストールの最後に Oracle Net Configuration Assistant によってシステムは構成されません。インストール後、Oracle ホーム・ディレクトリから `netca` コマンドを実行して Oracle Net Configuration Assistant で Oracle Net の構成を実行するか、または `netca.rsp` レスポンス・ファイルを使用します。

注意： レスポンス・ファイルを構成せずに非対話型セッションを試行すると、Oracle Universal Installer または Configuration Assistant が失敗します。失敗した非対話型インストールのトラブルシューティングの詳細は、9-6 ページの「[レスポンス・ファイルのエラー処理](#)」を参照してください。

関連項目：

- 14-30 ページの「[Oracle Files の非対話型構成](#)」

レスポンス・ファイルのエラー処理

Oracle Universal Installer または Configuration Assistant は、実行時にレスポンス・ファイルを検証します。検証に失敗した場合、非対話型インストールまたは構成のプロセスが終了します。パラメータ値のコンテキスト、形式またはタイプが不適切な場合、Oracle Universal Installer は、ファイルに値が指定されていないものとして処理します。また、セッションの範囲外の変数は無視されます。

失敗に関する情報は、インストール・セッションのログ・ファイルに記録されます。

関連項目： システム上にインストールするコンポーネントのインベントリを保存するために Oracle Universal Installer によって作成されるログ・ファイルについては、5-6 ページの「[インストール・セッション・ログ・ファイル](#)」を参照してください。

Oracle Collaboration Suite コンポーネントの削除

この章では、Oracle Collaboration Suite コンポーネントを削除する方法について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [削除の概要](#)
- [Oracle コンポーネントの削除の準備](#)
- [Oracle コンポーネントの削除](#)

注意：

- 削除プロセスを開始する前に、すべての Oracle サービスおよびプロセスを停止してください。
 - Oracle Universal Installer では、コンポーネントまたは Oracle Collaboration Suite インスタンスを選択してカスタム削除することはできません。削除を開始する前に、削除対象を確認してください。
-

削除の概要

Oracle Universal Installer では、Oracle Collaboration Suite がインストールされている場合、同じリリースの Oracle Collaboration Suite を再インストールすることはできません。同じリリースの Oracle Collaboration Suite を再インストールするには、インストールされている製品を削除した後で、インストールします。

Oracle Collaboration Suite をホストから正常に削除するには、Oracle Collaboration Suite のセカンダリ（後続の）・インストールを削除した後で、プライマリ（最初の）・インストールを削除することをお勧めします。

Oracle Collaboration Suite を削除する前に、Oracle Email を削除する必要があります。

Oracle コンポーネントの削除の準備

1. Middle-Tier を削除する前に、各 Middle-Tier の Oracle ホームから次のスクリプトを実行します。

```
%ORACLE_HOME%\oes\bin\removemidtierfromoid.bat
```

このスクリプトによって、電子メール・プロセスのターゲット、プロセス・インスタンスおよびこれらのリファレンスが Oracle Internet Directory から削除されます。

2. Information Storage を削除する必要がある場合、Middle-Tier で SQL*Plus を実行します。SYSTEM として Information Storage データベースに接続し、次のスクリプトを実行します。

```
%ORACLE_HOME%\oes\install\sql\dropschema.sql;
```

3. 任意の Oracle ホームから次のコマンドを実行し、Oracle Internet Directory からメール・ストアのエントリを削除します。

```
%ORACLE_HOME%\bin\ldapdelete -v -h oid_host -p oid_port  
-Dcn=umadmin,cn=EMailServerContainer,cn=Products,cn=OracleContext -w  
@ password "cn=global_db_name,cn=mailstores,cn=um  
_system,cn=EMailServerContainer,cn=Products,cn=OracleContext"
```

変数は次のとおりです。

- `oid_host` は、Infrastructure の Oracle Internet Directory のホスト名
 - `oid_port` は、Infrastructure の Oracle Internet Directory のポート番号
 - `password` は、umadmin ユーザー・パスワード
 - `global_db_name` は、メール・ストア・データベースのグローバル・データベース名
4. Oracle Universal Installer を使用して、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier ソフトウェアを削除します。

関連項目： 5-4 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」

Oracle コンポーネントの削除

1. Oracle Universal Installer を起動します。5-4 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」を参照してください。
「ようこそ」ウィンドウが表示されます。
2. 「製品の削除」をクリックします。
「インベントリ」ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、Oracle ホームにインストールされているすべてのコンポーネントが表示されます。
3. インストールされているコンポーネントを再確認し、削除する Oracle ホームを選択します。
4. 「削除」をクリックします。
「確認」ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、削除するために選択したすべてのコンポーネントが表示されます。
5. 「確認」ウィンドウを下にスクロールして、削除するために選択されたコンポーネントを確認します。
6. 「はい」をクリックします。
7. 複数の Oracle9iAS Infrastructure がインストールされている場合に Oracle9iAS Infrastructure のセカンダリ・インストールを選択すると、Oracle Universal Installer はこのインストールを削除します。プライマリ・インストールを選択すると、「Oracle9iAS Administration Service」ウィンドウが表示されます。次の操作は、現在ホスト上にインストールされている Oracle9iAS Infrastructure の数によって異なります。
8. 現在、ホスト上に Infrastructure が 1 つのみインストールされている場合、「Oracle9iAS Administration Service」ウィンドウに次のように表示されます。

```
The active Oracle9iAS Administration Service is in %ORACLE_HOME%. There are no other Administration Services available.
```
9. 「OK」をクリックして続行します。
10. 現在ホスト上に Infrastructure が複数インストールされている場合、「Oracle9iAS Administration Service」ウィンドウに次のように表示されます。

```
The active Oracle9iAS Administration Service is in %ORACLE_HOME%. You may select one of the Administration Services to become the active one.
```


残っている Infrastructure の 1 つを選択します。これがプライマリ・インストールとなり、Oracle9iAS Administration Service の新しい場所になります。
11. 「OK」をクリックして続行します。

注意：

- コンポーネントを削除すると、依存するすべてのコンポーネントおよびファイルも削除されます。
 - **Oracle Universal Installer** は、削除中にすべてのファイルおよびディレクトリを削除するわけではありません。削除されなかったファイルおよびディレクトリは手動で削除する必要があります。
-
-

第 III 部

Oracle Collaboration Suite コンポーネント の構成

第 III 部では、Oracle Collaboration Suite のコンポーネントの構成を完了するために実行する必要があるインストール後の手順を詳細に示します。

第 III 部は、次の章で構成されています。

- [第 11 章「Oracle Calendar の構成」](#)
- [第 12 章「Oracle Email のインストールおよび構成」](#)
- [第 13 章「検索機能の構成」](#)
- [第 14 章「Oracle Files の構成」](#)
- [第 15 章「Oracle Web Conferencing の構成」](#)

注意： Oracle9iAS Wireless には、インストール後に構成の必要のある組込みアプリケーションが含まれています。まず基礎となる Oracle9iAS Wireless スタック、次にアプリケーションを、使用前に構成する必要があります。

関連資料： これらのアプリケーションおよびその他の Oracle9iAS Wireless コンポーネントの構成については、『Oracle9iAS Wireless 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Calendar の構成

この章では、Oracle Calendar を構成する方法を説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Server の構成](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの起動および構成](#)
- [Oracle Calendar リソース・キットのインストール](#)
- [Oracle Calendar の複数インスタンスでの orclguest アカウントのプロビジョニング](#)
- [Oracle Calendar ポートレットからの SSL 要求の有効化](#)

Oracle Calendar Server の構成

この項では、Oracle Calendar Server のインストール後、また場合によってはアップグレード後に行う必要のある構成の変更について説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [ポート値の確認](#)
- [Oracle Calendar Administrator を開く](#)
- [リソース承認の設定](#)
- [ワイヤレス機能の有効化](#)
- [Windows PATH 変数の処理](#)

ポート値の確認

Oracle Calendar Server で使用されるデフォルト・ポートは次のとおりです。

ポート	機能
5730	Calendar Engine
5731	同期ネットワーク・コネクタ
5732	ディレクトリ・アクセス・サーバー
5734	Calendar Server Manager

これらのポートがすでに使用中の場合、インストールでは次に使用可能なポートを使用します。Oracle Calendar Server で使用される値は `unison.ini` で確認してください。

Oracle Calendar Administrator を開く

Oracle Calendar Administrator を使用して、ユーザー、イベント、リソースおよびパブリック予定表を管理し、管理タスクを実行します。デフォルトでは、次の URL で開くことができます。

```
https://Web_server_host:https_port/ocad-bin/ocad.cgi?object=nodeadm
```

Oracle Calendar Administrator にログインするには、インストール時に選択した Oracle Calendar 管理用パスワードを入力します。このパスワードとともにユーザー名を入力しないでください。

関連資料： Oracle Calendar Administrator の使用方法は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照してください。

リソース承認の設定

リソース承認を使用する場合は、次のように設定する必要があります。

1. NOTIFY-APPROVER を TRUE に設定し、APPROVER-EMAIL を承認者の電子メールに設定して、リソースを作成または変更します。たとえば、ocal¥bin では次のようになります。

```
uniuser -resource -add R=Resource_Approval/NOTIFY-APPROVER=TRUE  
/APPROVER-EMAIL=approver.email@oracle.com/psw=password -n 4313 -p test1
```

2. リソースに Designate 権限を与えます。たとえば、ocal¥bin では次のようになります。

```
uniaccessrights -mod -designate ALL=TRUE -grantee S=Designate/NODE-ID=4313  
-grantor R=Resource_Approval -n 4313 -p test1
```

3. unison.ini (ocal¥misc にある) に、url パラメータを指定した RESOURCE_APPROVAL セクションがあることも確認します。次に例を示します。

```
[RESOURCE_APPROVAL]  
url=http://server:port/ocas-bin/ocas.fcgi
```

4. リソース承認 URL を変更した場合は、Oracle Calendar Server を再起動します。

ワイヤレス機能の有効化

Oracle Calendar Server をワイヤレス対応にし、起動し稼働している有効な Wireless Server を指すようにするには、%ORACLE_HOME%\ocal¥misc¥unison.ini を開き、次のパラメータを設定します。

```
[CWS]
smtpmail = TRUE
smsnotifyprogramparam = " -host WIRELESS_HOST -port Calendar_listener_port"
smsnotifyprogram = %ORACLE_HOME%\ocal¥sbin¥sendalert
.
.
.
[NOTIFY]
sms = TRUE
alert_server = "IASW"
```

ファイルを保存し、Oracle Calendar Server を再起動します。

Wireless Server が正しく構成されていることを確認します。詳細は、Wireless Server に付属のドキュメントを参照してください。

Windows PATH 変数の処理

たとえばセキュリティ・メカニズムを構成するなどの目的で、Windows PATH 環境変数に追加されている値は、Oracle Calendar Server によりクリアされます。かわりに、OCAL_ADDITIONAL_LIBPATH に値を追加します。

Oracle Calendar アプリケーション・システムの起動および構成

一般に Oracle Calendar アプリケーション・システムは、Web サーバーを起動した際に、デフォルトのインストール設定を使用して正常に起動します。次の項では、アプリケーション・システムのステータスを確認し、必要に応じて構成を変更する方法を説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar アプリケーション・システムのステータスの確認](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成](#)

Oracle Calendar アプリケーション・システムのステータスの確認

アプリケーション・システムおよびそのコンポーネントが稼働しているかどうかを確認するには、`http://server_name:port/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=sys` でシステム・ページを開きます。コンポーネントが稼働していない場合は、システム・ページにそのコンポーネントが表示されません。

適切なアプリケーション・システムでコンポーネントに接続するには、次の URL を使用します。

コンポーネント	URL
Sync Server	<code>http://host:port/ocst-bin/ocas.fcgi</code>
Web Services	<code>http://host:port/ocws-bin/ocas.fcgi</code>
Oracle Calendar Web Client	<code>http://host:port/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=web</code>

Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成

Oracle Calendar アプリケーション・システムおよびそのコンポーネントは、`%ORACLE_HOME%\ocas\conf` の下にある次の構成ファイルで制御されます。

ocas.conf: クライアント

ocws.conf: Web Services

ocst.conf: Sync Server

ocwc.conf: Oracle Calendar Web Client

ocal.conf: `httpd.conf` から組み込まれる Web サーバー FastCGI ディレクティブ環境に応じて、次の構成オプションを検討してください。

- `ocas.fcgi` の複数インスタンスを実行します（インスタンス数は設定と負荷に依存）。この構成オプションは、`ocal.conf` で構成できます。
- インストールとホスト当たり `occhecklet.fcgi` のインスタンスを 1 つ実行する必要があります。この構成オプションも、`ocal.conf` で構成します。
- Sync Server を使用するには、`httpd.conf` または `apache.conf` の `KeepAlive` パラメータを 300 秒に設定するか、またはオフにします。これは、`ocal.conf` の 300 秒のアイドル・タイムアウト値に相当します。
- すべてのホストの `ocas` ファイル内の `linkdb` および `sessiondb` 変数が同じパス（たとえば、同じ NFS マウント）を指していることを確認します。
- 各コンポーネントの `conf` ファイルで、認証、圧縮および暗号化（ACE）値を設定します。すべての製品の AUTH Web 設定は、`ocas.conf` の `[ACE_PLUGINS_CLIENT]` セクションで構成する必要があります。

- 問題が発生した場合は、次の場所でエラー・メッセージを確認します。

`%ORACLE_HOME%\ocas\logs\ocas_log`

conf ファイルに変更を加えた後は、Web サーバーを再起動してください。

Oracle Calendar リソース・キットのインストール

Oracle Calendar リソース・キットは、管理者が、Oracle Calendar アプリケーション・システムに関する情報をエンド・ユーザーに提供するために使用可能なツールです。この情報には、次のクライアントの製品概要、システム要件、インストール手順、よくある質問と回答およびトラブルシューティングが含まれます。

- Oracle Connector for Outlook
- Oracle Calendar Web Client
- Oracle Calendar Desktop Client
- Oracle Calendar Sync
- Oracle Sync Server

Oracle Calendar リソース・キットは、Oracle9iAS Portal に含めることでエンド・ユーザーが使用できるようになります。現在、キットは `ROOT_OF_CD_DISK1\doc\admin\resource_kits` ディレクトリにあります。

Oracle Calendar の複数インスタンスでの orclquest アカウントのプロビジョニング

同じインフラストラクチャに Oracle Calendar のインスタンスを 2 つインストールする場合は、2 番目のインスタンスに対して orclquest アカウントがプロビジョニングされない場合があります。次の手順に従って、2 番目の Calendar インスタンスに対して別のテスト・ユーザー・アカウントを作成してください。

注意： これらの手順は、orclquest がまったく作成されていない場合にも実行する必要があります。

1. 次の URL にある Oracle Delegated Administration Services を使用して Oracle Internet Directory にユーザーを作成します。

`http://Oracle_Internet_Directory_host_name:port_number/oiddas`

2. 次の URL から Oracle Calendar Administrator を使用して、このユーザーにカレンダー・サービスをプロビジョニングします。

```
http://Oracle_Calendar_host_name:port_number/ocad-bin
/ocad.cgi?object=nodeadm
```

関連資料：『Oracle Calendar 管理者ガイド』の第 8 章「カレンダー・ユーザー」

Oracle Calendar ポートレットからの SSL 要求の有効化

次の手順では、Oracle Collaboration Suite Web Client の Oracle Calendar ポートレットから SSL 要求を有効化する方法について説明します。

1. 次の JAR ファイルを Oracle9iAS Containers for J2EE インスタンス CLASSPATH に含めます。

```
%ORACLE_HOME%\jlib\javax-ssl-1_1.jar
%ORACLE_HOME%\jlib\jssl-1_1.jar
```

たとえば、JAR ファイルを

```
%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_Portal\config\application.xml
```

に次の行とともに含めることができます。

```
<library path="%ORACLE_HOME%\jlib\javax-ssl-1_1.jar"%>
<library path="%ORACLE_HOME%\jlib\jssl-1_1.jar"%>
```

2. njssl9.dll が PATH 環境変数で指定されたディレクトリにあることを確認します。
3. Oracle Calendar Web Services にアクセスする場合は、次のファイルを HTTP ではなく HTTPS を使用するように変更します。

```
%ORACLE_HOME%\webclient\classes\oracle\collabsuite\webclient\resources\
webclient.properties
```

たとえば、

```
calendar=http://<host>:<port>/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=web
```

の場合、次のように変更します。

```
calendar=https://<host>:<SSL_Port>/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=web
```

4. Calendar.jsp を SSL 要求をサポートするように更新します。通常のインストールでは、Calendar.jsp は次の場所にあります。

```
%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_Portal\applications\webclient-calendar
\webclient-calendar-web\portlets\Calendar.jsp
```

次の行を Calendar.jsp の必須パッケージ・インポート・セクションに追加します。

```
<%@ page import="javax.net.ssl.SSLSocketFactory"%>
<%@ page import="java.security.Security"%>
<%@ page import="HTTPClient.*"%>
<%@ page import="oracle.security.ssl.OracleSSLCredential"%>
```

ポートレットのメイン・ルーチンの前に SSL 要求を有効化します。

```
System.setProperty("ssl.SocketFactory.provider",
                    "oracle.security.ssl.OracleSSLSocketFactoryImpl");
System.setProperty("java.protocol.handler.pkgs", "HTTPClient");
System.setProperty("javax.net.ssl.KeyStore",
                    "Oracle_Wallet_Client_Certificate_Path");
System.setProperty("javax.net.ssl.KeyStorePassword",
                    "Oracle_Wallet_Password");
```

javax.net.ssl.KeyStore プロパティは、Oracle Wallet Web Service クライアント証明を指します。要求はすべて同じ Middle-Tier に対してローカルであるため、Oracle Web Cache Wallet が使用されます。

javax.net.ssl.KeyStorePassword プロパティは、対応する Wallet ファイルのパスワードです。

Oracle Email のインストールおよび構成

この章では、管理ツールの Oracle Email のインストールおよび構成について説明し、Oracle Email システムの起動、停止および再初期化の方法を説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [構成前のチェックリスト](#)
- [Oracle Email のインストール](#)
- [管理ツールの使用](#)
- [Oracle Email の起動、停止および再初期化](#)

構成前のチェックリスト

この項では、Oracle Email を構成する前に実行する必要がある構成前の手順について説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Information Store データベース上の Java および Oracle Text オプションの確認](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure および Application Server の確認および起動](#)
- [Oracle Internet Directory へのデータベースの登録](#)
- [Information Storage データベースのデータベース init.ora パラメータの設定](#)
- [Information Storage 表領域およびスキーマの作成](#)

Information Store データベース上の Java および Oracle Text オプションの確認

Oracle Text は、Oracle Email のインストール時にデフォルトでインストールされます。ただし、データベース・ユーザー CTXSYS がインストール時に存在しないか、ロックされる場合は、Oracle Text のインストールは失敗します。

Java および Oracle Text オプションが Information Storage データベースにインストールされ、構成されていることを確認するには、次の SQL 問合せを sysdba として実行します。

```
SQL> select comp_id, version, status from dba_registry;
```

Oracle Text が正しくインストールされた場合は、次のような出力が表示されます。

COMP_ID	VERSION	STATUS

...		
CONTEXT	9.2.0.2.0	VALID

Oracle Text が Information Storage データベースにインストールおよび構成されていない場合は、手動で構成する必要があります。

Oracle9iAS Infrastructure および Application Server の確認および起動

Infrastructure および Application Server を起動するには、次のようにします。

```
%ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl startall
```

Oracle Internet Directory へのデータベースの登録

注意： この項は、Oracle Collaboration Suite でインストールされたデータベースを使用していない場合にのみ適用されます。Oracle Collaboration Suite Information Storage CD から Information Storage データベースをインストールすると、データベースは自動的に登録され、Oracle Internet Directory に登録する必要がありません。

Information Store のインストールには Oracle9i データベース・サーバーが必要です。データベースを Information Store として構成する前に、そのデータベースを Oracle Internet Directory インフラストラクチャに登録する必要があります。データベースがまだ Oracle Internet Directory に登録されていない場合は、Oracle Database Configuration Assistant を使用して登録できます。データベースが Oracle Internet Directory に登録された後、Oracle Net Manager を使用して接続識別子を変更できます。

Oracle Internet Directory インフラストラクチャで Information Store データベースを登録するには、Oracle Net Configuration Assistant および Database Configuration Assistant を使用して次の手順を実行する必要があります。

- [Oracle Net Configuration Assistant の実行](#)
- [Database Configuration Assistant の実行](#)

Oracle Net Configuration Assistant の実行

Oracle Net Configuration Assistant を実行するには、次のようにします。

1. 「スタート」→「プログラム」→「Oracle - *HOME_NAME*」→「Configuration and Migration Tools」→「Oracle Net Configuration Assistant」を選択して Oracle Net Configuration Assistant を起動し、「ようこそ」画面を表示します。
2. 「ディレクトリ使用構成」を選択します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. 「使用するディレクトリ・サーバーを選択してください。」を選択します。ディレクトリ・サーバーは、Oracle で使用可能なように構成済である必要があります。
5. 「次へ」をクリックします。
6. 使用するディレクトリ・サーバーとして Oracle Internet Directory を選択します。

7. 「次へ」をクリックします。
8. Oracle Internet Directory インフラストラクチャの接続情報を入力します。
9. 「次へ」をクリックします。
10. ディレクトリのデフォルトの Oracle コンテキストとしてルート OracleContext (cn=OracleContext) を選択し、Oracle Net Configuration Assistant 構成を終了します。

注意：「cn=OracleContext,subscriber_specific_DN」は選択しないでください。

これによって、%ORACLE_HOME%\network\admin ディレクトリに Oracle Internet Directory Server およびポート番号を指定する ldap.ora ファイルが作成されます。

11. Oracle Net Configuration Assistant を終了します。

Database Configuration Assistant の実行

Database Configuration Assistant を実行するには、次のようにします。

1. 「スタート」→「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Oracle Database Configuration Assistant」を選択して Database Configuration Assistant を起動します。
2. 「次へ」をクリックします。
3. 「データベース内のデータベース・オプションの構成」を選択します。
4. 「次へ」をクリックします。
5. 構成する Oracle Email データベースの SID を選択します。
6. 「次へ」をクリックします。
7. 「はい、データベースの登録を取り消します。」オプションを選択します。
 - a. 「ユーザ DN」フィールドで cn=orcladmin と入力します。
 - b. 「ユーザ DN」フィールドに入力した名前のパスワードを入力します。
8. 「終了」をクリックします。

「データベースの再起動」画面が表示されます。
9. 「はい」をクリックします。

「サマリー」画面が表示されます。

10. 「OK」をクリックします。

「Database Configuration Assistant」画面にデータベース構成のプロセスが表示されます。

11. 構成の完了後、Database Configuration Assistant を終了します。

Information Storage データベースのデータベース init.ora パラメータの設定

Information Storage データベースのデータベース init.ora パラメータを次の値に設定します。

```
processes=150 以上
open_cursors=300 以上
dml_locks=200 以上
shared_pool_size=32000000 以上
java_pool_size=40000000 以上
```

関連資料： これらのパラメータ設定の詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。

Information Storage 表領域およびスキーマの作成

Oracle Email 構成ウィザードでは、デフォルトのストレージ・パラメータを使用して Information Store 内で表領域と表スキーマを作成します。次の手順を使用して、Oracle Email 構成ウィザードを実行する前に、表領域のストレージ・パラメータまたはデータ・ファイルを事前に作成するか、カスタマイズします。

Information Store の表領域およびそれらのデフォルト・ストレージ・パラメータの名前は、`%ORACLE_HOME%\oes\install\sql\tblspc.sql` スクリプトを参照してください。デフォルトの電子メール・ストレージのサイズを増やすには、スクリプトのデフォルトのストレージ・パラメータを変更します。

旧メッセージの 3 次記憶域に対して予約されている ESTERSTORE という名前の表領域があります。3 次記憶域を有効にするには、インストールの前に別のディスクに ESTERSTORE 表領域をあらかじめ作成します。次に、TertiaryStore パラメータを有効にしてハウスキーピング・サーバーのインスタンスを作成し、TertiaryStoreageThreshold パラメータを目的の日数に設定します（デフォルトは 30）。ハウスキーピング・サーバーのインスタンスはメッセージを定期的に自動で移動します。

注意： 表領域を事前に作成する場合は、Oracle Email 構成ウィザードのログに、表領域の作成に失敗したことを示すエラーが表示されます。これらのエラーは無視してかまいません。

関連資料： 3 次記憶域の詳細およびサーバー・プロセスの構成方法は、『Oracle Email 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Email のインストール

この項では、Oracle Email をインストールする方法を説明します。

Oracle Email をインストールするには、Oracle Email Information Store Server および Middle-Tier Server を構成するために、umconfig.bat スクリプトを 2 回実行する必要があります。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Email Information Store の構成](#)
- [Oracle Email Middle-Tier の構成](#)
- [Oracle Email Middle-Tier の手動構成](#)

Oracle Email Information Store の構成

Information Store データベースの構成では次の処理を行います。

- メール・スキーマの表領域の作成
- メールの表と索引の作成
- メール関連の PL/SQL パッケージのロード
- メール関連のストアド Java プロシージャのロード
- Oracle Internet Directory でのメール・ストアの構成

Oracle Email Information Store を構成するには、Middle-Tier サーバーで次の手順を実行します。

1. アプリケーション・サーバーにある umconfig.bat スクリプトを実行します。

```
%ORACLE_HOME%\oes\bin\umconfig.bat
```

「Unified Messaging の構成」画面が表示されます。

2. 「メール・ストアのデータベース構成」を選択します。
3. 「次へ」をクリックします。「メール・ストアのデータベース構成」画面が表示されます。

4. 次の情報を対応するフィールドに入力します。

フィールド	説明
データベース・ホスト名	データベースが置かれているシステムの名前
SID	Information Store のシステム識別子
ポート番号	リスナーがリスニングしているポート番号
system_password	ホスト・データベースの SYSTEM パスワード

5. 「次へ」をクリックします。「CTXSYS パスワード」画面が表示されます。CTXSYS パスワードがロックされており、これをリセットする必要がある場合は、パスワードの確認を求められます。CTXSYS パスワードを入力します。デフォルト・パスワードは CTXSYS です。

注意： CTXSYS パスワードは、Information Storage データベースのインストール時に、6-4 ページの「[Oracle Collaboration Suite Information Storage データベースのインストール](#)」で説明されているように、ロックを解除しておく必要があります。

6. 「次へ」をクリックします。「ES_MAIL のパスワード」画面が表示されます。
7. ES_MAIL のパスワードを入力し、確認します。

注意： Information Store スキーマは ES_MAIL データベース・ユーザーが所有しています。

8. 「次へ」をクリックします。「UMADMIN のパスワード」画面が表示されます。

注意： UMADMIN は、Oracle Email のアプリケーション・サーバーのインストール時に Oracle Internet Directory サーバーで作成された管理者アカウントです。そのアカウントがディレクトリ内の特定の Oracle Email エントリを所有します。インストール後に、管理者は UMADMIN アカウントを使用して管理ツールにログインし、初期 Oracle Email 管理ユーザーを作成する必要があります。その後、アカウントはシステムおよびドメイン管理を他のユーザーに委譲できます。

9. UMADMIN のパスワードを入力し、確認します。
10. 「次へ」をクリックします。「Unified Messaging ドメインの作成」画面が表示されます。

11. ユーザーの電子メール・アドレスに使用するドメイン名を入力します。

注意： ドメイン名の入力を間違えると、不正なドメインが作成されます。この状況が発生した場合は、次のコマンドを実行してドメインを訂正してください。

```
%ORACLE_HOME%\oes\bin\install_createdomain.bat UM_SYSTEM domain_name
```

12. 「次へ」をクリックします。「構成ツール」画面が表示され、Information Store の構成が開始します。

Information Store の構成が完了すると、「インストールの終了」画面が表示されます。

umconfig.bat のログ・ファイルは次のディレクトリにあります。

```
%ORACLE_HOME%\oes\log\
```

この項では次の内容について説明します。

- [Oracle Email Information Store の手動構成](#)
- [umbackend.tar ファイルのインストール](#)
- [umbackend の SQL スクリプトのロード](#)

Oracle Email Information Store の手動構成

注意： この項で説明する手動手順は、ユーザー・インタフェースを使用した umconfig.bat スクリプトの実行にかわる方法です。

Oracle Email Information Store 構成スクリプトを手動で実行するには、次のようにします。

```
cd %ORACLE_HOME%\oes\bin
install_umconfig.bat connect_str true system_passwd
CTXSYS_passwd SID host_name port_number UM_SYSTEM ORACLE_HOME
es_mail_passwd umadmin_passwd oid_flag domain_name
```

次の表に、変数をリストし、それらの変数で予期される値を説明します。

変数	説明
connect_str	Information Store データベース接続文字列。
system_passwd	ホスト・データベースの SYSTEM パスワード。
CTXSYS_passwd	Oracle Text アカountのパスワード。

変数	説明
<i>SID</i>	Information Storage データベース SID。
<i>host_name</i>	Information Storage データベースのホスト名。
<i>port_number</i>	Information Storage データベースのポート番号（デフォルトは 1521）。
<i>es_mail_passwd</i>	ES_MAIL データベース・ユーザーのパスワード。ES_MAIL のパスワードが入力されていない場合、デフォルトは es です。
<i>umadmin_passwd</i>	<p>UMADMIN は、Oracle Email のアプリケーション・サーバーのインストール時に Oracle Internet Directory サーバーで作成された管理者アカウントです。そのアカウントがディレクトリ内の特定の Oracle Email エントリを所有します。インストール後に、管理者は UMADMIN アカウントを使用して管理ツールにログインし、初期 Oracle Email ユーザーを作成する必要があります。その後、システムおよびドメイン管理を他のユーザーに委譲できます。</p> <p>パスワードが入力されていない場合は、デフォルト値の welcome が Oracle Internet Directory およびデータベースに UMADMIN パスワードとして格納されます。</p>
<i>oid_flag</i>	<p>Oracle Email エントリが Oracle Internet Directory に作成された場合、値は 1 です。それ以外の場合、値は 0 です。</p> <p>Oracle Internet Directory インフラストラクチャが Oracle Email に対して構成されているかどうかを判断するには、中間層の Oracle ホームから次のコマンドを実行します。</p> <pre>del %ORACLE_HOME%\oes\log\exists.txt java -classpath %ORACLE_HOME%\jlib\esinstall.jar;%ORACLE_HOME%\jlib \repository.jar;%ORACLE_HOME%\jlib\esldap.jar; %ORACLE_HOME%\jlib\jndi.jar;%ORACLE_HOME%\jlib \ldap.jar;%ORACLE_HOME%\jlib\providerutil.jar oracle.mail.install.ESDSInstallQuery %ORACLE_HOME% um_system.</pre> <p>この問合せを実行した後に、%ORACLE_HOME%\oes\log\exists.txt ファイルが存在するかどうかを確認します。ファイルが存在する場合、<i>oid_flag</i> 値は 1 で、存在しない場合は 0 です。</p>
<i>domain_name</i>	<p>最初の Information Store の追加時に作成されるデフォルト・ドメインの名前。たとえば、acme.com などです。これが最初の Information Store でない場合、ドメイン名は無視されます。</p> <p>注意： ドメインが存在する必要があります。</p>

注意： デフォルトの `INSTALLATION_NAME` は、`UM_SYSTEM` です。

umbackend.tar ファイルのインストール

umbackend.zip ファイルをインストールするには、次のようにします。

1. umbackend.tar ファイルをアプリケーション・サーバー上の `%ORACLE_HOME%\oes` ディレクトリから Information Storage データベース上の Oracle ホーム・ディレクトリにコピーします。Information Store が別のシステムにある場合は、データベース・プラットフォームの umbackend.zip ファイルをアプリケーション・サーバーから Information Storage データベースにデータベース所有者として転送する必要があります。
2. umbackend.tar ファイルを解凍します。
3. 次のコマンドを実行して Oracle Universal Installer を起動します。

```
cd backend\Disk1\install\win32\setup.exe
```
4. 画面のプロンプトに従って、Oracle Email のバックエンド・インストールを完了します。

umbackend の SQL スクリプトのロード

umbackend の SQL スクリプトをロードするには、次のようにします。

1. Information Storage データベースの `%ORACLE_HOME%\oes\install\sql` にディレクトリを変更します。
2. `SQL*Plus` を実行し、データベースに `sys` としてログインします。
3. `install_backend_sys.sql` スクリプトをロードします。
4. `SQL*Plus` を実行し、データベースに `es_mail` ユーザーとしてログインします。
5. `install_backend_es_mail.sql` スクリプトをロードします。

注意： これらのスクリプトは、Information Store が Oracle Collaboration Suite Information Storage の CD からインストールされていない場合にのみ実行する必要があります。

Oracle Email Middle-Tier の構成

Middle-Tier の構成では次の処理を行います。

- Oracle Internet Directory での Middle-Tier の構成
- Information Storage データベースでの Middle-Tier の構成
- Oracle Email サーバー・インスタンスの作成

Oracle Email Middle-Tier サーバーを構成するには、次のようにします。

1. ポート 25 を使用するアプリケーションを停止します。
2. アプリケーション・サーバーにある `umconfig.bat` スクリプトを実行します。

```
%ORACLE_HOME%\oes\bin\umconfig.bat
```

「Unified Messaging の構成」画面が表示されます。
3. 「中間層の構成」を選択します。
4. 「次へ」をクリックします。「メール・ストア・データベース」画面が表示されます。
5. この中間層で使用するデータベースのグローバル名をドロップダウン・リストから選択します。

注意： UMADMIN パスワードとドメイン名が Information Store の構成中に指定された場合、次に表示される画面は「Unified Messaging ドメインの作成」画面です。それ以外の場合は、UMADMIN パスワードとドメイン名を指定する必要があります。

6. 「次へ」をクリックします。「UMADMIN のパスワード」画面が表示されます。

注意： UMADMIN は、Oracle Email のアプリケーション・サーバーのインストール時に Oracle Internet Directory サーバーで作成された管理者アカウントです。そのアカウントがディレクトリ内の特定の Oracle Email エントリを所有します。インストール後に、管理者は UMADMIN アカウントを使用して管理ツールにログインし、初期 Oracle Email ユーザーを作成する必要があります。その後、システムおよびドメイン管理を他のユーザーに委譲できます。

7. UMADMIN のパスワードを入力し、確認します。パスワードが入力されていない場合は、デフォルト値の `welcome` が Oracle Internet Directory とデータベースの両方に UMADMIN パスワードとして格納されます。
8. 「次へ」をクリックします。「Unified Messaging ドメインの作成」画面が表示されます。

9. 作成するドメイン名を入力します。このドメインは、ユーザーの電子メール・アドレスに使用されます。

注意： ドメイン名の入力を間違えると、不正なドメインが作成されます。この状況が発生した場合は、次のコマンドを実行してドメインを訂正してください。

```
%ORACLE_HOME%\oes\bin\install_createdomain.bat UM_SYSTEM  
domain_name
```

注意： 追加の中間層を構成する場合は、SMTP およびリスト・サーバー用のローカル・ドメイン名を指定する必要があります。

10. 「次へ」をクリックします。「プロセスの開始」画面が表示されます。
11. 構成の完了後に Oracle Email サーバー・プロセスを自動的に起動するには、「はい」を選択します。それ以外の場合は、「いいえ」を選択します。
12. 「次へ」をクリックします。「構成ツール」画面が表示され、Middle-Tier の構成が始まります。

Middle-Tier の構成が完了すると、「インストールの終了」画面が表示されます。

umconfig.bat のログ・ファイルは次のディレクトリにあります。

```
%ORACLE_HOME%\oes\log\
```

Oracle Email Middle-Tier の手動構成

注意： この項で説明する手動手順は、ユーザー・インタフェースを使用した umconfig.bat スクリプトの実行にかわる方法です。

Oracle Email Middle-Tier 構成スクリプトを手動で実行するには、次のようにします。

```
cd %ORACLE_HOME%\oes\bin  
install_umconfig.bat true true UM_SYSTEM ORACLE_HOME umadmin_passwd  
oid_flag global_db_name domain_name start_proc
```


次の表に、変数をリストし、それらの変数で予期される値を説明します。

変数	説明
<i>umadmin_passwd</i>	<p>UMADMIN は、Oracle Email のアプリケーション・サーバーのインストール時に Oracle Internet Directory サーバーで作成された管理者アカウントです。このアカウントがディレクトリ内の特定の Oracle Email エントリを所有します。インストール後に、管理者は UMADMIN アカウントを使用して管理ツールにログインし、初期 Oracle Email ユーザーを作成する必要があります。その後、システムおよびドメイン管理を他のユーザーに委譲できます。</p> <p>パスワードが入力されていない場合は、デフォルト値の <code>welcome</code> が Oracle Internet Directory およびデータベースに UMADMIN パスワードとして格納されます。</p>
<i>oid_flag</i>	<p>Oracle Email エントリが Oracle Internet Directory に作成された場合、値は 1 です。それ以外の場合、値は 0 です。</p> <p>Oracle Internet Directory インフラストラクチャが Oracle Email に対して構成されているかどうかを判断するには、中間層の Oracle ホームから次のコマンドを実行します。</p> <pre>del %ORACLE_HOME%\oes\log\exists.txt java -classpath %ORACLE_HOME%\jlib\esinstall.jar;%ORACLE_HOME%\jlib \repository.jar;%ORACLE_HOME%\jlib\esldap.jar; %ORACLE_HOME%\jlib\jndi.jar;%ORACLE_HOME%\jlib \ldap.jar;%ORACLE_HOME%\jlib\providerutil.jar oracle.mail.install.ESDSInstallQuery %ORACLE_HOME% um_system.</pre> <p>この問合せを実行した後に、<code>%ORACLE_HOME%\oes\log\exists.txt</code> ファイルが存在するかどうかを確認します。ファイルが存在する場合、<i>oid_flag</i> 値は 1 で、存在しない場合は 0 です。</p>
<i>global_db_name</i>	<p>データベースのグローバル名。 たとえば、<code>acmedb.foo.acme.com</code> などです。</p>
<i>domain_name</i>	<p>ローカル・ドメイン名。たとえば、<code>acme.com</code> などです。</p>
<i>start_proc</i>	<p>プロトコル・サーバーを起動。入力可能な値は 1 および 0 です。</p>

管理ツールの使用

この項では、Oracle Email システムの管理に使用される様々な管理ツールについて説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Enterprise Manager](#)
- [Oracle Email Webmail クライアント](#)

Oracle Enterprise Manager

関連資料： Oracle Enterprise Manager の詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Enterprise Manager は、管理者が Oracle9i データベース・サーバーおよび Oracle9i Application Server の管理タスクの一部を実行できるようにする Web ベースのツールです。Oracle Enterprise Manager は、Oracle Email サービス・プロセスの管理に使用できます。

Oracle Enterprise Manager を介して、管理者は Oracle Email システムで次のタスクを実行できます。

- 起動
- 停止
- 再初期化
- デフォルト・パラメータの変更

Oracle Enterprise Manager を介して Oracle Email の管理タスクを実行するには、次の URL に移動します。

`http://host_name:1810`

Oracle Email Webmail クライアント

関連資料： ドメインおよびユーザー・プロビジョニングの詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Email Webmail クライアントを使用して、管理者はドメインおよびユーザー・プロビジョニング・タスクを実行できます。Oracle Email Webmail クライアントを介して、管理者は次の処理を行うことができます。

- ユーザーおよび配信リストのドメイン設定の作成および変更
- 電子メール、FAX ユーザー、ボイスメール・ユーザーおよび配信リストの作成、削除、変更および表示
- 配信リストのメンバーの追加および削除
- 特定のユーザーがメンバーとなっているすべての配信リストの表示
- サーバー側フィルタの作成、削除、変更および表示
- リストの作成、削除および変更

Webmail クライアントを使用して Oracle Email の管理タスクを実行するには、次の URL に移動します。

`http://host_name:port_number/um/traffic_cop`

Oracle Email の起動、停止および再初期化

この項では、Oracle Email システムの起動、停止および再初期化の方法について説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Information Store の Oracle Net Listener の確認および起動](#)
- [Middle-Tier 用の SMTP リスナーの確認および起動](#)
- [Oracle Email システムの起動](#)
- [Oracle Email システムの停止](#)
- [Oracle Email システムの再初期化](#)
- [パブリック・ユーザーの作成](#)

関連資料： 個々のプロセスの起動、停止および再初期化方法の詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』を参照してください。

Information Store の Oracle Net Listener の確認および起動

Oracle Net Listener を Information Store データベースで実行して、システムが Oracle Email システムおよびクライアントからのデータベース接続を確立できるようにする必要があります。

リスナーが稼働していることを確認するには、次のようにします。

```
%ORACLE_HOME%\bin\lsnrctl status
```

「リスナーがありません。」という行を含むメッセージがコンピュータから返された場合は、リスナーを起動する必要があります。

リスナーを起動するには、管理権限を持つ管理者としてログインし、次の手順を実行します。

1. 「サービス」アイコンをクリックします。
2. ローカル・サービスのリストで、listener で終わるサービスを見つけます。
3. サービスが実行されていない場合は、リスナー名を右クリックし、「開始」または「再起動」を選択します。

リスナーを手動で起動するには、次のようにします。

```
%ORACLE_HOME%\bin\lsnrctl start
```

関連資料： リスナーの起動の追加情報は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

Middle-Tier 用の SMTP リスナーの確認および起動

SMTP リスナーが稼働していることを確認するには、次のようにします。

```
%ORACLE_HOME%\bin\lsnrctl status listener_es
```

「リスナーがありません。」という行を含むメッセージがコンピュータから返された場合は、リスナーを起動する必要があります。

リスナーを起動するには、次のようにします。

1. Oracle Net Configuration Assistant または Oracle Net Manager を使用し、プロトコル・アドレスとその他の構成パラメータを指定してリスナーを構成します。

関連資料： リスナー構成情報は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

2. 管理権限を持つ管理者としてとしてログインし、リスナー実行可能ファイル (tnslnsr) とその依存共有ライブラリのファイル所有権およびアクセス権を設定して、これらのファイルを管理者のみが変更できるようにします。tnslnsr は、
%ORACLE_HOME%\bin ディレクトリにあります。

3. ルート・ディレクトリからこれらのファイルまでのパス名にある個々のディレクトリの権限が、同じ方法で変更されていることを確認します。
4. 「サービス」アイコンをクリックします。
5. ローカル・サービスのリストで、`listener_es` で終わるサービスを見つけます。
6. サービスが実行されていない場合は、リスナー名を右クリックし、「開始」または「再起動」を選択します。

リスナーを手動で起動するには、次のようにします。

```
%ORACLE_HOME%\bin\lsnrctl start listener_es
```

関連資料： リスナーの起動の追加情報は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Email システムの起動

Oracle Email サービスを起動すると、IMAP4 や SMTP などのサービス・タイプを構成するすべてのプロセスが起動します。

Oracle Enterprise Manager を使用し、次の手順を実行して Oracle Email システムを起動します。

1. Oracle9i Application Server ホーム・ページに移動します。
2. 「Unified Messaging」を選択します。
3. 「起動」をクリックします。

Oracle Email システムの停止

Oracle Email システムを停止すると、すべての Oracle Email プロセスの停止要求がオペレーティング・システムに送信されます。管理者が Oracle Email システムを停止する理由の 1 つは、サーバーのハードウェアやソフトウェアのアップグレードなど、システムのメンテナンスを実行するためです。特定の種類のアップグレードの実行中はプロセスを実行できません。

Oracle Enterprise Manager を使用し、次の手順を実行して Oracle Email システムを停止します。

1. Oracle9i Application Server ホーム・ページに移動します。
2. 「Unified Messaging」を選択します。
3. 「停止」をクリックします。

Oracle Email システムの再初期化

Oracle Email プロセスを再初期化すると、Oracle Internet Directory サーバーから動作設定を再ロードするようオペレーティング・システムに通知されます。プロセスの実行は停止しないため、ユーザーは引き続き中断なくサービスの提供を受けます。Oracle Email プロセス・パラメータが変更されるたびに、再初期化して変更を有効にする必要があります。

Oracle Enterprise Manager を使用し、次の手順を実行して Oracle Email プロセスを再初期化します。

1. Oracle*9i* Application Server ホーム・ページに移動します。
2. 「Unified Messaging」を選択します。
3. 「再初期化」をクリックします。

パブリック・ユーザーの作成

Oracle Email を構成した後で、管理者は Oracle Delegated Administration Services を使用して Oracle Internet Directory にパブリック・ユーザー・アカウントを作成する必要があります。このアカウントを作成するには、`http://infrastructure_host:port_number/oiddas` に移動します。

このパブリック・ユーザーは、Webmail クライアント管理ツールを使用して作成される初期ユーザーに対応します。

関連資料： Oracle Delegated Administration Services の使用の詳細は、『Oracle Internet Directory アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

パブリック・ユーザーが作成された後で、`http://host_name:port_number/um/admin/UMAdminLogin.uix` に移動して初期ドメインおよびユーザーを作成します。

関連資料： 初期ドメインおよびユーザーの作成の詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』を参照してください。

検索機能の構成

この章では、Oracle Collaboration Suite の検索の構成プロセスについて説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- デフォルトの Oracle Ultra Search インスタンス
- Oracle Ultra Search データベース・ユーザーの作成
- Oracle Ultra Search Crawler の構成
- Web ソースの作成
- スケジュールの作成
- Oracle Ultra Search Crawler のスケジュール
- Oracle Collaboration Suite Search プロパティの設定
- 電子メールを検索可能に設定
- OC4J_iFS_files の再起動
- Oracle Ultra Search のテスト

デフォルトの Oracle Ultra Search インスタンス

Oracle Ultra Search インストーラは、すぐに使用できるデフォルトの Oracle Ultra Search インスタンスをデフォルトの **Ultra Search** テスト・ユーザーに基づいて作成するため、ユーザーは、インストール後にデフォルト・インスタンスに基づいて Oracle Ultra Search 機能をテストできます。

デフォルトのインスタンス名は、WK_INST です。このインスタンスは、データベース・ユーザー WK_TEST に基づいて作成されます。つまり、WK_TEST は、WK_INST のインスタンス管理者です。デフォルトのユーザー・パスワードは、WK_TEST です。

セキュリティ上の理由で、WK_TEST はインストール後にロックされます。Oracle Collaboration Suite 管理者は、データベースに DBA ロールとしてログインし、WK_TEST ユーザーのロックを解除してからパスワードを WK_TEST に設定する必要があります。（パスワードはインストール後に失効します。）パスワードが WK_TEST 以外に変更された場合は、データベースのパスワードを変更した後に、管理ツールの「インスタンスの編集」ページを使用して、キャッシュされたスキーマ・パスワードも更新する必要があります。

デフォルトのインスタンスは、Oracle Ultra Search サンプル問合せアプリケーションでも使用されます。『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』の「Middle Tier コンポーネントの設定」の項の説明に従って、data-sources.xml ファイルを更新する必要があります。

Oracle Ultra Search データベース・ユーザーの作成

Oracle Ultra Search では、次のように独自の表領域を使用して固有のデータを格納することをお勧めします。

```
SQL> create tablespace ultra datafile 'file_location' size x_MB
```

次のコマンドを使用して、インフラストラクチャ・ホストにログインし、Oracle Ultra Search スキーマを作成します。

```
sqlplus system/password@iasdb
SQL> CREATE USER ocs_us IDENTIFIED BY password DEFAULT TABLESPACE ultra
TEMPORARY TABLESPACE temp QUOTA UNLIMITED ON ultra;
User created.
SQL> GRANT resource, connect, wkuser TO ocs_us;
Grant succeeded.
SQL> exit
```

WKUSER ロールによりユーザーに Oracle Ultra Search へのアクセス権が付与されます。

Oracle Ultra Search Crawler の構成

この項では、Oracle Ultra Search Crawler の構成方法を説明します。

注意： 新規インスタンスの作成時には次の手順に従います。この項の手順 10 で、「キャッシュ・ディレクトリの位置」および「クローラのログイン」のパスをデフォルト・インスタンス WK_TEST に適用する必要があります。

Oracle Ultra Search Crawler を構成するには、次のようにします。

1. Oracle Ultra Search がインストールされているインフラストラクチャ・マシンに、一時ファイルとログ・ファイルを格納するディレクトリを作成します。
2. 次の URL にある Oracle Ultra Search 管理ツールに移動します。
`http://middletier_host:middletier_port/ultrasearch/admin_sso/index.jsp`
3. 「シングル・サイン・オン」ページが表示されたら、Oracle Internet Directory 管理者のユーザー名とパスワードを入力し、「ログイン」をクリックして「ようこそ」ページを表示します。
4. 「作成」サブタブをクリックして、「インスタンスの作成」アイコンを表示します。
5. 「インスタンスの作成」をクリックします。
6. 「新規インスタンス名」を入力し、13-2 ページの「Oracle Ultra Search データベース・ユーザーの作成」で作成したデータベース・スキーマの名前を「Ultra Search スキーマ名」フィールドに入力します。
7. 「適用」をクリックし、ページがリフレッシュされるまで待ちます。新規インスタンスの作成を確認する確認メッセージが表示され、「ようこそ」ページが表示されます。
8. 作成したインスタンスを「管理するインスタンスの選択」ドロップダウン・リストから選択し、「適用」をクリックしてこのインスタンスを現在のインスタンスとして選択します。確認メッセージが表示されます。
9. 「クローラ」タブをクリックします。
10. 次の情報を入力します。
 - **クローラの深さ：** Crawler が参照するネストしたリンクの最大数。「制限」ラジオ・ボタンを選択し、関連フィールドに数値を入力することにより、深さを制限できます。
 - **デフォルト・キャラクタ・セット：** HTML ドキュメントのデフォルトとして「標準 UTF-8」を選択します。
 - **キャッシュ・ディレクトリの位置：** このタスクの手順 1 で作成した一時ディレクトリへのパスを入力します。

- **クローラのロギング**: このタスクの手順 1 で作成したログ・ディレクトリへのパスを入力します。
- 「データベース接続文字列」フィールドの値に注意してください。この値は、13-6 ページの「[Oracle Collaboration Suite Search プロパティの設定](#)」で Oracle Ultra Search に対して Oracle Files を構成した場合に必要です。

11. 「適用」をクリックします。

Web ソースの作成

Web ソースを作成するには、次のようにします。

1. 「ソース」タブをクリックして、「Web ソースの作成: ステップ 1」ページを表示します。
2. 「Web ソースの作成」をクリックします。
3. 小さな Web サイトを選択して、Oracle Ultra Search のテスト・サイトとして索引を付け、それを「ソース名」フィールドに入力します。
4. 「ステップ 2 に進む」をクリックして、「Web ソースの作成: ステップ 2」ページを表示します。
5. 「ステップ 3 に進む」をクリックしてデフォルトを受け入れ、「Web ソースの作成: ステップ 3」ページを表示します。
6. 「開始アドレス」セクションで、索引付けの開始アドレスの URL を入力します。
7. 「追加」をクリックして「開始アドレス・リスト」に新規アドレスを追加します。
8. 「ステップ 4 に進む」をクリックして、「Web ソースの作成: ステップ 4」ページを表示します。
9. 「ステップ 5 に進む」をクリックしてデフォルトを受け入れ、「Web ソースの作成: ステップ 5」ページを表示します。
10. 「ステップ 6 に進む」をクリックしてデフォルトを受け入れ、「Web ソースの作成: ステップ 6」ページを表示します。
11. 「Finish」をクリックしてデフォルトを受け入れます。

新しい Web ソースが「Web ソース・リスト」に表示されます。

スケジュールの作成

スケジュールを作成するには、次のようにします。

1. 「スケジュール」タブをクリックして、「同期スケジュール」ページを表示します。
2. 「新規スケジュールの作成」をクリックして、「スケジュールの作成： ステップ 1/3」ページを表示します。
3. スケジュール名を「名前」フィールドに入力します。
4. 「ステップ 2 に進む」をクリックして、「スケジュールの作成： ステップ 2/3」ページを表示します。
5. 「ステップ 3 に進む」をクリックしてデフォルトのスケジュールを受け入れます。これにより、クロールが 1 か月に 1 回実行されるようスケジュールされます。
6. 次の操作を行うことにより、クロールするスケジュールのデータ・ソースを選択します。
 - a. 「次のタイプから使用可能なソースを取得します」ドロップダウン・リストから「Web」を選択し、「ソースの取得」をクリックします。
 - b. 13-4 ページの「Web ソースの作成」で作成したソースが、「使用可能なソース」リストに表示されます。
 - c. ソースを選択し、「>>」をクリックして「割り当てられたソース」リストに移動します。
 - d. 「完了」をクリックして「同期スケジュール」ページに戻ります。

新規スケジュールが「スケジュール」列に表示されます。

Oracle Ultra Search Crawler のスケジュール

Oracle Ultra Search Crawler をスケジュールするには、次のようにします。

1. 「ステータス」列で「スケジュール」をクリックして、「同期スケジュールのステータス」ページを表示します。
2. 「すぐに実行」をクリックして Crawler を起動します。
3. 「クローラの進行状況のサマリーおよびデータ・ソース別ログ・ファイル」セクションで、「統計」列の鉛筆アイコンをクリックして、クロールのステータスとサマリーを表示します。

鉛筆アイコンが表示されない場合は、「ステータスの更新」リンクをクリックします。
4. クロールが成功したかどうかを判断するには、「名前」列の「ドキュメントが索引付けされました」に 0 以外の値が表示されていることを確認します。

Oracle Collaboration Suite Search プロパティの設定

ドキュメントを索引付けした後で、Oracle Collaboration Suite で Search プロパティを設定する必要があります。

Oracle Ultra Search プロパティを設定するには、次のようにします。

1. Oracle Enterprise Manager を起動し、Oracle Files ドメイン・ページに移動します。
2. 「OCS Search 構成」をクリックして、「OCS Search 構成」ページを表示します。
3. 「メールの構成」に対して「はい」ラジオ・ボタンを選択します。
4. 「Ultra Search の構成」に対して「はい」ラジオ・ボタンを選択します。
5. 「Web メールベース URL」を次のように設定します。
`http://middletier_host:middletier_port/um/traffic_cop`
6. 13-3 ページの「Oracle Ultra Search Crawler の構成」で作成したデータベース・スキーマの名前を「Ultra Search スキーマ名」フィールドに入力します。
7. 13-3 ページの「Oracle Ultra Search Crawler の構成」でデータベース・スキーマに対して選択したパスワードを「Ultra Search スキーマ・パスワード」に入力し、「パスワードの確認」フィールドで確認します。
8. 13-3 ページの「Oracle Ultra Search Crawler の構成」項の手順 10 に表示される値の前に `jdbc:oracle:thin:@` を追加して「Ultra Search 接続文字列」フィールドに入力します。たとえば、`jdbc:oracle:thin:@infrastructure_host:1521:iasdb` と入力します。
9. 「適用」をクリックすると、「OCS Search 構成」が正常に更新されたことを示す確認メッセージが表示されます。
10. 「OCS Search 構成」を変更した後で、OC4J_iFS_files インスタンスを再起動する必要があります。Oracle Enterprise Manager から再起動するか、コマンドラインから次のコマンドを実行できます。

```
opmnctl restartproc gid=OC4J_iFS_files
```

電子メールを検索可能に設定

Oracle Ultra Search で電子メールを検索可能にするには、電子メールを索引付けし、HouseKeeping プロセスが電子メールのテキスト索引を定期的に同期するようにします。

この項の内容は次のとおりです。

- [電子メールの索引付け](#)
- [HouseKeeping プロセスの構成](#)

電子メールの索引付け

作成されたユーザーに対して電子メールを索引付けするには、ドメイン・レベルで次のようにします。

1. 管理者権限を持つユーザーとして Webmail クライアントにログインします。
2. 「管理」タブをクリックします。
3. 「ドメイン」タブをクリックします。
4. 「デフォルトの新規ユーザー」をクリックします。
5. 適切な「システム」および「ドメイン」をそれぞれのドロップダウン・リストから選択し、「送信」をクリックします。
6. 「メール・ユーザー索引タイプ」を「テキスト索引」に設定し、「送信」をクリックします。

ドメイン・レベルで前述の変更を行う前に作成したユーザーに対して電子メールを索引付けするには、次のように個別に行う必要があります。

注意： 新規電子メールのみ索引付けされます。「テキストの同期化」を有効にする前に送信された電子メールは索引付けされません。

1. 管理者権限を持つ電子メール管理者として Webmail クライアントにログインします。
2. 「管理」タブをクリックします。
3. 「ユーザー」タブをクリックします。
4. 「ユーザーの変更」をクリックします。
5. 既存のユーザーの検索基準を入力し、ドロップダウン・リストから適切な電子メール・ドメインを指定して、「実行」をクリックします。
6. ユーザー ID をクリックします。

7. 「メール・ユーザー索引タイプ」を「テキスト索引」に設定し、「変更」をクリックします。

HouseKeeping プロセスの構成

HouseKeeping プロセスを構成するには、次のようにします。

1. Oracle Enterprise Manager を使用して、「ハウスキーピング」ページに移動します。
2. 「作成」または「類似作成」をクリックして、新規 Oracle Email ハウスキーピング・インスタンスを作成します。
3. 新規ハウスキーピング・インスタンスをクリックしてパラメータ画面を表示し、「テキストの同期化」を「使用可能」に設定します。
4. 「ブルーニング」オプションと「コレクション」オプションを使用不可にします。
5. 「プロセス・スリープ継続時間」フィールドに、索引付けするメッセージを HouseKeeper がキューに入れる頻度（分単位）を入力します。たとえば、索引付けするメッセージを HouseKeeper が3分おきにキューに入れるようにするには、フィールドに「3」と入力します。

注意： クライアントが新規メールをチェックするのと同じ頻度（5分など）で HouseKeeper がメッセージを索引付けするよう設定してください。

6. 「実行モード」を「デーモン」に設定します。
7. 「適用」をクリックします。
8. 「ハウスキーピング」ページに戻ります。
9. 「起動」をクリックします。

継続プロセスとして、ハウスキーピングは索引付けのために Oracle Text に新規に到着したメッセージを定期的に収集します。

OC4J_iFS_files の再起動

新しい一括検索設定は、OC4J_iFS_files システム・コンポーネントが再起動されるまで使用されません。

OC4J_iFS_files システム・コンポーネントを再起動するには、次のようにします。

1. Oracle Enterprise Manager の「OCS Search 構成」ページで、サブタブ・バーの下にあるナビゲーション・パスで最初のリンクをクリックします。
2. **OC4J_iFS_files** システム・コンポーネントの横にあるラジオ・ボタンを選択します。
3. 「再起動」をクリックします。
4. 「はい」をクリックして、再起動することを確認します。
5. 「OK」をクリックして再起動メッセージを確認します。

Oracle Ultra Search のテスト

Oracle Ultra Search をテストするには、次のようにします。

1. 次の URL に移動し、「Oracle Files 検索」ウィンドウを表示します。
`http://middletier_host:middletier_port/files/app/FederatedSearch`
2. テスト・ユーザーとしてログインし、「一般検索」ページを表示します。
3. 「オブジェクト名」フィールドに、検索する名前を入力します。
4. 「コンテンツ」フィールドに、検索するコンテンツを入力します。
5. 「ユーザー名」フィールドに、検索するコンテンツの所有者名を入力します。
6. 「日付」ドロップダウン・リストから比較演算子を選択し、検索する日付文字列を関連フィールドに入力します。
7. 「場所」フィールドで「ファイル」、「Web」またはその両方を選択して、検索するソースを指定します。
8. 検索基準を入力した後で、「検索」をクリックします。

Oracle Files コンテンツまたは Oracle Email を検索するには、Oracle Ultra Search でこれらをソースとして構成します。

Oracle Files の構成

この章では、Oracle Files 構成のプロセスについて説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Files の構成プロセスの概要](#)
- [推奨のプロトコル構成](#)
- [Oracle Files の推奨およびオプションの構成前のタスク](#)
- [Oracle Files の構成](#)
- [Oracle Files の非対話型構成](#)
- [Oracle Files ランタイムの設定](#)
- [構成後の追加タスク](#)

Oracle Files の構成プロセスの概要

Oracle Files を構成し、実行するには次の手順が必要です。

1. Oracle Files Configuration Assistant を実行します。
14-8 ページの「[Oracle Files の構成](#)」を参照してください。
2. Oracle Files のプロセスを起動します。
14-33 ページの「[すべての必要なプロセスの起動](#)」を参照してください。
3. Oracle Files サブスクリバを作成します。
14-35 ページの「[Oracle Files のサブスクリバの作成](#)」を参照してください。
4. Oracle Files に orclquest として（または既存の Oracle Internet Directory ユーザーとして）ログインします。
14-39 ページの「[基本操作の検証](#)」を参照してください。

構成後のタスクの詳細は、14-31 ページの「[Oracle Files ランタイムの設定](#)」を参照してください。その他の構成後のタスクについては、14-40 ページの「[構成後の追加タスク](#)」を参照してください。

推奨のプロトコル構成

次に、Oracle Files へのアクセスに使用されるプロトコルに対するセキュリティの考慮事項を説明します。

1. FTP および AFP プロトコルは、暗号化されていないユーザー・パスワードをネットワーク上に送信します。

この動作は、これらの業界標準プロトコルで定義されています。Oracle はこの動作を制御できないため、Oracle ソフトウェアの欠陥ではありません。この動作を受け入れないようにするサイトでは、a) これらのプロトコルを無効にするか、b) これらのプロトコルに Oracle Files 固有のユーザー・パスワードを使用するよう Oracle Files を構成して、FTP または AFP パスワードのセキュリティに問題が発生する場合でもユーザーの Oracle9iAS Single Sign-On パスワードのセキュリティに問題が発生しないようにする必要があります。

Oracle Files 固有のパスワードを設定するには、Oracle Files の「パスワード・ユーザー設定」ページを使用します。詳細は、Oracle Files のオンライン・ヘルプを参照してください。

2. HTTP/DAV プロトコルでは、Basic（非暗号化）認証と Digest（暗号化）認証の両方を使用できます。

Basic 認証は、HTTP/DAV が SSL を使用していないかぎり、暗号化されていないユーザー・パスワードをネットワーク上に送信します。Apache 構成（Oracle Files 構成から別途実行されます）により、HTTP/DAV が SSL を使用するかどうかが決まります。

HTTP/DAV の Basic 認証の使用を考慮するサイトでは、SSL を使用するよう Apache を構成する必要があります。

3. HTTP/DAV、FTP、SMB、AFP、NTFS および NFS プロトコルは、デフォルトではネットワーク・チャンネルを暗号化しません。

これらのプロトコルを使用して転送されたファイルは、インターセプトされる可能性があります。この動作は、これらのプロトコルで定義されています。Oracle はこの動作を制御できないため、Oracle ソフトウェアの欠陥ではありません。この動作を受け入れないようにするサイトでは、これらのプロトコルを無効にし、SSL を使用するよう Apache を構成する (HTTP/DAV のみ) 必要があります。
4. Oracle9iAS Single Sign-On ではなく Oracle Files の Web ユーザー・インタフェースの HTML 形式を使用して認証が実行された場合は、Apache が SSL を使用するよう構成されていないかぎり、暗号化されていないパスワードがネットワーク上に送信されます。
5. Oracle Enterprise Manager を使用して Oracle Files を管理するには、HTML 形式を使用してユーザーを認証します。Oracle Enterprise Manager を SSL 用に構成していないかぎり、暗号化されていないパスワードがネットワーク上に送信されます。
6. デフォルトでは、JDBC は Oracle Files プロセスと Oracle9i データベース間のネットワーク接続を暗号化しません。このため、転送されるパスワードとファイルはインターセプトされる可能性があります。a) Oracle Files を実行している中間層マシン (存在する場合) 間のネットワーク接続を保護するか、b) Oracle Advanced Security を使用してこれらの接続を暗号化してください。
7. ユーザー認証に Oracle Internet Directory を使用するよう Oracle Files を構成する場合は、Oracle Files と Oracle Internet Directory 間の接続に SSL を使用するかどうかを管理者が選択する必要があります。SSL が使用されていない場合は、暗号化されていないパスワードが Oracle Files プロセスと Oracle Internet Directory の間のネットワーク接続上で送信されることがあります。a) Oracle Files と Oracle Internet Directory の間のネットワーク接続を保護するか、b) SSL を使用します。

Oracle Files の推奨およびオプションの構成前のタスク

インストール・プロセスの一部として Oracle Files を構成することを選択した場合、Oracle Files Configuration Assistant は自動的に起動し、Oracle Files スキーマに使用される Oracle データベースを識別するプロセスおよびその他の様々な構成タスクを示します。

Oracle Files を構成する前に、計画している配置に応じて、完了する必要がある構成前のタスクがいくつかあります。これらのタスクのいずれかを実行するには、Oracle Universal Installer で「Oracle Files」チェックボックスのチェックを外して Oracle Files Configuration Assistant の起動を停止するか、Oracle Files Configuration Assistant 起動時に起動を取り消します。

目的の構成前のタスクを実行した後で、Oracle Files Configuration Assistant を再び実行して Oracle Files を構成できます。

この項の内容は次のとおりです。

- [カスタム表領域の作成（推奨）](#)
- [Real Applications Clusters データベースを使用するための Oracle Files の設定（オプション）](#)

[表 14-1](#) に、推奨およびオプションの構成前のタスクを示し、そのタスクが Oracle Files の配置に必要なかどうかの判断に役立つ情報を提供します。

表 14-1 Oracle Files のオプションの構成前のタスク

オプションの構成前のタスク	目的
カスタム表領域の作成（推奨） このタスクの手順は 14-6 ページから開始します。	本番環境では、システムを構成する様々な表と索引のカスタム表領域を作成することをお勧めします。 カスタム表領域の作成を選択した場合は、Oracle Files を構成する前に作成する必要があります。Oracle Files を構成した後でカスタム表領域を作成することはできません。
Real Applications Clusters データベースを使用するための Oracle Files の設定（オプション） このタスクの手順は 14-7 ページから開始します。	Oracle Files の初期配置で Real Application Clusters データベースを使用することがわかっている場合は、Oracle Files を構成する前にこの構成前のタスクを実行することをお勧めします。

表 14-2 に、Oracle Files の構成および使用方法の追加情報を示します。

表 14-2 Oracle Files の構成および実行に関する重要情報

トピック	場所
Oracle Internet Directory でのユーザーの作成	14-36 ページの「 Oracle Internet Directory でのユーザーの作成 」
Oracle Files でのユーザーのプロビジョニング	14-36 ページの「 Oracle Internet Directory でのユーザーの作成 」および『Oracle Files 管理者ガイド』
Oracle Files と Oracle Workflow の統合	14-40 ページの「 Oracle Files と Oracle Workflow の統合 (オプション) 」
Oracle Enterprise Manager が必要な Oracle Files の構成タスク	『Oracle Files 管理者ガイド』
Oracle Files のサイト管理者およびサブスクライバ管理者情報	14-35 ページの「 Oracle Files のサブスクライバの作成 」、『Oracle Files 管理者ガイド』および Oracle Files オンライン・ヘルプ
NFS サーバーの構成	『Oracle Files 管理者ガイド』
Oracle FileSync クライアントのインストール	『Oracle Files 管理者ガイド』
その他のクライアント・アクセス・パスおよびソフトウェア	『Oracle Files 管理者ガイド』
「Portal へ戻る」リンクの作成	14-50 ページの「 Oracle Files Web UI への「Portal へ戻る」リンクの追加 (必須) 」
NTFS サーバーの設定	14-51 ページの「 NTFS プロトコル・サーバーの構成 (オプション) 」
Windows ユーザーによるネットワーク・ドライブとしての Oracle Files のマップの可能化	14-53 ページの「 Windows ユーザーによるネットワーク・ドライブとしての Oracle Files のマップの可能化 (オプション) 」

カスタム表領域の作成（推奨）

Oracle Files 構成中に、すべてのスキーマ・オブジェクトを USERS 表領域とカスタム表領域のどちらに格納するかを選択する必要があります。本番環境では、USERS 表領域は最適ではありません。Oracle Files を構成する前に、システムを構成する様々な表と索引（表 14-3 を参照）のカスタム表領域を作成することをお勧めします。

Oracle Files のカスタム表領域を作成するには、表領域を **ローカル管理表領域** として作成することをお勧めします。

ローカル管理表領域は、ビットマップを使用してすべてのエクステント情報を表領域自体で追跡するため、スペース割当てが単純化され、管理が簡単になり、パフォーマンスが向上します。

ローカル管理表領域は Oracle8i 以上で使用可能であり、Oracle9i データベース・サーバーからは、エクステント管理のタイプが明示的に指定されているかどうかにかかわらず、ローカル管理は SYSTEM 以外のすべての永続表領域のデフォルトになります。

SQL 構文の例は次のとおりです。

```
CREATE TABLESPACE "tbspname"
  LOGGING
  DATAFILE 'D:\%oradata%\sidname\tbspname_01.dbf' SIZE 50M EXTENT
  MANAGEMENT LOCAL
```

この例では、EXTENT MANAGEMENT LOCAL 句はデフォルトですが、完全な構文はセグメント、エクステントおよびその他のサイズ設定パラメータを指定する必要がないことを強調するために示されているため、この句は無関係です。

- ローカル管理カスタム表領域を作成する場合は、デフォルト・オプションをお勧めします。具体的には、ほぼすべての Oracle Files データが LOB として格納されますが、AUTO SEGMENT SPACE MANAGEMENT は LOB をサポートしないため、表領域の自動セグメント領域管理は指定しないでください。（デフォルトのセグメント領域管理のタイプは「手動」です。デフォルトでは、ローカル管理表領域は Oracle Files で使用するよう正しく作成されます。）
- 実装に適したディスクの記憶域にカスタム表領域を作成します。詳細は、『Oracle9i データベース・パフォーマンス・チューニング・ガイドおよびリファレンス』を参照してください。

表 14-3 には、カスタム表領域の追加情報が示されています。この表を使用して、作成するカスタム表領域の名前と詳細をメモできます。

表領域の作成およびローカル管理表領域の詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド Vol.1』を参照してください。

表 14-3 Oracle Files のカスタム表領域定義

表領域	説明（デフォルト・サイズ）	使用するカスタム表領域名
プライマリ	ドキュメントのメタデータ、ユーザーとグループに関する情報およびその他の Oracle Files オブジェクト・データを格納します。(50MB)	
索引付けされていないメディア	Oracle Text により索引付けされていない、Zip ファイルなどのドキュメントの LOB データを格納します。(50MB)	
索引付けされたメディア	Oracle Text により索引付けされている、テキストや文書処理ファイルなどのドキュメントの LOB データを格納します。(50MB)	
<i>interMedia</i> メディア	Oracle <i>interMedia</i> により索引付けされている、イメージ、オーディオ、ビデオ・ファイルなどのドキュメントの LOB データを格納します。(50MB)	
Oracle Text 索引	Oracle Text トークン表を格納します。(50MB)	
Oracle Text キー・マップ	Oracle Text トークン表に対する索引を格納します。(50MB)	
Oracle Text データ	その他の Oracle Text 表を格納します。(150MB)	

Real Applications Clusters データベースを使用するための Oracle Files の設定 (オプション)

構成前または構成後のいつでも、Real Application Clusters データベースに対して Oracle Files を実行することを選択できます。

ただし、初期 Oracle Files 配置用の Real Application Clusters データベースを指すことがわかっている場合は、次の構成前の手順を実行して、Oracle Files 構成プロセス中に Real Application Clusters データベースを指定できます。完了する必要がある追加の構成後のタスクがあることに注意してください。

重要： Real Application Clusters を使用するには、Oracle Files の構成をターゲット Real Application Clusters 構成の特定のノードに対して実行する必要があります、Oracle Files 構成プロセス中はこのノードでロード・バランシングを無効にする必要があります。

1. Real Application Clusters データベースで次のシステム・パラメータを設定します。
MAX_COMMIT_PROPAGATION_DELAY=1
2. JOB_QUEUE_PROCESSES パラメータの値が 10 以上に設定されていることを確認します。

- 3. Oracle Files で使用される各 Oracle ホームのロード・バランシングおよび接続フェイルオーバー・オプションについて、TNS エントリを tnsnames.ora ファイルに作成します。これらのオプションに対する TNS エントリ作成の詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters 管理』を参照してください。
- 4. Oracle Files を構成し、Oracle Files Configuration Assistant の「データベースの選択」画面で Real Application Clusters データベースの名前を指定します。
- 5. 必要な構成後の手順を実行します。

詳細は、14-48 ページの「[Real Application Clusters データベースで Oracle Files を使用するための構成後の手順（オプション）](#)」を参照してください。

Oracle Files の構成

Oracle Files Configuration Assistant は、Oracle Universal Installer により自動的に起動され、[表 14-4](#) に示す構成オプションを示します。Oracle Files Configuration Assistant は、常に、「Oracle Files CA - ようこそ」画面から開始します。

Oracle Files Configuration Assistant を使用して、各画面で選択を行い、「次へ」をクリックして続行します。「取消」をクリックしてアシスタントを停止し、次の場所に存在する ifasca.bat を実行することにより、後で Oracle Files を構成することもできます。

```
%ORACLE_HOME%\ifs\files\bin
```

[表 14-4](#) に、実行できる構成のタイプを説明します。

表 14-4 Configuration Assistant のオプション

構成タイプ	説明	関連項目
新しい Oracle Files ドメインの作成	データベースに新しい Oracle Files スキーマを作成します。コンピュータを ドメイン の中間層として含めるために必要なソフトウェアを構成します (オプション)。	14-9 ページの「 新しい Oracle Files ドメインの作成 」
既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定	既存のドメインと統合するために、システム上に Oracle Files ソフトウェアを構成します。中間層を追加する場合はこのオプションを選択します。	14-27 ページの「 既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定 」

Oracle Files Configuration Assistant の処理過程を監視するために、次のファイルに書き込まれるログを表示できます。

```
%ORACLE_HOME%\ifs\files\log\FilesConfig.log
```


新しい Oracle Files ドメインの作成

この項では、Oracle Files ドメインのコントローラ・コンピュータを構成する手順を示します。通常、このコンピュータは、構成するドメイン内の最初のコンピュータです。

手順は Oracle Files Configuration Assistant の「ようこそ」画面から開始します。

1. 「次へ」をクリックします。
「ドメイン操作」画面が表示されます。

図 14-1 「ドメイン操作」画面

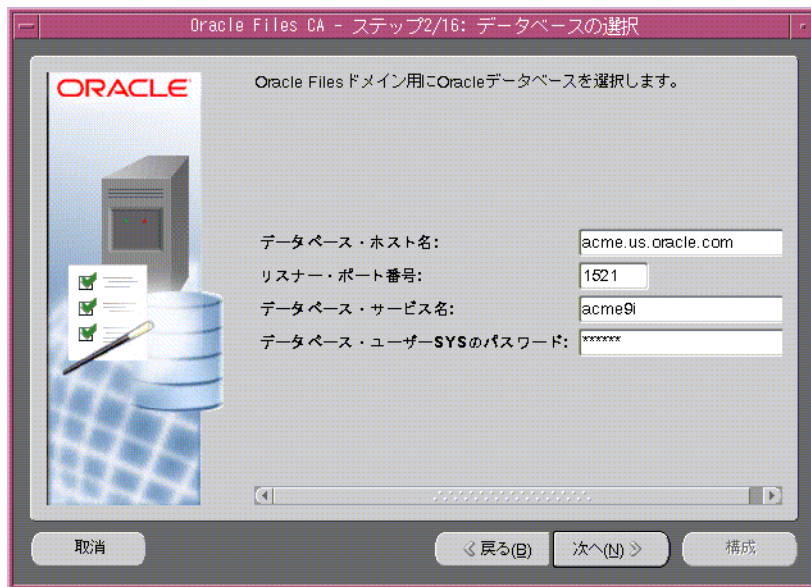


2. 「新規 Oracle Files ドメインの作成」オプションを選択します。

重要： Oracle Files スキーマを Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) にアップグレードする場合は、「ドメイン操作」画面で「既存の Oracle Files ドメインを使用するように設定」を選択し、14-27 ページの「[既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定](#)」の手順を参照する必要があります。

3. 「次へ」をクリックします。
「データベースの選択」画面が表示されます。

図 14-2 「データベースの選択」画面



4. データベースが実行されているホストの名前、リスナーのポート番号、データベース・サービス名およびデータベースの SYS ユーザー・アカウントのパスワードを入力します。
5. 「次へ」をクリックします。

「データベース・ログインの検証」メッセージ・ボックスが表示され、CLASSPATH、Oracle9i データベースへのデータベース接続、初期化パラメータ、Oracle JServer のインストールおよびその他の重要な要件が検証されます。

エラーが発生した場合は（たとえば、JServer がデータベースにインストールされていない場合は、DBMS_JAVA パッケージに関連するエラー・メッセージが表示されます）、Oracle Files 構成プロセスを取り消し、エラーを修正した後で、次の場所から ifscs.bat を実行することにより Oracle Files Configuration Assistant を再起動する必要があります。

```
%ORACLE_HOME%\ifscs\files\bin
```

Oracle Files Configuration Assistant はデータベース文字列を使用して SYS AS SYSDBA として接続の確立を試行するため、データベースがパスワード・ファイルを使用して構成されている必要があります。次のエラー・メッセージが表示される場合は、データベース・サーバーにパスワード・ファイルがない可能性があります。

Oracle ユーザー SYS のパスワードが無効です。

関連資料： パスワード・ファイル管理の詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。

さらにエラーが発生する場合、検証に失敗した原因の詳細を次の場所にある FilesConfig.log ファイルで確認できます。

```
%ORACLE_HOME%\rfs\files\log\FilesConfig.log
```

検証プロセスが完了すると、「スキーマ名」画面が表示されます。

図 14-3 「スキーマ名」画面



6. Oracle Files スキーマに使用する名前を入力します。さらに、スキーマのパスワードを指定する必要があります。確認のため 2 つのフィールドにパスワードを入力します。

7. 「次へ」をクリックします。

Oracle Files Configuration Assistant により、このスキーマ名がデータベースに存在するかどうかを確認されます。このスキーマ名が存在する場合、またはこのスキーマ名に基づく関連スキーマ名が存在する場合は、さらに明確化を要求するメッセージ・ボックスが表示されます。

8. このメッセージ・ボックスで、次のいずれかの操作を実行します。

- 「スキーマ名」画面に戻り、スキーマの新しい名前を入力するには、「いいえ」をクリックします。
- このスキーマ、および表やビューなどの関連するすべてのオブジェクトをデータベースから削除して新しいスキーマを作成する場合は、「はい」をクリックします。

注意： このスキーマ、および関連するすべてのオブジェクトをデータベースから削除して新しいスキーマを作成する必要がある場合以外は、「はい」をクリックしないでください。Oracle Files をアップグレードする場合は、Configuration Assistant を終了し、ocsua.bat を実行します。14-27 ページの「[既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定](#)」の手順に従います。

メッセージ・ボックスを閉じると「表領域」画面が表示されます。

図 14-4 「表領域」画面



9. 次のいずれかのオプションを選択します。

- Oracle Files のコンテンツ用に作成されたカスタム表領域が存在しない場合は、「すべての Oracle Files データに USERS 表領域を使用」を選択します。

重要： 本番システムを構成している場合は、Oracle Files のカスタム表領域を作成することをお勧めします。構成前の手順としてカスタム表領域を作成します。詳細は、14-6 ページの「カスタム表領域の作成 (推奨)」を参照してください。

- Oracle Files コンテンツ専用に作成された表領域が存在する場合、「各データ・タイプの表領域を指定」を選択し、ドロップダウン・リストから各コンテンツのタイプに使用する表領域を選択します。各データ・タイプ用に選択できる表領域が存在している必要があります。Oracle Files Configuration Assistant では表領域は作成されません。

10. 「次へ」をクリックします。「キャラクタ・セットおよび言語」画面が表示されます。

図 14-5 「キャラクタ・セットおよび言語」画面



11. Oracle Files にドキュメントを格納する際に使用するデフォルトのキャラクタ・セットおよび索引付け言語を選択します。ドキュメントのキャラクタ・セットのデフォルトは、Oracle Files に転送されるドキュメントの言語またはキャラクタ・セットを指定しないクライアント・アプリケーションにより使用されます。デフォルトのキャラクタ・セットは、FTP や WebDAV などの、Unicode 対応ではないプロトコルでも、これらのプロトコル・サーバーで使用するキャラクタ・セットを判別するために使用されます。

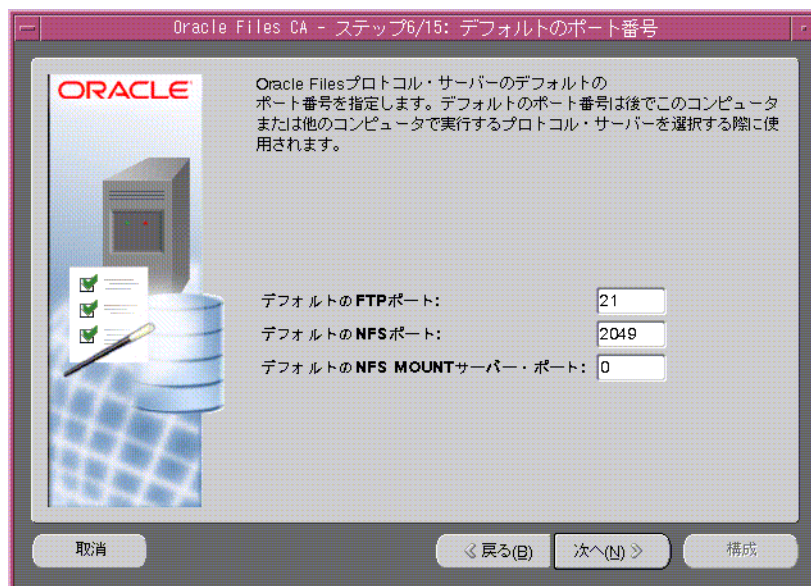
キャラクタ・セットは、Oracle Files ドメインのユーザーの大多数が使用しているキャラクタ・セットに設定することをお勧めします。

関連資料： 詳細は、『Oracle Text リファレンス』の「レクサー型」を参照してください。

12. 「次へ」をクリックします。

「デフォルトのポート番号」画面が表示されます。デフォルトのポート番号の設定は、Oracle Files スキーマを使用するすべての中間層コンピュータにより使用されるオブジェクトとして格納されます。Oracle Files の構成後に単一の中間層コンピュータ上で構成を変更するには、Enterprise Manager Web Site を使用する必要があります。

図 14-6 「デフォルトのポート番号」画面



13. 必要に応じて、ポート番号を変更します。

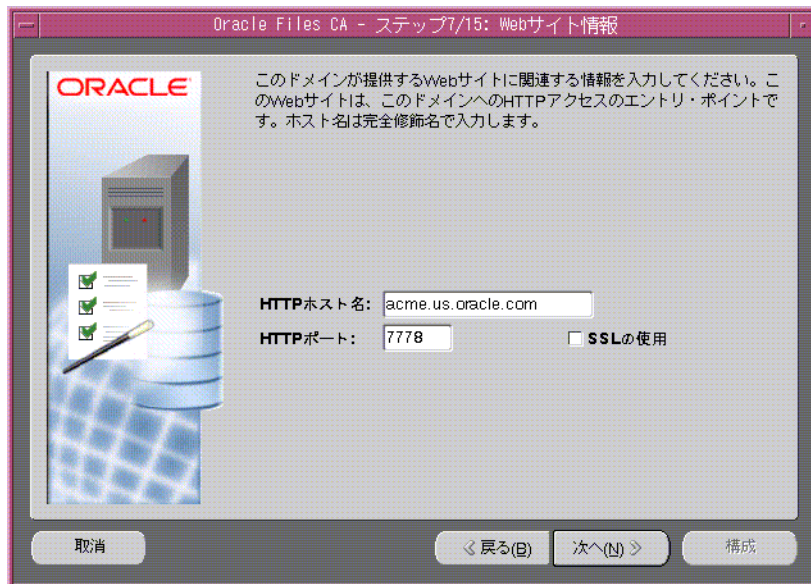
- NFS プロトコル・サーバーのメイン・ポートを変更する場合は、MOUNT サーバー・ポートを 0 以外の番号に変更する必要があります。0 という値は、MOUNT サーバー・ポートの番号がポート・マップパーにより動的に割り当てられる必要があることを示すため、NFS プロトコル・サーバーが標準の NFS ポート番号である 2049 上に存在する場合のみに使用する必要があります。

関連資料： NFS プロトコル・サーバーの設定の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

14. 「次へ」をクリックします。

「Web サイト情報」画面が表示されます。

図 14-7 「Web サイト情報」画面



Oracle Files CA - ステップ7/15: Webサイト情報

このドメインが提供するWebサイトに関連する情報を入力してください。このWebサイトは、このドメインへのHTTPアクセスのエントリ・ポイントです。ホスト名は完全修飾名で入力します。

HTTPホスト名:

HTTPポート: ☐ SSLの使用

取消 < 戻る(B) 次へ(N) > 構成

15. 次の情報を入力します。

- **HTTP ホスト名:** ドメインによる HTTP リスナー・サービスの提供に使用するコンピュータの完全修飾されたホスト名およびポート番号を入力します。この情報は、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール時に入力した値と一致している必要があります。
- **HTTP ポート:** HTTP ポートの値を入力します。ポート情報は、次のファイルにあります。

```
%ORACLE_HOME%\install\portlist.ini
```

たとえば、次のようにします。

- 4443: SSL を構成し、Oracle9iAS Web Cache を使用しない場合は、この値を入力します。
- 4444: SSL を構成し、Oracle9iAS Web Cache を使用する場合は、この値を入力します。
- 7777: SSL を構成せず、Oracle9iAS Web Cache を使用しない場合は、この値を入力します。
- 7778: SSL を構成せず、Oracle9iAS Web Cache を使用する場合は、この値を入力します。

- **SSL の使用：** コンピュータ上に SSL が構成されている場合にのみ選択します。

注意： 中間層の前にロード・バランサがある場合は、ホスト名とポート番号がロード・バランサのホスト名およびポート番号と一致している必要があります。

関連資料： SSL の使用の詳細は、『Oracle9i Application Server セキュリティ・ガイド』を参照してください。

16. 「次へ」をクリックします。
「SMTP 情報」画面が表示されます。

図 14-8 「SMTP 情報」画面



17. 電子メール・サーバー情報を入力します。これには、任意の有効な SMTP サーバー名を使用できます。SMTP サーバーの完全なホスト名を、`hostname.domain` の形式で入力します。または、SMTP サーバーの IP アドレスを入力することもできます。

この情報は、サブスクライバ管理者にパスワードに関する電子メールを送信し、ユーザーに Oracle Files アカウント・プロビジョニングに関する電子メールを送信する場合に使用されます。

重要： サブスクライバ管理者がパスワードを受信し、アカウントがプロビジョニングされた際にユーザーが通知を受けるためには、この情報が適切である必要があります。情報が正しくない場合、サブスクライバ管理者は Oracle Files にログインできず、ユーザーはアカウントがプロビジョニングされたことを知るできません。

注意： Oracle Files を構成した後にこの情報を変更する場合は、次の処理を行う必要があります。

- Oracle Enterprise Manager を介して FilesBaseServerConfiguration サーバー構成オブジェクトの IFS.SERVER.APPLICATION.UIX.Smtphost プロパティを編集します。OC4J_ifs_files インスタンスを再起動する必要があります。
 - 「サブスクライバ名」 ページでパスワードを再設定します（詳細は、14-35 ページの「[Oracle Files のサブスクライバの作成](#)」を参照してください）。
-
-

18. 「次へ」をクリックします。

「管理者情報」画面が表示されます。

図 14-9 「管理者情報」画面



19. 通知やその他のメッセージを Oracle Files の `site_admin` ユーザーに送信するために使用する完全修飾電子メール・アドレスを入力します。
20. 「次へ」をクリックします。

「ユーザー」画面が表示されます。Oracle Files Configuration Assistant は、`system`、`guest` および `site_admin` の 3 つの新規ユーザーを作成します。サイト管理者は、Oracle Files に [サブスクライバ](#)を作成するために使用されます。

図 14-10 「ユーザー」画面

Oracle Filesは、"system"、"guest"および"site_admin"という名前のユーザーが必要です。各ユーザーのパスワードを入力してください。

Filesユーザー	パスワード	パスワードの確認
System	*****	*****
Guest	*****	*****
site_admin	*****	*****

取消 < 戻る(B) 次へ(N) > 構成

21. それぞれのデフォルト・ユーザーにパスワードを割り当てます。
 site_admin ユーザーは、構成後の Oracle Files サブスクライバの作成に必要です。
22. 「次へ」をクリックします。
 Oracle Internet Directory の「ログイン」画面が表示されます。

図 14-11 Oracle Internet Directory の「ログイン」画面

Oracle Filesは、ディレクトリ・サービスを使用してOracle Filesユーザーのパスワードを格納し、ユーザー認証を行います。この構成の一部として、Oracle Filesディレクトリ・サービスとOracle Internet Directory(OID)が作成されます。Oracle Filesの資格証明マネージャとして構成するOIDサーバーのログイン情報を入力してください。

サーバー:

ポート: ☐ SSLの使用

スーパー・ユーザー:

スーパー・ユーザー・パスワード:

ルート Oracle コンテキスト:

取消 < 戻る(B) 次へ(N) > 構成

23. 資格証明の管理に使用する Oracle Internet Directory インスタンスに関するログイン情報を入力します。次の情報を入力します。

- **サーバー**： Oracle Internet Directory を実行するコンピュータの完全修飾**ホスト名**を入力します。
- **ポート**： Oracle Internet Directory サーバーがリスニングしているポート番号を入力します。
 - 通常、ポート番号は、389 です。インストール時にポート 389 が使用不能な場合は、ポート 4032 が使用されます。
 - Oracle Internet Directory 上で SSL を有効にしている場合は、「SSL の使用」を選択し、ポート番号を変更します。通常は、SSL 対応の Oracle Internet Directory のデフォルトのポート番号は、636 または 4031 です。

関連資料： SSL とともに使用するための Oracle Internet Directory の設定の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

- **スーパー・ユーザー**: Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー名を入力します。

Oracle Internet Directory のデフォルトのスーパー・ユーザー名は、cn=orcladmin です。

- **スーパー・ユーザー・パスワード**: Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー・パスワードを入力します。

パスワードは、Oracle Internet Directory のインストール時に入力したパスワードです。

- **ルート Oracle コンテキスト**: ルート **Oracle コンテキスト**を入力します。

Oracle Internet Directory のデフォルトのルート Oracle コンテキストは、cn=OracleContext に設定されます。通常、設定を変更する必要はありません。Oracle Internet Directory の管理者がルート・コンテキストを変更している場合は、正しい値を入力する必要があります。ルート・コンテキストの概念は、LDAP ディレクトリ・サービス固有のものです。

24. 「次へ」をクリックします。

「ローカル・マシンの設定」画面が表示されます。

図 14-12 「ローカル・マシンの設定」画面



25. 次のいずれかのオプションを選択します。
- 「はい」を選択して Oracle Files スキーマを作成し、ドメイン・コントローラ、ノードまたは HTTP ノードを実行するようこのホストを構成します。
 - 「いいえ」を選択し、このホストを構成せずに新規スキーマを作成します。
26. 「次へ」をクリックします。
- 「ドメインのコンポーネント」画面が表示されます。

図 14-13 「ドメインのコンポーネント」画面



27. Oracle Files に使用する完全修飾ホスト名を入力します。コンピュータに複数のネットワーク・インタフェース・カード (NIC) が取り付けられている場合は、ホスト・コンピュータの IP アドレスを入力します。
28. 「このコンピュータでドメイン・コントローラを実行」およびドメインに構成する他のすべてのプロセスを選択します。デフォルトでは、次のプロセスがこの画面で選択されています。
- 「このコンピュータでドメイン・コントローラを実行」をチェックすると、Oracle Files ドメイン・コントローラ・プロセスが構成されます。このプロセスは、1 つのコンピュータのみで実行する必要があります。

- 「このコンピュータでノードを実行」をチェックすると、このコンピュータ上で実行するよう Oracle Files ノードが構成されます。プロトコル・サーバーとエージェントはこのノードで実行されます。
- 「このコンピュータで HTTP ノードを実行」をチェックすると、このコンピュータ上で HTTP および WebDAV アクセス用の Oracle Files DAV サーバーを実行するよう HTTP ノードが構成されます。

29. 「次へ」をクリックします。

「ノード構成」画面が表示されます。この画面には、ドメイン内で実行するために選択可能なすべてのプロトコル・サーバーおよびエージェントが表示されます。

- 「ノード名」は、ノードを識別する名前です。ノード名にはコンピュータの名前（ホスト名）を含めることができますが、必須ではありません。名前はこのドメイン上のすべてのノードにわたって一意である必要があります。
- 「Oracle Files エージェントを実行」をチェックすると、すべての Oracle Files システム・エージェントがこのコンピュータ上で実行されるように構成されます。エージェントはドメイン内の 1 つのノード上のみで実行されることに注意してください。エージェントが別のノードで実行されるように構成されている場合、このチェックボックスのチェックを外す必要があります。
- 「プロトコル・サーバーを実行」をチェックすると、Oracle Files プロトコル・サーバーがこのコンピュータ上で実行されるように構成されます。プロトコル・サーバーには、FTP、AFP、NFS および NTFS が含まれます。

関連資料：『Oracle Files 管理者ガイド』の第 1 章「Oracle Files の概要」を参照してください。

図 14-14 「ノード構成」画面



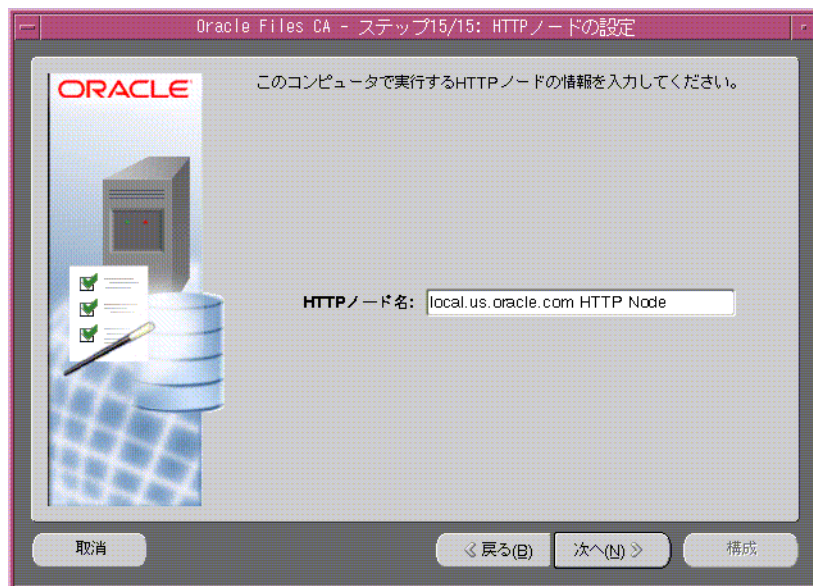
30. ノード名を入力し、プロトコル・サーバーとエージェントを必要に応じて構成します。

31. 「次へ」をクリックします。

「ドメインのコンポーネント」画面で「このコンピュータで HTTP ノードを実行」をチェックした場合、「HTTP ノードの設定」画面が表示されます。この画面では、HTTP ノードを識別する名前を指定できます。手順 32 に進みます。

それ以外の場合は、「サマリー」画面が表示されます。手順 34 に進みます。

図 14-15 「HTTP ノードの設定」画面



32. HTTP ノードの名前を入力します。

「HTTP ノード名」は、HTTP ノードを識別する名前です。ノード名にはコンピュータの名前（ホスト名）を含めることができますが、必須ではありません。名前はこのドメイン上のすべてのノードにわたって一意である必要があります。

33. 「次へ」をクリックします。

「サマリー」画面が表示されます。この時点で、Oracle Files Configuration Assistant は、新しい Oracle Files スキーマを作成し、ノードおよびその他のプロセスを構成するために必要なすべての情報が設定されています。ログ・ファイルの名前と場所、およびこの画面に表示されるその他の重要な情報を確認してください。

34. 「構成」をクリックして、構成プロセスを実行します。

進捗ウィンドウが表示されます。エラーが発生した場合、次のログ・ファイルで詳細を確認します。

```
%ORACLE_HOME%\ifs\files\log\FilesConfig.log
```

プロセスが完了すると、構成が正常に終了したことを示すメッセージが表示されます。「OK」をクリックしてメッセージを閉じます。Oracle Files と Oracle Enterprise Manager Web Site が自動的に統合されます。

Oracle Files Configuration Assistant が Oracle Universal Installer により起動された場合は、他のすべての構成ツールが実行されます。

既存のドメインを使用するためのコンピュータの設定

この項では、既存のドメインを使用するようにコンピュータを設定するプロセスを示します。これらの手順は、Oracle Files スキーマを Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) にアップグレードする場合、または既存の Oracle Files ドメインに Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を追加する場合に実行します。

手順は Oracle Files Configuration Assistant の「ようこそ」画面から開始します。

1. 「次へ」をクリックして、構成プロセスを開始します。
「ドメイン操作」画面が表示されます。
2. 「既存の Oracle Files ドメインを使用するように設定」オプションを選択し、「次へ」をクリックします。
「データベースの選択」画面が表示されます。
3. データベースが実行されているホストの名前（データベース・ホスト名）、リスナーのポート番号、データベース・サービス名およびデータベースの SYS ユーザー・アカウントのパスワードを入力します。
4. 「次へ」をクリックします。

「データベース・ログインの検証」メッセージ・ボックスが表示され、CLASSPATH、Oracle データベースへのデータベース接続、初期化パラメータ、Oracle JServer のインストールおよびその他の重要な要件が検証されます。

エラーが発生した場合、構成を続行するには問題を修正する必要があります。たとえば、データベースに Oracle JVM がインストールされていない場合、DBMS_JAVA パッケージに関連するエラー・メッセージが表示されます。

さらにエラーが発生する場合、検証に失敗した原因の詳細を次の場所にある FilesConfig.log ファイルで確認できます。

```
%ORACLE_HOME%\ifs\files\log\FilesConfig.log
```

検証プロセスが完了すると、「スキーマ名」画面が表示されます。

5. 既存の Oracle Files ドメインのスキーマ名をリストから選択し、スキーマ・パスワードを入力します。

重要： Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の既存の Oracle Files スキーマの名前を選択し、このスキーマを Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) にアップグレードしていない場合は、ダイアログ・ボックスに次のテキストが表示されます。

「Oracle Collaboration Suite Files リリース 1 のスキーマが選択されています。このスキーマに対して Oracle Files を構成するためには、その前に Oracle Collaboration Suite Files リリース 2 のスキーマにアップグレードする必要があります。アップグレードするには、構成処理を中止して Oracle Collaboration Suite Upgrade Assistant を実行します。Oracle Files Configuration Assistant で新規スキーマ情報を入力して、他のスキーマを選択することもできます。」

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) への Oracle Files スキーマのアップグレード手順は、3-34 ページの「[Oracle Files のアップグレード後のタスク](#)」を参照してください。

6. 「次へ」をクリックします。

データベース接続とスキーマの確認後、「ドメインのコンポーネント」画面が表示されます。

7. Oracle Files に使用するホスト名を入力します。コンピュータに複数のネットワーク・インタフェース・カード (NIC) が取り付けられている場合は、ホスト・コンピュータの IP アドレスを入力します。
8. 「このコンピュータでドメイン・コントローラを実行」およびこのコンピュータ上で実行するよう構成する他のすべてのプロセスを選択します。デフォルトでは、次のプロセスが選択されています。
 - 「このコンピュータでドメイン・コントローラを実行」をチェックすると、Oracle Files ドメイン・コントローラ・プロセスが構成されます。このプロセスは、1 つのコンピュータのみで実行する必要があります。既存のスキーマを再使用するには、このボックスのチェックを外します。ドメイン・コントローラが別のノードですすでに実行されている場合は、ドメイン・コントローラをこの中間層に移動する場合にのみ、このボックスをチェックしたままにしておきます。
 - 「このコンピュータでノードを実行」をチェックすると、このコンピュータ上で実行するよう Oracle Files ノードが構成されます。このオプションは、この中間層でプロトコル・サーバーまたはエージェントを実行する場合にのみ選択します。
 - 「このコンピュータで HTTP ノードを実行」をチェックすると、このコンピュータ上で HTTP および WebDAV アクセス用の Oracle Files DAV サーバーを実行するよう HTTP ノードが構成されます。

9. 「次へ」をクリックします。

「ノード構成」画面が表示されます。

「ノード構成」画面には、ドメイン内で実行するために選択可能なすべてのプロトコル・サーバーおよびエージェントが表示されます。

- 「ノード名」は、ノードを識別する名前です。ノード名にはコンピュータの名前（ホスト名）を含めることができますが、必須ではありません。ユーザーが識別可能な任意の文字列を使用します。
- 「Oracle Files エージェントを実行」をチェックすると、すべての Oracle Files システム・エージェントがこのコンピュータ上で実行されるように構成されます。エージェントはドメイン内の 1 つのノード上のみで実行されることに注意してください。エージェントが別のノードで実行されるように構成されている場合、このチェックボックスのチェックを外す必要があります。このボックスがチェックされている場合は、他のノードで実行されているエージェントが非アクティブになり、このノードで有効になります。既存の Oracle Files スキーマをアップグレードする場合、このボックスのチェックを外す必要があります。
- 「プロトコル・サーバーを実行」をチェックすると、Oracle Files プロトコル・サーバーがこのコンピュータ上で実行されるように構成されます。プロトコル・サーバーには、FTP、AFP、NFS および NTFS が含まれます。

関連資料：『Oracle Files 管理者ガイド』の第 1 章「Oracle Files の概要」を参照してください。

10. ノード名を入力し、プロトコル・サーバーとエージェントを必要に応じて構成します。

11. 「次へ」をクリックします。

「ドメインのコンポーネント」画面で「このコンピュータで HTTP ノードを実行」をチェックした場合、「HTTP ノードの設定」画面が表示されます。この画面では、HTTP ノードを識別する名前を指定できます。手順 12 に進みます。

それ以外の場合は、「サマリー」画面が表示されます。手順 14 に進みます。

12. HTTP ノードの名前を入力します。

「HTTP ノード名」は、HTTP ノードを識別する名前です。ノード名にはコンピュータの名前（ホスト名）を含めることができますが、必須ではありません。ユーザーが識別可能な任意の文字列を使用します。

13. 「次へ」をクリックします。

「サマリー」画面が表示されます。この時点で、Oracle Files Configuration Assistant には、コンピュータの構成に必要なすべての情報が含まれています。ログ・ファイルの名前と場所、およびこの画面に表示されるその他の重要な情報を確認してください。

14. 「構成」をクリックして、構成プロセスを実行します。

進捗ウィンドウが表示されます。エラーが発生した場合、次のログ・ファイルで詳細を確認します。

```
%ORACLE_HOME%\ifs\files\log\FilesConfig.log
```

15. プロセスが完了すると、初期構成が正常に終了したことを示すメッセージが表示されます。「OK」をクリックしてメッセージを閉じます。

Oracle Files Configuration Assistant が Oracle Universal Installer により起動された場合は、他の構成ツールが起動します。

注意： 以前に作成したスキーマを再使用するように Oracle Files を構成した後、次の Oracle Files Base Server の構成プロパティを適切なコンピュータを指すように編集する必要があります。

```
IFS.SERVER.APPLICATION.UIX.ApplicationHost
```

```
IFS.SERVER.APPLICATION.UIX.ApplicationPort
```

または、これらのプロパティをサーバー固有の構成でオーバーライドすることもできます。

Oracle Files の非対話型構成

すべての構成の設定を含むレスポンス・ファイルをコマンドラインでパラメータとして Oracle Files Configuration Assistant に渡すことにより、Oracle Files ドメインを非対話型に構成できます。レスポンス・ファイルの場所は次のようになります。

```
%ORACLE_HOME%\ifs\files\settings\silentconfig.properties
```

レスポンス・ファイルには、このファイルを変更および使用する方法に関する説明が含まれます。このレスポンス・ファイルを、ユーザー固有の要件を満たすように変更します。

1. テキスト・エディタで silentconfig.properties ファイルを開きます。
2. ファイルの設定に必要な変更を加え、変更が終了した後で、ファイルを閉じます。

ファイル自体に、このファイルを変更および使用する方法に関する説明が含まれます。このレスポンス・ファイルを、ユーザー固有の要件を満たすように変更します。たとえば、スキーマの名前を指定するか、既存のインスタンスで動作するように追加の中間層マシンをインストールおよび構成する場合は「Run Domain Controller」を無効にできます。

3. 次の 2 つのコマンドを入力することにより、変更したレスポンス・ファイルを使用して Oracle Files Configuration Assistant を実行します。

```
cd %ORACLE_HOME%\ifs\files\bin
```

```
ifsca -file %ORACLE_HOME%\ifs\files\settings\silentconfig.properties -silent
```

レスポンス・ファイルに定義された仕様に従って、コンピュータ上に Oracle Files が構成されます。エラーが発生した場合、次のログ・ファイルで詳細を確認します。

```
%ORACLE_HOME%\ifs\files\log\FilesConfig.log
```

注意： レスポンス・ファイルには、パスワードなどの機密情報が含まれます。レスポンス・ファイルを使用して Oracle Files を構成した後で、ファイルからパスワード情報を削除する必要があります。

Oracle Files ランタイムの設定

次のタスクを実行して、ランタイム用に Oracle Files を設定し、システムが稼働しており安全な状態であることを確認します。

- [管理者アカウントに対する権限の付与](#)
- [すべての必要なプロセスの起動](#)
- [Oracle Files のサブスクリイバの作成](#)
- [Oracle Internet Directory でのユーザーの作成](#)
- [プロトコル・サーバーへのアクセス](#)
- [基本操作の検証](#)

管理者アカウントに対する権限の付与

Windows NT、2000 および 2003 管理者アカウント（または Oracle Collaboration Suite をインストールし構成するために使用しているその他のアカウント）に対して、「バッチ ジョブとしてログオン」権限を付与し、ローカル・ユーザーが Oracle Enterprise Manager Web サイトからドメイン・コントローラおよびノードを起動できるようにする必要があります。

この後の手順は、Windows NT または Windows 2000 コンピュータに管理者（または管理権限を持つ他のユーザー・アカウント）としてログオンしていることを前提としています。

Windows NT での権限の付与

1. 「スタート」→「プログラム」→「管理ツール（共通）」→「ユーザー マネージャ」を選択します。

ユーザー マネージャ（または Windows NT Server 上のドメイン ユーザー マネージャ）が表示されます。

2. 「原則」→「ユーザーの権利」を選択します。

「ユーザー権利の原則」画面が表示されます。

3. 画面の左下隅にある「高度なユーザー権利の表示」を選択します。

4. 権利のドロップダウン・メニューから「**バッチ ジョブとしてログオン**」を選択します。
5. 「**追加**」をクリックします。
6. Oracle Collaboration Suite のインストールに使用されたユーザー・アカウントを追加します。これは通常、管理者ユーザーか、管理者グループの別のユーザー・アカウントです。
7. 「**OK**」をクリックしてダイアログを閉じます。
8. 「**OK**」をクリックして変更を保存し、「ユーザー権利の原則」ダイアログを終了します。

Windows 2000 および 2003 Server での権限の付与

1. 「**スタート**」→「**プログラム**」→「**管理ツール**」→「**ローカルセキュリティ ポリシー**」を選択します。
「ローカルセキュリティ設定」ウィンドウが表示されます。
2. 左側のペインのツリーから、「**ローカル ポリシー**」を開き、「**ユーザー権利の割り当て**」を選択します。
右側のパネルにポリシーのリストが表示されます。
3. 「**バッチ ジョブとしてログオン**」を選択します。
4. 「**追加**」をクリックします。
5. Oracle Collaboration Suite のインストールに使用されたユーザー・アカウントを追加します。これは通常、管理者ユーザーか、管理者グループの別のユーザー・アカウントです。
6. 「**OK**」をクリックしてダイアログを閉じます。
7. 「**OK**」をクリックして変更を保存し、「ローカルセキュリティ設定」ウィンドウを閉じます。

すべての必要なプロセスの起動

この項の手順は、Oracle Files がインストールおよび構成されており、データベースおよびリスナーが実行されていることを前提としています。

Oracle Files は、Oracle Collaboration Suite Infrastructure の Oracle9iAS Containers for J2EE (OC4J) コンポーネントを使用して、構成プロセス中に OC4J に自動的に配置される DAV Servlet をサポートします。

1. 次のコマンドを使用して、Oracle Enterprise Manager Web Site が稼働していることを確認します。

```
%ORACLE_HOME%\bin\emctl status
```

2. サーバー・コンピュータ上の Web ブラウザまたはネットワーク上の別のコンピュータから、Oracle Files ドメイン・コントローラが構成されているコンピュータ上の Oracle Enterprise Manager Web Site に接続する URL にアクセスします。

```
http://hostname:port
```

hostname には完全修飾ドメイン名を指定する必要があります。port は通常 1810 です。

「ユーザー名とパスワードの入力」または「ネットワーク パスワードの入力」というプロンプトが表示されます。

3. ユーザー名として ias_admin を入力し、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier の適切なパスワードを入力します。

Web ページに、指定したホスト上で実行されているすべての Oracle Collaboration Suite Infrastructure コンポーネント（ターゲット）と、すべての Oracle Collaboration Suite 関連 Middle-Tier のリストが表示されます。

4. Oracle Files ソフトウェアをホスティングしている Oracle Collaboration Suite インスタンスの名前をクリックします。Oracle Collaboration Suite インスタンスのユーザー名およびパスワードの入力を再び求められた場合は、ias_admin および適切なパスワードを入力して続行します。

「Application Server」ページに、インスタンス上で実行しているすべてのシステム・コンポーネントが表示されます。リストには Oracle Files ドメインが含まれている必要があります。このドメインは、IFS_ の後に、データベース・インスタンスのホスト名、ポート番号、サービス名および Oracle Files のスキーマの名前が連結された形式で表示されます。次に例を示します。

```
ifs_myMachineHostname.mycompany.com:1521:myDBServiceName:myFILESSchemaName
```

注意： このページには「起動」および「停止」ボタンが表示されますが、このページから Oracle Files を制御することはできません。ラジオ・ボタンはアクティブではありません。

5. Oracle Files ドメイン名のリンクをクリックします。後続のページで、「ローカル・コンポーネントの起動」をクリックします。Oracle Files ノードを起動するためにホスト資格証明の入力を求めるページが表示されます。
6. コンピュータのオペレーティング・システムのアカウント名およびパスワードを入力します。これは通常 Windows の管理者ユーザー名とパスワードか、Oracle Files をインストールしたユーザーの名前とパスワードです。
7. 「OK」をクリックします。

Oracle Files ドメインに、複数のコンピュータに存在する複数のノードが含まれる場合、各コンピュータに対してこの項の手順 1～7 を繰り返します。起動するノードが実行されている各コンピュータ上で、オペレーティング・システムのアカウント名およびパスワードを入力する必要があります。

注意： 手順 1～7 のかわりに、`ifsctl start` コマンドを `%ORACLE_HOME%\ifs\files\bin` の場所から実行してもかまいません。ただし、手順 1～7 に従うと、ブラウザを使用して任意の場所から Oracle Files を管理できます。

8. 「Application Server」ページに戻るリンクをクリックします。
「OC4J_iFS_files」を選択し、「起動」または「再起動」をクリックします。
9. OC4J インスタンスを起動します。
 - OC4J サービスを起動するには、「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。「サービス」ダイアログで、`Oracleinstance_nameProcessManager` サービスを選択し、「操作」→「開始」を選択します。
 - OC4J インスタンスをコマンドラインから起動するには、`%ORACLE_HOME%\opmn\bin` ディレクトリに移動し、次のコマンドを使用します。

```
opmnctl startproc gid=OC4J_iFS_files
```

Oracle Files ドメインが起動します。HTTP ノードが稼働しているすべての中間層コンピュータで、OC4J インスタンスを起動する必要があります。

10. Oracle Files ドメインのステータスを確認します。これを行うには、次の場所から `ifsctl status -n` コマンドを実行します。

```
%ORACLE_HOME%\ifs\files\bin%
```

11. ログ・ファイルをチェックして、ノードと HTTP ノードが表示されていることを確認します。ログ・ファイルは次のディレクトリにあります。

```
%ORACLE_HOME%\ifs\files\log%
%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_iFS_files\application-deployments\files
\OC4J_iFS_files_default_island_1%
```

Oracle Files のサブスクライバの作成

注意： サブスクライバを作成する前に、SMTP サーバーが稼働していることを確認してください。サブスクライバ管理者およびユーザーが自身のパスワードに関する電子メールを受信するためには、SMTP サーバーが稼働している必要があります。

次の手順では、サイト管理者として Oracle Files にログインし、**サブスクライバ**を作成する必要があります。Oracle Internet Directory ユーザーが Oracle Files にログインできるようにするには、Oracle Files サブスクライバを作成する必要があります。

1. 次の場所に移動します。

`http://http_host:port/files/app/AdminLogin`

`http_host` には完全修飾ドメイン名を指定する必要があります。次に例を示します。

`http://acme.us.oracle.com:7778/files/app/AdminLogin`

「管理者のログイン」ページが表示されます。

2. `site_admin` としてログインし、構成中に使用したパスワードと同じ `site_admin` パスワードを使用します。
3. 「新規サブスクライバ」をクリックします。
「サブスクライバ名」ページが表示されます。「サブスクライバ名」は、Oracle Internet Directory サーバーのデフォルト・サブスクライバです。Oracle Internet Directory サーバーは、Oracle Files 構成時に 14-21 ページの「新しい Oracle Files ドメインの作成」の項の手順 23 で入力した値です。
4. デフォルトを受け入れます。

重要： Oracle9iAS Single Sign-On の制限により、複数のサブスクライバは現在サポートされていません。

5. 「次へ」をクリックします。
「サブスクライバ情報」ページが表示されます。
6. クォータおよび最大ユーザー数を設定します。たとえば、合計で 1GB のクォータ、各ユーザーに 10MB のクォータおよび各ワークスペースに 10MB のクォータを設定します。
7. 「次へ」をクリックします。
「サブスクライバ管理者アカウントの作成」ページが表示されます。

8. サブスクリバ管理者のユーザー・ログイン ID を入力します。電子メール・アドレスは、サブスクリバのパスワードの送信先です。「デフォルトのユーザー・アカウント設定」および「デフォルトのワークスペース設定」を指定します。
9. 「次へ」をクリックします。
「New Subscriber Confirmation」ページが表示されます。
10. 情報を確認し、「送信」をクリックします。
「サブスクリバの参照」ページが表示されます。サブスクリバが作成され、サブスクリバのパスワードが電子メールで自動送信されたことが表示されます。
11. サブスクリバ管理者としてログインするには、次の URL に移動します。
`http://http_host:port/files/app/AdminLogin`
「管理者のログイン」ページが表示されます。
12. この項の手順 8 でサブスクリバの作成時に入力したサブスクリバ用のログイン・ユーザー ID と電子メールで受信したサブスクリバ・パスワードを使用し、`subscriberadmin_user_login_ID/password`としてログインします。
13. 「USERS」タブをクリックして、「ユーザー」ページを表示します。このページをリフレッシュして、Oracle Files ユーザーの更新済リストを表示します。

関連項目： Oracle Files でのユーザーの作成の詳細は、14-36 ページの「[Oracle Internet Directory でのユーザーの作成](#)」を参照してください。

Oracle Internet Directory でのユーザーの作成

ユーザーが Oracle Files にアクセスするには、まず Oracle の LDAP サーバーである Oracle Internet Directory にユーザーとして作成する必要があります。

Oracle Internet Directory でユーザーを作成するには、次のようにします。

1. OC4J_DAS インスタンスがインフラストラクチャ・ホストで開始していることを確認します。
2. インフラストラクチャ・ホストに接続します。通常は次のようになります。
`http://oidserver.us.oracle.com:7777/oiddas`
`hostname` には完全修飾ドメイン名を指定する必要があります。
3. Oracle Internet Directory 管理者（通常は `orcladmin`）としてログインします。
4. 「ディレクトリ」タブをクリックします。
5. 「作成」をクリックします。
「類似作成」画面が表示されます。
6. フィールドに入力します。電子メールのアドレスを指定する必要があります。

7. 「Oracle Collaboration Suite ユーザー」を選択し、このユーザーをグループに追加します。
8. 「送信」をクリックします。

注意： ユーザー名の最後に空白を使用している場合、または `&'%?¥/+=() * ^ , ; | ~` のいずれかの文字を使用している場合、ユーザーは Oracle Internet Directory から Oracle Files にプロビジョニングされません。

ユーザーが Oracle Internet Directory に作成され、Oracle Files サイト管理者が Oracle Files サブスクリバ管理者を作成した場合は、FilesOidUserSynchronizationAgent により 15 分おきに（デフォルト設定）Oracle Files に自動的にプロビジョニングされます。

また、ユーザーが Oracle Internet Directory に作成された後、そのユーザーとして Oracle Files にログインすると、エージェントに対して指定された時間間隔（このリリースの新機能）に関係なく、ユーザーが Oracle Files に即時にプロビジョニングされます。

FilesOidUserSynchronizationAgent による自動プロビジョニングのデフォルト間隔は、15 分から選択した間隔に再設定できます。

関連資料： このデフォルトの時間間隔の変更方法については、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

注意： Oracle Files はマルチバイト・キャラクタ・セットをサポートしますが、WebDAV などの一部のプロトコルはマルチバイト・ユーザー名をサポートしません。このため、Oracle Internet Directory で Oracle Files のユーザーを作成する場合は、シングルバイト文字のみを使用して名前を作成する必要があります。マルチバイト文字を使用して作成された名前を持つユーザーは、Oracle Files プロトコル・サーバーを介してコンテンツにアクセスできません。同様に、プロトコルは ASCII パスワードのみ受け入れるため、ユーザー・パスワードは ASCII で作成する必要があります。

ASCII 以外の文字を使用して作成されたパスワードを持つユーザーは、Oracle Files プロトコル・サーバーを介してコンテンツにアクセスできません。

プロトコル・サーバーへのアクセス

Oracle Files ドメインで実行されているプロトコル・サーバーにアクセスするには、各エンド・ユーザーが次の手順を実行する必要があります。

1. 「パスワード・ユーザー設定」ページに接続します。

`http://ocs_midtier_hostmachine:port/files/app/ProtocolAccess`

`ocs_midtier_hostmachine` の値には、完全修飾ドメイン名を指定する必要があります。
`port` の値には、中間層コンピュータのポート番号を指定する必要があります。

「シングル・サインオン」ページが表示されます。

2. Oracle Internet Directory のユーザーおよびパスワードを使用してログインします。

「パスワード・ユーザー設定」ページが表示されます。

3. Oracle9iAS Single Sign-On パスワードと Oracle Files 固有のパスワード、およびパスワードの確認を入力し、ユーザーに対してこれらのパスワードを作成します。

4. 「続行」をクリックして保存します。

この時点で、「パスワード・ユーザー設定」ページを使用して Oracle Internet Directory ユーザーが構成され、Oracle Files ドメインで実行されているプロトコル・サーバーにアクセスできます。

注意： FTP および AFP にアクセスするには、Oracle Files 固有のパスワードを使用します。NTFS、Oracle FileSync、WebFolders または Oracle Files Web インタフェースにアクセスするには、Oracle Internet Directory のパスワードを使用します。

関連資料： ユーザーの作成および Oracle Files ドメインで実行されているプロトコル・サーバーへのアクセスの詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

基本操作の検証

ドメインおよびノードが起動し、Oracle Files のコア・コンポーネントが動作していることを確認するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Files ドメインのステータスを確認します。次の場所から ifscctl status -n コマンドを実行します。
- ```
%ORACLE_HOME%\ifs\files\bin\
```
2. 次の場所にある HTTP ログを確認します。
- ```
%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_ifs_files\application-deployments\files
%OC4J_ifs_files_default_island_1\application.log
```
3. HTTP ログに「503 サービスは一時的に利用できません」メッセージが含まれている場合、ネットワーク上の別のコンピュータからシステムへの接続を試みます。

表 14-5 基本機能

プロトコルまたはサーバー	アクセス用のアドレスまたは方法	予期される結果
HTTP	http://ocs_middle_tier_host_name:port_number/files/app	Oracle Internet Directory Server で作成されたユーザーとしてログインします。
NTFS	Windows のエクスプローラで、ネットワーク・ドライブを割り当てます。 %%middle_tier_host_name%myhome	「Windows ファイル共有」が表示されます。

HTTP の Web サーバーへの接続を試行し、「503 サービスは一時的に利用できません」というメッセージを受信した場合は、HTTP ノードが完全には起動されていません。HTTP ノード (OC4J インスタンス) を起動する必要があります。

- OC4J サービスを開始するには、「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。「サービス」ダイアログで、Oracleinstance_nameProcessManager サービスを選択し、「操作」→「開始」を選択します。
- OC4J インスタンスをコマンドラインから起動するには、%ORACLE_HOME%\opmn\bin ディレクトリに移動し、次のコマンドを使用します。
- ```
opmnctl restartproc gid=OC4J_ifs_files
```

## 構成後の追加タスク

計画している配置に応じて、次のタスクの一部またはすべてを Oracle Files の構成後に実行する必要があります。

- [Oracle Files と Oracle Workflow の統合（オプション）](#)
- [Real Application Clusters データベースで Oracle Files を使用するための構成後の手順（オプション）](#)
- [Oracle Files Web UI への「Portal へ戻る」リンクの追加（必須）](#)
- [Oracle Internet Directory での問合せエントリの返送制限の編集（オプション）](#)
- [NTFS プロトコル・サーバーの構成（オプション）](#)
- [Windows ユーザーによるネットワーク・ドライブとしての Oracle Files のマップの可能化（オプション）](#)
- [Oracle Files および Search のポートレットの登録（必須）](#)

## Oracle Files と Oracle Workflow の統合（オプション）

Oracle Workflow を Oracle Files と統合する場合は、次のカテゴリのタスクを示されている順序で実行します。

- [ネット・サービス名の構成](#)
- [Oracle Workflow の構成](#)
- [Oracle Workflow と Oracle Files スキーマの統合](#)
- [Oracle Workflow スキーマの追加言語の有効化（オプション）](#)

### ネット・サービス名の構成

次のように Oracle Net Configuration Assistant を使用してネット・サービス名を構成します。

1. NetCA ユーティリティを実行して、Oracle Net Configuration Assistant を実行します。「スタート」→「プログラム」→「Oracle - ORACLE\_HOME」→「Configuration and Migration Tool」→「Oracle Net Configuration Assistant」を選択します。

`Oracle_Home` は、Oracle Collaboration Suite のインストール時に指定した Oracle ホームの名前です。

「ようこそ」画面が表示されます。

2. 「ネット・サービス名の構成」を選択し、「次へ」をクリックします。  
「ネット・サービス名の構成」画面が表示されます。



3. 「追加」をクリックし、「次へ」をクリックします。  
「ネット・サービス名の構成 - データベース・バージョン」画面が表示されます。
4. 「Oracle8i またはそれ以降のデータベースまたはサービス」を選択します。
5. 「次へ」をクリックします。  
「サービス名」画面が表示されます。db1.us.acme.com などのデータベース・インスタンスの「サービス名」を入力します。
6. 「次へ」をクリックします。  
「プロトコルの選択」画面が表示されます。
7. 「TCP (デフォルト)」を選択します。
8. 「次へ」をクリックします。  
「TCP/IP プロトコル」画面が表示されます。「ホスト名」および「ポート番号」の値を入力します。データベース・ポートのデフォルト値は 1521 です。
9. 「次へ」をクリックします。  
「テスト」画面が表示されます。
10. 「はい」をクリックしてテストを実行します。  
「接続」画面がテスト接続の結果とともに表示されます。テストでは、デフォルト・ユーザー scott を使用して接続を試行します。データベースの作成中はユーザー scott がロックされるため、テスト接続に失敗することがあります。テスト接続に失敗した場合、Oracle Net Configuration Assistant は「サービス名」画面に戻ります。ユーザーを system に変更し、データベースの値を入力してテスト接続を再び実行します。
11. 「接続」画面が「OK」という結果を返した場合は、「次へ」をクリックします。  
「ネット・サービス名」画面が表示されます。db1 など、このデータベース接続のサービス名を「TNS エイリアス名」フィールドに入力します。
12. 「次へ」をクリックします。  
「ネット・サービス名」画面が表示されます。デフォルト値の「いいえ」を受け入れます。
13. 「次へ」をクリックします。  
「構成が終了しました。」画面が表示されます。
14. 「次へ」をクリックします。  
「サマリー」画面が表示されます。
15. 「終了」をクリックします。

Oracle Workflow の構成

Oracle Files で使用するよう Oracle Workflow を正しく構成するには、この項で詳細に説明する手順を正しく実行する必要があります。

Oracle Workflow の構成では、主に Oracle Workflow スキーマを設定しますが、追加される中間層ではなく最初の間層に対してのみ実行する必要があります。

**注意：** Oracle Workflow スクリプトは、Oracle Workflow 管理者を orcladmin ユーザーとして自動的に設定します。

1. 次のスクリプトを実行して、最初の間層コンピュータで Oracle Workflow Configuration Assistant を実行します。

```
%ORACLE_HOME%\wf\install\wfinstall.bat
```

Oracle Workflow Configuration Assistant が表示されます。

2. 表 14-6 にリストされているユーザー情報を入力します。

表 14-6 Oracle Workflow Configuration Assistant の値

| フィールド          | 値                                                                                                                                                             |
|----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Workflow アカウント | Oracle Workflow データベース・アカウントのユーザー名。デフォルトの Workflow アカウントは OWF_MGR です。複数の Oracle Workflow インスタンスを同じ Information Storage データベースに作成している場合は、このアカウントの説明的な名前を入力します。 |
| ワークフロー・パスワード   | Oracle Workflow データベース・アカウントのパスワード。                                                                                                                           |
| SYS パスワード      | Oracle Workflow アカウントを作成しているデータベースの SYS パスワードを入力します。詳細は、Oracle DBA に確認してください。                                                                                 |
| SYSTEM パスワード   | Oracle Workflow アカウントを作成しているデータベースの SYSTEM パスワードを入力します。詳細は、Oracle DBA に確認してください。                                                                              |
| インストール・オプション   | 「インストール」を選択して Oracle Workflow の新規インストールを実行します。                                                                                                                |
| 言語の選択          | 「言語の追加」インストール・オプションを選択した場合は、追加する言語の略語を選択します。それ以外の場合は、デフォルトを受け入れます。<br><b>関連項目：</b> 標準言語の略語のリストは、表 14-8 「言語コード」を参照してください。                                      |

表 14-6 Oracle Workflow Configuration Assistant の値（続き）

| フィールド   | 値                                                                                                                                                                                                                                                     |
|---------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メソッドの接続 | Oracle SID を使用してローカル・データベースに接続するには「ローカル」、Oracle Net を介してリモート・データベースに接続するには「リモート」を選択します。<br><br>14-40 ページの「ネット・サービス名の構成」にリストされている手順を実行した場合は、「リモート」を選択します。                                                                                              |
| 接続文字列   | 「リモート」接続方法を選択する場合は、14-40 ページの「ネット・サービス名の構成」の手順 11 で指定したリモート・データベースのサービス名を入力します。<br><br><b>重要：</b> Oracle Files スキーマが作成されるデータベースと同じデータベースに Oracle Workflow スキーマが作成されていることを確認するには、Oracle Collaboration Suite Information Store の CONNECT_STRING を使用します。 |

3. 「送信」をクリックして、Oracle Workflow 構成を開始します。

Oracle Workflow 構成が完了すると、確認ウィンドウが表示されます。

4. 「OK」をクリックします。

Oracle Workflow 構成が完了します。次のディレクトリにある workflow.log ログ・ファイルを調べることにより、Oracle Workflow 構成のステータスを確認できます。

%ORACLE\_HOME%\wf\install\

**重要：** Oracle Workflow のインストールおよび構成中に生成された workflow.log ファイルには、機密情報が含まれることがあります。この機密情報を保護するには、インストールの完了後にこのファイルを削除するか、ファイルの権限を変更して、承認された管理者のみがこのファイルにアクセスできるようにします。

Oracle Workflow と Oracle Files スキーマの統合

Oracle Workflow と Oracle Files スキーマを統合する前に、次のパッチを適用する必要があります。

- ARU 4920260（問題 2183448 用）
- ARU 4909037（問題 3180908 用）
- ARU 5126488（問題 3279810 用）

Oracle Workflow を Oracle Files スキーマと統合するには、次の手順を実行します。これらの手順では、14-42 ページの手順に従って Oracle Workflow がすでに構成されていることを前提とします。

---

---

**注意：** Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) に含まれている Information Storage データベースのかわりに外部の 9.2.0.3 データベースを使用している場合は、`¥rdbms¥admin` からデータベース・ホスト・システム上のデータベース SYS ユーザーとして `catldap.sql` 構成スクリプトを実行する必要があります。次に、`ifswfsetup` スクリプトを実行して Oracle Files を Oracle Workflow と統合します。

---

---

1. 英語以外のロケールで Oracle Files と Oracle Workflow を統合する場合、`ifswfsetup` スクリプトを実行する前に、`NLS_LANG` 環境変数を英語のロケールに変更する必要があります。コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

---

---

**注意：** `NLS_LANG` の値を変更する前に、コマンド・プロンプトでコマンド `set NLS_LANG` を使用し、環境変数の現行値を記録します。

---

---

```
SET NLS_LANG = american_america.we8iso8859p1
```

2. Oracle Workflow を正常に構成した後で、表 14-7 に示されている値を使用して `ifswfsetup.properties` ファイルを編集します。この表では、`ifswfsetup` スクリプトで使用されるパラメータについて説明します。要件に基づいてこれらのパラメータを編集します。これらの編集は、Oracle Workflow を Oracle Files と統合する場合は必須です。`ifswfsetup.properties` ファイルは次の場所にあります。

```
%ORACLE_HOME%\ifs¥files¥settings
```

---

---

**重要：** `ifswfsetup.properties` ファイルは、変更する前にバックアップします。表 14-7 に示されているパラメータ以外のパラメータは編集しないでください。

---

---

表 14-7 ifswfsetup.properties ファイルの値

| フィールド番号および名前                  | 構造                                                    | 例 <sup>1</sup>                                                                                                                                                             |
|-------------------------------|-------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| (1) Oracle ホーム                | ORACLE_HOME= <i>ORACLE_HOME</i>                       | ORACLE_HOME=D:\focsmid                                                                                                                                                     |
| (2) データベース・ホスト                | DB_HOST_NAME= <i>dbhost.us.oracle.com</i>             | DB_HOST_NAME=acme.us.oracle.com                                                                                                                                            |
| (3) データベース・ポート                | DB_LISTENER_PORT= <i>port_number</i>                  | DB_LISTENER_PORT=1521                                                                                                                                                      |
| (4) データベース・サービス名              | DB_SERVICE_NAME= <i>db_service_name</i>               | DB_SERVICE_NAME=acme9i                                                                                                                                                     |
| (5) データベース TNS<br>エイリアス名      | DB_TNS_ALIAS= <i>db_tns_aliasname</i>                 | DB_TNS_ALIAS=my_files_instance<br>これは、Oracle Net Configuration Assistant で作成された Oracle Files に使用しているデータベース・サービスです。詳細は、14-40 ページの「 <a href="#">ネット・サービス名の構成</a> 」を参照してください。 |
| (6) データベース SID                | DB_SID= <i>db_sid</i>                                 | DB_SID=my_files_sid                                                                                                                                                        |
| (7) Oracle Files スキーマ名        | IFS_SCHEMA_NAME= <i>ifssys</i>                        | IFS_SCHEMA_NAME=ifssys                                                                                                                                                     |
| (8) Oracle Workflow<br>スキーマ名  | IFS_WORKFLOW_SCHEMA_NAME= <i>workflow_schema_name</i> | IFS_WORKFLOW_SCHEMA_NAME=owf_mgr                                                                                                                                           |
| (9) Oracle Workflow URL       | WF_URL= <i>http://midtier:port_number</i>             | WF_URL= <i>http://midtier.us.oracle.com:7777</i>                                                                                                                           |
| (10) Oracle LDAP ホスト          | OID_HOST_NAME= <i>ldaphost.us.oracle.com</i>          | OID_HOST_NAME=oidserver.us.oracle.com                                                                                                                                      |
| (11) Oracle LDAP ポート          | OID_PORT= <i>port_number</i>                          | OID_PORT=4032                                                                                                                                                              |
| (12) Oracle LDAP 管理者<br>ユーザー名 | OID_SUPER_USER_NAME= <i>cn=orcladmin</i>              | 「構造」列に指定されている正確な値を入力します。                                                                                                                                                   |
| (13) Oracle LDAP 変更ログ         | LDAP_CHANGELOG= <i>cn=changelog</i>                   | 「構造」列に指定されている正確な値を入力します。                                                                                                                                                   |
| (14) Oracle LDAP ベースログ        | LDAP_BASELOG= <i>cn=Users,dc=us,dc=oracle,dc=com</i>  | 値は、Oracle Internet Directory 構成時に LDAP 検索ベースに対して指定した値と一致している必要があります。                                                                                                       |

表 14-7 ifswfsetup.properties ファイルの値（続き）

| フィールド番号および名前                                                                   | 構造                         | 例 <sup>1</sup>                                                                                                                       |
|--------------------------------------------------------------------------------|----------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| (15) 言語アップロード・スクリプト                                                            | LANGONLY=false             | true または false を入力します。                                                                                                               |
| (16) アップロードする言語ファイル<br>言語コードの一覧は、表 14-8「言語コード」を参照してください。複数のコードをカンマで区切って入力できます。 | LANG=language_code         | LANG=<br>LANGONLY=false の場合（フィールド 15 を参照）は、この値を空のままにしておく必要があります。<br><br>LANG=es<br><br>LANGONLY=true の場合（フィールド 15 を参照）は、言語コードを入力します。 |
| (17) OID 同期間隔                                                                  | INTERVAL=interval_duration | INTERVAL=10<br><br>Oracle Internet Directory ユーザーが Oracle Files でプロビジョニングされる頻度を分単位で指定します。                                            |

<sup>1</sup> フィールド 2 ～ 7 の値は、Oracle Files 構成時に入力した情報と同一である必要があります。  
フィールド 8 ～ 9 の値は、Oracle Workflow 構成時に入力した情報と同一である必要があります。  
フィールド 10 ～ 14 の値は、Oracle Files 構成時に入力した LDAP 情報と同一である必要があります。

- 3. ifswfsetup.properties ファイルを保存し、終了します。
- 4. 次の 2 つのコマンドを入力して、ifswfsetup スクリプトを実行します。

```
cd %ifs%files%bin
ifswfsetup
```

これにより、スクリプトが実行され、次のディレクトリに ifswfsetup.log ログ・ファイルが作成されます。

```
%ifs%files%log%
```

**重要：** ifswfsetup.properties ファイルと ifswfsetup.log ファイルには、機密情報が含まれています。この機密情報を保護するには、インストールの完了後にこのファイルを削除するか、ファイルの権限を変更して、承認された管理者のみがこのファイルにアクセスできるようにします。

**注意：** NLS\_LANG の値を変更した場合、コマンド・プロンプトで set NLS\_LANG コマンドを使用して、環境変数の値を前の値に設定する必要があります。

5. 必要に応じて、Oracle Workflow スキーマの追加言語を有効にします。

## Oracle Workflow スキーマの追加言語の有効化（オプション）

Oracle Workflow スキーマで追加言語を有効にするには、次の手順を実行します。

1. ifswfsetup.properties ファイル（%ORACLE\_HOME%\ifs\files\settings にあります）を、次のように編集します。

- **フィールド 15:** 言語アップロード・スクリプト

```
LANGONLY=true
```

- **フィールド 16:** アップロードする言語ファイル

LANG=[Oracle Workflow にアップロードする言語と一致する言語コードを表 14-8 の列 2 から選択して入力します。複数の言語コードはカンマで区切ります。]

すべての言語を有効にする場合は、次の構文を使用します。

```
LANG=all
```

2. ifswfsetup.properties ファイルに対する編集が完了したら、次の 2 つのコマンドを入力して ifswfsetup スクリプトを実行します。

```
cd %ifs%files\bin
ifswfsetup.bat
```

これにより、スクリプトが実行され、次のディレクトリに ifswfenablelang.log ログ・ファイルが作成されます。

```
%ifs%files\log%
```

---

**重要：** ifswfenablelang.log ファイルには機密情報が含まれています。この機密情報を保護するには、インストールの完了後にこのファイルを削除するか、ファイルの権限を変更して、承認された管理者のみがこのファイルにアクセスできるようにします。

---

表 14-8 言語コード

| 言語      | コード <sup>1</sup> |
|---------|------------------|
| デンマーク語  | da               |
| ドイツ語    | de               |
| ギリシア語   | el               |
| スペイン語   | es               |
| フィンランド語 | fi               |

表 14-8 言語コード（続き）

| 言語           | コード <sup>1</sup> |
|--------------|------------------|
| フランス語        | fr               |
| イタリア語        | it               |
| 日本語          | ja               |
| 韓国語          | ko               |
| オランダ語        | nl               |
| ノルウェー語       | no               |
| ポルトガル語       | pt               |
| ポルトガル語（ブラジル） | pt_BR            |
| ロシア語         | ru               |
| スウェーデン語      | sv               |
| トルコ語         | tr               |
| 中国語（簡体字）     | zh_CN            |
| 中国語（繁体字）     | zh_TW            |

<sup>1</sup> これらのコードは ifswfsetup.properties ファイルにもあります。

## Real Application Clusters データベースで Oracle Files を使用するための構成後の手順（オプション）

Real Application Clusters データベースで Oracle Files を使用している場合、Oracle Files を構成した後で次のタスクが必要です。

Real Application Clusters データベースを使用するように Oracle Files を設定する構成前のタスク（14-7 ページの「[Real Applications Clusters データベースを使用するための Oracle Files の設定（オプション）](#)」を参照）に加えて、次の構成後の手順を実行する必要があります。

1. 各中間層で、registry.xml ファイル（¥ifs¥common¥ディレクトリにあります）をバックアップしてから編集し、DatabaseUrl エントリを追加します。  
  
DatabaseUrl エントリは、<Instance> タグの下に任意の位置に追加できます。次の例では、エントリはタグのすぐ下に追加されています。tnsentry の値は、Real Application Clusters の構成前の手順で指定した値と同じにする必要があります。



次に例を示します。

```
<Instance>
 <DatabaseUrl>jdbc:oracle:oci8:@tnsentry</DatabaseUrl>
 <Domain>ifs://DBHOME:1521:dbservice:ifssys</Domain>
 <DomainType>files</DomainType>
 <Registered>1018925008096</Registered>
 <LastStarted>1028329087966</LastStarte>d
 <LastModified>1028330926700</LastModified>
 <Ports>
</Instance>
```

2. システムで使用するサービス構成で、IFS.SERVICE.JDBC.DatabaseUrl サービス構成プロパティを変更します。この項の手順 1 で指定した DatabaseUrl に指定したものと同じ値を入力します。

```
jdbc:oracle:oci8:@tnsentry
```

http://hostname:1810 (hostname は Oracle Files ドメイン・コントローラが構成されているコンピュータ) に移動することにより、Oracle Enterprise Manager を介してサービス構成プロパティを表示できます。

デフォルトのサービス構成を表示するプロパティは次のとおりです。

```
IFS.DOMAIN.LIBRARYOBJECT.SERVICECONFIGURATION.DefaultServiceConfiguration
```

デフォルトのサービス構成は次のいずれかです。

- SmallServiceConfiguration
- MediumServiceConfiguration
- LargeServiceConfiguration

---

**注意：** DatabaseUrl パラメータに適切な値を指定してください。不適切な値を指定した場合は、Oracle Files プロセスが Oracle Files スキーマに接続できません。

---

## Oracle Files Web UI への「Portal へ戻る」リンクの追加（必須）

Oracle9iAS Portal を構成した場合は、Oracle Files から Oracle Collaboration Suite ホーム・ページに移動できるよう Oracle Files Web UI に表示される「Portal へ戻る」リンクを追加できます。

Oracle Files Web UI に「Portal へ戻る」リンクを追加するには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザに次の URL を入力することにより、Oracle Enterprise Manager Web Site にアクセスします。

`http://hostname:1810/`

2. インストール中に指定したパスワードを使用して `ias_admin` としてログインし、「OK」をクリックします。

3. Oracle9iAS ホーム・ページから、Oracle Files ドメイン・リンクをクリックして Oracle Files の最上位レベル・ページに移動します。次に例を示します。

`ifs_dbhost.us.oracle.com:1521:ifsdbservice.us.oracle.com:FilesSchema`

4. 「構成」セクションで、「サーバー構成」をクリックします。
5. 「サーバー構成」ページで、「FilesBaseServerConfiguration」をクリックします。「編集」ページが表示されます。
6. 「プロパティ」セクションで、「IFS.SERVER.APPLICATION.FILES.PortalUrl」を選択し、「編集」をクリックします。
7. 値を変更して、Oracle Collaboration Suite ホーム・ページの URL を指定します。たとえば、次のようにします。

`http://hostname.us.foo.com:7777/pls/portal`

8. プロパティの編集ページで「OK」をクリックします。
9. サーバーの編集ページで「OK」をクリックします。
10. Oracle9iAS ホーム・ページに戻ります。
11. 「OC4J\_ifs\_files」を選択し、「再起動」をクリックします。

「Portal へ戻る」リンクが Oracle Files Web UI に表示されます。一括検索ページも表示されます。

## Oracle Internet Directory での問合せエントリの返送制限の編集（オプション）

Oracle Internet Directory Server に 1000 を超える Oracle Internet Directory ユーザー・アカウントがある場合、Oracle Files の OidUserSynchronizationAgent によって Oracle Internet Directory Server からユーザーの同期をとろうとすると、次のエラー・メッセージがノード・ログに発生する可能性があります。

```
8/13/02 7:39 PM Files: [oidsync-2107123 OidUserSynchronizationAgent] Exception
oracle.ifs.common.IfsException: IFS-12988: Count limit exceededUIDs
```

このエラーを回避するには、Oracle Files の OidUserSynchronizationAgent を起動する前に、次の手順を完了します。

1. 「スタート」→「プログラム」→「Oracle9i Application Server - OCSPMidtier\_home」→「Integrated Management Tools」→「Oracle Directory Manager」を選択して、Oracle Directory Manager を実行します。
2. Oracle Internet Directory の管理者のユーザー名およびパスワードを使用して、Infrastructure Oracle Internet Directory Server にログインします。
3. ツリーからログインしたばかりの Oracle Internet Directory Server を選択します。選択したサーバーは、ツリー内でアカウント名、Oracle Internet Directory ホストおよび Oracle Internet Directory ポートとともに表示されます。Oracle Directory Manager では、ウィンドウの右側に Oracle Internet Directory のプロパティが表示されます。
4. 「問合せエントリの返送制限」フィールドの値を探し、Oracle Collaboration Suite ユーザーの数より大きい値になるように変更します。
5. 「OK」をクリックして保存します。

## NTFS プロトコル・サーバーの構成（オプション）

NTFS プロトコル・サーバーは、Windows サーバー上に仮想ディスク・ドライブを 1 つ作成し、Windows サーバーのファイル・システムから Oracle Files にアクセスできるようにします。この仮想ディスク・ドライブは、Windows のネットワーク・ファイル共有を使用して共有でき、Windows クライアントに Oracle Files ファイルへのネットワーク・アクセスを提供します（詳細は、14-53 ページの「[Windows ユーザーによるネットワーク・ドライブとしての Oracle Files のマップの可能化（オプション）](#)」を参照してください）。

NTFS プロトコル・サーバーでは、Windows サーバーのユーザー名を Oracle Files ユーザー名と照合することにより、Windows サーバーからのアクセスを制御します。Oracle Files が初めてインストールされ、起動されると、仮想ディスクが作成され、ドライブ文字 O が割り当てられます。すべてのファイル・アクセスには認証されたユーザーが必要であり、当初は Oracle Files インストールにはユーザーがまったくないため、最初は O ドライブのファイルにはアクセスできません。

O ドライブにアクセスするには、Oracle Files ユーザーを、Oracle Files の起動に使用される Windows サーバー・ユーザーと同じユーザー名（Windows サーバー管理者）でプロビジョ

ニングする必要があります。この Oracle Files ユーザーがプロビジョニングされると、Windows サーバー管理者は O ドライブ上のファイルにアクセスできます。

Oracle Files ユーザーをプロビジョニングするには、まず Oracle Internet Directory にそのユーザーを作成する必要があります。Oracle Internet Directory にユーザーが作成されると、FilesOidUserSynchronizationAgent により、ユーザーは自動的に Oracle Files にプロビジョニングされます。このエージェントは、デフォルトでは 15 分ごとに実行されますが、このデフォルトの時間間隔の設定を変更し、エージェントをより頻繁に実行させることができます。Oracle Internet Directory でのユーザーの作成と、それらユーザーの Oracle Files での自動プロビジョニングの詳細は、14-36 ページの「[Oracle Internet Directory でのユーザーの作成](#)」を参照してください。

Oracle Files ユーザーが作成された後、Windows サーバー管理者が O ドライブにアクセスできることを確認します。

## NTFS プロトコル・サーバーの構成手順

Oracle Files Configuration Assistant を実行した後、Windows サーバー管理者は、NTFS プロトコル・サーバーを正しく構成するために、次の手順を実行する必要があります。

1. Oracle Files NTFS ドライバのインストールを完了するために、再起動します。
2. Oracle Files ユーザーを Oracle Internet Directory に作成します。このユーザーには、Windows 管理者グループ内の Windows ユーザーと同じ名前（Windows サーバー管理者）を付ける必要があります。さもないと、このユーザーは NTFS ドライバを起動できません。
3. コマンド・ウィンドウで `ifsctl start` を使用することで、すべての Oracle Files サーバーを起動します。すべての Oracle Files プロトコル・サーバーおよびエージェントが起動しますが、まだ NTFS サーバーを使用して Oracle Files にアクセスできません。
4. FilesOidUserSynchronizationAgent によって、Oracle Internet Directory に作成されたユーザーが Oracle Files ユーザーとしてプロビジョニングされるのを待ちます。デフォルトでは、このプロセスは 15 分ごとに発生します。デフォルトの同期時間を変更して間隔を短縮する方法の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。
5. ユーザーがプロビジョニングされると、O ドライブへのアクセスが可能になり、デフォルトのマウント・ポイントが作成されます。マウント・ポイントが作成されない場合は、NTFS サーバーを再起動することで作成できます。Oracle Enterprise Manager Web サイトを使用して、Oracle Files NTFS サーバーを再起動します。または、コマンドラインで `ifsctl stop` と `ifsctl start` を使用して、すべての Oracle Files サーバーを再起動できます。これで NTFS サーバーを使用して Oracle Files にアクセスできるようになります。

デフォルトでは、NTFS プロトコルによって、O ドライブ上で MyHome と AllPublic という Windows ネットワーク共有が、それぞれルート・ディレクトリ (O:\) と AllPublic ディレクトリに作成されます。ネットワーク共有を作成するには、これらのディレクトリにローカルの Windows サーバー管理者がアクセスする必要があります。これらのディレク

トリに Windows サーバー管理者がアクセスできない場合、共有の作成は失敗します。O ドライブにアクセスできることを確認したら、NTFS プロトコル・サーバーを再起動して、デフォルトのネットワーク共有を作成します。Oracle Enterprise Manager Web サイトを使用してサーバーを再起動するか、`ifsctl stop` および `ifsctl start` を使用してすべてのサーバーを起動することができます。

## ローカル O ドライブへのアクセスの構成

デフォルトでは、Windows サーバー上の O ドライブへのアクセスは、Oracle Files サーバーの起動に使用された Windows ユーザーに基づいています。Windows ユーザーは、同じ名前の Oracle Files ユーザーにマップされます。たとえば、Oracle Files サーバーが Windows ユーザーの Administrator によって起動された場合、O ドライブへのアクセスは Administrator という名前の Oracle Files ユーザーに基づきます。

Windows サーバー上の O ドライブへのアクセスに使用されるデフォルトの Oracle Files は、NTFS サーバー構成でプロパティを設定することで変更できます。NTFS サーバー構成のプロパティを編集し、`IFS.SERVER.PROTOCOL.NTFS.SystemUserName` という名前を持つ文字列プロパティを追加します。このプロパティの値を、Windows サーバー上の O ドライブへのアクセスに使用される Oracle Files ユーザー名に設定します。NTFS サーバー構成の変更後、コマンドラインで `ifsctl stop` コマンドと `ifsctl start` コマンドを使用して、ノードを停止してから再起動する必要があります。

## Windows ユーザーによるネットワーク・ドライブとしての Oracle Files のマップの可能化（オプション）

Oracle Files Web Interface により、Oracle Files ユーザーは Oracle Files アカウントを使用してログオンでき、Windows アカウントは必要ありません。ただし、Windows NT、2000 および 2003 ドライブのマッピングは、Oracle Files から Windows 固有のセキュリティ・メカニズムにより独自に制御されます。Oracle Files ユーザーが、Windows NT、2000 および 2003 サーバー上の Oracle Files インスタンスに Windows ファイル共有としてアクセスできるようになるには、その前に Windows 固有のセキュリティ・メカニズムによって認証される必要があります。次の手順を実行して、ユーザーが Oracle Files NTFS プロトコル・サーバーを Windows ネットワーク・ドライブとしてマップできるようにします。

1. Windows サーバー管理者は、すべての認証済 Oracle Files ユーザーに対して、Windows ユーザー・アカウントを作成する必要があります。
  - 組織で Microsoft Windows ドメイン・セキュリティ・モデルを使用している場合、Windows サーバー管理者は、ローカル・マシン上ではなく、Windows ドメインにドメインユーザー マネージャを使用してユーザー・アカウントを作成する必要があります。（Oracle Files では、ドメイン接頭辞を無視し、ユーザー名のみを調べます。このため Windows サーバー管理者は、Oracle Files ユーザー名にマップされる Windows ユーザー名が、すべての Windows ドメインの間で一意であることを確認する必要があります。）

- Windows ユーザー・アカウントがすでに存在する場合、Windows サーバー管理者は、対応する Oracle Files アカウントをプロビジョニングする必要があります。Oracle Internet Directory でのユーザーの作成と、それらユーザーの Oracle Files での自動プロビジョニングの詳細は、14-36 ページの「[Oracle Internet Directory でのユーザーの作成](#)」を参照してください。
- 2. Windows NT、2000 および 2003 ドメインのユーザーは、ドライブを Oracle Files サーバーにマップしようとしたときに要求された場合には、有効な Windows NT、2000 および 2003 のユーザー名およびパスワードを入力する必要があります。
- Windows NT、2000 および 2003 ドメイン・ユーザーは、ログオン・プロンプトでユーザー名の一部として Windows ドメイン名を次の形式で入力するように求められる場合があります。

`windows-nt/2000/2003_domainname¥username`

次に例を示します。

`MyDomain¥gking`

ユーザーが Windows 固有のセキュリティ・メカニズムを使用して認証されると、Windows アカウントと同じ名前のユーザーとして Oracle Files にアクセスできます。

Oracle Files 管理者および Windows NT、2000 および 2003 管理者は、Windows および Oracle Internet Directory に適切なユーザー・アカウントが作成され、Oracle Files でプロビジョニングされていることを確認する必要があります。情報への不正アクセスを防止するには、Oracle Files ユーザー・アカウントに関連付けられたユーザーは、Windows NT、2000 および 2003 アカウントに関連付けられた同一のユーザーであることが必要です。

## Windows NT、2000 および 2003 ファイル共有のトラブルシューティング

ユーザーがネットワーク・ドライブを Oracle Files インスタンスにマップできない場合、Windows NT、2000 および 2003 管理者は、別の Windows NT、2000 および 2003 ファイル共有を（Oracle Files と関係なく）作成し、問題の原因が Windows NT、2000 および 2003 であるかどうかを確認するために、ユーザーにこのテスト・ドライブへのマップを実行させることができます。ユーザーが Windows NT、2000 および 2003 固有のファイル共有にマップできない場合、Windows のドキュメントを参照して、問題を解決します。

## Oracle Files および Search のポートレットの登録（必須）

Oracle Files を構成し、ドメインを起動した後、Oracle Files および Search のポートレットを構成するために、Web クライアント・インストーラを実行する必要があります。ポートレットは登録後、Oracle Collaboration Suite Web クライアントのページから使用可能になります。

**関連項目：** Web クライアント・インストーラの実行については、[第 6 章「Oracle Collaboration Suite のインストール」](#)を参照してください。





---

## Oracle Web Conferencing の構成

この章では、Oracle Web Conferencing のインストール後の構成タスクを説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Web Conferencing 構成の概要](#)
- [Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントのインストール後のタスク](#)
- [Document Conversion Server および Voice Conversion Server のインストール](#)
- [タイムゾーンの構成](#)
- [プロパティ](#)

# Oracle Web Conferencing 構成の概要

この項の内容は次のとおりです。

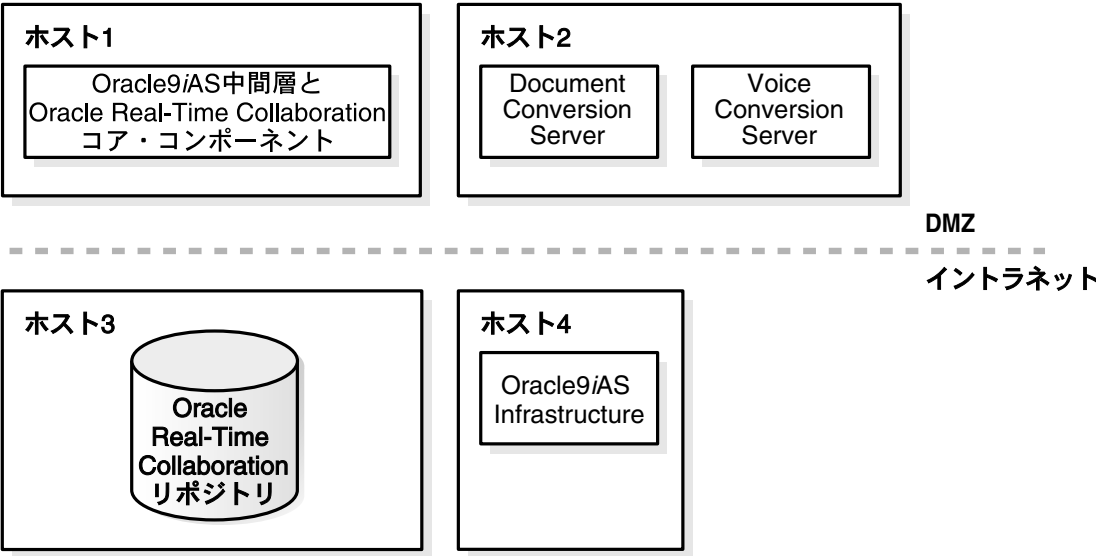
- [imctl コマンドライン・ユーティリティ](#)
- [Oracle Real-Time Collaboration インスタンスの起動](#)

標準構成は、企業のイントラネット・ユーザーが音声ストリーミングおよびドキュメント変換サービスを使用してオンライン会議を開くことのできる配置です。これは最も単純な配置であり、一般にパイロット配置の作成に使用されます。この配置では、ユーザーはインターネット、インターネット上のプロキシおよびイントラネットを介して Oracle Web Conferencing にアクセスできます。

**関連資料：** dcmctl の詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

[図 15-1](#) に示すように、ホスト 1 とホスト 2 が DMZ に配置され、ホスト 3 とホスト 4 が企業イントラネットに配置されます。

図 15-1 Oracle Real-Time Collaboration の基本配置



次に、Oracle Web Conferencing の様々な部分を動作させるために行う必要のある必須の関連付けを示します。

- **Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントから Oracle Real-Time Collaboration リポジトリ**： この関連付けは、インストール時に行います。
- **Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントから Oracle9iAS Infrastructure**： この関連付けは、インストール時に行います。
- **Document Conversion Server および Voice Conversion Server から Oracle Real-Time Collaboration リポジトリ**： この関連付けは、インストール時に行います。
- **Document Conversion Server および Voice Conversion Server から Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネント**： これはインストール後の必須手順です。

## imtctl コマンドライン・ユーティリティ

imtctl ユーティリティは、Oracle Real-Time Collaboration システムを管理および構成するためのコマンドライン・インタフェースを提供します。このユーティリティは、Oracle Real-Time Collaboration コンポーネントの起動や停止、現在の状態の表示、構成などの処理をサポートする様々なコマンドをサポートします。対話型シェル・モードで imtctl を実行することも、コマンドライン引数として単一のコマンドを発行することもできます。単一コマンドを発行する場合、imtctl はコマンドを実行して終了します。

このユーティリティは、`%ORACLE_HOME%\imeeting\bin` の下のすべてのプラットフォームで使用できます。これはすべてのプラットフォームで imtctl として起動されます。引数を指定せずに imtctl を起動すると、対話型シェルが開きます。

```
%ORACLE_HOME%\imeeting\bin> imtctl
```

サポートされるコマンドのリストを表示するには、help コマンドを起動します。

```
imtctl> help
```

特定のコマンドの詳細な説明を表示するには、後ろに -help オプションを指定してコマンドを起動します。

```
imtctl> COMMAND -help
```

exit コマンドは、シェル・セッションを終了します。

```
imtctl> exit
```

### imtcctl スクリプト

imtcctl ユーティリティの単純なスクリプトを作成できます。これらのスクリプトは、imtcctl により実行されるコマンドと、オプションのコメントから構成されます。これらのスクリプトが標準のオペレーティング・システム・スクリプトよりも優れている点は、imtcctl スクリプトがプラットフォームに依存せず、複数のコマンドを実行するためにユーティリティを複数回実行する必要がないということです。

Oracle Web Conferencing には、一般的なインストール後の構成タスクを実行するために使用できる標準スクリプトのセットが付属しています。これらのスクリプトは、`IMT_HOME¥bin¥scripts` ディレクトリにあり、拡張子 `.imt` で終わります。各スクリプトは、スクリプトの実行前に設定する必要がある値を示すためにテンプレート化されています。次の例に示すように、標準入力ダイレクションを使用してスクリプトを起動します。

```
%ORACLE_HOME%¥imeeting¥bin> imtcctl < ¥scripts¥sample.imt
```

---

**注意：** コマンドラインはプラットフォームごとに若干異なる場合がありますが、基本的な使用方法は同じです。

---

必要に応じて、新しいスクリプトを作成できます。スクリプトには、サポートされている任意の imtcctl コマンドに加えて、コメント行（# で開始する任意の行）およびスクリプトで実行されるコマンドをエコーする特殊な `echo [on/off]` コマンドを含めることができます。

## Oracle Real-Time Collaboration インスタンスの起動

インストール時に、すべてのプロセスがインストーラにより自動的に開始されます。

他の任意の時点で、imtcctl ユーティリティを使用してシステムを起動します。次の `start` コマンドを起動します。

```
%ORACLE_HOME%¥imeeting¥bin¥imtcctl start
```

または、imtcctl をシェル・モードで起動してから、`start` コマンドを発行することもできます。2 番目のオプションを使用すると、`start` コマンドの完了後に Oracle Real-Time Collaboration の状態を簡単に確認できます。

```
%ORACLE_HOME%¥imeeting¥bin¥imtcctl
imtcctl> start
imtcctl> getState
```

## Oracle Real-Time Collaboration インスタンスの停止

次の stop コマンドを起動することにより、システムを停止します。

```
imtctl> stop
```

## Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントのインストール後のタスク

Oracle Web Conferencing コア・コンポーネントをインストールする場合は、Oracle Web Conferencing Server およびその他の関連コンポーネントをインストールします。インスタンスが作成される新規インストールを実行するたびに、次の 2 種類のタスクを実行する必要があります。

- **システム・タスク：** これらのタスクは、システムに対して 1 回実行する必要があります。ほとんどの場合、新規インスタンスがシステムに追加されるときにこれらの手順を繰り返す必要はありません。ただし、グローバル設定を使用したり、特定のインスタンスに対してオーバーライドしたりできます。
- **インスタンス・タスク：** これらのタスクは、インスタンスごとに実行する必要があります。完了する必要がある特定のタスクのセットは、配置シナリオにより決定されます（たとえば、インターネット接続と SSL 対応）。

表 15-1 に、実行する必要がある様々なタスクと、各タスクに関連する情報をリストします。

表 15-1 タスクのチェックリスト

タスク	必要な理由	タスクの種類
既存のプロキシ・サーバーとの統合	Oracle Web Conferencing は、Oracle Web Conferencing コンソールで使用するには既存のプロキシ設定と統合する必要があります。これには、共有ブラウズ機能およびクロス・インスタンス HTTP ベース診断が含まれます。	システム・タスク
既存の電子メールとの統合	会議の電子メール招待を送信するには、Oracle Web Conferencing を電子メール・インフラストラクチャと統合する必要があります。	システム・タスク
Oracle HTTP Server との統合	Oracle Web Conferencing は、そのインスタンスに関連付けられている Oracle HTTP Server と統合する必要があります。これにより、リモート・ファイアウォールの背後にいるインターネット・ユーザーにアクセスできます。	インスタンス・タスク
レポートのための Oracle Web Conferencing の構成	Oracle Web Conferencing では、レポートを自動生成して電子メールで送信できます。Oracle Web Conferencing をこの機能用に構成する必要があります。	システム・タスク

表 15-1 タスクのチェックリスト（続き）

タスク	必要な理由	タスクの種類
定期的な監視の設定	インスタンスを定期的に監視し、結果をアラート管理システムにプラグインできます。	インスタンス・タスク
管理者への businessadmin ロールの割当て	これにより、管理者が Oracle Web Conferencing アプリケーションで管理ページを表示できます。	システム・タスク

この項の内容は次のとおりです。

- システム・タスク
- インスタンス・タスク
- 確認

システム・タスク

既存のプロキシ・サーバーとの統合： Oracle Web Conferencing 共有ブラウズ・モードは、Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントのインスタンス・システムから HTTP/S プロトコルを使用して Web サイトにアクセスします。ネットワーク・トポロジとファイアウォール構成に応じて、一部のサイトへのアクセスには HTTP/S プロキシ・サーバーが必要な場合があります。次のスクリプトは、プロキシ機能を有効にするためのテンプレートを提供します。

```
%ORACLE_HOME%\imeeting\bin\scripts\proxy.imt
```

スクリプトを実行する前に、テンプレートの値を編集して実際の配置の値で置換します。詳細は、スクリプト内の説明を参照してください。

次のプロパティを設定します。

- UserAgentProxyHost
- UserAgentProxySSLHost
- UserAgentProxyPort (80 でない場合のみ)
- UserAgentProxySSLPort (443 でない場合のみ)
- UserAgentProxyExclusions
- UserAgentProxyEnabled

**関連項目：** これらのプロパティの詳細は、15-17 ページの「[プロパティ](#)」を参照してください。

**既存の電子メールとの統合：** Oracle Web Conferencing アプリケーションでは、ユーザーへの会議の招待など、様々な目的で送信電子メールを生成できます。この機能を有効にするには、Oracle Real-Time Collaboration システムを特定の電子メール関連プロパティを使用して構成する必要があります。詳細は、次の `imtctl` スクリプトを参照してください。

```
%ORACLE_HOME%\meeting\bin\scripts\mail.imt
```

スクリプトを実行する前に、テンプレートの値を編集して実際の配置の値で置換します。詳細は、スクリプト内の説明を参照してください。

次のプロパティを設定します。

- `Smtphost`
- `Smtpport` (25 でない場合のみ)
- `EmailEnabled`

**関連項目：** これらのプロパティの詳細は、15-17 ページの「[プロパティ](#)」を参照してください。

**レポートの設定：** Oracle Real-Time Collaboration は様々なレポート機能をサポートしており、`imtreport` スクリプトを使用して Oracle Web Conferencing レポートを生成し、電子メールで送信できます。スクリプトは `%ORACLE_HOME%\meeting\bin` ディレクトリにあり、すべてのプラットフォームで `imtreport` として起動されます。実際のスクリプト・ファイルは、UNIX の場合が `imtreport`、Microsoft Windows の場合が `imtreport.cmd` です。受信者リストなどの必須レポート・オプションは、レポート・スクリプトの最上部にある変数を編集することにより設定します。スクリプトには、提供されているオプションのコメントが含まれます。使用しているプラットフォームに適したスクリプトを編集してください。一部のオペレーティング・システムで提供されている、スクリプトを毎週起動するメカニズム（たとえば、UNIX の `cron job` や Windows のタスク・スケジューラ）を使用して、レポートを毎週自動的に送信できます。

**管理ロールの設定：**

```
imtctl> modifyRole -username "firstname.lastname@acme.com" -rolename
"businessadmin"
```

## インスタンス・タスク

この Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・システムでの Oracle Real-Time Collaboration と Oracle HTTP Server の統合: `mod_imeeting` を有効にします。

`mod_imeeting` が構成される Oracle HTTP Server に必要な構成変更を加えます。`mod_imeeting` は、`%ORACLE_HOME%\imeeting\conf\mod_imeeting.conf` ファイルに含まれ、このファイルは Apache の `%ORACLE_HOME%\Apache\Apache\conf\oracle_apache.conf` ファイルに含まれています。

`mod_imeeting` をアクティブにするには、次のようにします。

1. `oracle_apache.conf` 行に `mod_imeeting.conf` 用の次の行を追加します。

```
Include "%ORACLE_HOME%\imeeting\conf\mod_imeeting.conf"
```

2. DCM を使用して Apache 構成を更新します。

```
%ORACLE_HOME%\dcm\bin\dcmctl updateConfig -ct ohs
```

**関連資料：** `dcmctl` の詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

3. DCM を介して Apache を再起動します。

```
%ORACLE_HOME%\dcm\bin\dcmctl restart -ct ohs
```

4. `mod_imeeting/mx` リダイレクトを設定します。

詳細は、次の `imtctl` スクリプトを参照してください。

```
%ORACLE_HOME%\imeeting\bin\scripts\redirect.imt
```

スクリプトを実行する前に、テンプレートの値を編集して実際の配置の値で置換します。詳細は、スクリプト内の説明を参照してください。

`MxRedirectPort` プロパティを設定します。

**関連項目：** このプロパティの詳細は、15-17 ページの「[プロパティ](#)」を参照してください。

5. 基本的な Apache 設定を使用するように Oracle Real-Time Collaboration を構成します。

Oracle Real-Time Collaboration インストーラは、Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・コンピュータに対して構成されている実際のホスト名が、Oracle Real-Time Collaboration リソースにアクセスするためにクライアントにより使用されることを想定します。このことは、DNS 別名やその他の高度なネットワーク配置シナリオで、外部の場所から Oracle Real-Time Collaboration リソースにアクセスするために使用される名前のカスタマイズが必要な場合には当てはまりません。次のスクリプトは、このような構成のサポート方法の例を示しています。



```
%ORACLE_HOME%\imeeting\bin\scripts\hostname.imt
```

スクリプトを実行する前に、テンプレートの値を編集して実際の配置の値で置換します。詳細は、スクリプト内の説明を参照してください。

次のプロパティを設定します。

- ApacheWebHost
- ApacheWebPort
- ApacheWebSecurePort
- ApacheProtocolSecure

**定期的な監視のためのサービス可用性テストの設定：** 次の URL を定期的に ping するようにインフラストラクチャの監視を設定します。次の例では、インスタンス (ApacheWebHost) の URL が imeeting1.company.com であると想定します。

会議サービスの可用性を監視する場合：

```
http://imeeting1.company.com/intapp/servlet/IntTestServlet?mtgtest=true
```

Voice Conversion Server の可用性を監視する場合：

```
http://imeeting1.company.com/intapp/servlet/IntTestServlet?voiceconvtest=true
```

Document Conversion Server の可用性を監視する場合：

```
http://imeeting1.company.com/intapp/servlet/IntTestServlet?docconvtest=true
```

**関連資料：** 詳細は、『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』を参照してください。

## 確認

インスタンス・タスクが正しく実行されたことを確認するには、次のユーティリティを起動します。

```
imtctl> runtests
```

失敗した各テストについて、インストール後の手順が正しく実行されていることを確認します。

---

**注意：** Document Conversion Server および Voice Conversion Server が、コア・コンポーネント・インスタンスが属する Oracle Real-Time Collaboration クラスタを処理するように構成されていない場合は、Voice Conversion Server の可用性テストと Document Conversion Server の可用性テストがコア・コンポーネント・インスタンスで失敗します。

---

# Document Conversion Server および Voice Conversion Server のインストール

Document Conversion Server または Voice Conversion Server をインストールする場合は、新規にインストールしたサーバーの新規インスタンスが作成されます。

## Voice Conversion Server の構成

この項では、Voice Conversion Server の構成および起動方法について説明します。

### VoiceDialInPrefix プロパティ

**説明：** このプロパティは、Voice Conversion Server のインスタンスのダイヤルイン接頭辞を設定します。この接頭辞は、ダイヤル・アウトの前に、Voice Conversion Server により受信されるすべてのダイヤルイン番号に追加されます。通常、企業には、社内電話ネットワークの外部の番号にダイヤルするためのダイヤルイン接頭辞（9 など）があります。

**デフォルト値：** なし

**有効値：** 任意の有効なダイヤル・シーケンス。たいていの場合は数値です（9 など）。有効なダイヤル・シーケンスには、数値 0 ～ 9 および、`、`、`*`、`#` が含まれます。

**スコープ：** インスタンス

Voice Conversion Server インスタンスのダイヤルイン接頭辞を 9 に構成するには、次のようにします。

```
imtctl> setProperty -i instance_name -pname "VoiceDialInPrefix" -pvalue "9"
```

### システム・ダイヤルイン

システム・ダイヤルインは、管理者が作成するシステム全体のダイヤルインです。これらはすべての Oracle Web Conferencing ユーザーから使用できます。通常、システム管理者は、システムのユーザーが共通に使用する電話会議ベンダーのシステム・ダイヤルインを作成します。システム・ダイヤルインは、ユーザーが独自のダイヤルインを作成するためのテンプレートとして機能します。ただし、ユーザーはシステム・ダイヤルインを編集できません。多くの場合、システム・ダイヤルインは、すべてのユーザーに共通の情報を含み、ユーザーがダイヤルインを使用可能にするために追加する必要がある情報を示すという点で不完全なダイヤル・シーケンスです。ユーザーは、システム・ダイヤルインに推奨される追加を行い、会議で使用するためにユーザー定義ダイヤルインとして保存する必要があります。

たとえば、電話会議ベンダーは、一般にユーザーに PIN または会議 ID を提供します。システム管理者は、特定の会議ベンダーについて、ベンダーへの通話料無料の番号を含むシステム全体のダイヤルインを作成し、それに PIN/ 会議 ID および `、`、`*`、`#` などの必要なセパレータを追加できます。ユーザーは、PIN/ 会議 ID を追加することでシステム・ダイヤルインを変更し、別の名前で作成できます。

表 15-2 に、ダイヤルインの例を 2 つ示します。

表 15-2 ダイヤルインの例

ダイヤルイン名	ダイヤルイン・シーケンス
音声会議ベンダー（米国）	18005555555,ADD_CONF_ID_HERE#,,,,,,,,,#,,,,,,,,,#
音声会議ベンダーでの Joe のアカウント	18005555555,8282828#,,,,,,,,, #,,,,,,,,#

システム・ダイヤルインは、`imtcctl` ユーティリティを介して管理できます。

新規システム・ダイヤルインの作成

新規システム・ダイヤルインを作成するには、次のようにします。

```
imtcctl> addSysDialin -name dialin_name -sequence dialin_sequence -default
true/false
```

`-default` は、システム・ダイヤルインをすべてのユーザーのデフォルトにするかどうかを示します。ユーザーは、Oracle Web Conferencing コンソールからデフォルトをオーバーライドすることも選択できます。

システム・ダイヤルインの削除

システム・ダイヤルインを削除するには、次のようにします。

```
imtcctl> deleteSysDialin -name dialin_name -id dialin_id
```

ダイヤルイン名または ID が必要です。両方が指定されている場合は、ダイヤルイン名が使用されます。名前または ID を取得するには、`getSysDialins` を起動します。

既存のシステム・ダイヤルインの表示

`getSysDialins` を起動します。これにより、既存のシステム・ダイヤルインのダイヤルイン ID、名前およびシーケンスがリストされます。

特定の Oracle Real-Time Collaboration クラスタにあるインスタンスを処理するための Voice Conversion Server の構成

次のコマンドを起動します。

```
imtcctl> setProperty -pname InstanceLocation -pvalue
"[%cluster1locationvalue%,%cluster2locationvalue%]"
```

Voice Conversion Server の起動

`imtcctl> start` を起動して Voice Conversion Server を起動します。

### 確認

Voice Conversion Server が正しく設定されていることを確認するには、新規サーバーが割り当てられるのと同じ Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントの処理を割り当てられている他の Voice Conversion Server を停止します（存在する場合）。次に、一連の Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネントで次のコマンドを起動します。

```
imtctl> runtests -testlist voiceconvtest
```

コア・コンポーネント・コンピュータが Voice Conversion Server に接続できることを確認します。

## タイムゾーンの構成

Oracle Web Conferencing ユーザーは、Oracle Web Conferencing アプリケーションにログインし、「設定」をクリックすることによりタイムゾーンを設定できます。使用可能なタイムゾーンのリストが表示されます。

ユーザーがタイム・ゾーンを設定した後で、Oracle Web Conferencing アプリケーションおよび Oracle Web Conferencing コンソール内のすべての日付 / 時刻参照が自動的にそれらのタイムゾーンに変換されます。

**例：** ユーザー A は、自身のタイムゾーンを「(-05:00) 米国東部標準時」に設定します。次に、会議を 2004 年 3 月 30 日午後 5:00 にスケジュールします。東部標準時の午後 5 時に会議を開始します。タイムゾーンを「(-08:00) 米国太平洋標準時」に設定しているユーザー B は、この会議に招待されています。ユーザー B が「**会議**」タブで招待を参照した際に、2004 年 3 月 30 日午後 2:00 と表示されます。時刻はユーザー B の太平洋標準時に変換されています。

### デフォルトのシステム・レベル・タイムゾーンの設定

ユーザーが Oracle Web Conferencing に初めて登録された際に、ユーザーのデフォルト・タイムゾーンはシステム・レベルのプロパティ DefaultTimeZoneName に基づいて設定されます。このプロパティのデフォルト値は UTC です。管理者は、この値を変更することが必要な場合があります。たとえば、Oracle Real-Time Collaboration システムがニューヨークに配置された場合は、プロパティを次のように変更できます。

```
imtctl> setProperty -system -pname DefaultTimeZoneName -pvalue America/New_York
```

この変更は、タイムゾーンをまだ設定していないユーザーのデフォルト・タイムゾーンにのみ影響します。ユーザーにタイムゾーンを設定するよう推奨してください。

## タイムゾーン

表 15-3 に、Oracle Real-Time Collaboration でサポートされているタイムゾーンのリストを示します。

**表 15-3 Oracle Real-Time Collaboration タイムゾーン**

内部名	ユーザーに表示される外部名
Pacific/Pago_Pago	(-11:00) パゴパゴ
Pacific/Honolulu	(-10:00) ハワイ
America/Anchorage	(-09:00) アラスカ
America/Vancouver	(-08:00) カナダ太平洋標準時
America/Los_Angeles	(-08:00) 米国太平洋標準時
America/Tijuana	(-08:00) ティファナ
America/Edmonton	(-07:00) カナダ山地標準時
America/Denver	(-07:00) 米国山地標準時
America/Phoenix	(-07:00) アリゾナ
America/Mazatlan	(-07:00) マサトラン
America/Winnipeg	(-06:00) カナダ中部標準時
America/Regina	(-06:00) サスカчевン
America/Chicago	(-06:00) 米国中部標準時
America/Mexico_City	(-06:00) Mexico City
America/Guatemala	(-06:00) グアテマラ
America/El_Salvador	(-06:00) エルサルバドル
America/Managua	(-06:00) マナグア
America/Costa_Rica	(-06:00) コスタリカ
America/Montreal	(-05:00) カナダ東部標準時
America/New_York	(-05:00) 米国東部標準時
America/Indianapolis	(-05:00) インディアナ東部
America/Panama	(-05:00) パナマ
America/Bogota	(-05:00) ボゴタ

**表 15-3 Oracle Real-Time Collaboration タイムゾーン（続き）**

内部名	ユーザーに表示される外部名
America/Lima	(-05:00) リマ
America/Halifax	(-04:00) カナダ大西洋標準時
America/Puerto_Rico	(-04:00) プエルトリコ
America/Caracas	(-04:00) カラカス
America/Santiago	(-04:00) サンティアゴ
America/St_Johns	(-03:30) ニューファンドランド
America/Sao_Paulo	(-03:00) サンパウロ
Atlantic/Azores	(-01:00) アゾレス諸島
Etc/UTC	(00:00) 世界標準時
UTC	(00:00) 世界標準時
Atlantic/Reykjavik	(00:00) レイキャビク
Europe/Dublin	(00:00) ダブリン
Europe/London	(00:00) ロンドン
Europe/Lisbon	(00:00) リスボン
Africa/Casablanca	(00:00) カサブランカ
Africa/Nouakchott	(00:00) ノアクショット
Europe/Oslo	(+01:00) オスロ
Europe/Stockholm	(+01:00) ストックホルム
Europe/Copenhagen	(+01:00) コペンハーゲン
Europe/Berlin	(+01:00) ベルリン
Europe/Amsterdam	(+01:00) アムステルダム
Europe/Brussels	(+01:00) ブリュッセル
Europe/Luxembourg	(+01:00) ルクセンブルク
Europe/Paris	(+01:00) パリ
Europe/Zurich	(+01:00) チューリヒ
Europe/Madrid	(+01:00) マドリード

表 15-3 Oracle Real-Time Collaboration タイムゾーン (続き)

内部名	ユーザーに表示される外部名
Europe/Rome	(+01:00) ローマ
Africa/Algiers	(+01:00) アルジェ
Africa/Tunis	(+01:00) チュニス
Europe/Warsaw	(+01:00) ワルシャワ
Europe/Prague	(+01:00) プラハ、ブラチスラバ
Europe/Vienna	(+01:00) ウィーン
Europe/Budapest	(+01:00) ブダペスト
Europe/Sofia	(+02:00) ソフィア
Europe/Istanbul	(+02:00) イスタンブール
Europe/Athens	(+02:00) アテネ
Asia/Nicosia	(+02:00) ニコシア
Asia/Beirut	(+02:00) ベイルート
Asia/Damascus	(+02:00) ダマスカス
Asia/Jerusalem	(+02:00) エルサレム
Asia/Amman	(+02:00) アンマン
Africa/Tripoli	(+02:00) トリポリ
Africa/Cairo	(+02:00) カイロ
Africa/Johannesburg	(+02:00) ヨハネスブルク
Europe/Moscow	(+03:00) モスクワ
Asia/Baghdad	(+03:00) バグダッド
Asia/Kuwait	(+03:00) クウェート
Asia/Riyadh	(+03:00) リヤド
Asia/Bahrain	(+03:00) バーレーン
Asia/Qatar	(+03:00) カタール
Asia/Aden	(+03:00) アデン
Africa/Khartoum	(+03:00) ハルツーム

**表 15-3 Oracle Real-Time Collaboration タイムゾーン（続き）**

内部名	ユーザーに表示される外部名
Africa/Djibouti	(+03:00) ジブチ
Africa/Mogadishu	(+03:00) モガディシオ
Asia/Dubai	(+04:00) ドバイ
Asia/Muscat	(+04:00) マスカット
Asia/Yekaterinburg	(+05:00) エカテリンバーグ
Asia/Tashkent	(+05:00) タシケント
Asia/Calcutta	(+05:30) インド
Asia/Novosibirsk	(+06:00) ノボシビルスク
Asia/Almaty	(+06:00) アルマトウイ
Asia/Dacca	(+06:00) ダッカ
Asia/Krasnoyarsk	(+07:00) クラスノヤルスク
Asia/Bangkok	(+07:00) バンコク
Asia/Saigon	(+07:00) ベトナム
Asia/Jakarta	(+07:00) ジャカルタ
Asia/Irkutsk	(+08:00) イルクーツク
Asia/Shanghai	(+08:00) 北京、上海
Asia/Hong_Kong	(+08:00) 香港
Asia/Taipei	(+08:00) 台北
Asia/Kuala_Lumpur	(+08:00) クアラルンプール
Asia/Singapore	(+08:00) シンガポール
Australia/Perth	(+08:00) パース
Asia/Yakutsk	(+09:00) ヤクーツク
Asia/Seoul	(+09:00) ソウル
Asia/Tokyo	(+09:00) 東京
Australia/Darwin	(+09:30) ダーウィン
Australia/Adelaide	(+09:30) アデレード



表 15-3 Oracle Real-Time Collaboration タイムゾーン (続き)

内部名	ユーザーに表示される外部名
Asia/Vladivostok	(+10:00) ウラジオストク
Australia/Brisbane	(+10:00) ブリズベン
Australia/Sydney	(+10:00) シドニー、キャンベラ
Australia/Hobart	(+10:00) ホーバート
Asia/Magadan	(+11:00) マガダン
Asia/Kamchatka	(+12:00) カムチャッカ
Pacific/Auckland	(+12:00) オークランド

## プロパティ

この項では、Oracle Web Conferencing 機能を構成するために設定する必要のあるプロパティについて説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [プロキシの設定](#)
- [電子メールの構成](#)
- [Oracle Real-Time Collaboration プロパティと Apache 設定の同期](#)

## プロキシの設定

次のプロパティは、すべての Oracle Real-Time Collaboration の HTTP クライアント・コードで使用されるプロキシ設定を構成します。これには、共有ブラウズ機能およびクロス・インスタンス HTTP ベース診断が含まれます。これは、ファイアウォールを考慮する場合に重要です。

### UserAgentProxyHost

**説明：** このプロパティは、HTTP プロキシのホスト名を設定します。

**デフォルト値：** なし

**有効値：** ホスト名

**スコープ：** コンポーネント

例：

- システム全体についてプロキシを `www-proxy.company.com` に設定するには、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxyHost -pvalue
"www-proxy.company.com"
```

- 現在のインスタンスについてプロキシを `www-proxy.company.com` に設定するには、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -pname UserAgentProxyHost -pvalue
"www-proxy.company.com"
```

### **UserAgentProxySSLHost**

説明： このプロパティは、HTTPS プロキシのホスト名を設定します。

デフォルト値： なし

有効値： 有効なホスト名

スコープ： コンポーネント

例：

- システム全体についてプロキシを `www-proxy.company.com` に設定するには、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxySSLHost -pvalue
"www-proxy.company.com"
```

- 現在のインスタンスについてプロキシを `www-proxy.company.com` に設定するには、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -pname UserAgentProxySSLHost -pvalue
"www-proxy.company.com"
```

### **UserAgentProxyPort**

説明： このプロパティは、プロキシ・ポートを設定します。

デフォルト値： 80

有効値： 任意のポート

スコープ： コンポーネント

例：

- システム全体についてプロキシ・ポートを 8080 に設定するには、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxyPort -pvalue 8080
```

- 現在のインスタンスのプロキシ・ポートを設定するには、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -pname UserAgentProxyPort -pvalue 8080
```

### UserAgentProxySSLPort

**説明：** SSL プロキシ・ポートに設定します。

**デフォルト値：** 443

**有効値：** 任意のポート

**スコープ：** コンポーネント

**例：**

- システム全体について SSL プロキシ・ポートを 4443 に設定するには、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxySSLPort -pvalue 4443
```

- 現在のインスタンスの SSL プロキシ・ポートを設定するには、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -pname UserAgentProxySSLPort -pvalue 4443
```

### UserAgentProxyExclusions

**説明：** このプロパティは、プロキシ化する必要のないドメイン / ホストの URL のリストを設定します。

**デフォルト値：** なし

**有効値：** (単純な最後尾マッチング・アルゴリズム)。値の書式は "[¥"domain1¥", ¥"domain2¥"]" にする必要があります。

**スコープ：** システム、インスタンス。このプロパティはシステム・スコープで設定できますが、特定のコンポーネントに対してオーバーライドできます。

**例：**

- システム全体でドメイン company.com および companycorp.com の除外を設定するには、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxyExclusions -pvalue "[¥".company.com¥", ¥".companycorp.com¥"]"
```

- 現在のインスタンスでドメイン company.com および companycorp.com の除外を設定するには、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -pname UserAgentProxyExclusions -pvalue "[¥".company.com¥", ¥".companycorp.com¥"]"
```

### **UserAgentProxyEnabled**

**説明：** このプロパティは、プロキシ設定を有効にします。このプロパティが **true** に設定されていないかぎり、他のプロキシ設定はいずれも有効になりません。

**デフォルト値：** true

**有効値：** true/false

**スコープ：** コンポーネント

**例：** プロキシ設定を有効にするには、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname UserAgentProxyEnabled -pvalue true
```

## **電子メールの構成**

Oracle Web Conferencing では、ユーザーへの会議の招待など、様々な目的で送信電子メールを生成できます。この機能を有効にするには、**Oracle Real-Time Collaboration** システムを特定の電子メール関連プロパティを使用して構成する必要があります。

### **Smtphost**

**説明：** これは、Oracle Real-Time Collaboration で使用する SMTP サーバーのホスト名です。

**デフォルト値：** なし

**有効値：** ホスト名

**スコープ：** システム、インスタンス。このプロパティはシステム・スコープに設定できますが、特定のインスタンスに対してオーバーライドできます。

**例：**

- システム全体の Smtphost を mail-net.company.com に設定するには、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -system true -pname Smtphost -pvalue
"mail-net.company.com"
```

- 現在のインスタンスの Smtphost を mail-net.company.com に設定するには、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -pname Smtphost -pvalue "mail-net.company.com"
```

**SmtplibPort**

**説明:** これは、SMTP サーバーがリスニングするポートです。

**デフォルト値:** 25

**スコープ:** システム、インスタンス。このプロパティはシステム・スコープに設定できますが、特定のインスタンスに対してオーバーライドできます。

**例:**

- システム全体の SmtplibPort を 3000 に設定するには、次のコマンドを起動します。  

```
imtcctl> setProperty -system true -pname SmtplibPort -pvalue 3000
```
- 現在のインスタンスの SmtplibPort を 3000 に設定するには、次のコマンドを起動します。  

```
imtcctl> setProperty -pname SmtplibPort -pvalue 3000
```

**MxRedirectPort**

**説明:** Oracle Web Conferencing コンソールを介して接続しているインターネット・エンド・ユーザーは、通常は Apache/mod\_imeeting に接続します。最終的に、ソケットは mod\_imeeting により MX に渡され、このプロパティを使用して mod\_imeeting とインスタンス上の MX プロセス間の通信が行われます。このパラメータには、プラットフォーム固有の次の意味があります。

- **UNIX:** これはポートではなく名前です。ソケットはドメイン名ソケットを使用して渡されます。
- **Windows NT:** これはポートです。
- **Linux x86:** これはポートではなく名前です。

**デフォルト値:** なし

**有効値:** 2400 ~ 2700 の範囲の整数

**スコープ:** コンポーネント

**例:**

- 1 つの MX プロセス（インストーラのデフォルト）の場合は、次のコマンドを起動します。  

```
imtcctl> setProperty -ct mxcomm -pname MxRedirectPort -pvalue "[¥"2420¥"]"
```
- 2 つの MX プロセスの場合は、次のコマンドを起動します。  

```
imtcctl> setProperty -ct mxcomm -pname MxRedirectPort -pvalue "[¥"2420¥",¥"2421¥"]"
```

Oracle Web Cache が Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・コンピュータに存在せず、Oracle HTTP Server がリスナーの場合、通常はこの 2 つの例で接続のすべてのモードを十分にサポートできます。

## Oracle Real-Time Collaboration プロパティと Apache 設定の同期

次のプロパティを変更して、Apache 設定と同期します。

### ApacheWebHost

**説明：** Oracle Real-Time Collaboration インストーラは、Oracle Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・コンピュータに対して構成されている実際のホスト名が、Oracle Real-Time Collaboration リソースにアクセスするためにクライアントにより使用されることを想定します。このことは、DNS 別名やその他の高度なネットワーク配置シナリオで、外部の場所から Oracle Real-Time Collaboration リソースにアクセスするために使用される名前のカスタマイズが必要な場合には当てはまりません。

**デフォルト値：** インストーラによりインストール時に導出された実際のホスト名

**有効値：** 任意のホスト名

**スコープ：** インスタンス

**例：** 実際のホスト名が host1.company.com の場合でも、使用されている名前が "webconferencing.company.com" の場合は、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -pname ApacheWebHost -pvalue "webconferencing.company.com"
```

### ApacheWebPort

**説明：** Apache が HTTP 要求をリスニングするポート

**デフォルト値：** 80

**有効値：** 任意の有効なポート値

**スコープ：** インスタンス

**例：** インスタンス上の Apache がポート 80 ではなくポート 7777 で HTTP 要求をリスニングしている場合は、次のコマンドを起動します。

```
imtctl> setProperty -pname ApacheWebPort -pvalue 7777
```

---

**注意：** ポートを 80 以外の値に設定すると、リモート・プロキシの背後にいるユーザーにアクセスできなくなることがあります。

---

### ApacheWebSecurePort

**説明：** Apache が HTTPS 要求をリスニングするポート

**デフォルト値：** 443

**有効値：** 任意の有効なポート値

**スコープ：** インスタンス

**例：** インスタンス上の Apache がポート 443 ではなくポート 4443 で HTTPS 要求をリスニングしている場合は、次のコマンドを起動します。

```
imctl> setProperty -pname ApacheWebSecurePort -pvalue 4443
```

---

**注意：** このポートを 443 以外の値に設定すると、リモート・プロキシの背後にいるユーザーにアクセスできなくなることがあります。

---

### **ApacheProtocolSecure**

**説明：** ApacheWebHost が SSL を使用しているかどうか

**デフォルト値：** false

**有効値：** true/false

**スコープ：** システム

**例：** Apache Web ホストで SSL を使用している場合は、次の例に示すようにこのプロパティを true に設定する必要があります。

```
imctl> setProperty -pname ApacheProtocolSecure -pvalue true
```





---

## Java Access Bridge のインストール

この付録では、Java Access Bridge のインストールに必要な手順を説明します。

この付録の内容は次のとおりです。

- [Java Access Bridge の設定](#)
- [JRE 1.3.1 に対する設定](#)
- [JRE 1.1.8 に対する設定](#)

## Java Access Bridge の設定

この項では、画面リーダーを使用するために Oracle コンポーネントを有効にするための設定情報を示します。

Java Access Bridge は、Windows プラットフォームで実行されている Java アプリケーションを読み取るための JAWS 画面リーダーなどの補助テクノロジーを有効にします。補助テクノロジーは、Oracle Universal Installer や Oracle Enterprise Manager などの Java ベースのインタフェースを読み取ることができます。

Oracle Collaboration Suite インストールの CD-ROM には、インストール時に Oracle Universal Installer で使用される 2 つの異なるバージョンの Java Runtime Environment (JRE) が含まれています。CD-ROM には、JRE 1.3.1 および JRE 1.1.8 が含まれています。JRE は、インストール時に Java Access Bridge を使用できるようにします。

次の手順を完了して、各 JRE に対して Java Access Bridge をインストールおよび構成します。

---

---

**注意：** Java Access Bridge は、次のインストール CD の 1 枚目の CD-ROM にあります。

- Oracle9iAS Infrastructure
  - Oracle Collaboration Suite Information Storage
  - Oracle Collaboration Suite
- 
- 

## JRE 1.3.1 に対する設定

Java Access Bridge を JRE 1.3.1 で設定するには、1 枚目の Oracle Collaboration Suite の CD-ROM にあるバッチ・ファイルを実行します。バッチ・ファイルは、次の場所にあります。

`first_install_CD-ROM\install\win32\access_setup.bat`

## JRE 1.1.8 に対する設定

次の項では、Java Access Bridge を JRE 1.1.8 で使用する方法を説明します。

- [Oracle Universal Installer に対する設定](#)
- [インストール済 Oracle コンポーネントの設定](#)

## Oracle Universal Installer に対する設定

Oracle コンポーネントをインストールする前に Java Access Bridge をインストールおよび構成して、補助テクノロジーが Oracle Universal Installer 画面を読み取れるようにします。

Java Access Bridge をインストールするには、次のようにします。

1. Java Access Bridge のインストールを開始する前に、実行されている補助テクノロジー・ソフトウェアを終了します。
2. 1 枚目の Oracle Collaboration Suite コンポーネントの CD-ROM を挿入します。
3. %AccessBridge%accessbridge1\_0\_2.zip をハード・ドライブ上にコピーします。
4. ファイルをコンピュータのハード・ドライブに展開します。たとえば、次のようにします。

c:%

5. access-bridge.jar および jaccess-1\_1.jar 情報をユーザー環境変数 CLASSPATH に追加します。
  - a. Windows システムの「コントロール パネル」を開きます。Windows NT または Windows 2000 の場合は、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「システム」を選択します。
    - Windows NT では、「環境」タブをクリックします。
    - Windows 2000 では、「詳細」タブをクリックします。次に、「環境変数」をクリックします。
  - b. 次のパスをユーザー環境変数 CLASSPATH に追加します。
 

```
c:%AccessBridge-1_0_2fcs%installer%installerFiles%access-bridge.jar
```

```
c:%AccessBridge-1_0_2fcs%installer%installerFiles%jaccess-1_1.jar
```

c:%AccessBridge-1\_0\_2fcs は、コンピュータのハード・ドライブ上の Java Access Bridge の場所へのフルパスです。
6. JavaAccessBridge.dll および WindowsAccessBridge.dll を次の場所からコピーします。

c:%AccessBridge-1\_0\_2fcs%installer%installerFiles%

コピー先は次のようになります。

%SystemRoot%\system32\

インストールが成功した後、Java Access Bridge ドキュメントは次の場所にあります。

%AccessBridge-1\_0\_2fcs%\doc

インストール済 Oracle コンポーネントの設定

Oracle コンポーネントをインストールした後に Java Access Bridge for Windows をインストールおよび構成して、補助テクノロジーで Oracle コンポーネント画面を読み取れるようにします。

Java Access Bridge をインストールするには、次のようにします。

- 1. 1 枚目の Oracle Collaboration Suite コンポーネントの CD-ROM を挿入します。
- 2. %AccessBridge%\accessbridge1\_0\_2.zip をハード・ドライブ上にコピーします。
- 3. ファイルをコンピュータのハード・ドライブに展開します。たとえば、次のようにします。

c:\  
c:\

- 4. Java Access Bridge を Oracle コンポーネントで使用されている JRE 1.1.8 のサブディレクトリにインストールします。デフォルトでは、Oracle で使用される JRE 1.1.8 は次の場所にインストールされます。

SYSTEM\_DRIVE:\Program Files\Oracle\jre1.1.8

表 A-1 に、コンピュータのハード・ドライブにある Java Access Bridge の場所から、Oracle コンポーネントで使用される JRE の適切なサブディレクトリにコピーするファイルをリストします。

表 A-1 サブディレクトリへのファイルのコピー

コピー対象	コピー先
%AccessBridge-1_0_2fcs%\installer\installerFiles\ jaccess-1_1.jar	%lib%
%AccessBridge-1_0_2fcs%\access-bridge.jar	%lib%
%AccessBridge-1_0_2fcs%\JavaAccessBridge.dll	%bin%
%AccessBridge-1_0_2fcs%\WindowsAccessBridge.dll	%bin%

- 5. インストール先フォルダにある jaccess-1\_1.jar の名前を jaccess.jar に変更します。
- 6. テキスト・エディタを使用して、Oracle コンポーネントで使用される JRE 1.1.8 のサブディレクトリにある %lib%\awt.properties ファイルを開きます。

7. `awt.properties` ファイルに次の行を追加します。

```
AWT.EventQueueClass=com.com.java.accessibility.util.EventQueueMonitor
AWT.assistive_technologies=com.sun.java.accessibility.AccessBridge
```

インストールが成功した後、Java Access Bridge ドキュメントは次の場所にあります。

```
¥AccessBridge-1_0_2fcs¥doc
```

Java Access Bridge を使用するように Oracle コンポーネントを構成するには、次のようにします。

インストールされている Java Access Bridge ファイルを示すようにシステム環境変数 `ORACLE_OEM_CLASSPATH` を設定します。

1. 「システムのプロパティ」を開きます。Windows NT または Windows 2000 の場合は、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「システム」を選択します。

Windows NT の場合：

- a. 「環境」タブをクリックします。
- b. 「システム変数」リストで変数を選択します。
- c. 「変数」フィールドに `ORACLE_OEM_CLASSPATH` を入力します。
- d. 「値」フィールドに `jaccess.jar` および `access-bridge.jar` のフルパスを入力します。たとえば、JRE 1.1.8 がデフォルトの場所にインストールされている場合、パスは次のようになります。

```
SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib¥jaccess.jar;
SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib¥access-bridge.jar
```

- e. 「設定」をクリックします。
- f. 「OK」をクリックします。

Windows 2000 の場合：

- a. 「詳細」タブをクリックします。
- b. 「環境変数」をクリックします。  
「環境変数」ダイアログが表示されます。
- c. 「システム環境変数」リストの下にある「新規」ボタンをクリックします。  
「新しいシステム変数」ダイアログが表示されます。
- d. 「変数名」フィールドに `ORACLE_OEM_CLASSPATH` を入力します。

- e. 「**変数値**」フィールドに jaccess.jar および access-bridge.jar のフルパスを入力します。たとえば、JRE 1.1.8 がデフォルトの場所にインストールされている場合、パスは次のようになります。

```
SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib¥jaccess.jar;
SYSTEM_DRIVE:¥Program Files¥Oralce¥jre¥1.1.8¥lib¥access-bridge.jar
```

- f. 「システムのプロパティ」が終了するまで「**OK**」をクリックします。

---

# インストール・チェックリスト

この付録では、Oracle Collaboration Suite および Oracle Files Configuration Assistant の 3 つのインストールのチェックリストを示します。これらのチェックリストには、各インストールおよび構成のプロンプトで入力を求められる情報のタイプを示します。

この付録の内容は次のとおりです。

- [Oracle9iAS Infrastructure のインストール・チェックリスト](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール・チェックリスト](#)
- [Oracle Collaboration Suite のインストール・チェックリスト](#)
- [Oracle Files の構成チェックリスト](#)

# Oracle9iAS Infrastructure のインストール・チェックリスト

表 B-1 に、Oracle9iAS Infrastructure のインストールに必要な情報を示します。操作を開始する前に、示されたインストール情報に対する値を「ユーザー固有情報」欄に記入してください。

表 B-1 Oracle9iAS Infrastructure のインストール情報

情報	値の例	ユーザー固有情報
インスタンス名	instance1	
ias_admin パスワード	oracle1	
Oracle9iAS Single Sign-On Server のホスト名 <sup>1</sup>	ocs.us.oracle.com	
Oracle9iAS Single Sign-On のポート番号 <sup>1</sup> (付録 D「デフォルトのポート番号およびポート範囲」を参照)	7777	
Oracle Internet Directory のホスト名	ocs.us.oracle.com	
Oracle Internet Directory のポート番号 (付録 D「デフォルトのポート番号およびポート範囲」を参照)	4032	
Oracle Internet Directory のユーザー名	cn=orcladmin	
Oracle Internet Directory のパスワード	oracledadmin	
データベース・キャラクタ・セット	UTF8	

<sup>1</sup> Oracle Collaboration Suite のインストールに必要です。



# Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール・ チェックリスト

表 B-2 に、Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストールに必要な情報を示します。操作を開始する前に、示されたインストール情報に対する値を「ユーザー固有情報」欄に記入してください。

表 B-2 Information Storage のインストール情報

情報	値の例	ユーザー固有情報
グローバル・データベース名 および SID 名	instance1	
データベース・キャラクタ・ セット	UTF8	UTF8 <sup>1</sup>
SYSTEM ユーザーのパスワード		
SYS ユーザーのパスワード		
CTXSYS ユーザーのパスワード		
データベース・サービス名	myService	
データベース・ホスト名	dbHost	
データベース・リスナー・ ポート		

<sup>1</sup> このリリースの Oracle Collaboration Suite では、Information Storage データベースのデフォルトのキャラクタ・セットは UTF8 です。

# Oracle Collaboration Suite のインストール・チェックリスト

表 B-3 に、Oracle Collaboration Suite のインストールに必要な情報を示します。操作を開始する前に、示されたインストール情報に対する値を「ユーザー固有情報」欄に記入してください。

表 B-3 Oracle Collaboration Suite のインストール情報

情報	値の例	ユーザー固有情報
インスタンス名	instance2	
ias_admin パスワード	oracle1	
Oracle9iAS Single Sign-On Server のホスト名 <sup>1</sup>	ocs.us.oracle.com	
Oracle9iAS Single Sign-On のポート番号 <sup>1</sup> (付録 D「デフォルトのポート番号およびポート範囲」を参照)	7777	
Oracle Internet Directory のホスト名	ocs.us.oracle.com	
Oracle Internet Directory のポート番号 (付録 D「デフォルトのポート番号およびポート範囲」を参照)	4032	
Oracle Internet Directory のユーザー名	cn=orcladmin	
Oracle Internet Directory のパスワード	oracledadmin	

<sup>1</sup> Oracle Collaboration Suite のインストールに必要です。

## Oracle Files の構成チェックリスト

表 B-4 に、Oracle Files の構成に必要な情報を示します。操作を開始する前に、示された構成情報に対する値を「ユーザー固有情報」欄に記入してください。

**表 B-4 Oracle Files の構成情報**

情報	値の例	ユーザー固有情報
スキーマ名	IFSSYS	
スキーマのパスワード		
Oracle Files の SYSTEM ユーザー・パスワード		
Oracle Files の site_admin ユーザー・パスワード		
データベース・ホスト名	deploy.mycompany.com	
データベース・リスナーの ポート	1521	
データベース・サービス名	storage.deploy.mycompany. com	
データベースの SYS ユー ザー・パスワード		
HTTP ホスト名	files.mycompany.com	
SMTP サーバー名	smtphost.domainname	
サイト管理者の電子メール・ アドレス	admin@mycompany.com	
Oracle Internet Directory ルー ト Oracle コンテキスト	cn=OracleContext	
ローカル・ホスト名	local.mycompany.com	
ノード名	local.mycompany.com Node	
HTTP ノード名	local.mycompany.com HTTP Node	
Oracle Files プロトコル・ サーバー		<input type="checkbox"/> FTP <input type="checkbox"/> NFS <input type="checkbox"/> AFP <input type="checkbox"/> NTFS



---

# トラブルシューティング

この付録では、一般的なインストールの問題および解決策について説明します。

この付録の内容は次のとおりです。

- [Oracle Collaboration Suite のインストールのトラブルシューティング](#)
- [Oracle Collaboration Suite Web Client 構成のトラブルシューティング](#)
- [Oracle Files のインストールのトラブルシューティング](#)
- [Real Application Clusters のトラブルシューティング](#)

## Oracle Collaboration Suite のインストールのトラブルシューティング

Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier には、Windows のシステム・フォルダにあるいくつかのファイルが必要です。これらのインストール時に、Oracle Collaboration Suite の要件が満たされてることを確認するために、そのシステム・ファイルが調べられます。古いファイルはすべて必要なバージョンのものに置き換えられます。通常、置換は Middle-Tier のインストール時に完了しますが、インストール時にファイルが別のプロセスで使用中の場合には、インストールは停止し、エラー画面が表示されます。

Infrastructure CD-ROM および Middle-Tier CD-ROM には、必要な Windows システム・ファイルの追加インストールが含まれています。このインストールでは、必要な場合にはインストールの終了時に自動的にシステムが再起動されます。

Oracle9iAS Infrastructure または Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のいずれかのインストール中にエラーが発生した場合、「OK」をクリックして、エラー・ダイアログを閉じ、次の手順を実行して Windows システム・ファイルのインストールを実行します。Windows システム・ファイルのインストールを実行しないと、Oracle9iAS Infrastructure または Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストールに進めません。

Windows システム・ファイルのインストールを実行するには、次のようにします。

1. 「終了」をクリックして現行のインストールを終了します。
2. Oracle9iAS Infrastructure または Oracle Collaboration Suite Middle Tier の CD-ROM のルート・ディレクトリから、`wsf.exe` を実行します。

Windows システム・ファイルのインストールは、既存の Oracle ホームを利用するレスポンス・ファイルにより実行されます。Oracle ホームがない場合は、OUIHome というホームを作成します。必要な場合は、Windows が自動的に再起動します。それ以外の場合、Windows システム・ファイルのインストールは、その他の画面を表示することなく終了します。

3. Oracle9iAS Infrastructure または Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストールを再起動します。

## Oracle Collaboration Suite Web Client 構成のトラブルシューティング

ユーザーが Oracle Collaboration Suite にログインし、Oracle Collaboration Suite ホーム・ページではなく汎用 Oracle9iAS Portal ページが表示される場合は、次のようにします。

1. 次のように、ユーザーが Oracle Collaboration Suite のメンバーであることを確認します。
  - a. 次の URL で Oracle Delegated Administration Services に orcladmin としてログインします。

`http://host_name:port_number/oiddas/`

---

**注意：** 標準インストールでは、Oracle Delegated Administration Services は Infrastructure がインストールされている場所に配置されます。

---

- b. 「ディレクトリ」タブをクリックします。
    - c. ユーザーをユーザー ID (orclguest など) で検索します。
    - d. 検索結果からユーザーを選択し、「編集」をクリックします。
    - e. 「Public グループ割当て」セクションにスクロールし、ユーザーが Oracle Collaboration Suite ユーザー・グループのメンバーであることを確認します。

ユーザーがメンバーでない場合は、**Oracle Collaboration Suite ユーザー・ボックス**をチェックし、「適用」をクリックします。
    - f. Oracle Delegated Administration Services からログアウトします。
  2. 次のように、Oracle Collaboration Suite ユーザー・グループがユーザーのデフォルト・グループであることを確認します。
    - a. Oracle9iAS Portal にそのユーザーとしてログインします。たとえば、`http://host_name:port_number/` に移動し、**エンド・ユーザーのログイン用コマンド**をクリックし、orclguest としてログインします。
    - b. Oracle Collaboration Suite ホーム・ページが表示された場合は、ユーザーが正しくプロビジョニングされているため、この手順の残りの部分を実行する必要はありません。
    - c. Oracle9iAS Portal の「ようこそ」ページが表示された場合は、「アカウント情報」をクリックします。
    - d. 「アカウント情報」ページで、ユーザーのデフォルト・グループが OCS\_PORTAL\_USERS に設定されていることを確認します。

設定されていない場合は、ユーザーのデフォルト・グループとして OCS\_PORTAL\_USERS を入力し、「適用」をクリックします。

- e. ユーザーの「**デフォルト・ホームページ**」が空白であることを確認します。
  - f. 「**ホーム**」グローバル・ボタンをクリックします。Oracle Collaboration Suite ホーム・ページが表示されます。表示されない場合は、手順 3 に進みます。
3. Oracle Collaboration Suite ホーム・ページがまだ表示されない場合は、次のようにします。
- a. Oracle9iAS Portal にそのユーザーとしてログインします。たとえば、`http://host_name:port_number/` に移動し、**エンド・ユーザーのログイン用コマンド**をクリックし、`orclguest` としてログインします。
  - b. Oracle9iAS Portal の「ようこそ」ページが表示された場合は、「**アカウント情報**」をクリックします。
  - c. 「**アカウント情報**」ページで、ユーザーのデフォルト・グループが `OCS_PORTAL_USERS` に設定されていることを確認します。  
設定されていない場合は、ユーザーのデフォルト・グループとして `OCS_PORTAL_USERS` を入力し、「**適用**」をクリックします。
  - d. 「**デフォルト・ホームページ**」フィールドの横の「**参照ページ**」アイコンをクリックします。
  - e. `OCS_V2_PAGE_GROUP` ページ・グループを探し、クリックして展開します。
  - f. Oracle Collaboration Suite ホーム・ページを探し、「**オブジェクトを戻す**」をクリックします。
  - g. 「**適用**」をクリックします。
  - h. 「**ホーム**」グローバル・ボタンをクリックすると、正しいホーム・ページが表示されます。



## Oracle Files のインストールのトラブルシューティング

ほとんどの構成エラーは、インストール前の手順を適切に実行しなかったことが原因で発生します。次の項では、いくつかの一般的なインストールの問題、その考えられる原因およびその問題の修正方法について説明します。Oracle Files および Oracle Workflow の両方のインストールおよび構成のアクションは、次のログ・ファイルに記録されます。

```
%ORACLE_HOME%\ifs\files\log\FilesConfig.log
%ORACLE_HOME%\wf\install\workflow.log
%ORACLE_HOME%\ifs\files\log\ifswfsetup.log
%ORACLE_HOME%\ifs\files\log\ifswfuploadlang.log
```

この項では、次の問題について説明します。

- データベース・オブジェクトの作成エラー
- データベースに関連するインストール・エラー・メッセージ
- Oracle Text が正しく動作しているかどうかの判断
- 低速なサーバー
- プロトコル・サーバーへの接続不可
- 「503 Service Unavailable」メッセージ
- Oracle Files Configuration Assistant の「session\_max\_open\_files must be set to 50」エラー・メッセージ

### データベース・オブジェクトの作成エラー

データベースが実行されていないか使用可能でない、またはリスナーが実行されていません。この場合は、構成前にデータベースおよびリスナーを起動します。

### データベースに関連するインストール・エラー・メッセージ

データベースが実行されていないか、または Oracle Text が正しく構成されていません。この場合は、インストール前にデータベースを起動し、tnsnames.ora ファイルおよび listener.ora ファイルを確認します。

## Oracle Text が正しく動作しているかどうかの判断

Oracle Files Configuration Assistant は、Oracle Text が正しく動作しているかどうかを判断するために一連の操作を実行します。これらの手順には次のものがあります。

- IFSCTXTEST0 ユーザーの作成とログイン
- Oracle Text 作業環境の作成
- BLOB 列を含む表の作成
- この BLOB 列に基づく Oracle Text 索引の作成
- 表への Word ドキュメントの配置
- Oracle Text 索引の同期化

これらのいずれかの手順に失敗した場合は、Oracle Files Configuration Assistant により、Oracle Text が正しく動作していないことが通知されます。問題の原因は、いくつかの問題に関連している場合があります。テストが失敗した手順を調べるには、次の手順に従います。

---

**注意：** Windows 64-bit Oracle9i データベース・サーバー 9.2 データベースに対する Oracle Files の構成は、スキーマ上で Oracle Text を使用可能にするために必要な ctxhx 実行可能ファイルがデータベースにないために失敗します。

この問題には、次の 2 つの解決策が考えられます。

- Oracle Files の構成中に「Oracle Text の検証が失敗しました。」というエラー・メッセージが表示された場合、「OK」をクリックして、有効な Oracle Text なしでスキーマを作成します。
- 独自の ctxhx 実行可能ファイルを作成します。詳細は、次の URL の OTN にある「Building a Filter Server for Oracle Text」ドキュメントを参照してください。

<http://otn.oracle.com/products/text/htdocs/FilterServer.htm>

---

次の手順を実行して、Oracle Text を手動で各手順でチェックします。

1. DBA ユーザーとしてログインし、次のように ifscctxtest0 というテスト・ユーザーを作成します。

```
SQL> CREATE USER IFSCCTXTEST0 IDENTIFIED BY IFSCCTXTEST0 DEFAULT TABLESPACE
USERS TEMPORARY TABLESPACE TEMP;
```

```
SQL> GRANT CONNECT,RESOURCE,CTXAPP TO IFSCCTXTEST0;
```

2. ifscctxtest.doc ファイルのロード元のディレクトリを作成します。  

```
SQL> create or replace directory DIR_TESTCASE as
'ORACLE_HOME%\ifs\files\admin\binaries'
```
3. IFSCCTXTEST0 ユーザーに、このディレクトリからの読取りを許可します。  

```
SQL> grant read on directory DIR_TESTCASE to IFSCCTXTEST0;
```
4. IFSCCTXTEST0 として接続し、lexer 作業環境を作成します。  

```
SQL> exec ctx_ddl.create_preference('mylexer', 'basic_lexer');
```
5. この作業環境に対してテーマ索引付けを使用不可にします。  

```
SQL> exec ctx_ddl.set_attribute('mylexer', 'index_themes', 'NO');
```
6. Word ドキュメントを格納する一時表を作成します。  

```
SQL> create table ifs_basic_lob_table(id NUMBER PRIMARY KEY, name
VARCHAR2(64),content BLOB);
```
7. BLOB 列に基づいて Oracle Text 索引を作成します。  

```
SQL> create index content_i on ifs_basic_lob_table(content) indextype is
ctxsys.context parameters ('lexer mylexer');
```
8. LOB ロケータを含む一時表に行を挿入し、次の PL/SQL ブロックを使用してドキュメントをロードします。  

```
SQL> DECLARE
 Dest_loc BLOB;
 Src_loc BFILE := BFILENAME('DIR_TESTCASE', 'ifscctxtest.doc');
BEGIN
 INSERT INTO ifs_basic_lob_table (id,name,content)
 VALUES (1,'ifscctxtest.doc',EMPTY_BLOB())
 RETURN content INTO dest_loc;
 DBMS_LOB.FILEOPEN(Src_loc, DBMS_LOB.LOB_READONLY);
 DBMS_LOB.LOADFROMFILE(Dest_loc, Src_loc, DBMS_LOB.GETLENGTH(Src_loc));
 DBMS_LOB.FILECLOSE(Src_loc);
 COMMIT;
END;
/
```
9. 索引を同期化します。  

```
SQL> alter index content_i rebuild parameters('sync');
```
10. Word ドキュメントを含む表でコンテンツベースの問合せを実行します。  

```
SQL> SELECT id, name FROM ifs_basic_lob_table WHERE CONTAINS
(content,'Protocol') > 0;
```

Oracle Text が正しく動作している場合は、これにより次の行が返されます。

```
ID NAME
```

```

1 ifsctxtest.doc
```

エラー・メッセージが返された場合、そのメッセージは何が問題の原因になっているかを示しています。索引の同期化またはコンテンツの検索に失敗した場合は、CTX\_USER\_INDEX\_ERRORS で補足情報 (ifsctxtest0 など) をチェックします。

```
SQL> select * from ctx_user_index_errors;
```

Oracle Text の構成の詳細は、Oracle Text のドキュメントおよび『Oracle Files 管理者ガイド』のトラブルシューティングの項を参照してください。

---

---

**注意：** これらのテストの実行後に、IFSCTXTEST0 ユーザーを忘れずに削除してください。

---

---

## 低速なサーバー

チューニングが必要です。

**関連資料：** 『Oracle Files 管理者ガイド』の Oracle Files のトラブルシューティングおよびパフォーマンスに関する章を参照してください。

## プロトコル・サーバーへの接続不可

Oracle Files の Web インタフェースにログインできても、一部の Oracle Files プロトコル・サーバーに接続できない場合は、Oracle Files 固有のパスワードを設定する必要があります。Oracle Files 固有のパスワードに関連付けられているプロトコルは、Oracle Files 構成時に選択されています。デフォルトでは、FTP および AFP では、ユーザーが Single Sign-On パスワードではなく Oracle Files 固有のパスワードを使用してログインする必要があります。

http://host\_name:port/files/app/ProtocolAccess に接続し、Oracle Files 固有のパスワードをユーザーに対して設定します。

**関連資料：** プロトコル・サーバーの構成の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

## 「503 Service Unavailable」メッセージ

このメッセージには2つの原因が考えられます。

- OC4J\_iFS\_files インスタンスが実行されていません。Oracle Files ドメインの起動後に、OC4J\_ifs\_files プロセスを再起動する必要があります（コマンド `ifstl start` を使用して Oracle Files ドメインを起動します）。

HTTP ログでエラーを確認し、OC4J\_iFS\_files インスタンスを起動します。

`http://hostname:port/files/app` に接続します。

OC4J\_ifs\_files プロセスを起動するには、`%ORACLE_HOME%/opmn/bin` ディレクトリで次のコマンドを実行します。

```
opmnctl startproc gid=OC4J_iFS_files
```

以前に OC4J\_iFS\_files プロセスを起動した場合は、次のコマンドを使用してプロセスを再起動します。

```
opmnctl restartproc gid=OC4J_iFS_files
```

- OC4J\_iFS\_files インスタンスは実行されていますが、インタフェースがまだロード中です。OC4J\_iFS\_files の起動後、約1分待ってから接続してください。

## Oracle Files Configuration Assistant の「session\_max\_open\_files must be set to 50」エラー・メッセージ

`initSID.ora` ファイルの `session_max_open_files` 値が正しく設定されていません。`initSID.ora` ファイルを変更して、`session_max_open_files` パラメータの値を50に設定します。

ファイルを編集し、次の行を追加します。

```
session_max_open_files=50
```

ファイルの編集後に、データベースを停止し、新しい `initSID.ora` ファイルを使用して再起動します。SQL\*Plus で次のコマンドを使用して、データベースを起動します。

```
startup pfile="%ORACLE_HOME%\pfile\initSID.ora"
```

Oracle Files Configuration Assistant を実行します。

## Real Application Clusters のトラブルシューティング

選択したリモート・ノード上でインストールを正常に実行するには、選択したすべてのノードで同一の、書込み可能な **Oracle** ホームのパスを選択します。そのようなパスを選択しなかった場合は、リモート・ノードでのインストールが失敗します。この失敗を示すエラー・メッセージは表示されません。

---

## デフォルトのポート番号およびポート範囲

この付録では、Oracle Universal Installer によって自動的に割り当てられるポート番号について説明します。

この付録の内容は次のとおりです。

- [ポート割当ての概要](#)
- [コンポーネントのポート番号](#)
- [Oracle のポート使用（コンポーネント別）](#)
- [Oracle のポート使用（ポート番号別）](#)

## ポート割当ての概要

Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite は、コンポーネントの構成時に、自動的にコンポーネントにポート番号を割り当てます。ポート番号は、事前に割り当てられた一連のデフォルトのポート番号およびポート範囲内から割り当てられます。

ポート番号は、次の方法で割り当てられます。

1. デフォルトのポート番号が Oracle プロセスまたは Oracle 以外のプロセスですでに使用中であるかどうかを確認されます。
2. デフォルトのポート番号が使用中ではない場合は、そのポート番号がコンポーネントに割り当てられます。
3. デフォルトのポート番号がすでに使用中である場合は、空きポート番号が見つかるまで、ポート範囲内で最も小さい番号から昇順に番号の割当てが試行されます。

## コンポーネントのポート番号

Oracle Universal Installer は、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite のインストール中に割り当てられるポートを示す `portlist.ini` というファイルを作成します。インストール・プロセスでは、自動的にすべてのポート競合が検出され、そのコンポーネントに割り当てられた範囲内で代替ポートが選択されます。このファイルは、次の場所にあります。

```
%ORACLE_HOME%\install\portlist.ini
```

`portlist.ini` ファイルには、`port_name = port_value` の形式でコンポーネント・エントリが示されます。次に例を示します。

```
Oracle HTTP Server port = 7777
Oracle HTTP Server SSL port = 4443
Oracle HTTP Server listen port = 7778
Oracle HTTP Server SSL listen port = 4444
Oracle HTTP Server Jserv port = 8007
Enterprise Manager Servlet port = 1810
```

ブラウザで「Oracle Collaboration Suite Welcome」ページにアクセスし、「Ports」タブを選択して、ポート番号を表示することもできます。

```
http://hostname:port_number/
```

ここで、デフォルトの `port_number` は 7777 です。



**注意：** Oracle Universal Installer は、Oracle Collaboration Suite のインストール中に選択されたコンポーネントに対してポート番号を使用します。その他の Oracle Collaboration Suite インスタンスを追加する場合は、インストール済のインスタンスが追加インストール時に実行されていることを確認してください。

Oracle9iAS Infrastructure のポート使用

Oracle9iAS Infrastructure をインストールするには、コンピュータでポート 1521 を排他的に使用する必要があります。現行システムのアプリケーションのいずれかがこのポートを使用している場合は、Oracle9iAS Infrastructure をインストールする前に、次のいずれかの操作を実行します。

- ポート 1521 を使用する既存のアプリケーションが存在する場合は、そのアプリケーションが別のポートを使用するように再構成します。
- 既存の Oracle Net Listener および Oracle9i データベースが存在する場合は、Oracle9iAS Infrastructure のインストールを続行します。Oracle9iAS Infrastructure は、既存の Oracle Net Listener を使用します。

Oracle のポート使用（コンポーネント別）

表 D-1 に、Oracle のポートをコンポーネント別に示します。

表 D-1 Oracle のポート使用（コンポーネント別）

コンポーネント	デフォルトの ポート番号	ポート番号の範囲
Oracle9iAS Clickstream Intelligence		
Oracle9iAS Clickstream Collector Server	6675	固定
Oracle9iAS Clickstream Collector Agent	6666	固定
Oracle9iAS Clickstream Intelligence Collector Agent	6666	6666 ～ 6674
Oracle9iAS Clickstream Execution Engine	6676	固定
Oracle9iAS Clickstream Intelligence Viewer	Oracle HTTP Server と 同じ	Oracle HTTP Server と 同じ
Oracle9iAS Clickstream Runtime Administrator	Oracle HTTP Server と 同じ	Oracle HTTP Server と 同じ

表 D-1 Oracle のポート使用（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトの ポート番号	ポート番号の範囲
<b>Oracle9iAS Containers for J2EE</b>		
Oracle9iAS Containers for J2EE AJP	3001	3001 ～ 3100
Oracle9iAS Containers for J2EE RMI	3101	3101 ～ 3200
Java Message Service (JMS) for Oracle9iAS Containers for J2EE	3201	3201 ～ 3300
Oracle9iAS Containers for J2EE HTTP Listener	3301	3301 ～ 3400
<b>Oracle9iAS Forms Services</b>		
Oracle9iAS Forms Services	Oracle HTTP Server と 同じ	Oracle HTTP Server と 同じ
<b>Oracle HTTP Server</b>		
Oracle HTTP Server - 非 SSL	7777	7777 ～ 7877
Oracle HTTP Server - SSL	4443	4443 ～ 4543
Oracle HTTP Server Listen - 非 SSL	7777	7777 ～ 7877
Oracle HTTP Server Listen - 非 SSL (Oracle9iAS Web Cache がインストール および構成されている場合)	7778	7777 ～ 7877
Oracle HTTP Server - SSL	4443	4443 ～ 4543
Oracle HTTP Server - SSL (Oracle9iAS Web Cache がインストールおよび構成されている 場合)	4444	4443 ～ 4543
Oracle HTTP Server JServ Servlet Engine	8007	8007 ～ 8107
Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のリクエスト・ポート	6003	6003 ～ 6099
Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のローカル・ポート	6100	6100 ～ 6199
Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のリモート・ポート	6200	6200 ～ 6299
Oracle HTTP Server - Java Object Cache	7000	7000 ～ 7010

表 D-1 Oracle のポート使用（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトの ポート番号	ポート番号の範囲
<b>Oracle9iAS Portal</b>		
Oracle9iAS Portal	Oracle HTTP Server と 同じ	Oracle HTTP Server と 同じ
<b>Oracle9iAS Single Sign-On</b>	5000	5000 ～ 5099
<b>Oracle9iAS Reports Services</b>		
Oracle9iAS Reports Services	3000	3000 ～ 3010
SQL*Net - リリース 6i との下位互換性専用	1950	1950 ～ 1960
Visigenics CORBA - Reports 9i	14000	14000 ～ 14010
<b>Oracle Email</b>		
Oracle Email	5100	5100 ～ 5200
IMAP4	143	固定
IMAP4-SSL	993	固定
POP3	110	固定
POP3-SSL	995	固定
SMTP	25	固定
NNTP	119	固定
NNTP-SSL	563	固定
<b>Oracle9iAS Web Cache</b>		
Oracle9iAS Web Cache HTTP Listen - 非 SSL	7777	7777 ～ 7877
Oracle9iAS Web Cache HTTP Listen - SSL	4443	4443 ～ 4543
Oracle9iAS Web Cache Administration	4000	4000 ～ 4030
<b>Oracle9iAS Wireless</b>		
Oracle9iAS Wireless	Oracle HTTP Server と 同じ	Oracle HTTP Server と 同じ
Oracle9iAS Wireless PIM 通知ディスパッチャ	9000	9000 ～ 9100

表 D-1 Oracle のポート使用（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトの ポート番号	ポート番号の範囲
<b>Oracle Enterprise Manager</b>		
Oracle Enterprise Manager アプリケーション・サーバー管理サービス	1810、1811	1812 ～ 1820
Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent	1748、1754、1808、1809	固定
Oracle Management Server	7771、7772、7773	7771 ～ 7773
<b>Oracle Internet Directory</b>		
Oracle Internet Directory	389、4031 ～ 4040	4031 ～ 4040
Oracle Internet Directory - 非 SSL	4032	
Oracle Internet Directory - SSL	636、4031 ～ 4040	4031 ～ 4040
<b>Oracle Calendar</b>		
Oracle Calendar Server Manager	5734	
<b>Oracle Files</b>		
Oracle Files ドメイン・コントローラ	53000 の範囲（自動割当て）	動的
Oracle Files のメイン・ノード	53000 の範囲（自動割当て）	動的
Oracle Files の HTTP ノード	53000 の範囲（自動割当て）	動的
LDAP- 非 SSL	Oracle Internet Directory と同じ	Oracle Internet Directory と同じ
LDAP-SSL	Oracle Internet Directory と同じ	Oracle Internet Directory と同じ
AFP	548	固定
FTP	21	その他の一般的な値： 2100 または 21000
NFS	2049	4048 および 4049 (MOUNT サーバー用)
<b>Oracle Workflow</b>		
TNS	1521	固定

## Oracle のポート使用（ポート番号別）

表 D-2 に、Oracle のポートをポート番号の昇順で示します。

**表 D-2 Oracle のポート使用（ポート番号別）**

ポート番号	コンポーネント
21	Oracle Files - FTP（デフォルト値）
110	Oracle Email - POP
119	Oracle Email - NNTP
389	LDAP（Oracle Internet Directory）
548	Oracle Files - AFP
563	Oracle Email NNTP - SSL
636	Oracle Internet Directory - SSL
995	Oracle Email POP - SSL
1521	Oracle Workflow - TNS
1748	Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent
1754	Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent
1808	Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent
1809	Oracle Enterprise Manager Intelligent Agent
1810	Oracle Enterprise Manager アプリケーション・サーバー・サービス
1811	Oracle Enterprise Manager アプリケーション・サーバー・サービス
1950	Oracle9iAS Reports Services SQL*Net
2049	Oracle Files - NFS（デフォルト値）
2070	Oracle9iAS Syndication Server（OSS） - OSS へのアクセス用
3001	Oracle9iAS Containers for J2EE - AJP
3101	Oracle9iAS Containers for J2EE - RMI
3201	Oracle9iAS Containers for J2EE - JMS
3301	Oracle9iAS Containers for J2EE HTTP Listener
4000	Oracle9iAS Web Cache の管理ポート
4001	Oracle9iAS Web Cache の無効なポート
4002	Oracle9iAS Web Cache 統計

表 D-2 Oracle のポート使用（ポート番号別）（続き）

ポート番号	コンポーネント
4031	Oracle Internet Directory SSL
4032	Oracle Internet Directory 非 SSL
4443	Oracle HTTP Server - SSL、Oracle HTTP Server Listen - SSL、Oracle <i>9iAS</i> Web Cache Listen - SSL
4444	Oracle HTTP Server Listen - SSL（Oracle <i>9iAS</i> Web Cache がインストールおよび構成されている場合）
5000	Oracle <i>9iAS</i> Single Sign-On
5100	Oracle Email
5730	Oracle Calendar
5731	Oracle Calendar
5732	Oracle Calendar
5734	Oracle Calendar Server Manager
6003	Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のリクエスト・ポート
6100	Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のローカル・ポート
6200	Oracle HTTP Server - Oracle Notification Service のリモート・ポート
6666	Oracle <i>9iAS</i> Clickstream Collector Agent
6675	Oracle <i>9iAS</i> Clickstream Collector Server
6676	Oracle <i>9iAS</i> Clickstream Execution Engine
7000	Oracle HTTP Server Java Object Cache
7771	Oracle Management Server
7772	Oracle Management Server
7773	Oracle Management Server
7777	Oracle HTTP Server - 非 SSL、Oracle HTTP Server Listen - 非 SSL、Oracle <i>9iAS</i> Web Cache Listen - 非 SSL
7778	Oracle HTTP Server Listen - 非 SSL（Oracle <i>9iAS</i> Web Cache がインストールおよび構成されている場合）
8007	Oracle HTTP Server JServ Servlet Engine
9000	Oracle <i>9iAS</i> Wireless PIM 通知ディスパッチャ
14000	Oracle <i>9iAS</i> Reports Services Visigenics - CORBA

表 D-2 Oracle のポート使用（ポート番号別）（続き）

ポート番号	コンポーネント
16001	Internet Inter-ORB Protocol（IIOP）
53000 の範囲	Oracle Files のドメイン・コントローラおよびノード
53000 の範囲	Oracle Files のメイン・ノード
53000 の範囲	Oracle Files の HTTP ノード





---

## Windows サービス

この付録では、Oracle Collaboration Suite for Windows のインストールでインストール時に作成されるサービスをリストします。

この付録の内容は次のとおりです。

- [Windows サービスへのアクセス](#)
- [Oracle Collaboration Suite インストール時のサービス](#)
- [Oracle Voicemail & Fax インストール時のサービス](#)

## Windows サービスへのアクセス

Windows NT でサービスを開くには、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「サービス」を選択します。

Windows 2000 および Windows XP でサービスを開くには、「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。

## Oracle Collaboration Suite インストール時のサービス

表 E-1 に、3 つの Oracle Collaboration Suite のインストール時に作成される Windows サービスを示します。

ORACLE\_HOME は、Oracle ホームの名前を表します。

表 E-1 Oracle Collaboration Suite の Windows サービス

インストール・タイプ	Windows サービス
Oracle9iAS Infrastructure	<ul style="list-style-type: none"><li>Oracle OLAP 9.0.1.0.1 (オンライン分析処理)</li><li>Oracle OLAP Agent</li><li>OracleORACLE_HOMEAgent</li><li>OracleORACLE_HOMEClientCache</li><li>OracleORACLE_HOMEEMWebsite</li><li>OracleORACLE_HOMEInternetDirectory_SID<sup>1</sup></li><li>OracleORACLE_HOMEManagementServer<sup>2</sup></li><li>OracleORACLE_HOMEPagingServer</li><li>OracleORACLE_HOMEProcessManager<sup>5</sup></li><li>OracleORACLE_HOMETNSListener</li><li>OracleORACLE_HOMEWebCache</li><li>OracleORACLE_HOMEWebCacheAdmin</li><li>OracleORACLE_HOMEWebCacheMon</li><li>OracleServiceSID<sup>3</sup></li></ul>

表 E-1 Oracle Collaboration Suite の Windows サービス (続き)

インストール・タイプ	Windows サービス
Oracle Collaboration Suite Information Storage	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ OracleORACLE_HOMEAgent</li> <li>■ OracleORACLE_HOMEClientCache</li> <li>■ OracleORACLE_HOMESNMPPeerEncapsulator</li> <li>■ OracleORACLE_HOMESNMPPeerMasterAgent</li> <li>■ OracleORACLE_HOMETNSListener<sup>4</sup></li> <li>■ OracleServicesSID<sup>4</sup></li> </ul>
Oracle Collaboration Suite	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Calendar Corporate-Wide Services</li> <li>■ Calendar Directory Access Server</li> <li>■ Calendar Engine</li> <li>■ Calendar Lock Manager</li> <li>■ Calendar Synchronous Network Connections</li> <li>■ OracleORACLE_HOMEAgent</li> <li>■ OracleORACLE_HOMEClientCache</li> <li>■ OracleORACLE_HOMEEMWebsite (Oracle Enterprise Manager Web Site)</li> <li>■ OracleORACLE_HOMEProcessManager<sup>5</sup></li> <li>■ OracleORACLE_HOMETNSListener</li> <li>■ OracleORACLE_HOMEWebCache</li> <li>■ OracleORACLE_HOMEWebCacheAdmin (Web Cache Administrator)</li> <li>■ OracleORACLE_HOMEWebCacheMon (Web Cache Monitor)</li> </ul>

<sup>1</sup> Oracle9iAS Infrastructure のインストール時に Oracle Internet Directory が選択されていない場合は作成されません。

<sup>2</sup> Oracle9iAS Infrastructure のインストール時に Oracle Management Server が選択されていない場合は作成されません。

<sup>3</sup> Oracle9iAS Metadata Repository のインストール時に作成されます。

<sup>4</sup> データベース構成タイプとして「ソフトウェアのみ」が選択された場合は作成されません。

<sup>5</sup> Oracle HTTP Server のインストール時に作成されます。

# Oracle Voicemail & Fax インストール時のサービス

表 E-2 に、Oracle Voicemail & Fax のインストール時に作成される Windows サービスを示します。

表 E-2 Oracle Voicemail & Fax の Windows サービス

インストール・タイプ	Windows サービス
Oracle Voicemail & Fax	<ul style="list-style-type: none"><li>Oracle Unified Messaging-Attendant</li><li>Oracle Unified Messaging-FaxRecv (Fax)</li><li>Oracle Unified Messaging-MWI (Message Waiting Indicator)</li><li>Oracle Unified Messaging-Process Manager</li><li>Oracle Unified Messaging-Recording</li><li>Oracle Unified Messaging-Retrieval</li><li>Oracle Unified Messaging-Routing</li><li>Oracle Unified Messaging-Recovery</li></ul>

---

# スタンドアロンでの Oracle Calendar のインストール

この付録では、Oracle Calendar のコンポーネントをスタンドアロンでインストールするための次のような要件および手順を説明します。

- **Oracle Calendar Server:** Oracle Calendar の他のコンポーネントの実行に必要です。Oracle Calendar Administrator により補足されます。
- **Oracle Calendar アプリケーション・システム:** 次のコンポーネントを制御するアプリケーション・フレームワークです。
  - Oracle Calendar Web Client
  - Oracle Calendar Web Services
  - Oracle Sync Server

この付録の説明は、Windows ベースのシステムに適用されます。

Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システム (OCAS) は、同じホストまたはネットワークで接続された複数の異なるホストにインストールできます。

---

**注意:** Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4) を前のリリースの Oracle Calendar がインストールされた Windows コンピュータにインストールすると、前のリリースは使用できなくなります。まず Oracle Calendar スタンドアロンをテスト・インストールする場合は、別の Windows コンピュータにインストールします。

---

この付録の内容は次のとおりです。

- [システム要件](#)
- [インストール前](#)
- [インストール](#)
- [アップグレード](#)
- [インストール後の構成](#)
- [Oracle Calendar の削除](#)
- [一般的な問題と対処方法](#)

## システム要件

Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムは一緒に別々にもインストールできるため、次以降の項では両方のコンポーネントに共通の要件およびそれぞれに個別の要件を示します。

この項の内容は次のとおりです。

- [共通要件](#)
- [Oracle Calendar Server の要件](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの要件](#)

## 共通要件

- **オペレーティング・システム：** Oracle Collaboration Suite の要件で説明したように、Windows ベースのシステム。
- **CPU：** 300MHz。
- **色：** 最低でも 256 色表示。
- **ディスク領域：** 最大 150MB の空きディスク領域がインストールに必要なことがあります。
- **パッチ：** Windows NT では、Oracle Collaboration Suite の要件に示されたものと同じパッチが適用されます。

## Oracle Calendar Server の要件

- **権限:** インストール時に、Oracle Universal Installer では、Oracle Calendar をインストールするコンピュータのローカル管理者であることが必要です。詳細は、Oracle Universal Installer に含まれているドキュメントを参照してください。
- **RAM:** 多数のユーザーまたはサービスを処理するコンピュータには、512MB 以上の RAM が必要と推定されます。メモリー要件の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の付録 A「ディスク領域およびメモリー」を参照してください。この付録は UNIX 固有のものですが、Windows の要件も類似しています。
- **ディスク領域:** 400MB のディスク領域に加えて、Oracle Calendar データベースおよびログ・ファイル用の領域。
- **メッセージ・サーバー:** メール通知用の SMTP メッセージ・サーバー。
- **Web ブラウザ:** Oracle Calendar Administrator を使用するために、次のいずれかの Web ブラウザ。
  - Internet Explorer 5.5 または 6.0 (Windows のみ)
  - Netscape 7.0
  - Mozilla 1.2

## Oracle Calendar アプリケーション・システムの要件

- **Web サーバー:** Oracle HTTP Server または Apache Web Server。Apache Web Server では、Apache 1.3.27 と mod-fastcgi 2.2.12 が必要です。mod-fastcgi 2.2.12 は、Apache Web サイトからはまだ入手できないため、FTP アクセスを介して検索してください。Oracle Calendar スタンドアロンは、Apache 2.x と mod-fastcgi 2.4.x では動作しません。
- **RAM:** 多数のユーザーを処理するコンピュータには、256MB 以上の RAM をお勧めします。
- **ディスク領域:** インストール用の 100MB のディスク領域に加えて、操作用の 200MB (linkdb および sessiondb ディスク領域。大規模な配置にはさらに領域が必要です)。
- **Oracle Calendar Web Client ブラウザ:** ユーザーが Oracle Calendar アプリケーション・システムの Oracle Calendar Web Client コンポーネントを使用するには、次のいずれかのブラウザが必要です。
  - Internet Explorer 5.x、6.x (Windows)
  - Internet Explorer 5.x (Macintosh OS 9 のみ)
  - Netscape 6.x、7.x (Linux x86、Macintosh、Windows)
  - Mozilla 1.1 ~ 1.2 (Linux、UNIX、Windows)、Mozilla 1.0 (Macintosh)
  - Safari (Macintosh OS X のみ)

- Lynx 2.8.4 Pre5 (Accessible モード、スタンドアロンのみ)

## インストール前

この項では、Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムをインストールする前に知っておく必要のある次のような重要情報を示します。

- [ディレクトリ・サーバーの設定](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムおよびサーバーの個別インストールの計画](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの考慮事項](#)

---

---

**注意：** 以前のバージョンの Oracle Calendar がインストールされている場合は、他のバージョンの処理について F-15 ページの「[アップグレード](#)」を参照してください。

---

---

## ディレクトリ・サーバーの設定

スタンドアロン・モードでインストールされている場合、Oracle Calendar Server は、サード・パーティの外部ディレクトリ・サーバーで使用できます。LDAP のサポートは、別のコネクタを介して提供されます。

- LDAP Connector 9.0.4 for Sun ONE Directory Server
- LDAP Connector 9.0.4 for OpenLDAP
- LDAP Connector 9.0.4 for Syntegra Aphelion Directory Server
- LDAP Connector 9.0.4 for Critical Path InJoin Directory Server

Oracle Calendar Server をインストールする前に、LDAP コネクタを使用してディレクトリ・スキーマを拡張する必要があります。ディレクトリ・サーバーには、格納する情報を定義するスキーマがあります。これらのスキーマは、オブジェクトおよび属性から構成されます。ディレクトリ・サーバー・スキーマは、Calendar Server で必要なオブジェクトと属性を含むように拡張する必要があります。Oracle Calendar Server スキーマに対するの拡張のリストは、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の付録 H「Calendar のディレクトリ・サーバー・スキーマの拡張機能」を参照してください。

この項の内容は次のとおりです。

- [Sun ONE Directory Server](#)
- [OpenLDAP](#)
- [Syntegra Aphelion Directory Server](#)
- [Critical Path InJoin Directory Server](#)



## ■ ディレクトリ・サーバーの用語

### Sun ONE Directory Server

次の手順は、Sun ONE および iPlanet 5.x Directory Server に適用されます。

---

**注意：** この手順を実行するには、オープン・ソース `ldapmodify` ユーティリティが必要です。

---

1. Oracle Calendar Server パッケージに含まれている `tar` ファイル `ldapc0904000_SunOne_win_en_rtm1.zip` からファイルを抽出します。
2. ファイル `SunOne/calendar-schema.ldif` を検索します。
3. このファイルを `ldapmodify` ユーティリティとともに使用して、ディレクトリ・エントリを変更します。  

```
% ldapmodify -h host -p port -D Directory_Manager_DN -w
Directory_Manager_Password -f "calendar-schema.ldif"
```
4. エラーがレポートされていないことを確認します。

### OpenLDAP

次の手順は、OpenLDAP Directory Servers バージョン 2.x 以降に適用されます。

1. Oracle Calendar Server パッケージに含まれている `tar` ファイル `ldapc0904000_openldap_win_en_rtm1.zip` からファイルを抽出します。
2. ファイル `openldap/calendar.schema` を検索します。
3. OpenLDAP 構成ディレクトリを探します。UNIX では、通常は `/usr/local/etc/openldap` に設定されます。このディレクトリは、次の例で使用されます。
4. 構成ディレクトリが `/usr/local/etc/openldap` にあるとした場合、ファイル `calendar.schema` を `/usr/local/etc/openldap/schema` にコピーします。
5. ファイル `/usr/local/etc/openldap/slapd.conf` を編集します。
6. 次の内容を含む行を探します。  

```
include /usr/local/etc/openldap/schema/cosine.schema
```
7. まだ追加されていない場合は、行を追加します。  

```
include /usr/local/etc/openldap/schema/inetorgperson.schema
```
8. 次の行を追加します。  

```
include /usr/local/etc/openldap/schema/calendar.schema
```

9. データベース・セクションに、次の行を追加します。

```
index ctcalthitemid pres,eq
```

10. slapd サーバーを再起動します。

## Syntegra Aphelion Directory Server

次の手順は、Syntegra Aphelion Directory Server に適用されます。

1. Oracle Calendar Server パッケージに含まれている tar ファイル `ldapc0904000_syntegra_win_en_rtm1.zip` から一時ディレクトリにファイルを抽出します。

一時ディレクトリには、次の 3 つのファイルが含まれている必要があります。

```
syntegra/oidtable.gen_cst
syntegra/oidtable.oc_cst
syntegra/oidtable.at_cst
```

2. ディレクトリ・サーバーを準備するには、これらのファイルをインストールして `ctCal` ディレクトリ・オブジェクトを構成する必要があります。これらのファイルの内容 (Oracle Calendar Server スキーマのオブジェクト識別子番号、オブジェクト・クラスおよび属性を含む) を、対応する Syntegra Aphelion (オブジェクト識別子) 表ファイルに追加します。

```
/usr/var/osi/oidtable.gen
/usr/var/osi/oidtable.oc
/usr/var/osi/oidtable.at
```

3. ディレクトリ・サーバーを再起動して、構成変更を有効にします。

## Critical Path InJoin Directory Server

次の手順は Critical Path InJoin Directory Server バージョン 4.x に適用され、次の処理を含みます。

- [スキーマの拡張](#)
- [ネーム・バインドの作成](#)
- [Oracle Calendar ベース DN の設定](#)
- [匿名読取りアクセス権の付与 \(オプション\)](#)

## スキーマの拡張

1. Oracle Calendar Server パッケージに含まれている tar ファイル `ldapc0904000_injoin_win_en_rtm1.zip` からステー징・ディレクトリにファイルを抽出します。ディレクトリには、次のファイルが含まれている必要があります。

```
injoin/calendar_acsp
injoin/calendar_admin_aci
injoin/calendar_anonymous_aci
injoin/calendar-attribute.schema
injoin/calendar_local
injoin/calendar-objc.schema
```

2. 場所フィールドに `http://iCon_host:iCon_port` と入力して、iCon 管理ページに移動します。iCon\_port は、デフォルトでは 1500 に設定されます。
3. 左側のタブで、「**Schema**」ナビゲーション・タブをクリックします。
4. 右側のウィンドウで、「**Schema Import**」をクリックします。
5. ファイル `calendar-attribute.schema` の内容を LDAPv3 フォーマット・テキスト領域の「**New attributes**」にコピーします。
6. 「**Schema Import**」をクリックします。
7. 左側のタブで「**Schema**」ナビゲーション・タブをクリックし、右側のウィンドウで「**Schema Import**」をクリックします。
8. ファイル `calendar-objc.schema` の内容を LDAPv3 フォーマット・テキスト領域の「**New object classes**」にコピーします。
9. 「**Schema Import**」をクリックします。

## ネーム・バインドの作成

Oracle Calendar Server には、`ctCalAdmin` および `ctCalResource` という 2 種類の構造化オブジェクト・クラスが導入されています。これらのタイプのエントリが `organizationalUnit` エントリの下に存在するように、ネーム・バインド・レジストリを更新する必要があります。

`ctCalAdmin` のネーム・バインドを作成するには、次のようにします。

1. 場所フィールドに `http://iCon_host:iCon_port` と入力して、iCon 管理ページに移動します。iCon\_port は、デフォルトでは 1500 に設定されます。
2. 左側のタブで、「**Schema**」ナビゲーション・タブをクリックします。
3. 「**Create a new name binding**」をクリックします。
4. 「**Superior**」リスト・ボックスから **organizationalUnit** を選択します。
5. 「**Subordinate**」リスト・ボックスから **ctCalAdmin** を選択します。
6. 「**Naming attributes**」リスト・ボックスから **ctCalXItemId** を選択します。

7. 「Create Name Binding」をクリックします。

ctCalResource のネーム・バインドの作成:

1. 場所フィールドに `http://iCon_host:iCon_port` と入力して、iCon 管理ページに移動します。iCon\_port は、デフォルトでは 1500 に設定されます。
2. 左側のタブで、「Schema」ナビゲーション・タブをクリックします。
3. 「Create a new name binding」をクリックします。
4. 「Superior」リスト・ボックスから **organizationalUnit** を選択します。
5. 「Subordinate」リスト・ボックスから **ctCalResource** を選択します。
6. 「Naming attributes」リスト・ボックスから **commonName** を選択します。
7. 「Create Name Binding」をクリックします。

### Oracle Calendar ベース DN の設定

Oracle Calendar Server がインストールされるサブツリーは、Access Control Specific Point (ACSP) サブツリーとして設定する必要があります。ほとんどのインストールでは、すでにこのように設定されています。次の手順では、この設定方法を示します。

1. ファイル `calendar_acsp`、`calendar_anonymous_aci`、`calendar_local` および `calendar_admin_aci` を `dsa` の作業ディレクトリにコピーします。
2. 配置に合わせて `calendar_local` を編集します。

マクロ `ctBaseDN` の値を、Oracle Calendar Server がインストールされる場所 (BASEDN) に設定します。たとえば、次のようにします。

```
BASEDN: o=acme,c=us
=ctBaseDN Rc("us") Ro("acme")
BASEDN: ou=School of Law, o=ABC University,c=us
=ctBASEDN Rc("us") Ro("ABC University") Rou("Shool of Law")
```

3. `dsa` 作業ディレクトリに移動します。たとえば、`/opt/ids/Icon/dsa1` とします。
4. コマンド・プロンプトで `odsadmin` を入力することにより、odsadmin ディレクトリ・アクセス・ツールを起動します。
5. `bman` と入力して、ディレクトリ・マネージャとしてバインドします。

```
odsadmin> bman
```

6. プロンプトが表示されたら、ディレクトリ・マネージャのパスワードを入力します。
7. Oracle Calendar BASEDN を ACSP にします (まだ設定されていない場合)。

```
odsadmin> run calendar_acsp ~
```

匿名読取りアクセス権の付与（オプション）

Oracle Calendar Server は、検索操作の実行時に匿名で、つまりバインド・ユーザーとしてバインドします。ディレクトリ・サーバーが匿名読取りアクセスを許可しない場合は、Oracle Calendar Server がインストールされるサブツリーへの読取りアクセス権を持つエントリを作成する必要があります。Oracle Calendar Server のインストール時に、このエントリの識別名（DN）とパスワードを指定する必要があります。次の手順では、匿名検索のために読取りアクセス権を付与する方法を示します。

1. odsadminセッションをすでに閉じている場合は、dsa 作業ディレクトリから odsadmin と入力して再び開きます。
2. bman と入力して、ディレクトリ・マネージャとしてバインドします。  

```
odsadmin> bman
```
3. プロンプトが表示されたら、ディレクトリ・マネージャのパスワードを入力します。
4. 匿名の読取り専用アクセスを許可するように ACI を設定するコマンド・ファイルを実行します。これにより、ディレクトリ・サーバーのセキュリティが変更されます。  

```
odsadmin> run calendar_anonymous_aci ~
```

ディレクトリ・サーバーの用語

表 F-1 を使用して、インストール時に必要なディレクトリ・サーバー・パラメータと各製品で使用される用語の関係を判断します。

表 F-1 Calendar Server/ ディレクトリ・サーバーの用語

概念の定義	Oracle Calendar Server	Sun ONE Directory Server	Syntegra Aphelion Directory Server	Critical Path InJoin Directory Server
ディレクトリ・サーバーがインストールされるコンピュータ	LDAP ホスト	ディレクトリ・サーバー・ホスト		ディレクトリ・サーバー・ホスト
ディレクトリ・サーバー (LDAP) 接続のポート番号	LDAP ポート	ディレクトリ・サーバー・ポート番号	LDAP デーモン・ポート	ディレクトリ・サーバー・アドレス・ポート番号
検索の実行が開始されるディレクトリ階層内のポイント	ベース DN	BaseDN/ ディレクトリ接尾辞 / 検索ルート	コンテキスト接頭辞の下にある DN	エントリ開始ポイント / コンテキスト接頭辞
ディレクトリの「スーパーユーザー」（無制限のアクセス権限を持つユーザー）	SuperUserDN	RootDN または無制限ユーザー	マネージャ DN	ディレクトリ管理者の DN

表 F-1 Calendar Server/ ディレクトリ・サーバーの用語（続き）

概念の定義	Oracle Calendar Server	Sun ONE Directory Server	Syntegra Aphelion Directory Server	Critical Path InJoin Directory Server
無制限アクセス用のパスワード	SuperUserDN パスワード	RootDN または無制限ユーザー・パスワード	マネージャ DN パスワード	ディレクトリ管理者のパスワード
6 つの予約済 Oracle Calendar ユーザー用の、ベース DN からのオフセットの親エントリ	Oracle Calendar Server 管理者の親 DN	なし	なし	なし
6 つの予約済 Oracle Calendar ユーザー用の、ベース DN からのオフセットの新規グループ	Oracle Calendar Server 管理者のグループ DN	なし	なし	なし

Oracle Calendar アプリケーション・システムおよびサーバーの個別インストールの計画

Oracle Universal Installer では、Oracle Calendar アプリケーション・システムおよび Oracle Calendar Server を同じホストにインストールして構成できます。どちらのコンポーネントも、相互のホストおよびポートを参照するように構成されます。ただし、大規模な配置では、Server とアプリケーション・システムを別々のホストにインストールするのが最適です。これは、各ホストでインストーラを実行し、インストールするコンポーネントを選択することで行うことができます。

一般には、Server のインストールから開始する必要があります。アプリケーション・システムのホスト名とポートを求めるプロンプトが表示された場合は、一時的な値を入力する必要があります。アプリケーション・システムをインストールする際に、インストールした Server に関する情報を入力する必要があります。その後で、F-11 ページの「インストール」の説明に従って、サーバーの構成ファイルを編集してリソース承認を有効にする必要があります。

Oracle Calendar 構成ファイルの編集の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

## Oracle Calendar アプリケーション・システムの考慮事項

セキュリティ上の理由から、Sync Server コンポーネントは、SSL (https) 接続を介してのみアクセス可能にすることが最適です。Oracle Sync Server は、電話からのアクセスが簡単な独立したホストにインストールすることが必要な場合もあります。ファイアウォールを介した VPN アクセスをサポートしている電話もありますが、サポートしていない電話もあることに注意してください。

また、SSL 接続を介してのみ Web Services を使用することが最適です。

## インストール

この項では、Oracle Calendar スタンドアロン・コンポーネントを UNIX ベースのシステムにインストールする方法を説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール](#)
- [Oracle Calendar Server のみのインストール](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムのためのインストール](#)
- [複数の Oracle Calendar インスタンスの処理](#)

## Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール

---

---

**注意：** Windows で、Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4) を前のリリースの Oracle Calendar がインストールされたコンピュータにインストールすると、前のリリースは使用できなくなります。まず Oracle Calendar スタンドアロンをテスト・インストールする場合は、別の Windows コンピュータにインストールすることを検討してください。また、Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4) は、重ねてインストールできません。Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4) の再インストールが必要な場合は、まず既存のインストールを削除する必要があります。

---

---

1. Oracle Calendar インストール・ファイルを一時ディレクトリに抽出またはコピーします。
2. 一時ディレクトリで、次のサブディレクトリに移動します。  
`Disk1¥install¥win32`
3. Setup.exe を実行して、Oracle Universal Installer を起動します。
4. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックし、インストール手順に従います。

5. Windows プラットフォームでは、「ファイルの場所の指定」画面で次の場所を選択します。

```
%Source_Path%\Disk1\calendar_standalone\Disk1\stage\products.jar
```

この場所は、インストールする製品のパスとして選択します。Oracle Calendar のスタンドアロン・バージョンをインストールするには、このパスを選択する必要があります。

6. 「ファイルの場所の指定」画面で、ORACLE\_HOME の名前とパスも入力し、「次へ」をクリックします。74 文字までのパスを入力できます。以前のバージョンの Oracle Calendar がインストールされており、これをアップグレードする場合は、上書きしないでください。
7. インストールするコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします。「Oracle Calendar アプリケーション・システム」を選択しないと、Oracle Calendar Web Client、Sync Server および Web Services はインストールできません。

コンポーネント	場所
Oracle Calendar Server	%ORACLE_HOME%\ocal\
Oracle Calendar Administrator	%ORACLE_HOME%\ocad\
Oracle Calendar アプリケーション・システム	%ORACLE_HOME%\ocas\

8. Oracle Calendar ユーザーが作業を行うタイム・ゾーンを選択し、「次へ」をクリックします。
9. Windows のパスワードやネットワーク・ドメインなど、Windows サービス情報を入力します。
10. SMTP サーバーの完全修飾ドメイン名を入力します。
11. 使用するディレクトリ・サーバーを選択します。(ディレクトリ・サーバーがない場合は、「内部」を選択します。)  
「次へ」をクリックします。F-4 ページの「ディレクトリ・サーバーの設定」で説明しているように、「ホスト」、「ポート」、「ベース DN」などのディレクトリ・サーバー構成情報の入力を求められます。



---

**注意：**「クリティカル・パス InJoin Directory Server」を選択した場合は、次の点に注意してください。

- BASEDN サブツリーの入力を求められた場合は、F-8 ページの「[Oracle Calendar ベース DN の設定](#)」で説明しているように、calendar\_local で設定した場所と同じ場所に設定してください。
  - ディレクトリ・サーバーの匿名アクセスが無効になっている場合は、「**Anonymous binding permitted**」チェックボックスのチェックを外します。Oracle Calendar の BASEDN サブツリーに対する読取りアクセス権を持つエントリの DN およびパスワードを入力します。
  - Oracle Calendar の admin グループ名のプロンプトが表示された場合は、calendar\_local ファイルで値を変更していないかぎり、デフォルト値のままにします。
- 

12. ディレクトリ・サーバー情報を入力した後で、「Oracle Calendar 管理パスワード」画面のフィールドにパスワードを入力します。
13. 「Oracle Calendar のノード ID」画面で、ノード ID を入力します。これは、1 ～ 4999 の間の一意の値である必要があります。
14. Oracle Calendar Server の最初のインストールである場合、「Oracle Calendar のマスター・ノード」画面で「はい」を選択し、現在のインストールをマスター・ノードに指定します。Web Services および Sync Server を動作させるには、ネットワーク上に 1 つのマスター・ノードが必要です。
15. 「次へ」をクリックし、その他の手順に従って、インストールを完了します。
16. 以前のバージョンの Oracle Calendar からデータをアップグレードする場合は、F-15 ページの「[アップグレード](#)」に進みます。それ以外の場合は、F-20 ページの「[インストール後の構成](#)」に進みます。

## Oracle Calendar Server のみのインストール

Oracle Calendar Server のみのインストール手順は、F-11 ページの「[Oracle Calendar Server](#) および [Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール](#)」の手順とほぼ同様ですが、次の点が異なります。

- F-12 ページの「[Oracle Calendar Server](#) および [Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール](#)」の項の手順 7 で、「**Oracle Calendar サーバー**」を選択し、「**Oracle Calendar アプリケーション・システム**」を選択しないでください。
- アプリケーション・システムのホストおよびポートの入力プロンプトが表示されます。これらが不明な場合、一時的に値を入力し、後で `unison.ini` ファイル・サーバーを適切な値に編集します。次に例を示します。

[RESOURCE\_APPROVAL]

`url=http://Web_server_host:port/ocas-bin/ocas.fcgi`

## Oracle Calendar アプリケーション・システムのみのインストール

Oracle Calendar アプリケーション・システムおよびそのコンポーネントのみのインストール手順は、F-11 ページの「[Oracle Calendar Server](#) および [Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール](#)」の手順とほぼ同様ですが、次の点が異なります。

- F-12 ページの「[Oracle Calendar Server](#) および [Oracle Calendar アプリケーション・システムのインストール](#)」の項の手順 7 で、「**Oracle Calendar アプリケーション・システム**」およびその任意のコンポーネントを選択し、「**Oracle Calendar Server**」または「**Oracle Calendar Administrator**」は選択しません。
- 手順 7 の後に、Oracle Calendar Server の「**ホスト**」、「**ポート**」および「**ノードID**」の入力を求めるプロンプトのみ表示されます。これらの値が不明な場合、一時的に値を入力し、後でアプリケーション・システムの `ocas.conf` ファイルで正しい値に編集します。次に例を示します。

[CONNECTION]

`mnode=Calendar_server_host:Engine_Port,master_node_id`

## 複数の Oracle Calendar インスタンスの処理

Oracle Calendar の 2 つのインスタンス（Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムの 2 つのインスタンス）をインストールする場合、2 番目のインスタンスである Oracle Calendar アプリケーション・システムを最初のインスタンスである Oracle Calendar Server に対して示す必要があります。

この処理を行うには、2 番目のインスタンスの Oracle Calendar アプリケーション・システム構成ファイル（%ORACLE\_HOME%\ocas\conf\ocas.conf）を次のように編集します。

```
[CONNECTION]
mnode=Calendar_server_host_name:engine_port,node
```

`host_name` は Oracle Calendar Server の最初のインスタンスであり、`node` はマスター・ノードです。

## アップグレード

この項では、Oracle Calendar および Oracle Calendar アプリケーション・システムのデータのアップグレード方法を説明します。Oracle Calendar の以前のインストールを削除する前に、これらの指示を読んで従う必要があります。

この項の内容は次のとおりです。

- [Server のアップグレード](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード](#)

---

**注意：** アップグレードを実行する前に、新規ソフトウェアの要件に基づいてサイズ計算を再評価することをお勧めします。ディスク領域およびメモリー要件の計算方法の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の付録 A「ディスク領域およびメモリー」を参照してください。機能の追加により、CPU の使用量のハードウェア要件が変更されています。現在インストールされている Oracle Calendar で CPU 使用状況の通常のピークが 60% 以上になることが 1 日に複数回ある場合、新規インストールでは追加の CPU が必要な場合があります。新規 Oracle Calendar Server に対して動作している以前のバージョンの Oracle Calendar アプリケーション・システムが配置に含まれている場合も、CPU 使用率が増加することに注意してください。

---

## Server のアップグレード

次のバージョンから Oracle Calendar Server リリース 2 (9.0.4) にアップグレードできます。

- CorporateTime Server 5.3
- CorporateTime Server 5.4 (Oracle ブランド)
- Oracle Calendar Server 5.5 スタンドアロン (Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の一部)

5.3 より前のリリースがインストールされている場合は、リリース 2 (9.0.4) にアップグレードする前に、リリース 5.4 にアップグレードする必要があります。

インストールされているバージョンに応じて、自動アップグレードが可能な場合と手動アップグレードの実行が必要な場合があります。以前のバージョンと共存するように Oracle Calendar をインストールすることもできます。

この項の内容は次のとおりです。

- サポートされる自動アップグレード・パス
- サポートされる手動アップグレード・パス
- 共存
- サーバーのアップグレード

### サポートされる自動アップグレード・パス

Oracle Calendar は、次のバージョンから自動的にアップグレードできます。

- 5.4 (または 5.3) 内部からスタンドアロンの 9.0.4 内部
- 5.4 (または 5.3) 外部からスタンドアロンの 9.0.4 外部 (サポートされる 9.0.4 ディレクトリ・サーバーのみ)

### サポートされる手動アップグレード・パス

スタンドアロンの 9.0.4 内部からスタンドアロンの 9.0.4 外部にアップグレードする場合は、手動アップグレードを行う必要があります。これには、サポートされるサード・パーティ製ディレクトリ・サーバーのみでの LDAP ディレクトリの手動移行が必要です。

### 共存

現行のインストールを新規バージョンにアップグレードする必要がある大規模な組織では、共存が役立ちます。異なるバージョンのノードとサーバーを接続して同時に実行する機能は、アップグレードの実行に必要なダウン時間の短縮に役立ちます。

異なるバージョンの Oracle Calendar Server 間の共存は、Oracle Calendar Server の統一 (同じバージョンの) ネットワークを持つための移行手順としてみなされることに注意する必要があります。異なるバージョンの混在を長期間または永久に維持することはお薦めしませ

ん。異なるバージョンの 2 つのサーバーを共存させることには制限があります。たとえば、正しいバージョンのユーティリティは対応するサーバーで使用する必要があります。また、Web Services リリース 9.0.4 は、接続されているすべての Server がリリース 9.0.4 にアップグレードされた場合にのみ動作します。

### サポートされる共存バージョンの組合せ

- スタンドアロン 9.0.4 と 5.3 または 5.4 (すべて内部、または同じディレクトリに対してすべて外部)

### サポートされない共存バージョンの組合せ

- スタンドアロン 9.0.4 と 5.3 より前のリリース
- スタンドアロン 9.0.4 と 5.5 の Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3)

### サポートされる共存外部 / 内部インストール

共存は、次の外部 (LDAP) および内部 (LDAP 以外) の組合せに対してサポートされます。

- Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) とスタンドアロン 9.0.4 (DIP を使用した内部または外部)
- スタンドアロン 9.0.4 外部とスタンドアロン 9.0.4 内部
- スタンドアロン 9.0.4 内部と Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1)

## サーバーのアップグレード

---

---

### 注意:

開始する前に、以前のバージョンを後で復元する場合のためにデータをバックアップすることをお勧めします。詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』の第 15 章「ノードの保持」を参照してください。

Oracle Calendar リリース 2 (9.0.4) を前のリリースの Oracle Calendar がインストールされた Windows コンピュータにインストールすると、前のリリースは使用できなくなります。まず Oracle Calendar スタンドアロンをテスト・インストールする場合は、別の Windows コンピュータにインストールします。

---

---

1. 以前のバージョンが 5.2 より前の場合は、リリース 5.4 にアップグレードする必要があります。このアップグレード手順は、リリース 5.4 の README を参照してください。
2. アップグレードするサーバーを停止します。
3. F-11 ページの「インストール」の説明に従って、Oracle Calendar Server をスタンドアロンでインストールします。

4. Oracle Calendar Server 9.0.4 を停止します。
5. %ORACLE\_HOME%\ocal\upgrade から、ocalPreUpg.cmd を実行して、アップグレードの準備をします。
6. 次の構文を使用して、%ORACLE\_HOME%\ocal\upgrade から ocalUpg.cmd を実行します。

```
ocalUpg.cmd -srcpath <current source location> -dstpath %ORACLE_HOME%
```

変数の意味は次のとおりです。

- -srcpath: Oracle Calendar 5.x インストールの場所 (/users/unison)
- -dstpath: 新規 Oracle Calendar インストールの場所 (ORACLE\_HOME)

7. サーバーが以前のバージョンと共存している場合は、リリース 9.0.4 の Calendar Server で次のパラメータを %ORACLE\_HOME%\ocal\misc\unison.ini に追加する必要があります。

セクション: [ENG]

パラメータ: usermailmap

値: "o"

セクション: [ENG]

パラメータ: coexist\_cwsbasicauth

値: TRUE

セクション: [ACE\_PLUGINS\_SERVER]

パラメータ: cs-standard\_coexistence

値: TRUE

---

**重要:** セキュリティ上の理由から、すべての Calendar Server をリリース 9.0.4 にアップグレードした後、すぐに %ORACLE\_HOME%\ocal\misc\unison.ini から前述のパラメータを削除する必要があります。

---

アップグレードで問題が発生した場合は、ログ・ファイル %ORACLE\_HOME%\ocal\upgrade\log を参照してください。

## Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード

CorporateTime/Oracle Calendar 3.x データは新規バージョンの Oracle Calendar アプリケーション・システムに自動的にアップグレードできます。

**関連項目：** アプリケーション・システムのアップグレードに関する既知の問題は、F-29 ページの「[一般的な問題と対処方法](#)」を参照してください。

この項の内容は次のとおりです。

- [開始する前に](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード](#)

### 開始する前に

- F-29 ページの「[一般的な問題と対処方法](#)」で、アップグレードに関する既知の問題を確認します。
- 次のファイルに、新規バージョンの Oracle ホーム・ユーザーに対する適切な権限があることを確認します。
  - リリース 3.x の構成ファイル `webcal.ini` に対する読取りアクセス権。このファイルは一般に `¥APACHE_ROOT¥fcgi-bin¥lexacal-private¥ini¥` ディレクトリにあります。
  - Web サーバーの構成ファイル `httpd.conf`（または `Apache.conf`）に対する読取りおよび書込みアクセス権。このファイルは一般に `¥APACHE_ROOT¥conf¥` にあります。
- Oracle Calendar Web サーバーおよびリリース 3.x の FastCGI プロセスが停止していることを確認します。

### Oracle Calendar アプリケーション・システムのアップグレード

1. F-11 ページの「[インストール](#)」の説明に従って、Oracle Calendar アプリケーション・システムをスタンドアロン・モードでインストールします。
2. Oracle ホームおよび Windows の PATH 環境変数を設定します。
3. CorporateTime および Oracle Calendar Web サーバーを停止します。
4. 新規インストール・ディレクトリ `%ORACLE_HOME%¥ocas¥upgrade¥` から、次のオプション構文を使用してコマンド `ocasua.bat` で Upgrade Assistant を実行します。

```
ocasua.bat [-appdir appdir] [-resdir resdir] [-confdir confdir]
```

変数の意味は次のとおりです。

- **-appdir** は、次のような CorporateTime バイナリ・ディレクトリです。

`¥Apache_home¥fcgi-bin¥owc`

- **-resdir** は、次のような CorporateTime ベース・ディレクトリです。

`¥Apache_home¥fcgi-bin¥lexacal-private`

- **-confdir** は、次のような Web サーバー構成ディレクトリです。

`¥Apache_home¥conf`

プロセスのログは次の場所に生成されます。

`%ORACLE_HOME%¥ocas¥upgrade¥log¥`

5. httpd.conf にある旧バージョンの FastCGI Server ディレクティブを削除します。これらは、次のファイルに挿入されているディレクティブで置換されています。

`%ORACLE_HOME%¥ocas¥conf¥ocal.conf`

6. 一部のセクションとキーは、webcal.ini から ocas.conf および ocwc.conf に移行されません。これらは手動で移行する必要があります。詳細は、F-32 ページの「[アップグレード](#)」を参照してください。

## インストール後の構成

この項では、Oracle Calendar のスタンドアロン・インストールを構成するために必要な手順を説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Web サーバーの構成](#)
- [ディレクトリ・サーバーの構成](#)
- [Oracle Calendar Server の構成](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成](#)



## Web サーバーの構成

Apache Server または Oracle HTTP Server を使用している場合は、Oracle Calendar Administrator を認識するために、Web サーバーの `httpd.conf` ファイルに次の行を追加する必要があります。

```
include %ORACLE_HOME%\ocad\config\ocad.conf
```

(`ocad.conf` への読取りアクセス権があることを確認してください。)

また、`httpd.conf` ファイルに次の変更を加えて、Oracle Calendar アプリケーション・システムを使用できるようにします。

- `%ORACLE_HOME%\ocas\conf\ocal.conf` を含めます。
- `%ORACLE_HOME%\lib` を含むようにシステム・ライブラリの検索パスを設定します。
- `ORACLE_HOME` 環境変数を `%ORACLE_HOME%\bin` に設定します。

同様の方法でオリジナル・サーバーをカスタマイズした場合は、競合する設定の解決が必要になる場合があることに注意してください。

場合によっては、Apache 以外の Web サーバーで Oracle Calendar Administrator を実行することが必要な場合があります。その場合は、Web サーバーに次の変更を加える必要があります。

- `%ORACLE_HOME%\lib` (HP-UX PA-RISC (64-bit) などの他のプラットフォームでは `lib32`) および `%ORACLE_HOME%\ocad\bin` を含むようにシステム・ライブラリの検索パスを設定します。
- 環境変数 `ORACLE_HOME` が、Oracle Calendar のインストール・ディレクトリに設定されていることを確認します。
- `ocad-bin` などのスクリプトの別名を `%ORACLE_HOME%\ocad\bin\ocad.cgi` に構成します。別名には、`ocad.cgi` を実行するための権限が必要です。
- `ocad-templates` スクリプトの別名を `%ORACLE_HOME%\ocad\templates` に構成します。別名には、`ocad-templates` という名前を付け、HTML、`.js` および `.css` ファイルを読み取る権限を付与する必要があります。

Web サーバーの ID には、次のサーバー・ディレクトリへのアクセス権が必要です。

フォルダ	権限
<code>%ORACLE_HOME%\ocad\bin\</code>	読取り、書込み、実行
<code>%ORACLE_HOME%\ocad\sessions\</code>	読取り、書込み
<code>%ORACLE_HOME%\ocad\temp\</code>	読取り

%ORACLE\_HOME%\ocad\bin\ocad.cgi プログラムには、%ORACLE\_HOME%\ocad\sessions でのファイルの読取りまたは書込みに必要な権限が必要です（これは %ORACLE\_HOME%\ocad\bin\ocad.ini で構成できます）。

サーバーに必要な設定は %ORACLE\_HOME%\ocad\config\ocad.conf にあります。

変更後に Web サーバーを再起動します。

Web サーバーで Internet Information Services が稼働している場合、Oracle Calendar Administrator と連携するように構成する必要があります。次の手順では、この方法を説明します。

1. Windows のコントロール パネルから「Internet Information Services Administrator」を開きます。
2. 「既定の Web サイト」を右クリックし、「新規作成」→「仮想ディレクトリ」を選択します。
3. 別名として ocad-bin を入力します。
4. ocad-bin のフル・パスのショートカットを C:\%ORACLE\_HOME%\ocad\bin のように指定します。スクリプトおよび実行可能ファイルに対して権限が設定されていることを確認します。
5. もう一度「既定の Web サイト」を右クリックし、「新規作成」→「仮想ディレクトリ」を選択します。
6. ショートカットとして ocad-templates を入力します。
7. テンプレート・ディレクトリのフル・パスのショートカットを C:\%ORACLE\_HOME%\ocad\templates のように指定します。
8. Windows の PATH 環境変数を、%ORACLE\_HOME%\bin および %ORACLE\_HOME%\ocad\bin が含まれるように変更します。
9. コンピュータを再起動します。
10. Oracle Calendar Administrator が `http://webservername:port/ocad-bin/ocad.cgi?object=nodeadm` で開くかどうかを確認します。

## ディレクトリ・サーバーの構成

インストール時に、Oracle Calendar Server で使用するディレクトリ・サーバーを選択した場合は、Oracle Calendar Administrator に特定のアクセス権を付与する必要があります。

この項の内容は次のとおりです。

- [Sun ONE Directory Server](#)
- [OpenLDAP](#)
- [Syntegra Aphelion Directory Server](#)
- [Critical Path InJoin Directory Server](#)

### Sun ONE Directory Server

Oracle Calendar Administrator にアクセス権を付与するには、`-w` オプションを指定して `unidsacissetup` ユーティリティを実行します。このユーティリティの詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の付録 E「Calendar Server のユーティリティ」を参照してください。

### OpenLDAP

ベース DN（たとえば、`"dc=acme,dc=com"`）および Oracle Calendar Administrator の親 DN（たとえば、`"ou=OracleCalendarAdministrator"`）を使用します。たとえば、次のようにします。

1. `%usr%local%etc%openldap%slapd.conf` ファイルを編集します。
2. `database` セクションで、この情報を適切なベース DN および Oracle Calendar Administrator の親 DN とともに追加します。

```
access to dn="(.*,)?dc=acme,dc=com"
by dn="(.*,)?ou=OracleCalendarAdministrator,dc=acme,dc=com" write
```

### Syntegra Aphelion Directory Server

1. Syntegra Aphelion Web アプリケーションを使用し、ディレクトリ・マネージャとしてサイン・インします。
2. Oracle Calendar Server がインストールされている LDE をクリックします。
3. 「Manage」をクリックします。
4. 「Access Control」フォルダを展開します。
5. 「Advance Access Control」をクリックします。
6. 右側のペインで、「Add New Access Control Policy」をクリックします。

7. 「Modify Access Control Policy」テキスト領域で、次のように入力します。

```
to dn=.*BASEDN by dn=.*,ADMINDN,BASEDN write
```

BASEDN は [LDAP]basedn パラメータの値で、ADMINDN は %ORACLE\_HOME%\ocal¥misc¥unison.ini 構成ファイル内の [LDAP]admin パラメータの値です。これらのパラメータの詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の付録 C「Calendar Server のパラメータ」を参照してください。

8. 「適用」をクリックして変更を有効にします。

### Critical Path InJoin Directory Server

1. odsadmin セッションをすでに閉じている場合は、dsa 作業ディレクトリから odsadmin を実行して再び開きます。
2. bman と入力して、ディレクトリ・マネージャとしてバインドします。
3. プロンプトが表示されたら、ディレクトリ・マネージャのパスワードを入力します。
4. Oracle Calendar Administrator へのアクセス権を付与するように ACI を設定するコマンド・ファイルを実行します。

```
odsadmin> run calendar_admin_aci ~
```

5. odsadmin セッションを終了します。

## Oracle Calendar Server の構成

この項では、Oracle Calendar Server のインストール後、また場合によってはアップグレード後に行う必要のある構成の変更について説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Server の起動および停止](#)
- [ポート値の確認](#)
- [Oracle Calendar Administrator を開く](#)
- [リソース承認の設定](#)
- [Windows PATH 変数の処理](#)
- [セキュリティ・メカニズムの処理](#)

## Oracle Calendar Server の起動および停止

次のコマンドを入力して Oracle Calendar Server を起動します。

```
%ORACLE_HOME%\ocal\bin\unistart
```

次のコマンドを入力して Oracle Calendar Server を停止します。

```
%ORACLE_HOME%\ocal\bin\unistop -y
```

## ポート値の確認

Oracle Calendar Server で使用されるデフォルト・ポートは次のとおりです。

ポート	機能
5730	Oracle Calendar Engine
5731	同期ネットワーク・コネクタ
5732	ディレクトリ・アクセス・サーバー
5734	Oracle Calendar Server Manager

これらのポートがすでに使用されている場合は、インストール時に次に使用可能なポートが使用されます。Oracle Calendar Server で使用される値は `unison.ini` で確認してください。

## Oracle Calendar Administrator を開く

Oracle Calendar Administrator を使用して、ユーザー、イベント、リソースおよびパブリック予定表を管理し、管理タスクを実行します。デフォルトでは、次の URL で開くことができます。

```
https://Web_server_host:https_port/ocad-bin/ocad.cgi?object=nodeadm
```

Oracle Calendar Administrator にログインするには、インストール時に選択した Oracle Calendar 管理用パスワードを入力します。このパスワードとともにユーザー名を入力しないでください。

## リソース承認の設定

(任意の Web サーバーで) リソース承認機能を使用する場合は、次のように設定する必要があります。

1. NOTIFY-APPROVER を TRUE に設定し、APPROVER-EMAIL を承認者の電子メールに設定して、リソースを作成または変更します。たとえば、ocal/bin では次のようになります。

```
uniuser -resource -add R=Resource_Approval/NOTIFY-APPROVER=TRUE/
APPROVER-EMAIL=approver.email@oracle.com
/psw=password -n 4313 -p test1
```

2. リソースに Designate 権限を与えます。たとえば、ocal/bin では次のようになります。

```
uniaccessrights -mod -designate ALL=TRUE -grantee S=Designate/NODE-ID=4313
-grantor R=Resource_Approval -n 4313 -p test1
```

3. unison.ini (ocal/misc にある) に、URL パラメータを指定した RESOURCE\_APPROVAL セクションがあることも確認します。次に例を示します。

```
[RESOURCE_APPROVAL]
url=http://server:port/ocas-bin/ocas.fcgi
```

4. リソース承認 URL を変更した場合は、Oracle Calendar Server を再起動します。

## Windows PATH 変数の処理

たとえばセキュリティ・メカニズムを構成するなどの目的で、Windows の PATH 環境変数に追加されている値は、Oracle Calendar Server によりクリアされます。かわりに、OCAL\_ADDITIONAL\_LIBPATH に値を追加します。

## セキュリティ・メカニズムの処理

一部のセキュリティ・メカニズムでは、そのライブラリへのパスを含むように環境変数 OCAL\_ADDITIONAL\_LIBPATH を設定する必要があります。

GSSAPI/Kerberos 5 を使用している場合は、libaut\_gssapi.so で必要な 5 つの共有ライブラリへのパスを含める必要があります。

SASL/Kerberos 4 または SASL/GSSAPI を使用している場合は、次のライブラリへのパスを含める必要があります。

- GSSAPI/Kerberos 5 と同じライブラリ
- libaut\_sasl.so、libsasl.so および SASL プラグインに必要な Kerberos および SASL 共有ライブラリ

各パスは、コロン (:) で区切る必要があります。たとえば、次のようにします。

```
setenv OCAL_ADDITIONAL_LIBPATH
¥usr¥local¥kerberos¥krb5¥lib:¥usr¥local¥sas1¥sas1-1.5.27¥lib
```

## Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成

一般に Oracle Calendar アプリケーション・システムは、Web サーバーを起動した際に、デフォルトのインストール設定を使用して正常に起動します。この項では、アプリケーション・システムのステータスを確認し、必要に応じて構成を変更する方法を説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar アプリケーション・システムのステータスの確認](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成](#)

### Oracle Calendar アプリケーション・システムのステータスの確認

アプリケーション・システムおよびそのコンポーネントが稼働しているかどうかを確認するには、`http://server:port/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=sys` でシステム・ページを開きます。コンポーネントが稼働していない場合は、システム・ページにそのコンポーネントが表示されません。

適切なクライアントでコンポーネントに接続するには、次の URL を使用します。

コンポーネント	URL
Sync Server	<code>http://host:port/ocst-bin/ocas.fcgi</code>
Web Services	<code>http://host:port/ocws-bin/ocas.fcgi</code>
Oracle Calendar Web Client	<code>http://host:port/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=web</code>

### Oracle Calendar アプリケーション・システムの構成

Oracle Calendar アプリケーション・システムおよびそのコンポーネントは、`%ORACLE_HOME%/ocas¥conf` の下にある次の構成ファイルで制御されます。

**ocas.conf:** Oracle Calendar アプリケーション・システム

**ocws.conf:** Web Services

**ocst.conf:** Sync Server

**ocwc.conf:** Oracle Calendar Web Client

**ocal.conf:** `httpd.conf` から組み込まれる Web サーバー FastCGI ディレクティブ

環境に応じて、次の構成オプションを検討してください。

- `ocas.fcgi` の複数インスタンスを実行します（インスタンス数は設定と負荷に依存）。この構成オプションは、`ocal.conf` で構成できます。
- インストールまたはホストごとに `ochecklet.fcgi` のインスタンスを 1 つ実行する必要があります。この構成オプションも、`ocal.conf` で構成します。
- Sync Server を使用するには、`httpd.conf` または `apache.conf` の `KeepAlive` パラメータを 300 秒に設定するか、またはオフにします。これは、`ocal.conf` の 300 秒のアイドル・タイムアウト値に相当します。
- すべてのホストの `ocas` ファイル内の `linkdb` および `sessiondb` 変数が同じパス（たとえば、同じ NFS マウント）を指していることを確認します。
- 各コンポーネントの `conf` ファイルで、認証、圧縮および暗号化（ACE）値を設定します。すべての製品の AUTH Web 設定は、`ocas.conf` の `[ACE_PLUGINS_CLIENT]` セクションで構成する必要があります。
- 問題が発生した場合は、次の場所でエラー・メッセージを確認します。

```
%ORACLE_HOME%\ocas\logs\ocas_log
```

`conf` ファイルに変更を加えた後は、Oracle HTTP Server または Apache を再起動してください。

## Oracle Calendar の削除

次の手順では、Oracle Calendar Server およびアプリケーション・システムをホストから削除する方法について説明します。

1. `unistop` コマンドを使用して Oracle Calendar Server を停止します。
2. Web サーバーを停止します。
3. ディレクトリ・サーバーで、Oracle Calendar ユーザーから Oracle Calendar Server 属性を削除します。これは LDIF 更新コマンドを使用して行います。
4. ディレクトリ・サーバーで、このサーバーにあった Oracle Calendar Server ノードのすべての `ctCal` オブジェクトを削除します。`ldapsearch` および `ldapdelete` コマンドを使用します。適切な構文は、ご使用のディレクトリ・サーバーの管理者ガイドを参照してください。
5. ディレクトリ・サーバーで、データベースからすべての関連 Oracle Calendar Server 管理グループおよび ACL を削除します。手動で LDIF を編集するか LDIF 更新文を使用して、LDIF ファイルをクリーン・アップします。
6. Oracle Universal Installer を使用して Oracle Calendar コンポーネントを削除します。次のコマンドを使用して Oracle Universal Installer を起動します。

```
setup.exe
```



7. `calendar_server_path` を削除します。
8. `client_path` を削除します。

## 一般的な問題と対処方法

この項では、Oracle Calendar Server および Oracle Calendar アプリケーション・システムの一般的な問題とその対処方法を説明します。問題は次の項に分類されます。

- [Server の問題](#)
- [Oracle Calendar アプリケーション・システムの問題](#)

## Server の問題

この項の内容は次のとおりです。

- [インストール](#)
- [再インストール](#)
- [共存およびアップグレード](#)
- [代理](#)
- [その他](#)

### インストール

- **unison.ini の空白セクション**: スタンドアロンの Oracle Calendar Server またはアップグレードしたスタンドアロン・サーバー、あるいはその両方の新規インストールの `unison.ini` ファイルには、空白の [LCK] および [LIC] セクションが追加されます。これらのセクションは削除しないでください。

### 再インストール

- Oracle Calendar のコンポーネントを再インストールする場合は、Oracle Calendar Server コンポーネントを新規ディレクトリにインストールしてください。その他のコンポーネントは、既存のパスにインストールまたは追加できます。

### 共存およびアップグレード

- **クライアント**: Oracle Calendar Server リリース 9.0.4 と連携する Oracle Calendar アプリケーション・システムのバージョンは次のとおりです。
  - Oracle Calendar Desktop Client for Windows リリース 6.0.5
  - Oracle Calendar Desktop Client for Mac リリース 5.2.3

- Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86/Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) リリース 5.0.2

- Oracle Connector for Outlook リリース 3.3 以上

以前のクライアントは、15 文字以下のパスワードのみサポートしています。15 文字より長いパスワードが管理者により割り当てられた場合、ユーザーはサイン・インできません。

新規クライアントのみサポートする場合は、`unison.ini` の `cs-standard_coexistence` を `false` に設定します。

- **サーバー：**

- 共存により、旧 Oracle Calendar Server（リリース 5.x）で意味不明なエラー・メッセージが表示されることがあります。これは、新規サーバーで導入された機能が旧サーバーでは認識されない場合があるからです。

- Oracle Calendar Server のバージョン間でイベント Oracle Calendar の共存はありません。リリース 1 (9.0.3) のユーザーはリリース 1 (9.0.3) のイベント・カレンダーのみ参照し、リリース 2 (9.0.4.1.1) のユーザーはリリース 2 (9.0.4.1.1) のイベント・カレンダーのみ参照します。

- **ノード・ネットワーク：**

- ノード・ネットワークは、リリース 5.3 以上の Oracle Calendar Server でのみ作成できます。
- ノード・ネットワークを作成する必要がある場合は、`nodes.ini` および `uninode` コマンドの使用はネットワーク内の最新リリース (9.0.4) のサーバーで行う必要があります。

- **管理ユーティリティ：**

- リリース 5.x の Oracle Calendar Server の管理にはリリース 9.0.4 ユーティリティを使用しないでください。この例外は、ユーザーを移動する場合のみです。どちらも旧サーバー・ノード (5.x) にある 2 つのノード間でユーザーを移動する場合でも、`moveuser` ユーティリティは最新サーバーのリリース (9.0.4) から実行する必要があります。
- リリース 9.0.4 の Oracle Calendar Server の管理にはリリース 5.x ユーティリティを使用しないでください。

- **マッピング・パラメータ：** マッピング・パラメータは、共存およびアップグレード用にリリース 9.0.4 の Server の `unison.ini` に追加されています。リリース 5.x の Server は、EMAIL には O、UID には P をマッピングします。ただし、リリース 9.0.4 の Server は、このマッピングを必要としなくなりました。リリース 9.0.4 の Server に追加されたパラメータは、マッピングにまったく影響しません。

新規パラメータは次のとおりです。

```
[ENG]
usermailmap = O
itemuidmap = P
resourceemailmap = O
usersmscprefmap = OU3
usermobiletypemap = N
usermobilemap = R
```

バージョンを共存させるには、これらのパラメータをリリース 9.0.4 の `unison.ini` ファイルに手動で追加する必要があります。これらはアップグレード時に自動的に追加されます。

## 代理

- **代理のリスト：** Windows クライアントは、リモート・リソースの代理をリストできません。
- **代理としてのイベントの作成：** ユーザーが代理として作業している間にイベントを作成するとエラーになることがあります。ただし、イベントは正常に作成されます。
- **リモート代理：** リモート代理機能は、Oracle Calendar Web Client および Oracle Calendar SDK でのみ使用できます。

## その他

- **ユーザーの移動：** ある時点で Oracle Calendar Web Client を使用していたユーザーは移動しないでください。このようなユーザーの移動の試行は失敗し、一部のイベントが重複する原因となります。
- **UID：** 数値 UID は、既存の UID を持たないユーザーに対してシステムにより作成されます。
- **リモート・ユーザー：** リモート・ユーザーが会議に招待された場合、会議の所有者のステータスがリモート・ユーザーに対して正しく表示されません。所有者のステータスは、「参加予定」ではなく「後で決定」と表示されます。これはサーバーの問題です。(2892129)

## Oracle Calendar アプリケーション・システムの問題

この項の内容は次のとおりです。

- インストール
- アップグレード
- 構成

### インストール

- **サーバー情報のプロンプトが非表示：** Oracle Calendar Server がすでにインストールされているコンピュータにアプリケーション・システムのスタンドアロン・パッケージをインストールした場合は、インストール時にサーバー情報を入力するプロンプトが表示されません。アプリケーション・システムがインストールされた後で、ocas.conf の [connection] セクションを開き、次の行を置換する必要があります。

```
mnode=,
```

この行を次の行で置換します。

```
mnode=host:engine_port,node
(2844399)
```

### アップグレード

- **複数のアップグレード：** アプリケーション・システムの Upgrade Assistant が複数回実行されると、複数の include 行が httpd.conf に挿入され、Web サーバーが正しく起動しない原因となります (#2978880)。提案される対処方法として、重複している include 行を conf ファイルから削除します。通常は、行は次のようになります。

```
include full_path_of_install_home/ocas/conf/ocal.conf
```

- **ocas.conf および ocwc.conf での空白行：** リリース 2 (9.0.4) のインストールでの ocas.conf および ocwc.conf の空白行は、Upgrade Assistant で削除されます。これを防ぐには、Assistant を実行する前にこれらの行を # で置換します。
- **欠落キー：** Upgrade Assistant は、次のキーのみ移行します。インストールがまだ動作していても、新規パラメータを変更して目的のロック・アンド・フィールドを得ることが必要な場合があります。パラメータの編集の詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

```
[system]
connection
```

```
[servers]
(All keys migrated to "connection" section of ocas.conf. If the old
installation was a masternode, 'mnode' will be the only entry.)
```

```
[ACE_PLUGINS_CLIENT]
(All keys into ocas.conf)
```

```
[admin]
ssn_timeout
sso_user_env_key
max_login_attempts
login_fail_timeout
secure_login
cache
```

```
[ADA]
enable
hide_toggle_link
```

```
[modules]
logout
prefs
chgpwd
accrights
userlist_login
hide_eventcal
hide_global
hide_taskview
hide_managegroups
hide_suggesttime
hide_show_unconfirmed
hide_updateall
enable_designate
hide_viewpub
```

```
[file_attachment]
download_enable
upload_enable
```

```
[taskview]
quickCreateStartTime
quickCreateEndTime
showQCCompletion
```

```
[calendar_view]
default_view
default_dayview_mode
default_weekview_mode
hide_dayview_toggle
hide_weekview_toggle
pdv_notes_top_task_bottom
```

```
default_color_mgt_by

[cookies]
domain

[sms]
enable

[sched]
userlist_login (becomes same key in "modules" section of ocwc.conf)
serverlist_login (becomes same key in "modules" section of ocwc.conf).
enable_autologin (becomes same key in "modules" section of ocwc.conf).
modify_emailadd (becomes same key in "modules" section of ocwc.conf).
showicalvcal (becomes same key in "modules" section of ocwc.conf).

[ACE]
authentication (becomes 'Authentication' of ocwc.conf).
```

## 構成

- **低速なパフォーマンス - signinmaxattempts:** Oracle Calendar のスタンドアロン・インストールでは、unison.ini ファイルの [LIMITS] セクションの signinmaxattempts パラメータは現在デフォルトでは設定されません。結果として、ユーザーが Oracle Calendar Web Client に対してアクションを実行するたびに、エラーが ocas\_log に書き込まれるため、ログ・ファイルが大きくなりパフォーマンスが低下します。unison.ini に制限（5 など）を手動で設定します。(2985693)

---

# Oracle Collaboration Suite のクライアントのインストール

Oracle Collaboration Suite Client CD-ROM には、クライアント製品が含まれています。

この付録の内容は次のとおりです。

- [Oracle Connector for Outlook](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Windows](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Linux](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Solaris](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Windows](#)
- [Oracle Calendar Sync for Pocket PC](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh](#)
- [Oracle FileSync](#)

# Oracle Connector for Outlook

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Connector for Outlook のシステム要件](#)
- [Oracle Connector for Outlook のインストール前の要件](#)
- [Oracle Connector for Outlook のインストール](#)
- [Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール](#)
- [Oracle Connector for Outlook の削除](#)

## Oracle Connector for Outlook のシステム要件

表 G-1 に、Oracle Connector for Outlook のシステム要件を示します。

表 G-1 Oracle Connector for Outlook のシステム要件

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Windows NT 4.0</li><li>■ Windows 98</li><li>■ Windows 2000</li><li>■ Windows XP Professional</li></ul> <p>Windows NT、2000 および XP に Oracle Connector for Outlook をインストールするには、管理権限が必要です。</p>
ディスク領域	ユーザーの IMAP4 メールボックス・サイズに相当する空きディスク領域。
RAM	ご使用の Microsoft Outlook クライアントの RAM 要件を参照してください。
Outlook	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Outlook 98</li><li>■ Outlook 2000</li><li>■ Outlook 2002</li></ul> <p><b>注意：</b> ネイティブ言語バージョンまたは Multilingual User Interface Pack (MUI) は、英語以外のバージョンのローカライズに必要です (サポートされる言語を参照してください)。</p>
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Oracle Calendar Server 5.5</li><li>■ Oracle Calendar Server 9.0.4 (ほとんどの Oracle Calendar 新機能に必要)</li></ul>



表 G-1 Oracle Connector for Outlook のシステム要件（続き）

要件	値
電子メール・サーバー	Oracle Collaboration Suite に付属している送信メール用の SMTP サーバー。  Oracle IMAP4 Server 9.0.3 以降。  実装が IMAP4 リファレンス実装 Cyrus およびワシントン大学に基づいているその他の IMAP4 サーバー。
PDA 同期のコンジット	<ul style="list-style-type: none"><li>■ PocketMirror 2.04 または 3.0（3.0 を推奨）</li><li>■ PocketJournal</li><li>■ Desktop To Go 2.5</li><li>■ Desktop To Go 2.509（Outlook 2002 の場合のみ）</li><li>■ PSIWIN 2.3 または 2.31</li><li>■ ActiveSync 3.0、3.1 または 3.5</li><li>■ HotSync Manager 4.0（Windows XP の場合のみ）</li></ul>

Oracle Connector for Outlook のインストール前の要件

- サポートされている Outlook バージョンが、サポートされているプラットフォームにインストールされている必要があります。
- Windows NT、2000 および XP に Oracle Connector for Outlook をインストールするには、管理権限が必要です。
- Outlook 98 および Outlook 2000 は、「企業 / ワークグループ」モードでインストールされている必要があります。「ツール」→「オプション」→「メールサービス」→「メールサポートの再設定」を選択して、Outlook の構成を確認します。
- 情報の消失を回避するために、アップグレード前にオフライン・フォルダを同期化することをお勧めします。

## Oracle Connector for Outlook のインストール

1. Oracle Connector for Outlook をインストールする前に、すべての Windows アプリケーションを終了します。
2. 以前のバージョンからアップグレードし、インストールされている言語を追加または変更する場合は、スイッチ /Lang を後に指定して `con_outlook_904x.exe` を実行します。それ以外の場合は、`con_outlook_904x.exe` ファイルをダブルクリックします。画面に表示されるインストール手順に従います。

---

**注意：** POP3 プロトコルと IMAP4 プロトコルの競合を回避するには、Microsoft の Internet Mail または Exchange サービス・プロバイダを Oracle Connector for Outlook と同じプロファイルに設定しないでください。

---

## Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール

Oracle Connector for Outlook インストーラは、サイレント・モードで実行している場合、通常はユーザーがインストール・ダイアログ・ボックスを介して指定するすべての情報を、事前に設定された構成ファイルで参照します。Oracle Connector for Outlook では、`ctoc.ini` というサンプル・ファイルを使用できます。このファイルをテンプレートとして使用し、そのパラメータ値をインストールに合せて変更します。使用可能なパラメータの詳細は、表 G-2 を参照してください。最初の起動時に、値が指定されておらず、デフォルト値を持たないすべてのパラメータに対して値を入力するためのプロンプトが表示されます。

ユーザーの操作なしにコマンドラインから Oracle Connector for Outlook をインストールするには、`-s` オプションを指定して製品の自己解凍形式の実行可能ファイルを実行し、使用する構成ファイルを `-cfg` オプションで指定します。

たとえば、インストーラ・ファイルおよび構成ファイルの両方が C: ドライブのルート・ディレクトリに存在し、インストーラ・ファイル名が `OC_03040_WIN.exe` である場合は、次のコマンドを実行します。

```
C:¥> con_outlook_904x.exe -s -cfg ctoc.ini
```

次に示す 2 つのオプションのフラグも指定できます。

- `-f`

コマンドラインで `-f` を指定すると、Oracle Connector for Outlook インストーラは、製品の現行バージョンをインストールする前に、以前のすべてのバージョンの削除を試行します。

- `-1`

コマンドラインで `-1` (数字の 1) を指定すると、Oracle Connector for Outlook のインストールの前半部分のみが実行され、必要なファイルのコピー、および使用可能なサービス・プロバイダとしての Oracle Connector for Outlook の登録が行われます。インス

トールの後半部分（プロファイルへの Oracle Connector for Outlook の追加）は実行されません。

---

**注意：** 一度サイレント・インストールを実行すると、-f オプションが指定されていない後続のサイレント・インストールでは、インストールの前半部分のみが実行され、必要なファイルのコピー、および使用可能なサービス・プロバイダとしての Oracle Connector for Outlook の登録が行われます。インストーラは、インストールの後半部分を続行しません。

---

Oracle Connector for Outlook の大規模な配置の詳細は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせてください。

## Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の 構成ファイル・パラメータ

表 G-2 に、Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストールに使用できるパラメータをセクションごとにアルファベット順で示します。示されるデフォルト値は、該当するパラメータの値が空白であるか、そのパラメータが構成ファイルに存在しない場合に適用されます。

構成ファイル内のセミコロン (;) で始まるすべての行はコメントであり、インストーラでは読み込まれません。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Calendar]	AccountName	Calendar Server の有効なユーザー名	なし	このユーザーのカレンダー・アカウント名を指定します。
[Calendar]	DomainID	有効なドメイン ID	なし	組織を示すドメイン ID を指定します。 [Calendar] UseDNS パラメータおよび [Calendar] HostName パラメータも指定する必要があります。
[Calendar]	HostName	有効なホスト名、または 「host1;host2;hostN」という形式の名前のリスト (「scooter;kermit」など)	なし	1 つ以上の Calendar Domain Service ホストのホスト名またはネットワーク・アドレスを指定します。[Calendar] UseDNS パラメータおよび [Calendar] DomainID パラメータも指定する必要があります。
[Calendar]	NoAccount	0 ([Calendar] パラメータを使用して、Calendar Server 接続を構成します。) 1 (Calendar Server 接続の構成をスキップし、[Calendar] セクションで他のパラメータによって設定されたすべての値を無視します。)	0	このユーザーが Calendar Server アカウントを持っていないことを指定し、[Calendar] セクションで他のパラメータによって設定されたすべての値を無視します。
[Calendar]	Password	このユーザーのカレンダー・アカウントの有効なパスワード	なし	このユーザーのカレンダー・パスワードを指定します。
[Calendar]	Port	0 (デフォルトを使用します。) 有効なポート	なし	[Calendar] ServerName パラメータで指定された Calendar Server への接続に使用するポートを指定します。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Calendar]	ServerName	有効なホスト名、およびそれに後続するカンマと有効なノード ID (「kermit,1200」など)	なし	Calendar Server のホスト名またはネットワーク・アドレス、および接続先であるノード ID (必要な場合) を指定します。
[Calendar]	UseDNS	0 または空 (「企業モード」) 1 (DNS を使用します。)		Calendar Domain Service を使用します。
[E-Mail]	AccountName	有効なユーザー名	なし	IMAP4 サーバーでのこのユーザーのアカウント名を指定します。
[E-Mail]	DisplayName	任意の英数字文字列	なし	このユーザーが送信するすべての電子メールに表示する名前を設定します。
[E-Mail]	EmailAddress	有効な電子メール・アドレス	なし	現行ユーザーの電子メール・アドレスを指定します。
[E-Mail]	Imap4ServerName	有効なホスト名	なし	IMAP4 電子メール・サーバーのホスト名またはネットワーク・アドレスを指定します。
[E-Mail]	ImapNoAccount	0 ([E-Mail] セクションの他の IMAP4 構成パラメータを使用して、IMAP4 サーバー接続を構成します。) 1 (IMAP4 サーバー接続の構成をスキップし、[E-Mail] セクションで他の IMAP4 構成パラメータによって設定されたすべての値を無視します。)		このユーザーが IMAP4 アカウントを持たないことを指定し、[E-Mail] セクションで他の IMAP4 構成パラメータによって設定されたすべての値を無視します。
[E-Mail]	ImapPort	有効なポート	143	IMAP4 サーバー用のポートを指定します。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[E-Mail]	ImapSameAsCTime	0 (Calendar Server のアカウント名およびパスワードに対する設定値と同じ値を使用しません。)  1 (Calendar Server のアカウント名およびパスワードに対する設定値と同じ値を使用します。)	0	インストーラに、 [Calendar] AccountName パラメータおよび [Calendar] Password パラメータで指定されたユーザー名およびパスワードを IMAP4 サーバーに対しても使用するよう指示します。 このパラメータを 1 に設定すると、インストーラは [E-Mail] AccountName パラメータおよび [E-Mail] Password パラメータで設定されたすべての値を無視します。
[E-Mail]	ImapSSL	0 (SSL を使用しません。)  1 (SSL を使用します。)	0	インストーラに、IMAP4 電子メール・サーバーとのすべての通信に SSL を使用するよう指示します。
[E-Mail]	Organization	任意の英数字文字列	なし	送信電子メールに表示する、現行ユーザーの組織を指定します (オプション)。
[E-Mail]	Password	このユーザーの電子メール・アカウントの有効なパスワード	なし	IMAP4 サーバーでのこのユーザーのパスワードを指定します。
[E-Mail]	ReplyTo	有効な電子メール・アドレス	なし	現行ユーザーが送信したメールへの返信メールが送信される宛先電子メール・アドレスを指定します (オプション)。
[E-Mail]	SmtAccount	有効なホスト名	なし	SMTP 電子メール・サーバーのホスト名またはネットワーク・アドレスを指定します。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[E-Mail]	SmtpAuthentication	0 (認証は要求されません。 1 (ユーザー名およびパスワードが要求されます。)	0	インストーラに、指定された SMTP 電子メール・サーバーでユーザー名およびパスワードを要求するように指示します。
[E-Mail]	SmtpNoAccount	0 ([E-Mail] セクションの他の SMTP 構成パラメータを使用して、SMTP サーバー接続を構成します。 1 (SMTP サーバー接続の構成をスキップし、[E-Mail] セクションで他の SMTP 構成パラメータによって設定されたすべての値を無視します。)	0	このユーザーが SMTP アカウントを持たないことを指定し、[E-Mail] セクションで他の SMTP 構成パラメータによって設定されたすべての値を無視します。
[E-Mail]	SmtpPassword	現行ユーザー・アカウントの有効なパスワード	なし	[E-Mail] SMTPAuthentication パラメータが 1 に設定されている場合は、SMTP 電子メール・サーバーへの接続時に使用するパスワードを指定します。
[E-Mail]	SmtpPort	有効なポート	25	SMTP サーバー用のポートを指定します。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[E-Mail]	SmtSameAsImap	0 (IMAP4 サーバーのアカウント名およびパスワードに対する設定値と同じ値を使用しません。) <p>1 (IMAP4 サーバーのアカウント名およびパスワードに対する設定値と同じ値を使用します。)</p>	0	インストーラに、 [E-Mail] AccountName パラメータおよび [E-Mail] Password パラメータで指定されたユーザー名およびパスワードを SMTP サーバーに対しても使用するよう指示します。 このパラメータを 1 に設定すると、インストーラは [E-Mail] SmtAccount パラメータおよび [E-Mail] SmtPassword パラメータで設定されたすべての値を無視します。
[E-Mail]	SmtServerName	SMTP サーバーでの有効なユーザー名	なし	[E-Mail] SMTPAuthentication パラメータが 1 に設定されている場合は、SMTP 電子メール・サーバーへの接続時に使用するアカウント名を指定します。
[E-Mail]	SmtSSL	0 (SSL を使用しません。) <p>1 (SSL を使用します。)</p>	0	インストーラに、SMTP 電子メール・サーバーとのすべての通信に SSL を使用するよう指示します。
[General]	CompanyName	任意の英数字文字列	なし	その登録済ユーザーを雇用する会社の名前を指定します。
[General]	InstallPath	有効なパス名	current_drive: ¥Program Files ¥Oracle¥ Connector_for_ Outlook	Oracle Connector for Outlook をインストールするパスを指定します。



表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[General]	UserName	任意の英数字文字列	なし	その登録済ユーザーの名前を指定します。 [Calendar] AccountName パラメータおよび [E-Mail] DisplayName パラメータのデフォルト値としても使用されます。
[Install]	ShowError	0 (エラー・メッセージを非表示にします。) 1 (エラー・メッセージを表示します。)	0	インストール中に検出されたエラー・メッセージが格納されているログ・ファイルを開くボタンを表示します。 ShowOutput が 1 の場合は、インストールの進捗ボックスにボタンが表示されます。ShowOutput が 0 の場合は、別のダイアログ・ボックスにボタンが表示されます。
[Install]	ShowOutput	0 (出力を非表示にします。) 1 (出力を表示します。)	0	Oracle Connector for Outlook インストーラによるサイレント・インストールの進行に伴って、インストーラの出力を表示します。
[Install]	ShowSuccess	0 (通常メッセージを非表示にします。) 1 (通常メッセージを表示します。)	0	インストールが正常に完了したときに、ステータス・メッセージを表示します。
[Install]	ShutdownOutlook	0 (Outlook を自動的に停止しません。) 1 (Outlook を自動的に停止します。)	0	インストーラに、Outlook が実行されている場合は Oracle Connector for Outlook をインストールする前に Outlook を自動的に終了するように指示します。インストーラが正常に機能するためには、Outlook が実行されていない必要があります。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Languages]	(なし)	次のような許容される言語 1031=d 1036=fr 1041=ja 1042=ko  数値は言語を表し、文字列はその言語の Oracle Connector for Outlook DLL およびヘルプ・ファイルに追加される文字列と同じです。	なし。値が指定されていない場合、Oracle Connector for Outlook は英語でインストールされます。	Oracle Connector for Outlook で使用される言語を設定します。
[MAPIProfile]	Name	任意の英数字文字列	Oracle Connector for Outlook	Oracle Connector for Outlook を追加するプロファイルを指定します。指定したプロファイル名が存在しない場合は、インストール中に、この名前を持つ新しいプロファイルが作成され、Oracle Connector for Outlook がそのプロファイルに追加されます。
[Off-line]	Path	有効なパス	現行のプラットフォームおよびプロファイル名により決定されたデフォルトのパス	現行ユーザーのオフライン・ストレージの位置を指定します。
[Off-line]	Use	0 (オフライン・アクセスが使用不可になります。) 1 (オフライン・アクセスが使用可能になります。)	0	インストーラに、現行ユーザーがオフラインでのアクセスおよび同期化を使用できるようにするように指示します。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Settings]	DisableCfgUI	0 (構成ダイアログ・ボックスを表示します。 1 (構成ダイアログ・ボックスを無効にします。))	0	通常は Windows の「コントロール パネル」の「メール」を介して使用できる Oracle Connector for Outlook 構成ダイアログ・ボックスを非表示にして、ユーザーがそのサインイン設定およびオフライン設定を変更できないようにします。
[Settings]	DisablePwd	0 (パスワードの保存を可能にします。) 1 (パスワードの保存を使用不可にします。)	0	インストーラに Calendar Server、IMAP4 サーバーおよび SMTP サーバーに対して設定されたパスワードを無視するように指示し、現行ユーザーにログインのたびにアカウント・パスワードを入力するように要求します。
[Settings]	ForceReboot	0 (再起動しません。) 1 (強制的に再起動します。)	0	インストーラに、インストールの前半部分 (ファイルのコピー、およびサービス・プロバイダとしての Oracle Connector for Outlook のインストール) を実行した後でオペレーティング・システムを再起動するように指示します。

表 G-2 Oracle Connector for Outlook のサイレント・インストール用の構成パラメータ (続き)

コンポーネント	パラメータ	許容値	デフォルト値	説明
[Settings]	HideCTimePwdMenu	0 (「パスワードの変更」オプションを表示します。  1 (「パスワードの変更」オプションを非表示にします。)	0	ユーザーが Outlook を介してその Calendar Server のパスワードを変更することを防ぐために、「ツール」メニューの「パスワードの変更」オプションを非表示にします。
[Settings]	NoServerMail	0 (メール・サーバーへの接続を常に使用可能にします。  1 (IMAP4 サーバーと SMTP サーバーの両方への接続をスキップします。  2 (IMAP4 サーバーへの接続をスキップします。  3 (SMTP サーバーへの接続をスキップします。)	0	IMAP4 サーバーおよび SMTP サーバーへの接続をスキップします。メールに Oracle Connector for Outlook ではなく別のサービス・プロバイダ (Microsoft の Internet Mail など) を使用する場合は、このパラメータを使用します。1、2 または 3 が指定されている場合は、Outlook の対応するサーバー・プロパティ・ページが非表示になります。
[Settings]	ShowSrvIcon	0 (サーバーが使用不可であることを示すアイコンを表示しません。  1 (サーバーが使用不可であることを示すアイコンを表示します。)	0	Calendar Server またはメール・サーバーが使用不可の場合に、Outlook のメイン・ウィンドウの右下に小さい情報アイコンを表示します。

Oracle Connector for Outlook の削除

Oracle Connector for Outlook を削除するには、次のようにします。

- 1. 「コントロール パネル」で「アプリケーションの追加と削除」をダブルクリックします。
- 2. 「Oracle Connector for Outlook」を選択し、「追加と削除」をクリックします。

# Oracle Calendar Desktop Client for Windows

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Desktop Client for Windows のシステム要件](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Windows のインストール](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Windows の削除](#)

## Oracle Calendar Desktop Client for Windows のシステム要件

表 G-3 に、Oracle Calendar Desktop Client for Windows のシステム要件を示します。

表 G-3 Oracle Calendar Desktop Client for Windows のシステム要件

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Windows 98</li><li>■ Windows ME</li><li>■ Windows NT</li><li>■ Windows 2000</li><li>■ Windows XP Home</li><li>■ Windows XP Professional</li></ul> <p>Windows NT コンピュータに Oracle Calendar Desktop Client for Windows をインストールする場合は、Microsoft Windows Service Pack 6 以上をインストールする必要があります。</p> <p>Windows NT、2000 および XP に Oracle Calendar Desktop Client for Windows をインストールするには、管理権限が必要です。</p>
ディスク領域	25MB
RAM	30MB 以上
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Oracle CorporateTime Server 5.4</li><li>■ Oracle Calendar Server 5.5</li><li>■ Oracle Calendar Server 9.0.4</li></ul>

## Oracle Calendar Desktop Client for Windows のインストール

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Windows をインストールする方法を説明します。

1. Windows NT、2000 または XP にインストールする場合は、管理権限でログインします。
2. 自己解凍形式の実行可能ファイル cal\_win\_904x.exe を実行し、画面に表示される手順に従います。

## Oracle Calendar Desktop Client for Windows の削除

Oracle Calendar Desktop Client for Windows を削除するには、次のようにします。

1. 「コントロール パネル」で「アプリケーションの追加と削除」をダブルクリックします。
2. 「Oracle Calendar 9.0.4」を選択し、「追加と削除」をクリックします。

## Oracle Calendar Desktop Client for Linux

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のシステム要件](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のインストール](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のサイレント・インストール](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 の削除](#)

## Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のシステム要件

[表 G-4](#) に、Oracle Calendar Desktop Client for Linux のシステム要件を示します。

**表 G-4 Oracle Calendar Desktop Client for Linux のシステム要件**

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Red Hat Linux 7.x ~ 9.0</li><li>■ SuSE Linux 7.1</li><li>■ Linux X86 カーネル 2.4.x 以上</li></ul>
ディスク領域	33MB
RAM	15 ~ 20MB

表 G-4 Oracle Calendar Desktop Client for Linux のシステム要件（続き）

要件	値
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle CorporateTime Server 5.4</li> <li>■ Oracle Calendar Server 5.5</li> <li>■ Oracle Calendar Server 9.0.4</li> </ul>

## Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のインストール

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Linux をインストールする方法を説明します。

1. 一時ディレクトリにディストリビューション・アーカイブを解凍します。次に示す手順では、サンプル・ディレクトリとして /tmp を使用しています。

```
cd /tmp
gtar zxvf /tmp/cal_linux_904x.tar.gz
```

2. OracleCalendar\_inst ディレクトリに移動します。

```
cd OracleCalendar_inst
```

3. 完全なグラフィカル・インタフェースを使用してインストールするには、gui\_install.bat を実行します。テキスト・モード・インタフェースを使用してインストールするには、text\_install.bat を実行します。インストールおよびショートカット・ディレクトリを求めるプロンプトが表示されます。

## Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のサイレント・インストール

Oracle Calendar Desktop Client for Linux のサイレント・インストールを実行するには、ファイル silent\_install.bat を実行することを除いて、G-17 ページの「[Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 のインストール](#)」に説明されている手順に従います。このファイルは、ocal\_conf/silent.properties ファイルから次のパラメータを読み取ります。

- USER\_INSTALL\_DIR: アプリケーションのインストール先
- USER\_SHORTCUTS: Oracle Calendar の起動に使用するショートカットの配置場所

どちらの値も、/local/OracleCalendar のような完全修飾パスである必要があります。相対パスは使用できません。

## Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86 の削除

Oracle Calendar Desktop Client for Linux を削除するには、OracleCalendar ディレクトリを削除します。

```
rm -rf /OracleCalendar
```

## Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のシステム要件](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のインストール](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh の削除](#)

## Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のシステム要件

[表 G-5](#) に、Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のシステム要件を示します。

**表 G-5 Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のシステム要件**

要件	値
オペレーティング・システム	Mac OS 9.x (CarbonLib 1.6 付き)、Mac OS X 10.1.4 ～ 10.2.6
ディスク領域	20MB 以上
RAM	12MB
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Oracle Calendar Server Oracle CorporateTime Server 5.4</li><li>■ Oracle Calendar Server 5.5</li><li>■ Oracle Calendar Server 9.0.4</li></ul>



## Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh のインストール

### Mac OS 9.x

この項では、Mac OS 9.x に対して Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh をインストールする方法を説明します。

1. 管理権限を所有していることを確認します。
2. インストーラを実行するために、CarbonLib ファイルがアクティブなシステム・フォルダの「Extensions」フォルダにインストールされていることを確認します。
3. cal\_mac\_OS9\_904x.hqx をダブルクリックし、画面に表示される手順に従います。

インストーラは、アプリケーションを抽出し、選択されたコピー先フォルダに Readme.htm ファイルをコピーします。また、インストーラは、すべての共有ライブラリを「Extensions」フォルダに抽出し、「Oracle Calendar Help」をアクティブなシステム・フォルダの「ヘルプ」フォルダに抽出します。

CarbonLib ファイルが 1.6 より前のバージョンである場合は、それが更新されます。ファイルの新しいバージョンを有効にするには、コンピュータを再起動します。

4. インストール完了時にアプリケーションを起動する場合は、「Oracle Calendar」デスクトップ・アイコンをダブルクリックします。

### Mac OS X

この項では、Mac OS X に対して Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh をインストールする方法を説明します。

1. 管理権限を所有していることを確認します。
2. cal\_mac\_OSX\_904x.hqx をダブルクリックし、画面に表示される手順に従います。

インストーラは、アプリケーションを抽出し、選択されたコピー先フォルダに Readme.htm ファイルをコピーします。また、インストーラは、すべての共有ライブラリを /Library/CFMSupport/ フォルダに抽出し、「Oracle Calendar Help」フォルダを /Library/Documentation/Help/ フォルダに抽出します。

3. インストール完了時にアプリケーションを起動する場合は、「Oracle Calendar」デスクトップ・アイコンをダブルクリックします。

## Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh の削除

### Mac OS 9.x

この項では、Mac OS 9.x で Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh を削除する方法を説明します。

1. Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh を削除するには、次のコンポーネントを削除する必要があります。
  - 共有ライブラリおよび ACE プラグイン
  - ヘルプ
  - 設定
  - Oracle Calendar Desktop Client アプリケーション
  - Oracle Calendar データ（オフライン・ファイル）
2. 共有ライブラリおよび ACE プラグインを削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「システム」フォルダを開きます。「Extensions」フォルダを開き、次のファイルを削除します。
  - OCALACipher1EncrLib
  - OCALLightEncrLib
  - OCALSimpleCompLib
  - OCALStdAuthLib
  - OCALSASLAuthLib
  - OCALGssapiAuthLib
  - Unison Library
3. ヘルプを削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「システム」フォルダを開きます。「ヘルプ」フォルダを開き、「Oracle Calendar Help」フォルダを選択して削除します。
4. 設定を削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「システム」フォルダを開きます。「初期設定」フォルダを開き、Oracle Calendar Prefs ファイルを選択して削除します。
5. Oracle Calendar データ・ファイルを削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「Applications (Macintosh OS 9)」フォルダを開きます。「Oracle Calendar」フォルダを選択し、それを削除します。

## Mac OS X

この項では、Mac OS X で Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh を削除する方法を説明します。

1. Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh を削除するには、次のコンポーネントを削除する必要があります。
  - 共有ライブラリおよび ACE プラグイン
  - ヘルプ
  - 設定
  - Oracle Calendar Desktop Client アプリケーション
  - Oracle Calendar データ（オフライン・ファイル）
2. 共有ライブラリおよび ACE プラグインを削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「Library」フォルダを開きます。「CFMSupport」フォルダを開き、次のファイルを削除します。
  - OCALACipher1EncrLib
  - OCALLightEncrLib
  - OCALSImpleCompLib
  - OCALStdAuthLib
  - OCALSASLAuthLib
  - OCALGssapiAuthLib
  - Unison Library
3. ヘルプを削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「Library」フォルダを開きます。「Documentation」フォルダを開き、「ヘルプ」フォルダを開きます。「Oracle Calendar Help」フォルダを選択し、それを削除します。
4. 設定を削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「Users」フォルダを開き、「(ユーザー名)」フォルダにアクセスします。「Library」フォルダを開き、「作業環境」フォルダを開きます。次のファイルを選択し、それを削除します。
  - com.Oracle.Oracle Calendar.plist
  - Oracle Calendar Prefs
5. Oracle Calendar アプリケーションを削除するには、ハード・ディスクにアクセスし、「Applications」フォルダを開きます。「Oracle Calendar」フォルダを選択し、それを削除します。

# Oracle Calendar Desktop Client for Solaris

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\) のシステム要件](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\) のインストール](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\) の削除](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\) のサイレント・インストール](#)

## Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) のシステム要件

[表 G-6](#) に、Oracle Calendar Desktop Client for Solaris のシステム要件を示します。

**表 G-6 Oracle Calendar Desktop Client for Solaris のシステム要件**

要件	値
オペレーティング・システム	Solaris 8、9 (SPARC のみ)  Oracle Calendar Desktop Client のオンライン・ヘルプを使用するには、Netscape Navigator または Netscape Communicator リリース 4.0 以上が必要です。Netscape 実行可能ファイルを含むディレクトリをパスに設定する必要があります。
ディスク領域	40MB
RAM	20 ～ 25MB

## Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) のインストール

この項では、Solaris に対して Oracle Calendar Desktop Client をインストールする方法を説明します。

1. 一時ディレクトリにディストリビューション・アーカイブを解凍します。次に示すコマンドでは、サンプル・ディレクトリとして /tmp を使用しています。

```
cd /tmp
gtar zxvf /tmp/cal_sun_os_904x.tar.gz
```

2. OracleCalendar\_inst ディレクトリに移動します。

```
cd OracleCalendar_inst
```

3. 完全なグラフィカル・インタフェースを使用してインストールするには、gui\_install.bat を実行します。テキスト・モード・インタフェースを使用してインストールするには、text\_install.bat を実行します。インストールおよびショートカット・ディレクトリを求めるプロンプトが表示されます。

## Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) の削除

Oracle Calendar Desktop Client for Solaris を削除するには、OracleCalendar ディレクトリを削除します。

```
rm -rf /OracleCalendar
```

## Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) のサイレント・インストール

Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment (SPARC 32-bit) のサイレント・インストールを実行するには、ファイル silent\_install.bat を実行することを出いて、G-23 ページの「[Oracle Calendar Desktop Client for Solaris Operating Environment \(SPARC 32-bit\) のインストール](#)」に説明されている手順に従います。このファイルは、ocal\_conf/silent.properties ファイルから次のパラメータを読み取ります。

- USER\_INSTALL\_DIR: アプリケーションのインストール先
- USER\_SHORTCUTS: Oracle Calendar の起動に使用するショートカットの配置場所

どちらの値も、/local/OracleCalendar のような完全修飾パスである必要があります。相対パスは使用できません。

# Oracle Calendar Sync for Palm for Windows

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のシステム要件](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のインストール](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Windows の削除](#)

## Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のシステム要件

[表 G-7](#) に、Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のシステム要件を示します。

**表 G-7 Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のシステム要件**

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Windows 98</li><li>■ Windows 2000</li><li>■ Windows ME</li><li>■ Windows XP</li><li>■ Windows NT 4.0</li></ul>
ディスク領域	75MB
RAM	64MB
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none"><li>■ CorporateTime Server 5.4</li><li>■ Oracle Calendar Server 5.5</li><li>■ Oracle Calendar Server 9.0.4</li></ul>
Palm Desktop	Palm Desktop 3.1 ～ 4.1
デバイス	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Palm m100、m500、m505、III、IIIx、V、Vx、Tungsten T、W</li><li>■ Handspring Visor</li></ul>

## Oracle Calendar Sync for Palm for Windows のインストール

この項では、Oracle Calendar Sync for Palm for Windows をインストールする方法を説明します。

Oracle Calendar Sync (CorporateSync) の以前のバージョンがインストールされている場合は、Oracle Calendar Sync for Palm for Windows をインストールする前に同期化を実行することをお薦めします。

1. HotSync がコンピュータにインストールされていることを確認します。
2. ディストリビューション・パッケージに付属の cal\_syncpalm\_win\_904x.exe セットアップ・プログラムを実行し、画面に表示される InstallShield の手順に従います。
3. インストールのタイプを選択します。「カスタム」を選択した場合、「この機能をローカルのハードディスク ドライブにインストールします。」と「この機能、およびすべてのサブ機能をローカルのハードディスク ドライブにインストールします。」の間に違いはありません。インストールするコンジットを選択します。
4. ユーザー情報（ユーザー名、パスワード、Calendar Server、ノード ID など）を入力します。
5. 画面に表示されるその他の手順に従って、インストールを完了します。
6. デバイスがクレードルにあることを確認し、同期を実行します。インストール後に初めて同期を実行する際には、完全同期が実行されます。

## Oracle Calendar Sync for Palm for Windows の削除

Oracle Calendar Sync を削除するには、次のようにします。

1. 「コントロール パネル」で「アプリケーションの追加と削除」をダブルクリックします。
2. 「Oracle Calendar Sync 9.0.4 for Palm」を選択し、「追加と削除」をクリックします。

# Oracle Calendar Sync for Pocket PC

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Sync for Pocket PC のシステム要件](#)
- [Oracle Calendar Sync for Pocket PC のインストール](#)
- [Oracle Calendar Sync for Pocket PC の削除](#)

## Oracle Calendar Sync for Pocket PC のシステム要件

表 G-8 に、Oracle Calendar Sync for Pocket PC のシステム要件を示します。

表 G-8 Oracle Calendar Sync for Pocket PC のシステム要件

要件	値
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Windows 98</li><li>■ Windows 2000</li><li>■ Windows ME</li><li>■ Windows XP</li><li>■ Windows NT 4.0</li></ul>
ディスク領域	75MB
RAM	64KB
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none"><li>■ CorporateTime Server 5.4</li><li>■ Oracle Calendar Server 5.5</li><li>■ Oracle Calendar Server 9.0.4</li></ul>
Pocket PC	MIPS、SH3、ARM または XScale プロセッサ搭載の Pocket PC (Windows CE 3.0)
デバイス	<ul style="list-style-type: none"><li>■ HPC 2000</li><li>■ Compaq iPAQ</li><li>■ HP iPAQ H1910</li><li>■ HP Jornada 500 シリーズ</li><li>■ HP Jornada 700 シリーズ</li><li>■ Handheld PC</li><li>■ Pocket PC 2002</li></ul> <p>Microsoft ActiveSync の以前のバージョンを実行している場合は、製造元の Web サイトで更新版を入手してください。</p>



## Oracle Calendar Sync for Pocket PC のインストール

この項では、Oracle Calendar Sync for Pocket PC をインストールする方法を説明します。

Oracle Calendar Sync (CorporateSync) の以前のバージョンがインストールされている場合は、Oracle Calendar Sync for Pocket PC をインストールする前に同期化を実行することをお勧めします。

1. ActiveSync がコンピュータにインストールされていることを確認します。
2. ディストリビューション・パッケージに付属の cal\_syncppc\_win\_904x.exe セットアップ・プログラムを実行し、画面に表示される InstallShield の手順に従います。
3. インストールのタイプを選択します。「カスタム」を選択した場合、「この機能をローカルのハードディスク ドライブにインストールします。」と「この機能をローカルのハードディスク ドライブにインストールします。」の間に違いはありません。インストールするコンジットを選択します。
4. アプリケーションで Oracle Calendar Sync Helper ファイルをインストールするかどうかを確認するプロンプトが表示されたら、インストールすることを確定します。これらのファイルをインストールするにはデバイスが接続されている必要があります。

---

**注意：** 後で接続し、ファイルをインストールするには、「スタート」→「プログラム」→「Oracle Calendar Sync for Pocket PC」→「携帯情報端末のヘルパー・ファイルをインストール」をクリックします。

---

5. ユーザー情報（ユーザー名、パスワード、Calendar Server、ノード ID など）を入力します。
6. 画面に表示されるその他の手順に従って、インストールを完了します。
7. クレードルからデバイスを除去します。
8. 以前のバージョンからアップグレードする場合は、「ファイル」→「パートナーシップの削除」を選択します。
9. デバイスをクレードルに戻します。ActiveSync パートナーシップ・ウィザードが起動します。
10. 画面の説明に従って、新規 ActiveSync Partnership を作成します。カレンダー、タスクおよび連絡先のプラグインとして「Oracle Calendar」を選択します。
11. Microsoft ActiveSync が自動的に開かれない場合は、これを開きます。
12. 同期が自動的に開始しない場合は、「同期」をクリックします。初めて同期を実行する際には、完全同期が実行されます。

## Oracle Calendar Sync for Pocket PC の削除

Oracle Calendar Sync for Pocket PC を削除するには、次のようにします。

1. 「コントロール パネル」で「**アプリケーションの追加と削除**」をダブルクリックします。
2. 「**Oracle Calendar Sync 9.0.4 for Pocket PC**」を選択し、「**追加と削除**」をクリックします。

携帯情報端末から Oracle Calendar Sync Helper ファイルを削除するには、次のようにします。

1. デバイスで、「**スタート**」→「**設定**」を選択します。
2. 「**システム**」の下で、「**アプリケーションの削除**」をクリックします。
3. 「**Oracle Calendar Sync Helper Files**」を選択し、「**削除**」をクリックします。

## Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件](#)
- [以前のバージョンへのインストールの準備](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストール](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストールのトラブルシューティング](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh の削除](#)

## Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件

[表 G-9](#) に、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件を示します。

**表 G-9 Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件**

要件	値
オペレーティング・システム	Macintosh OS 9 または Mac OS X 10.1.4 ～ 10.2.6
RAM	8MB（64MB を推奨）
Calendar Server	<ul style="list-style-type: none"><li>■ Oracle CorporateTime Server 5.4</li><li>■ Oracle Calendar Server 5.5</li><li>■ Oracle Calendar Server 9.0.4</li></ul>
Palm Desktop	Palm Desktop バージョン 4.0 および 4.1

表 G-9 Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のシステム要件（続き）

要件	値
デバイス	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Handspring Visor</li> <li>■ Palm M500 シリーズ</li> </ul>

## 以前のバージョンへのインストールの準備

Sync ソフトウェアがコンピュータにすでにインストールされており、データが Palm Desktop に格納されている場合は、HotSync を実行します。

Beta バージョンの Oracle Calendar Sync がインストールされている場合、またはリリース 2.1.4 以前の Oracle Corporate Sync がインストールされている場合は、データを保護するために、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh をインストールする前に次の操作を実行する必要があります。

1. Oracle Calendar Sync アプリケーション（CS Setup と呼ぶ）を Palm オーガナイザから削除します。
2. 「Date Book」および「To Do List」からすべてのアイテムをパージします。この処理を行わない場合、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストール後に初めて HotSync を実行した際に、重複するアイテムが作成されます。データをパージする際には、次の手順に注意してください。
  - 「Save archive copy on PC」が選択されていることを確認します。
  - 完了としてマークされている「To Do」アイテムは、手動で削除する必要があります。
  - 「Date Book」イベントの大多数またはすべてを削除する場合は、オーガナイザの日付を数年進めてからパージします。たとえば、オーガナイザの日付を 2015 に変更し、1 週間より前のすべてのイベントをパージして、2015 年までのすべてのイベントを削除します。

## Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストール

この項では、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh をインストールする方法を説明します。

1. `cal_syncpalm_macOS9_904.hqx` (Mac OS X を使用している場合は `cal_syncpalm_macOSX_904.hqx`) ファイルをダブルクリックします。これにより、Oracle Calendar Sync インストーラが作成されます。
2. 「**Oracle Calendar Sync Install**」をダブルクリックします。インストーラは、既存の Sync ファイルをチェックし、プログラムをインストールします。設定に応じて、これには数分かかることがあります。エラー・メッセージが生成され、インストール・ログに保存されることがあります。これらのメッセージは無視してかまいません。
3. `Oracle Calendar Sync.prc` を、`/Applications/Palm/Add-on/` ディレクトリから `/Users/user/Documents/Palm/Users/user/Files to Install/` ディレクトリにコピーします。`user` は、関連 Mac ユーザーの名前です。

Palm Desktop を最近インストールし、「Files to Install」フォルダが存在しない場合は、このフォルダを手動で作成します。

---

**注意：** インストーラは、「予定」および「ToDo」コンジットを「Disabled Conduits」という名前のフォルダに移動します。

---

4. Palm オーガナイザをオンにし、オーガナイザをそのクレードルに設置します。
5. Palm オーガナイザ・クレードルの前面にある「**HotSync**」ボタンを押します。Oracle Calendar Sync アプリケーションが Palm オーガナイザにインストールされます。

---

**注意：** Oracle Calendar Sync が見つからないことを示すエラー・メッセージが HotSync ログに表示される場合があります。これらのメッセージは無視してください。

---

6. HotSync Manager が実行されている場合、インストーラはそれを終了するかどうかを確認するプロンプトを表示します。「はい」をクリックして、HotSync Manager を終了します。
7. HotSync フォルダ内の「HotSync」アイコンをクリックし、「HotSync マネージャー」を選択します。
8. 「HotSync」メニューで、「動作設定」を選択します。同期可能な項目のリストが表示されます。Oracle Calendar のイベントおよびタスクをダブルクリックして、これらの各

項目を同期化する方法を選択します。次の選択項目を含むダイアログ・ボックスが表示されます。

- **Synchronize the files:** Palm オーガナイザおよび Oracle Calendar の両方に存在するすべての情報を同期化します。
  - **Macintosh overwrites hand-held:** Oracle Calendar Agenda 内の情報が Palm オーガナイザの「予定表」、「To Do」または「アドレス」を上書きします。
  - **何もしない:** 指定したエントリ・タイプは同期化されません。
9. 「動作設定」ダイアログ・ボックスの上部で、ユーザー名を選択します。ユーザー名が1つのみの場合は、それが自動的に選択されます。
  10. Oracle Calendar Sync を Palm オーガナイザに開き、Oracle Calendar ユーザー名、パスワード、サーバーおよびノード ID を入力します。この情報が不明な場合は、ネットワーク管理者に問い合わせてください。

この時点で Oracle Calendar Sync はインストールされていますが、エントリ情報は同期化されていません。

## Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストールの トラブルシューティング

Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh のインストール後に、HotSync の実行に問題が発生することがあります。これは、Palm Desktop ファイルとの競合が原因です。問題を修正するには、次の手順を実行します。

1. `/Users/your_user_name/Documents/Palm/Users` の下の「Documents Folder」にある「Users」フォルダを削除します。
2. `com.palm.Desktop.plist` ファイルを削除します。このファイルは `/Users/your_user_name/Library/Preferences/` ディレクトリにあります。
3. `/Users/your_user_name/Library/Preferences/ByHost/` ディレクトリにある次のファイルを削除します。
  - `com.palm.HS.T.S.xxxxxxxx.plist`
  - `com.palm.HS.T.PC.xxxxxxxx.plist`
  - `com.palm.HS.T.USB.xxxxxxxx.plist`
4. HotSync Manager を起動します。前述の手順の説明に従ってファイルとフォルダを削除した場合は、ユーザー名を求めるプロンプトが表示されます。
5. ユーザー名およびその他の必要な HotSync 情報を入力します。
6. HotSync Manager を終了し、HotSync を実行します。

## Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh の削除

この項では、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh を削除する方法を説明します。

1. HotSync の「Conduits」フォルダから「Oracle Calendar Tasks」および「Oracle Calendar Events」コンジットを削除します。
2. アクティブな (Mac OS 10.2.1) Library¥CFM Support フォルダから「Unison Library」共有ライブラリを削除します。
3. 「Disable Conduits」フォルダの内容を「HotSync conduits」フォルダに戻します。

## Oracle FileSync

この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle FileSync for Windows のインストール](#)
- [Oracle FileSync for Windows の削除](#)

## Oracle FileSync for Windows のインストール

Oracle FileSync は、ローカル・コンピュータと Oracle Files の間でファイルの同期を維持することを可能にする Windows クライアント・ソフトウェア・アプリケーションです。Oracle FileSync をインストールするには、次の手順に従います。

1. すべての Windows アプリケーションを保存および終了します。
2. Oracle Files にログインし、「ヘルプ」をクリックします。オンライン・ヘルプのメイン・ページで、Oracle FileSync セクションにあるリンクをクリックします。
3. 実行可能ファイルをハード・ドライブに保存します。
4. FileSync.exe をダブルクリックして、インストール・プログラムを実行します。
5. 指示に従い、デフォルト値を受け入れます。アプリケーションは、Windows クライアント・マシンの次のディレクトリにインストールされます。

c:¥Program Files¥Oracle¥Oracle FileSync

6. Oracle FileSync アプリケーションを起動するには、Windows の「スタート」→「プログラム」メニューで「Oracle FileSync」を選択します。
7. 更新 URL を編集します。「ファイル」→「作業環境」→「更新」を選択し、正しい URL を「更新 URL」フィールドに入力します。

管理者に使用する正しい URL を問い合わせます。または、「更新準備チェック」の選択を解除することができます。詳細は、Oracle FileSync のオンライン・ヘルプを参照してください。

## Oracle FileSync for Windows の削除

Oracle FileSync for Windows を削除するには、次のようにします。

1. 「コントロール パネル」で「**アプリケーションの追加と削除**」をダブルクリックします。
2. 「**Oracle FileSync**」を選択し、「**追加と削除**」をクリックします。





---

# 用語集

## Debian

Linux カーネル、および GNU プロジェクトの基本オペレーティング・システム・ツールを使用する無償のオペレーティング・システム。

## ias\_admin パスワード (ias\_admin password)

Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite がインストールされたホスト上の任意のインストールの管理に使用されるパスワード。このパスワードは、追加の Oracle Collaboration Suite インスタンスをインストールするために必要である。**Oracle Internet Directory** を構成する場合、デフォルトで、デフォルトの管理ユーザー orcladmin に、ias\_admin ユーザーと同じパスワードが割り当てられる。orcladmin ユーザーは、**Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー**である。

## LDAP

「**Lightweight Directory Access Protocol** (LDAP)」を参照。

## LDAP Data Interchange Format (LDIF)

すべての LDAP コマンドライン・ユーティリティ用の入力ファイルをフォーマットするための一連の規格。

## LDIF

「**LDAP Data Interchange Format** (LDIF)」を参照。

## Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)

拡張可能な標準 DAP (Directory Access Protocol)。LDAP クライアントと LDAP サーバーが通信するために使用する共通の言語。業界標準のディレクトリ製品 (Oracle Internet Directory など) をサポートする設計規則のフレームワーク。

## Oracle Calendar

デスクトップ・クライアント、Web およびすべての携帯情報端末を介したカレンダーリング、スケジュールリングおよび個人情報管理（PIM）機能を提供する Oracle Collaboration Suite アプリケーション。スケーラブルなカレンダー・アーキテクチャによって、企業全体での高度なグループ・カレンダーの使用およびリソース・スケジュールリングが可能になる。

## Oracle Calendar Desktop Client

**Oracle Calendar** Desktop Client を使用すると、ユーザーは、会議、記録、イベントおよびタスクを、自分で、または他のユーザーの代理として作成および管理できる。ユーザーは、便利な結合された「グループ・ビュー」を使用して簡単にスケジュールを比較したり、他のユーザーのスケジュール空き状況を確認したりすることができ、会議を作成する前にスケジュールの不一致を確認できる。オンラインのアドレス帳を使用すると、ユーザーは、連絡先を管理して、構成可能なカテゴリに従って連絡先を分類できる。Oracle Calendar Desktop Client は、Windows、Macintosh および Motif で使用できる。

## Oracle Calendar Sync

**Oracle Calendar** の会議、タスクおよびアドレス帳を携帯端末のエントリと同期化する。Oracle Calendar Sync を使用すると、カレンダーをどこにでも携帯し、携帯端末で必要な変更を行って、Oracle Calendar Server 上で最新の情報と同期化できる。この機能は、Palm デバイス（Windows および Macintosh）および Pocket PC デバイス（Windows のみ）で使用できる。

## Oracle Calendar Web Client

単独で、または任意の Oracle Calendar Desktop Client の補助機能としても使用できる、便利でアクセスの容易なカレンダー・サービス。ユーザーは、カスタマイズ可能なユーザー・インタフェースによって組織のニーズに適応するインタフェースを使用して、複数のタイムゾーン、オペレーティング・システムおよび言語間で作業できる。また、柔軟で直観的なレイアウトおよび編成を使用して、周囲のユーザーと簡単に共同作業できる。

## Oracle Cluster Setup Wizard

Oracle Cluster Setup Wizard は、すべてのノード上で次のタスクを実行する。

- Oracle9i オペレーティング・システム依存のクラスタウェアをインストールおよび起動する。
- OracleClusterFileSystem サービスをインストールおよび起動し、1 つまたは 2 つの共有ファイル・システムを作成する（オプション）。
- Object Link Manager をインストールし、すべてのノード上で Oracle Object Service を起動する（オプション）。このツールは、論理ドライブへの永続シンボリック・リンクを作成する。サービスは、シンボリック・リンクが変更されるとすべてのノードを更新し、コンピュータが停止および再起動されるたびに起動するよう「自動」に設定される。
- Oracle Object Link Manager を以前起動したときに作成された既存のシンボリック・リンク情報を保持する。
- すべてのノードに他のディスク管理ツールをインストールする。
- 既存のクラスタにノードを追加する。

## Oracle Collaboration Suite Web Client

Oracle Collaboration Suite は、ブラウザを搭載したコンピュータ用の統合 Web クライアントを提供する。この Web クライアントは、基礎となる Oracle9iAS Infrastructure を使用して、メッセージ（電子メール、ボイスメールおよび FAX）、カレンダーおよびディレクトリ情報、および大規模な共同作業用に設計されたファイル・サーバーである **Oracle Files** に格納されたコンテンツにアクセスするための、安全なシングル・サインオン環境を提供する。

## Oracle Connector for Outlook

Oracle Connector for Outlook は、統合された Microsoft Outlook の見慣れたインタフェースを介して、電子メールおよびリアルタイムのカレンダーを提供する。Oracle Connector for Outlook は、オンラインとオフラインの両方での情報へのアクセス機能、完全な電子メール機能および PDA 同期機能を備え、Microsoft Outlook の最もよく使用するすべての機能のメリットを最大限に活かす。さらに、ユーザーは、**Oracle Calendar** を使用した情報へのリアルタイム・アクセスおよび最新のスケジュールの空き状況の参照を介して、高度なカレンダー機能のメリットを得ることができる。

## Oracle Email

ボイスメール、電子メールおよび FAX のメッセージ用に使用される単一のメッセージ・ストア。あらゆるタイプの情報を格納および管理し、それらの情報へのアクセスを提供する。このメッセージ・ストアは、配信、通話処理、ワイヤレス通知、ブラウザベースのクライアント（Web とワイヤレスの両方）および管理ユーティリティを提供する。Oracle Email は、任意のアクセス方法を使用して、すべてのタイプのメッセージにアクセスを提供する。ボイスメール、電子メール、FAX およびその他のメール・タイプは、ユーザーが選択したアクセス・チャネルおよびデバイスで使用可能になる。

## Oracle Enterprise Manager Web Site

Oracle Collaboration Suite 用に特別に設計された管理ツールを提供する Web サイト。この Web サイトを使用すると、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite のコンポーネントを監視および構成できる。アプリケーションの配置、セキュリティの管理および Oracle Collaboration Suite クラスターの作成および管理を実行できる。Oracle Enterprise Manager Web Site は、Oracle9iAS Infrastructure の一部としてすべてのホストにインストールされる。

## Oracle Enterprise Manager コンソール (Oracle Enterprise Manager Console)

Oracle Enterprise Manager のクライアント・インタフェース。Oracle 環境を詳細に表示する。Oracle Enterprise Manager コンソールを使用すると、ネットワーク全体で、Oracle データベース、アプリケーション・サーバーおよび Oracle アプリケーションを自動的に検出および管理できる。コンソールおよび関連ツールは、Oracle9iAS Infrastructure の一部としてインストールされる。

## Oracle Files

スケーラブルで信頼性の高い統合ファイル・サーバーを介した共同作業およびファイルの共有をサポートする、コンテンツ管理アプリケーション。Oracle Files は、高度な Web ベースのユーザー・インタフェースおよび業界標準のプロトコル・サポートを提供する。これによって、ユーザーは、1 つのワークスペース内または企業全体で様々なタイプのファイルを他のユーザーと簡単に共有できる。セルフサービス管理機能によって、ユーザーはワークスペースを作成し、優先する生産性ツールおよびネットワーク・プロトコル・サーバーを使用して、コンテンツの安全性の確保、コンテンツの作成および公開を行うことができる。Oracle Files は、データ・センターとユーザーの両方のファイル・システムを管理できる。

## Oracle FileSync

Oracle FileSync は、すべてのファイルの変更をローカル・コンピュータと **Oracle Files** の間で同期化し、古いファイルを新しいファイルで置き換え、ローカル・コンピュータと Oracle Files のコンテンツが一致するようにする。

## Oracle Files ドメイン・コントローラ (Oracle Files Domain Controller)

**ドメイン**を作成する **ノード**を制御するためのプロセス。

## Oracle HTTP Server

Apache Web Server テクノロジーに基づいて構築された Oracle HTTP Server は、Oracle9iAS Infrastructure をサポートし、拡張性、安定性、高速な処理を提供する。Java Servlets、JavaServer Pages (JSP)、Perl、PL/SQL および CGI アプリケーションもサポートする。

## Oracle Internet Directory

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) バージョン 3 の実装。散在するユーザーおよびネットワーク・リソースに関する情報の共有を可能にする。

## Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー (Oracle Internet Directory super user)

特別なディレクトリ管理者。IASAdmins グループのメンバーである必要があり、通常、ディレクトリ情報への完全なアクセス権を持つ。スーパー・ユーザーのデフォルトのユーザー名は orcladmin、デフォルトのパスワードは welcome。デフォルトのパスワードは、すぐに変更することを推奨。このユーザー名は、デフォルトで、IASAdmins のメンバーである。Oracle Internet Directory の管理者は、他のユーザーに orcladmin パスワードを付与しない場合、IASAdmins グループのメンバー用に異なるユーザー名とパスワードを作成できる。

## Oracle Management Server

**Oracle Enterprise Manager コンソール**を使用して、システム管理タスクを処理し、ネットワーク間のこれらのタスクの分散を管理する。Oracle Enterprise Manager Console およびその3層アーキテクチャを **Oracle Enterprise Manager Web Site** と併用すると、Oracle 環境全体を管理できる。

## Oracle Ultra Search

Oracle Ultra Search は、Oracle データベース、その他の ODBC 対応データベース、IMAP メール・サーバー、Web サーバーが提供する HTML ドキュメント、ディスク上のファイルなどの複数のリポジトリにわたって、均一な検索機能を提供する。Oracle データベース・サーバーおよび Oracle Text テクノロジーに基づいて構築され、クローラを使用してドキュメントを索引付けする。ドキュメントは元のリポジトリ内に残り、クローラされた情報を使用して索引が構築される。この索引は、ファイアウォールの内側の、指定された Oracle データベース内に存在する。また、Oracle Ultra Search は、コンテンツ管理ソリューションを構築するための API を提供する。

## Oracle Voicemail & Fax

信頼性が高く、高スケーラブルなボイスメールおよび FAX システム。このシステムによって、ボイスメール・メッセージおよび FAX メッセージの集中管理された安全な格納および取出しが可能になる。Oracle Voicemail & Fax は、高スケーラブルで信頼性の高い **Oracle Email** メッセージ・ストアを基礎として使用し、通話処理、配信、ブラウザベースのクライアントおよび管理ユーティリティを提供する。

## Oracle Web Conferencing

Oracle Web Conferencing は、企業でのリアルタイムのオンラインの共同作業を可能にし、顧客、従業員、チームおよびパートナーが、E-Business のコンテンツ、取引および総合的ビジネス・フローにより提供されるコンテキスト内でオンライン会議を行えるようにする。オンライン会議を作成し、会議への参加をさせるクライアントおよびサーバー・アプリケーションから構成される。Oracle Web Conferencing には、デスクトップ共有、ホワイトボード、チャット、アンケート、共有ブラウズなど、会議で協調するための複数の方法が用意されている。

## Oracle9iAS Containers for J2EE

Oracle9iAS Infrastructure が提供する、完全に Java で作成された、Java 2 Enterprise Edition (J2EE) コンテナの完全なセット。標準 Java Development Kit (JDK) の Java Virtual Machine (JVM) 上で実行する。Oracle9iAS Containers for J2EE (OC4J) は、オペレーティング・システムに存在する標準 JDK 上で実行できる。

## Oracle9iAS Metadata Repository

Oracle Collaboration Suite インスタンスの実行に必要なメタデータを含む事前作成済データベース。Oracle Internet Directory および Oracle9iAS Single Sign-On の情報も格納できる。

## Oracle9iAS Portal

Oracle9iAS Portal は、Web データベース・アプリケーションおよびコンテンツ駆動型の Web サイトを構築、配置および監視するための完全なソリューションである。Oracle9iAS Portal を使用すると、簡単に使用できる HTML ベースのインタフェースを介してデータベース・オブジェクトを作成および参照し、HTML ベースのインタフェースを作成するためのツールを使用できる。また、パフォーマンス追跡機能を使用してパフォーマンスの問題を解決したり、インタフェースを介してデータベースのセキュリティを管理したりできる。

## Oracle9iAS Single Sign-On

複数のアカウントおよび Oracle Collaboration Suite アプリケーションへのアクセスを可能にする、企業規模のユーザー認証プロセス。

## Oracle9iAS Web Cache

サーバーのアクセス速度を向上させるキャッシュ・サービス。Oracle9iAS Infrastructure および Oracle データベース上で実行し、頻繁に使用される E-Business Web サイトのパフォーマンス、拡張性および可用性を向上させる。Oracle9iAS Web Cache は、頻繁にアクセスされる URL を仮想メモリー内に格納することによって、これらの URL へのリクエストを Web サーバー上で繰返し処理する必要性を排除する。また、1 つ以上の Web アプリケーションからの、静的および動的に生成された HTTP コンテンツをキャッシュする。

## Oracle9iAS Wireless

情報およびアプリケーションを携帯情報端末に配信するためのポータル・サービス。Oracle9iAS Wireless を使用すると、Web ページ、カスタム Java アプリケーション、XML ベースのアプリケーションなどの様々なコンテンツを使用するカスタム・ポータル・サイトを作成できる。Oracle9iAS Wireless サイトでは、各ターゲット端末のプラットフォーム用のコンテンツを再作成することなく、携帯情報端末から多様な情報にアクセスできる。

## Oracle コンテキスト (Oracle Context)

相対識別名 `cn=OracleContext` を持つディレクトリ・サブツリーのルート。すべての Oracle ソフトウェア情報が格納される。ディレクトリには、1 つ（または複数）の Oracle コンテキストが存在する。Oracle コンテキストは、ディレクトリ・ネーミング・コンテキストに関連付けることができる。

Oracle コンテキストには、次の Oracle エントリを含めることができる。

- データベース接続のために Oracle Net Services ディレクトリ・ネーミングで使用する接続識別子
- Oracle Advanced Security で使用するエンタープライズ・ユーザー・セキュリティ

## インスタンス名 (instance name)

単一のホスト上の Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite のインストール・インスタンスを識別する名前。

## サブスクライバ (Subscriber)

Oracle Files では、サブスクライバはユーザーが共同作業を行う組織エンティティを示す。Oracle Files サブスクライバは、Oracle Internet Directory LDAP サーバー上のサブスクライバにマップされる。Oracle Internet Directory サーバーは Oracle Files で設定される。

各サブスクライバには、それぞれ固有のサブスクライバ管理者が存在する。拡張ユーザーであるサブスクライバ管理者は、クォータの管理、サブスクライバ設定の指定、ユーザーの管理、ファイル、フォルダおよびワークスペースのリストア、カテゴリの管理を担当する。

サブスクライバは、サイト管理者が管理する。サイト管理者は、サブスクライバを作成、変更および削除する。

## スキーマ (schema)

データベース・オブジェクトの集合。表、ビュー、シーケンス、ストアド・プロシージャ、シノニム、索引、クラスタ、データベース・リンクなどの論理構造を含む。スキーマの名前は、そのスキーマを制御するユーザーの名前になる。

## ドメイン (domain)

**ドメイン・ネーム・システム (DNS)**・ネームスペース内の任意のツリーまたはサブツリー。ドメインは、一般的に、同じ接尾辞（ドメイン名）を含むホスト名を持つコンピュータのグループを意味する。

Oracle Files では、ドメインは Oracle Files ノードと HTTP ノード、**Oracle Files ドメイン・コントローラ**およびすべての Oracle Files データを含む Oracle9i データベース・インスタンスの論理グループである。

### **ドメイン・ネーム・システム (Domain Name System: DNS)**

ドメインの階層に編成されたコンピュータおよびネットワーク・サービスのネーミング・システム。DNS は、TCP/IP ネットワークで使用され、ユーザーが簡単に識別できる名前によってコンピュータの位置を示す。DNS は、ユーザーが識別できる名前を、コンピュータが理解する IP アドレスに解決する。

### **ノード (node)**

Oracle Files ノードは、ホスト・コンピュータで実行される一連のプロセスである。1 つ以上のノード・プロセスを 1 台のホスト・コンピュータで実行できる。Oracle Files ノードは、基本的に、Java 仮想マシン (JVM) など、製品および基礎となるプロセスを構成するアプリケーション・ソフトウェアであり、実行時にソフトウェアをサポートする。

### **ポート (port)**

送信データを特定のプログラムに、または特定のプログラムからルーティングするために使用される番号。

### **ホスト名 (host name)**

ドメイン内の各コンピュータを一意に識別する名前。



---

# 索引

## A

---

Advanced Queue Message Waiting Indicator, 8-6  
AJP  
    ポート番号, D-4  
AQMWI  
    「Advanced Queue Message Waiting Indicator」も  
    参照

## C

---

Client  
    Oracle Collaboration Suite, 1-6  
Configuration Assistant  
    Oracle Files Configuration Assistant, 14-8

## D

---

Database Configuration Assistant, 12-3  
Document Conversion Server, 15-10

## E

---

ESTERSTORE 表領域, 12-5

## G

---

gui\_install.bat  
    Oracle Calendar Desktop Client のインストール,  
    G-23

## I

---

ias\_admin パスワード, B-2, B-4

imttcl  
    スクリプト, 15-4  
    ユーティリティ, 15-3  
imtreport, 15-7  
init.ora パラメータ, 12-5  
install\_umconfig.bat, 12-8

## J

---

J2EE and Web Cache  
    概要, 1-3  
    カスタマ・アプリケーションの配置の制限, 1-3  
Java Message Service (JMS)  
    ポート番号, D-4  
Java Object Cache  
    ポート番号, D-4  
JMS  
    「Java Message Service (JMS)」を参照

## L

---

LDAP, 14-21  
LOB データ, 14-7

## M

---

mod\_imeeting, 15-8  
    アクティブにする, 15-8

## N

---

NFS  
    プロトコル・サーバー・ポート, 14-15

## O

### OC4J

- ポート番号, D-4

### Oracle Calendar

- Administrator, 11-3

- Desktop Client

  - Linux, G-16

  - Macintosh, G-18

  - Solaris, G-22

  - Windows, G-15

  - インストール, G-23

- Desktop Client for Windows

  - cal\_win\_904x.exe, G-16

- HTTPS および mod\_osso の設定, 6-16

- ocad.conf ファイル, F-21

- ocas.conf ファイル, F-14, F-20

- ocasua.bat, F-19

- ocwc.conf ファイル, F-20

- Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh

  - cal\_mac\_OS9\_904x.hqx, G-19

- Server およびアプリケーション・システム

  - インストール, 6-12

- slapd.conf ファイル, F-23

- unison.ini ファイル, F-14

- webcal.ini ファイル, F-19, F-20

- Windows サービス, E-3

- アップグレード, 3-24

- アップグレード前のタスク, 3-11

- アプリケーション・システム

  - アップグレード, 3-27

- インストール

  - 複数インスタンス, 11-6

- インストール・ガイド, 1-10

- 概要, 1-4

- 共存, 3-24

- 構成, 11-1

- スタンドアロン, F-1

  - Web サーバー構成, F-21

  - アップグレード, F-15

  - 削除, F-28

  - セキュリティ・メカニズムの構成, F-26

  - ディレクトリ・サーバー, F-4, F-23

  - 問題と対処方法, F-29

- 多言語サポートの制限, 2-4

- 配置, 4-4

- ポート番号, 11-2, D-6

- Oracle Calendar Desktop Client for Linux x86

  - silent.properties, G-23

- Oracle Calendar Sync

  - Palm for Macintosh, G-28

    - インストール, G-30

    - 削除, G-32

    - システム要件, G-28

    - トラブルシューティング, G-31

  - Palm for Windows, G-24

    - インストール, G-25

    - 削除, G-25

    - システム要件, G-24

  - Pocket PC, G-26

    - インストール, G-27

    - 削除, G-28

    - システム要件, G-26

- Oracle Collaboration Suite

  - Client, 1-6

  - Information Storage, 1-3

    - 概要, 1-3

    - 配置, 4-2

  - Information Storage データベースのインストール,

    - 6-4

  - Middle-Tier

    - Oracle Calendar, 6-12

    - Oracle Web Conferencing, 6-12

    - アップグレード, 3-10

    - インストール, 6-8, 6-10

    - インストールの順序, 1-4

    - 概要, 1-4

  - Middle-Tier コンポーネント, 1-4

  - Middle-Tier の配置, 4-3

  - Upgrade Assistant

    - 実行, 3-18

  - Web Client, 1-5

    - アップグレード, 3-38

    - トラブルシューティング, C-3

  - Web クライアント

    - インストール, 6-14

  - アプリケーションのリスト, 1-4

  - インストール

    - CD-ROM, 5-2

    - ハード・ドライブ, 5-2

  - 単一コンピュータへのインストール, 7-3

  - ドキュメント, 1-8

  - ハードウェア要件, 2-2

  - リリース 1 (9.0.3) のインスタンスの削除, 3-38

- Oracle Connector for Outlook
  - con\_outlook\_904x.exe, G-4
  - インストール, G-4
  - インストール前の要件, G-3
  - サイレント・インストール, G-4
  - 削除, G-14
  - システム要件, G-2
- Oracle Delegated Administration Services
  - Oracle Internet Directory でのユーザーの作成, 12-18
- Oracle Email
  - IMAP4-SSL のポート番号, D-5
  - IMAP4 のポート番号, D-5
  - Information Storage
    - アップグレード, 3-28
  - Information Storage データベース
    - Oracle Internet Directory での登録, 12-3
  - Information Store 構成, 12-8
  - Information Store 構成スクリプト
    - 変数値, 12-8
  - install\_backend\_es\_mail.sql スクリプト, 12-10
  - install\_backend\_sys.sql スクリプト, 12-10
  - Middle-Tier 構成スクリプト
    - 変数値, 12-13
  - NNTP-SSL のポート番号, D-5
  - NNTP のポート番号, D-5
  - POP3-SSL のポート番号, D-5
  - POP3 のポート番号, D-5
  - SMTP のポート番号, D-5
  - umconfig.bat, 12-11
  - アップグレード後のタスク, 3-28
  - アップグレード前のタスク, 3-12
  - 概要, 1-4
  - 削除手順, 10-2
  - 配置, 4-6
  - ポート番号, D-5
- Oracle Enterprise Manager
  - ポート番号, D-6
- Oracle Files
  - ifswfsetup.properties, 14-47
  - ifswfsetup スクリプト, 14-47
  - ifswfuploadlang.log, 14-47
  - アップグレード後のタスク, 3-34
  - 概要, 1-4
  - 構成, 14-8
  - 構成情報, B-5
  - トラブルシューティング, C-5
- 配置, 4-7
- 非対話型モードでの Oracle Files Configuration Assistant の実行, 14-30
- 表領域, 14-13
- プロトコル・サーバー, B-5
- ポート番号, D-6
- ランタイムの設定, 14-31
- Oracle FileSync
  - Windows
    - インストール, G-32
    - 削除, G-33
- Oracle HTTP Server
  - ポート番号, D-4
- Oracle Internet Directory
  - Oracle Delegated Administration Services, 12-18
  - 概要, 1-3
  - スーパー・ユーザーのパスワード, B-2, B-4
  - スーパー・ユーザー名, B-2, B-4
  - 問合せエントリの返送制限
    - 編集, 14-51
  - ポート番号, B-2, B-4, D-6
  - ホスト名, B-2, B-4
- Oracle Management Server
  - 概要, 1-3
  - ポート番号, D-6
- Oracle Net
  - 非対話型インストール, 9-6
- Oracle Net Configuration Assistant, 6-6, 12-3
  - 実行, 12-3
- Oracle Text
  - 確認, C-6
- Oracle Ultra Search
  - アップグレード, 3-35
  - アップグレード前のタスク, 3-12
  - 概要, 1-5
  - 配置, 4-10
  - 表領域の作成, 13-2
- Oracle Universal Installer
  - 起動, 5-4
  - 前提条件の確認, 5-2, 5-3
  - 追加コンポーネントのインストール, 5-3
- Oracle Voicemail & Fax
  - sc\_vsto.cfg ファイル, 8-6
  - sc\_vsto.cfg ファイルの更新, 8-6
  - UM スキーマ, 8-6
  - アップグレード, 3-36
  - アップグレード前のタスク, 3-13

- インストール, 1-7
- 概要, 1-5, 1-7
- 配置, 4-13
- Oracle Web Conferencing
  - Document Conversion Server, 15-10
  - Document Conversion Server および Voice Conversion Server
    - インストール, 6-13
  - Voice Conversion Server, 15-10
  - インスタンスの開始, 15-4
  - インスタンスの停止, 15-5
  - インストール, 6-12
  - インストール後のタスク
    - インスタンス・タスク, 15-5
    - システム・タスク, 15-5
  - 概要, 1-5
  - 管理ロールの設定, 15-7
  - 既存の電子メールとの統合, 15-7
  - 既存のプロキシ・サーバーとの統合, 15-6
  - ソフトウェア要件, 2-4
  - 定期的な監視, 15-9
  - 配置, 4-14
  - レポートの設定, 15-7
- Oracle Webmail
  - アップグレード, 3-30
- Oracle Wireless & Voice
  - ポート番号, D-5
- Oracle Workflow
  - catldap.sql スクリプト, 14-44
  - ポート番号, D-6
- Oracle9i *interMedia* メディア表領域, 14-7
- Oracle9i Text キー・マップ索引表領域, 14-7
- Oracle9i Text 索引表領域, 14-7
- Oracle9i Text データ, 14-7
- Oracle9i Text データ表領域, 14-7
- Oracle9iAS Clickstream
  - Collector Agent のポート番号, D-3
  - Collector Server のポート番号, D-3
  - Execution Engine のポート番号, D-3
  - Intelligence Viewer のポート番号, D-3
  - Intelligence のポート番号, D-3
  - Runtime Administrator のポート番号, D-3
- Oracle9iAS Forms Services
  - ポート番号, D-4
- Oracle9iAS Infrastructure, 6-2
  - 9.0.2.0.1 のアップグレード, 3-5
  - インストールの順序, 1-2

- 概要, 1-2
- コンポーネントのポート番号, D-2
- パッチ 3038037, 3-5
- Oracle9iAS Metadata Repository
  - 概要, 1-2
- Oracle9iAS Portal
  - 概要, 1-6
  - パッチ 2513540, 3-6
  - ポート番号, D-5
- Oracle9iAS Reports Services
  - ポート番号, D-5
- Oracle9iAS Single Sign-On
  - 概要, 1-3
  - サーバーのホスト名, B-2, B-4
  - ポート番号, B-2, B-4, D-5
- Oracle9iAS Web Cache
  - ポート番号, D-5
- Oracle9iAS Wireless
  - アップグレード前のタスク, 3-13
  - 概要, 1-5
- Oracle9i データ, 14-7
- OracleContext, 12-4
- orclguest ユーザー
  - 作成, 3-7

---

## P

- portlist.ini ファイル, D-2

---

## R

- Real Application Clusters
  - インストール前のタスク, 2-8, 2-9
  - 拡張パーティション, 2-10
  - トラブルシューティング, C-10
  - 論理パーティション, 2-10
- RMI
  - ポート番号, D-4

---

## S

- silentInstall.log ファイル, 9-5
- SQL\*Net
  - ポート番号, D-5
- SSL
  - Oracle Internet Directory での使用, 14-21

Sun Java Access Bridge  
インストールおよび構成, A-1

## T

---

TertiaryStore パラメータ, 12-5  
text\_install.bat  
Oracle Calendar Desktop Client のインストール,  
G-23

## U

---

UMADMIN, 12-7  
umbackend.tar, 12-10  
UM スキーマ, 8-6  
Upgrade Assistant  
実行, 3-18

## V

---

Visigenics CORBA  
ポート番号, D-5  
Voice Conversion Server, 15-10  
確認, 15-12  
起動, 15-11  
構成, 15-11

## W

---

Web Client  
アップグレード, 3-38  
Windows  
システム・ファイル  
インストール, C-2

## あ

---

アップグレード  
Oracle Calendar, 3-24  
アプリケーション・システム, 3-27  
Oracle Collaboration Suite  
Middle-Tier, 3-10  
Oracle Email  
Information Storage, 3-28  
Oracle Ultra Search, 3-35  
Oracle Voicemail & Fax, 3-36

Oracle Webmail  
Oracle Webmail  
アップグレード後のタスク, 3-30  
Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2.0.1, 3-5  
アップグレード前のタスク  
Oracle Calendar, 3-11  
Oracle Email, 3-12  
Oracle Ultra Search, 3-12  
Oracle Voicemail & Fax, 3-13  
Oracle9iAS Wireless, 3-13  
アップグレード後のタスク  
Oracle Email, 3-28  
Oracle Files, 3-34  
Oracle Webmail, 3-30  
アップグレード前のタスク  
Oracle Calendar, 3-11  
Oracle Email, 3-12  
Oracle Ultra Search, 3-12  
Oracle Voicemail & Fax, 3-13  
Oracle9iAS Wireless, 3-13

## い

---

インスタンス名, B-2, B-4  
インストール  
Oracle Calendar  
Desktop Client for Linux, G-17  
Desktop Client for Macintosh, G-19  
Desktop Client for Solaris, G-23  
Desktop Client for Windows, G-16  
Oracle Calendar Sync  
Palm for Macintosh, G-30  
Palm for Windows, G-25  
Pocket PC, G-27  
Oracle Collaboration Suite  
Information Storage データベース, 6-4  
Middle-Tier, 6-8  
Oracle9iAS Infrastructure, 6-2  
単一コンピュータ上, 7-3  
Oracle Connector for Outlook, G-4  
Oracle FileSync  
Windows, G-32  
Oracle Voicemail & Fax, 1-7  
Oracle Web Conferencing, 6-12  
Sun Java Access Bridge, A-1  
単一コンピュータ, 7-3  
Information Storage データベース, 7-4

- Infrastructure, 7-5
- Middle-Tier, 7-6
- 非対話型インストールおよび Oracle Net, 9-6
- 非対話型のエラー処理, 9-6
- 非対話型ログ・ファイル, 9-5
- インストール・エラー, C-5
- インストール後のタスク
  - その他のドキュメント, 6-4, 6-19
- インストール・チェックリスト
  - Oracle Collaboration Suite, B-4
  - Oracle Collaboration Suite Information Storage, B-3
  - Oracle9iAS Infrastructure, B-2
- インストールの順序
  - Oracle Collaboration Suite Middle-Tier, 1-4
  - Oracle9iAS Infrastructure, 1-2
- インストール前のタスク
  - Oracle Connector for Outlook, G-3
  - Real Application Clusters, 2-8

## え

---

- エラー
  - インストール, C-5

## お

---

- オブジェクト・データ, 14-7
- オペレーティング・システム
  - 要件, 2-3
- オンライン・ドキュメント
  - オンライン・フォーマット, 2-5
  - ディスク領域, 2-5
  - 要件, 2-5

## か

---

- 拡張パーティション
  - Real Application Clusters 用の構成, 2-10
- 確認
  - データベース接続, 14-10, 14-27
- 環境変数
  - 設定, 2-6

## き

---

- 起動
  - Oracle Universal Installer, 5-4

- 共存
  - Oracle Calendar, 3-24

## く

---

- グループ情報, 14-7

## け

---

- 言語サポート, 2-4

## こ

---

- 構成
  - Oracle Internet Directory, 6-4
  - Oracle9iAS Infrastructure, 6-4
  - Oracle9iAS Single Sign-On, 6-4
  - Sun Java Access Bridge, A-1
- 構成チェックリスト
  - Oracle Files, B-5
- 構成前
  - チェックリスト, 12-2
- 構成ログ・ファイル
  - Oracle Files, 14-8
- コンポーネントのポート番号, D-2

## さ

---

- サイレント・インストール, 9-2
  - Oracle Calendar
    - Desktop Client for Linux, G-17
    - Desktop Client for Solaris, G-23
  - Oracle Calendar desktop client for Linux, G-17
  - Oracle Connector for Outlook, G-4
- 索引, 14-7
- 索引付けされたメディア表領域, 14-7
- 索引付けされていないメディア表領域, 14-7
- 削除
  - Oracle Calendar
    - Desktop Client for Linux, G-18
    - Desktop Client for Macintosh, G-20
    - Desktop Client for Solaris, G-23
    - Desktop Client for Windows, G-16
  - Oracle Calendar Sync
    - Palm for Macintosh, G-32
    - Palm for Windows, G-25
    - Pocket PC, G-28

- Oracle Collaboration Suite, 10-3
- Oracle Connector for Outlook, G-14
- Oracle Email, 10-2
- Oracle FileSync
  - Windows, G-33
- 作成
  - 新規の Oracle Files ドメイン, 14-9
- サポート
  - 言語, 2-4

## し

---

- システム・ダイヤルイン
  - getSysDialins, 15-11
  - 既存の表示, 15-11
  - 削除, 15-11
  - 作成, 15-11
  - 定義, 15-10
- システム・ファイル
  - インストール, C-2
- システム要件
  - Oracle Calendar
    - Desktop Client for Linux, G-16
    - Desktop Client for Macintosh, G-18
    - Desktop Client for Solaris, G-22
    - Desktop Client for Windows, G-15
  - Oracle Calendar Sync
    - Palm for Macintosh, G-28
    - Palm for Windows, G-24
    - Pocket PC, G-26
  - Oracle Collaboration Suite, 2-2
  - Oracle Connector for Outlook, G-2
- 実行
  - Oracle Net Configuration Assistant, 6-6
- 指定
  - レスポンス・ファイル, 9-4
- 情報
  - グループ, 14-7
  - ユーザー, 14-7

## す

---

- スクリプト
  - cal\_mac\_OS9\_904x.hqx, G-19
  - catalog.bat, 3-9
  - catldap.sql, 14-44
  - gui\_install.bat, G-23

- ifswfsetup, 14-47
- install\_backend\_es\_mail.sql, 12-10
- install\_backend\_sys.sql, 12-10
- ocasua.bat, F-19
- ocsua.bat, 3-18
- ptlasst.bat, 3-3
- ssl\_osso.bat
  - 実行, 6-18
- text\_install.bat, G-23
- umconfig.bat, 12-8, 12-11
- uminfra\_install.sh, 8-5

## た

---

- タイムゾーン
  - 変更, 15-12
- 多言語サポート, 2-4
  - Oracle Calendar, 2-4

## て

---

- ディスク領域
  - オンライン・ドキュメント, 2-5
- データ
  - LOB, 14-7
  - Oracle9i, 14-7
  - Oracle9i Text, 14-7
  - オブジェクト, 14-7
  - テキスト, 14-7
  - メディア, 14-7
- データベース
  - Configuration Assistant
    - 実行, 6-7, 12-4
    - キャラクタ・セット, B-2, B-3
    - 実行していない, C-5
    - 接続, 14-10, 14-27
  - テキスト・データ, 14-7
  - 電子メールのテキスト索引
    - 新規表領域への移動, 3-29

## と

---

- 問合せエントリの返送制限
  - 編集, 14-51
- 登録
  - Oracle Collaboration Suite Information Storage を
    - Oracle Internet Directory へ, 6-5

## ドキュメント

Oracle Collaboration Suite ライブラリ, 1-8  
その他, 6-4, 6-19

## トラブルシューティング

Oracle Calendar Sync  
Palm for Macintosh, G-31  
Oracle Collaboration Suite  
Web Client, C-3  
Oracle Files, C-5  
Real Application Clusters, C-10  
インストール・エラー, C-5  
実行していないデータベース, C-5  
実行していないリスナー, C-5  
レスポンス・ファイル, 9-5

## は

---

### 配置

Oracle Calendar, 4-4  
Oracle Collaboration Suite Information Storage, 4-2  
Oracle Collaboration Suite Middle-Tier, 4-3  
Oracle Email, 4-6  
Oracle Files, 4-7  
Oracle Ultra Search, 4-10  
Oracle Voicemail & Fax, 4-13  
Oracle Web Conferencing, 4-14

配置についての推奨事項, 4-15

### パッチ

2513540, 3-6  
3038037, 3-5

## ひ

---

### 非対話型インストール

Oracle Files Configuration Assistant, 14-30  
エラー処理, 9-5  
概要, 9-2  
要件, 9-3

### 表領域

Oracle9i *interMedia* メディア, 14-7  
Oracle9i Text キー・マップ, 14-7  
Oracle9i Text 索引, 14-7  
Oracle9i Text データ, 14-7  
索引付けされたメディア, 14-7  
索引付けされていないメディア, 14-7  
プライマリ, 14-7

## ふ

---

### ファイル

cal\_win\_904x.exe, G-16  
con\_outlook\_904x.exe, G-4  
consoleConfig.xml, 8-5  
data-sources.xml, 3-35, 13-2  
emailaci.ldif, 3-9  
httpd.conf, 6-18, 11-5  
ifswfsetup.properties, 14-47  
ifswfuploadlang.log, 14-47  
install\_umconfig.bat, 12-8  
mod\_osso\_https.conf, 6-18  
mod\_osso.conf, 6-18  
ocad.conf, F-21  
ocas.conf, F-14, F-20  
ocsua.properties, 3-15  
ocsua.xml, 3-14  
ocwc.conf, F-20  
Oracle9iAS Portal パッチ  
recompile.sql, 3-6  
secapi.pkb, 3-6  
secapi.pks, 3-6  
secapip.pkb, 3-6  
secapip.pks, 3-6  
secoidd.pkb, 3-6  
secoid.pkb, 3-6  
secoid.pks, 3-6  
secrmoid.sql, 3-6  
ssoidd.sql, 3-6  
portlist.ini, 2-5  
ptlasst.bat, 3-3  
sc\_vsto.cfg, 8-6  
更新, 8-6  
silent.properties, G-17, G-23  
slapd.conf, F-23  
targets.xml, 3-13, 8-5  
unison.ini, F-14  
webcal.ini, F-19, F-20  
webclient.properties, 6-15  
インストール・ログ, 9-5  
非対話型インストール・ログ, 9-5  
プライマリ表領域, 14-7  
プロパティ  
ApacheProtocolSecure, 15-9  
説明, 15-23



- ApacheWebHost, 15-9
  - 説明, 15-22
- ApacheWebPort, 15-9
  - 説明, 15-22
- ApacheWebSecurePort, 15-9
  - 説明, 15-22
- DefaultTimeZoneName, 15-12
- EmailEnabled, 15-7
- MxRedirectPort, 15-8
  - 説明, 15-21
- SmtpHost, 15-7
  - 説明, 15-20
- SmtpPort, 15-7
  - 説明, 15-21
- UserAgentProxyEnabled, 15-6
  - 説明, 15-20
- UserAgentProxyExclusions, 15-6
  - 説明, 15-19
- UserAgentProxyHost, 15-6
  - 説明, 15-17
- UserAgentProxyPort, 15-6
  - 説明, 15-18
- UserAgentProxySSLHost, 15-6
  - 説明, 15-18
- UserAgentProxySSLPot, 15-6
  - 説明, 15-19
- VoiceDialInPrefix, 15-10

## ほ

---

ポートの割当て, 2-5

ポート番号

- OC4J, D-4
  - AJP, D-4
  - HTTP Listener, D-4
  - RMI, D-4
- Oracle Calendar, D-6
- Oracle Email, D-5
  - IMAP4, D-5
  - IMAP4-SSL, D-5
  - NNTP, D-5
  - NNTP-SSL, D-5
  - POP3, D-5
  - POP3-SSL, D-5
  - SMTP, D-5
- Oracle Enterprise Manager, D-6
  - Intelligent Agent, D-6

- 管理, D-6
- Oracle Files, D-6
  - AFP, D-6
  - FTP, D-6
  - HTTP ノード, D-6
  - LDAP-SSL, D-6
  - LDAP-非 SSL, D-6
  - NFS, D-6
  - ドメイン・コントローラ, D-6
  - メイン・ノード, D-6
- Oracle HTTP Server, D-4
  - Java Object Cache, D-4
  - JServ Servlet, D-4
  - Oracle Notification Service のリクエスト・ポート, D-4
  - Oracle Notification Service のリモート・ポート, D-4
  - Oracle Notification Service のレポート・ポート, D-4
  - Oracle Notification Service のローカル・ポート, D-4
  - SSL, D-4
  - 非 SSL, D-4
- Oracle Internet Directory, D-6
  - SSL, D-6
  - 非 SSL, D-6
- Oracle Management Server, D-6
- Oracle Wireless & Voice, D-5
- Oracle Workflow, D-6
  - TNS, D-6
- Oracle9iAS Clickstream
  - Collector Agent, D-3
  - Collector Server, D-3
  - Execution Engine, D-3
  - Intelligence, D-3
  - Intelligence Viewer, D-3
  - Runtime Administrator, D-3
- Oracle9iAS Containers for J2EE
  - Java Message Service (JMS), D-4
- Oracle9iAS Forms Services, D-4
- Oracle9iAS Portal, D-5
- Oracle9iAS Reports Services, D-5
  - Visigenics CORBA, D-5
- Oracle9iAS Single Sign-On, D-5
- Oracle9iAS Web Cache, D-5
  - HTTP Listen - SSL, D-5
  - HTTP Listen - 非 SSL, D-5

- 管理, D-5
- SQL\*Net, D-5
  - コンポーネントの番号, D-2
  - コンポーネント別, D-3
  - デフォルトの番号, 14-15
  - デフォルトの変更, 14-15
  - ポート番号別, D-7
- ポート番号ファイル, 2-5, D-2

## ま

---

- マウント・ポイント
  - サーバー, 14-15

## め

---

- メタデータ, 14-7
- メディア・データ, 14-7

## も

---

- 問題
  - インストール, C-5

## ゆ

---

- ユーザー情報, 14-7

## よ

---

- 要件
  - Oracle Calendar
    - Desktop Client for Linux, G-16
    - Desktop Client for Macintosh, G-18
    - Desktop Client for Solaris, G-22
    - Desktop Client for Windows, G-15
  - Oracle Calendar Sync
    - Palm for Macintosh, G-28
    - Palm for Windows, G-24
    - Pocket PC, G-26
  - Oracle Connector for Outlook, G-2
  - Oracle Web Conferencing, 2-4
  - オペレーティング・システム, 2-3
  - オンライン・ドキュメント, 2-5

## り

---

- リスナー
  - Information Store
    - 確認, 12-16
    - 起動, 12-16
  - Middle-Tier
    - 確認, 12-16
    - 起動, 12-16
  - 実行していない, C-5

## れ

---

- レスポンス・ファイル, 9-2, 9-3
  - 指定, 9-4

## ろ

---

- ログ・ファイル
  - Oracle Files, 14-8
- 論理パーティション
  - Real Application Clusters 用の構成, 2-10